
スーパーロボット大戦TOP ? Side The Earth ?

北洋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スーパーロボット大戦TOP ? Side The Earth
h ?

【Nコード】

N1982N

【作者名】

北洋

【あらすじ】

「ギガノス戦争」は終結し、地球に平和が訪れたかに見えた。しかし新たな危機が地球を襲う。奴らの名は「宇宙怪獣」、人類の生き残りを賭けた戦いが今始まる……。

少しパラレルな世界の中で、地球はどんな運命をたどるのか？
現在、第2部（ゴードンナー編）開始。

超光速宇宙戦艦ルクシオン内

そこは地獄だった。

地獄……今、彼が置かれている状況を
それに、そう呼ぶ
に相応しいのか？

答えは分らない。

宇宙 真空ではなくエーテルによって満たされてるその漆黒
は、決して人が生きるを許さない。

なぜならば空気がない。

酸素がない。たったそれだけのことで人は死んでしまう。な
んと儚く、脆い存在なのだろうか人間は。

宇宙 そこは死に満ちた空間。そこには恐怖しかないのか？

否。死の空間、恐怖が支配する場所でありながら、人の心は宇宙
に無限の可能性を見出している。それが死に対する一種のアンチテ
ーゼなのか、それは誰にも分からない。

分かっているのは、この時代に生きている人々が、宇宙を‘無限
の開拓地・希望の海’と風に考えているということだ。

彼 オオタ コウイチロウもそうである。

人類の科学力の比類なき進歩は、今より20年以上前に宇宙へと
進出し、そして宇宙で生活することを可能とした。これは希望だっ
た。我々は地球以外でも生きているのだ、という希望。

時は流れ西暦2018年

人類の技術力は初のワープ搭載

型の宇宙戦艦は完成するに至る。

超光速宇宙戦艦「るくしおん」に搭載されているバニシング・モーター。それにより超光速航法　ワープ　は実現し、限りある時間の中で外宇宙へと進出する術を獲得したのだった。

ワープ　それは人類の夢。短い人生では到底及びつかぬ程の時間と距離を、一瞬にして縮めることができる、正に人類の夢の結晶ともいえる技術。

同年、表向きは人類の新天地を探すために、「るくしおん」は進出する……そして、オオタ　コウイチロウもそのクルーの一員であった……

スーパーロボット大戦TOP　？　Side　The　Earth　？

プロローグ1　西暦2019年　邂逅、そして帰点

希望という白が、絶望という黒で塗りつぶされる。
その瞬間が‘今’なのだろう、ということをおオオタ　コウイチロウは肌で感じている。

炸裂する耳をつんざく爆音、艦内のアラーム、クルー達の悲鳴……
阿鼻叫喚ともいえるその状況をオオタは脱出用亜高速ポッドの前で感じることはできない。

声にならぬ悲鳴、助けを求める悲鳴、そして爆音。

オオタはこの突然の被害による爆発により、弾け飛んだ艦内装甲の破片により右目を負傷していた。かなり深く抉り取られている。適切な処置は行ったが視力が戻るかは疑わしい。また腰辺りにも破片が突き刺さりうまく歩くこともできない。

そんな彼に肩を貸している、軍服　それも将官クラスの勲章をつけた　男が言う。

「これが最後の脱出艇だ！　オオタ、お前が乗り込むのだ！」

足の自由が利かないオオタを、その男は脱出ポッドの座席へと押し込める。有事の際の脱出ポッドは一人用だ。非常用の食糧・水・酸素と人一人以外に乗り込める余裕などない。

今、自分が乗り込めばこの男が死ぬのだということは分かり切っている。

「いいえ、提督が」

「バカッ、お前が行け！」

提督と呼ばれた男がオオタの声を遮る。

同時に戦艦の主砲が命中したかのように船が激しく揺れる。

おそらく、‘ヤツら’の放った光弾が「るくしおん」に直撃したのだろう。

「いいかつ、このことを地球に帰って伝えるんだ！　‘ヤツら’は

やはり地球を狙っていると！　そして、‘ヤツら’との交戦経験のあるお前が私よりも生き残る価値があるのだ、分かるな！」

「しかし！」

オオタは叫ぶ。

艦の揺れがさらに激しくなっってゆく。

人類の英知の結晶が！ 俺たちの船が！

ここまで成すすべもないとは。‘ヤツら’の物量・戦力・強大さを、オオタは嫌というほど痛感させられた。

人類は宇宙へと進出し生活圏を広げ、かつて死の空間であった宇宙は、人類にとっての白い希望のキャンバスになったはずであった。それが再び黒く染まろうとしている。

真の恐怖が今迫っているのだ。

‘ヤツら’を止めなければ、‘ヤツら’を上回る力を得なければ……‘ヤツら’が地球を目指しているとすれば、地球人類に未来はない！

「提督！ ‘ヤツら’を ‘宇宙怪獣’を、今ここで止めなければ地球が危ういのです！」

「馬鹿者！ 我々の現戦力で ‘宇宙怪獣’ に対抗できると思っているのか！」

そう言うのと、提督と呼ばれた男は脱出ポッドのドアを閉める。そしてロック。

強制的に脱出シーケンスを起動、行き先は地球、もうこちらからの操作は利かない。

オオタはドアを叩きながら叫ぶ。

「タカヤ提督ッ！」

「行くだオオタ！ お前が、地球に希望の光を灯すんだ！」

瞬間、ハッチが閉まりタカヤ提督の顔が見えなくなる。

そして衝撃 次の瞬間には、宇宙空間に放り出される。

ひどく不自由な漆黒の宇宙の中、宇宙戦艦「ルクシオン」を取り囲む異形の化け物がオオタの目には飛び込んできた。

艦の周辺に張り付いている深緑色の、まるでずんぐりむつくりとしたカニのような外観の化け物。それが艦に穴を開け、中へと侵入していく様子を。

オオタは見た。

醜く表面が歪んだ三角錐のような、紫色の化け物から放たれる光弾で「ルクシオン」から爆発が起こる様子を。

全てをオオタは目に焼き付けた。忘れまい、絶対に。許すまじ、宇宙怪獣！

次の瞬間、脱出ポッドは地球へ向けワープシーケンスを発動する。声を上げる間もなく、全てがオオタの前から流れ去ってゆく。届かない、分かっていながら叫ばずにいられなかった。

「タカヤ提督――ーッッ！！！」

そしてポッドは彼を乗せ生まれ故郷の地球へ向かう

半壊した「るくしおん」内

オオタを脱出させた後、タカヤ提督はポケットからまだ十代前半と思われる「愛娘」の写真を取り出し愛おしそうにそれを眺めていた。

「ノリコ……………すまん」

誕生日には戻る。‘愛娘’ノリコとかわした約束。守れないことを悔やむ。残して逝ってしまうこと悔やむ。希望の船が沈めてしまうこと悔やむ。

いくら悔やんでも後悔したりない。

先に逝く自分は楽なのだろうか……オオタに全て任せてしまった自分は卑怯なのか……もはや答えを出す時間など残されていない。

（この世に神はいないのか？）

次の瞬間、閃光が彼の視界を奪う。

そして、彼の意識はそこで途切れた

西暦2019年 12月19日 超光速宇宙戦艦るくしおん消息を
絶つ

そのニュースを聞いたとき私と私の親友は動揺を隠しきれなかった。

親友の父が死んだ？ あの英雄が？

地球圏が地球帝国によって平定される数年前、宇宙移民者達の帝国である「ギガノス帝国」が地球に反旗を翻す。

「ギガノス戦争」 後にそう呼ばれた戦で、数々の武勲を立てドラグナーを率いた伝説の艦長タカヤ ユウゾウが。「るくしおん」艦隊の提督にまで任命された男が。

あの「ギガノス戦争」の英雄が宇宙で散る。

そんなことは信じられない。だが、後日「るくしおん」の生き残り少数が地球に帰還したことで、その報道はまごうことなき真実だと世界に広まった。

同時に人類の敵「宇宙怪獣」の存在でもある。

このことを受けて地球帝国政府は、RX計画の強化推進を決定。また、世界各州に決戦用ロボット兵器の開発と人材の育成を義務付けた。

そして私と私の親友は、地球帝国日本州の人材育成機関「沖縄女子宇宙学校」に入学することとなる。

今にして思えば、あの時が私と彼女の運命の回帰点だったのだと思う。

あの場所であの人たちと出会い、彼女は逃れえない運命の渦へと身を投じた。

時間の流れがずれてしまった以上、私と彼女は二度と会うことは叶わないだろう。

だがもう一度会いたい、私の親友 タカヤ ノリコに。私が生きていられるのも全て彼女のおかげなのだから。

そしてもう一人会いたい人がある。世界のために戦った「彼女」

はどうしているのだろうか？

会いたい、もう一度皆に。

西暦 2042年 アカイ キミコ著「スーパーロボット大戦」より
抜粋

そして舞台は2年後へと移る。

第1部 キャラクター紹介・設定など（前書き）

プロローグの後にキャラ紹介を移動しました。
キャラ紹介読まなくても、本編は読めるように執筆してるつもりです。

各原作に登場している用語の設定を改変してるので、改変部分の設定を載せています。

多少ネタばれあるかもしれませんが（汗）。

飛ばして第1話読んでくれても大丈夫です。

第1部 キャラクター紹介・設定など

スーパーロボット大戦TOP ? Side The Earth
?

注：本作品は原作：トップをねらえ！ Gunbuster
の世界観を基本としたスーパーロボット大戦の二次小説です。
原作との設定の違いが多々ありますがご容赦ください（笑）

?登場予定作品

・トップをねらえ！ Gunbuster （第一部）

・機甲戦記ドラグナー （第一部）

・神魂合体ゴードンナー

・高機動幻想ガンパレードマーチ（キャラのみ?）

・あと作者オリジナル少々

?第一部 主要登場キャラクター紹介

オオタ ヒカリ（太田 耀）

生年月日：西暦2004年5月8日 18歳 女性

身長：169cm 血液型：B型

搭乗マシン兵器：RX-7カスタム（愛称：ノワール）

本作の主人公。緑がかつた黒髪が特徴。

「ギガノス戦争」で名を馳せたオオタ コウイチロウの実妹。

ロボット戦闘の天才と称され兄をも凌ぐと言われており他の分野
においても才能を遺憾なく発揮する才媛（ただし料理は殺人的に下手）。

努力なしでたいていのことはできるため努力することを嫌い、努力する者を見下している。入学時より模擬戦・マシーン兵器での私闘において全て負けなし、「薔薇の嬢様」ことアマノ カズミと対比と使う機体の色から「黒薔薇」と呼ばれることもある。また男子部・女子部問わず目を付けられ私闘を申し込まれることがよくあるが本人はそれを楽しんでいる。

好物はアンドロメダ焼き。悪友のケーンたちとよく商店街に繰り出し買い食いしている。

タカヤ ノリコ

15歳 女性 原作：トップをねらえ！ Gunbuste

r

搭乗機体：RX-7（沖女指定）

沖女1年生。「ギガノス戦争」における帝国側旗艦の艦長を務め、宇宙戦艦「るくしおん」艦隊の提督でもあったタカヤ ユウゾウの一人娘。

運動神経は抜群だが、まだマシーン兵器を満足に立たせることもできない。

「薔薇の女王様」ことアマノ カズミをお姉さまと呼び慕っている。

アマノ カズミ

17歳 女性 原作：トップをねらえ！ Gunbuste

r

搭乗機体：RX-7カスタム（愛称：ジゼル）

沖女3年生。文武両道、沖女女子部筆頭であり「薔薇の女王様」の通り名を持つ。

主人公とは同じクラス。クラスで浮いている主人公を気かけ、

また実力を認め、めておりよく訓練に誘ってくれている。主人公とのマシーン兵器模擬戦成績は全てひき分け。

オオタ コウイチロウ

男性 原作：トップをねらえ！ Gunbuster

主人公の実兄。

「ギガノス戦争」では地球帝国側で参加し「帝国の黒い稲妻」と呼ばれた伝説のパイロットであり、ケーンたちの上官であった。

また「RX計画」発案者・責任者でもある。

その功績にて「るくしおん」のクルーとなり、また数少ない生きのこりとなる。

沖女の教官として抜擢され沖女を訪れることとなる。

マイヨ プラート

男性 原作：機甲戦記ドラグナー

「ギガノス戦争」において「ギガノスの蒼き鷹」と恐れられたギガノス帝国のエースパイロット。

戦時中、オオタ率いるケーン達「と幾度も交戦しており因縁は深いがお互いに認め合っている。最終決戦にて地球帝国側につき、現在は地球帝国に所属している。

ケーン ワカバ

男性 原作：機甲戦記ドラグナー

搭乗機体：D-1カスタム

「ギガノス戦争」にて民間人であったが成り行きでD兵器に乗ることになり終戦まで戦い抜いた英傑。

マイヨとは何度も交戦経験のあるいわばライバル関係。

終戦後も帝国軍に所属していたが元々民間人であるため半ば強制的に沖女男子部に入學させられる。

現在、沖女男子部3年生。基本的にライト、タップとつるみ3人組で行動している。

主人公の悪友。

？時代背景とか世界観とか

世界観

ワープ、ウラシマ効果、エーテルや地球帝国など、基本的にトツプをねえ！ の世界観を踏襲させてもらってます。

時代背景

過去に既に1国家として統一された「地球帝国」と宇宙移民たちの「ギガノス帝国」との間に戦争があり、地球帝国の勝利で地球圏は完全に地球帝国と統一されている。

この戦争のことを「ギガノス戦争」という。

？原作の設定と異なる用語の解説

・地球帝国

この世界の地球はすでに地球帝国として統一されており、それぞれの元々国家だった土地は州として管理されている。

「ギガノス」戦争後、宇宙も含め地球圏は完全に「地球帝国」として統一された。

・ギガノス戦争

西暦2017年に勃発した地球帝国とギガノス帝国間の戦争。

約1年間続き、多くの被害をもたらした後、地球帝国の勝利によって幕を閉じる。

・ 沖縄女子宇宙学校（通称：沖女）

地球帝国日本州のパイロット養成学校の一つで男子部も存在する。
成績優秀者はTOP部隊など有名部隊への配属も期待できる。

メタルアーマー

・ MA

全長20m前後の人型機動兵器の総称。

「ギガノス戦争」では主力兵器として使用されるも、機体と共に
熟練したパイロットの多くが失われることとなる。また高コストか
つ操縦性・整備性にやや難があり、戦後の主力機は「RX計画」の
機体に移行している。しかしRXシリーズではなくMAを好んで使
うパイロットもいる。

・ RX計画

宇宙怪獣に対抗するマシン兵器を開発する計画。

・ RX-7

9m前後の人型マシン兵器。小型のため生産コスト・整備性に
優れ、操縦性も優秀。沖女ではエース級と認められたパイロットに
は塗装やセンサー等のカスタマイズを許可されている。

小型のプラズマドライブを搭載し、対生物に有効な電撃兵装を多
く搭載しているのも特徴。

ネット小説サーチ（アドレス） [http://netnovel.
info/](http://netnovel.info/)（コピーして使用ください）

第1話 ヒカリとカズミ

スーパーロボット大戦TOP ? Side The Earth
?

第一話 ヒカリとカズミ

西暦2021年 6月31日 地球帝国日本州 沖縄女子宇宙学
校 校庭

そこに彼女はいた。

「次、かかってらっしゃい！」

鋼鉄のコクピット。多くの計器がざわめき、前方には巨大スクリーン、手には操縦桿と保持をサポートする装具……鉄と汗の匂いが立ち込める場所で、その少女は意気揚々と声を上げる。

眼下にはRX-7と呼ばれる兵器がゴロゴロと横たわっていた。全長9m前後の人型の兵器。俗にマシン兵器と呼ばれるそれは胸部を3年の識別カラーの青で塗装されている以外あまり特徴はない。いや、背には亀の甲羅に似た装甲があり、その下には加速用のジェット噴射機が搭載されているのだが。

あまりスマートな印象を人には与えない、そんな巨人が校庭に転がっている。そう、ゴロゴロといった具合にだ。

緑がかった黒髪が特徴的な少女は楽しそうに笑う。

「どうしたの、もう終わり？」

「あなた生意気よッ！」

離れて見ていた一機から黒く塗装された少女の機体を指差す。
パーソナルカラーは青。3年だ、ただの。

「黒薔薇」なんて呼ばれていい気なつてんじゃないの！ 前々から気に食わなかったし、今は学年合同模擬戦、いい機会だから分かってあげてね！ 沖女最強は、このツ、カシハラ レイコだってね！！」

ヒステリックな声を外部スピーカーでまき散らせながら、その3年は機体を動かす。ボクサーのようなファイティングポーズ。器用にステップを踏むわけではなく、上体をかがませて勢いをつけて足を踏む出す。それだけで弾丸のように加速し、少女めがけて突っ込んでくる。

模擬戦では重火器の使用は禁止されている。高い操縦技術を身につけるには、一進一退の攻防の中で避ける当てるを繰り返すのが一番だ。模擬戦でこそ被弾率の高い格闘戦を行うべきなのだ。

だが3年は遠距離から勢いをつけ飛び込んでくる。1発を狙っているのが見え見えなので避けやすいことこの上ない。

「トライアングルパーンチッ！！」

RX-7の腕部から拳台のカッターがせり出す。その右腕を勢いのまま黒いRX-7に突き出してきた。

少女は微笑む。面白い自意識過剰娘だ、と。そして操縦桿とフットペダルを軽く動かす。黒い機体が半歩下がり、真正面向いていた姿勢が3年に半身を向けた体勢になる。

「あらよつと」

的が小さくなり、3年の拳は空を切る。そして次の瞬間には宙に舞っていた。

一瞬の間、直後

ズズンツ、と轟音と共に3年の機体が背から地面に落ちる。そして沈黙。

少女の機体が右腕を掴み、機体の足を払い、勢いをそのまま放り投げてやったのだ。柔道のように、相手が人の形をしているからこそできる技。決まった時の快感は投げた者にしか分からないだろう。

もちろん投げられた方は堪らない。数メートルが地面に叩きつけられる、自動車の接触事故など比ではない。優秀な衝撃吸収装置がコクピットについているからこそできるのだ、でなければ殺人だ。さあ、これで十機目。次はどうしようか。少女は気持ち良さそうに汗を拭う。

「さすがですわね、オオタ ヒカリさん」

オオタ ヒカリ それが彼女の名前らしい。きりりとした二重瞼に、緑がかった黒髪が肩の辺りまでで切りそろえられており、顔立ちも整っている。間違いなく美少女と呼ばれる部類の女子だ。湿り気を帯び艶やかになった黒髪かるく掻きながら声の主に答えた。

「なによカズミ。もう止めにきたの？」

モニターには全身を白くカラリングされたRX-7が映し出されていた。ヒカリの機体と正反対の色、そして3年の識別色でもない。彼女もただの3年ではない。

「止めに来た、じゃありませんわ。せつかくの合同模擬戦だというのに、あなたは好き放題なさっているようね。少しは周りの迷惑を考えたかどうかしら」

カズミと呼ばれた少女の顔がモニターの端に小さく映し出される。長い青い髪をリボンで結び、唇には紅いルーージュ、口調も落ち着いているし大人びた雰囲気を持つ美少女だった。彼女はため息をつきながら言う。

「たまに授業に顔を出したと思えば、模擬戦で十人抜きだなんて…皆順番に試合を行うように説明されたでしょう」

「しかしねえ、張り合いがないんだよ。これぐらいしないかね」

ヒカリの言葉に校庭中の空気が重くなった。当たり前だ。暗に、どこか直にお前らめっちゃ弱いと言われているのだから。彼女たちも厳しい試験をクリアして沖女に入学したエリートなのだから。張り詰める空気にヒカリは無関心、カズミだけがつぶさに反応する。

「まったく……そこまで言うのなら、私がお相手してさしあげます」

その言葉に周囲の女生徒たちが一気に湧き上がる。

「待つてましたお姉さま!」「お姉さまが私たちの仇をとってくださいるわ!」「黒薔薇の最後よ!」「薔薇の女王様」の実力思い知るがいいわ!」etc……。

お前たちはカズミ教の信者か? と毒づきたくなるくらいに、ヒカリに罵声が浴びせられる。

無理もない。カズミの人気は、この沖女女子部において不動のものだ。

文武両道、才色兼備

絵に描いたような美少女優等生、そし

て人望もあり誰からも慕われる　それがアマノ　カズミだ。その優雅さから‘薔薇の女王様’と呼ばれ、ヒカリは乗機の色や性格の対比から‘黒薔薇’などと呼ばれている　別にうれしくも何ともないが。

それに、学力・戦闘力・美貌。どれを取っても自分が上という自信が彼女にはある。

ヒカリは機体の指を動かし挑発する。

「来なよカズミ。たまには遊んであげる」

「望むところです。私の日々の修練の成果見せてあげましてよ」

カズミが機体を動かすと、離れて見学していた女生徒たちから歓声があがる。

「相変わらず人気ね。さすが薔薇の女王様」

「あら、あなたも結構人気者なのよ。隠れファンが多いの知らないの？」

ヒカリは苦笑し、操縦桿を離しコンソールを操作。モニター上の白いRX-7にガンサイトのようなマークが明滅　対象を自動追尾するようセンサーをセッティングした。
再び操縦桿を握りこむ。

「私の場合、因縁をつけられる方が多いけどね」

「それは日頃の行いのせいではなくて？」

短い会話を終えると両者は機体に構えを取らせる。

モニター越しにカズミと睨みあう。周囲の女生徒たちの歓声とヤジを音声センサーが拾うが、ヒカリの耳には遠く聞こえる。

意識が目の前に向いている、集中しているという感覚。程良い高

揚感が彼女を包む。

「こうでなくっちゃね」

フットペダルを踏みこみ。

「いくよ、カズミ！」

黒いRX-7が一息に間合いをつめ、軽くパンチを繰り出す。

白いRX-7は上半身をよじりそれを回避、すかさず拳で頭部を狙い打つ。

ヒカリはそれを手で受け止めると、体勢を崩すように相手の拳を引きひざ蹴りを出すよう操作。黒いRX-7の右足関節のギアが唸りをあげ、直後ひざがミサイルが発射されるような勢いで腹部めがけ飛び出す。

だが白いRX-7は難なく受け止めた。

一瞬の攻防 2機はすぐに間合いを取る。

「また腕上げたみたいね」

ヒカリの言葉にカズミは。

「当然です。私はあなたと違って日々の努力を欠かしたことはありません。あなたも私と一緒に努力をすれば 」

「お説教はたくさんよ」

ヒカリは言葉を遮る。

「私はロボット戦闘の天才。私に努力なんて必要ないの。努力なんて、あんたたちみたいな凡才や秀才が私に追いつくためにやるもん

さ」

カズミにだけではなく、わざと外部スピーカーで言ってやった。周りの女生徒の耳に届いた言葉は汚いヤジとなってヒカリに返ってくる。完全にヒール役になっているのだが当の本人は楽しんでいる。凡人は才能に関する中傷に激しく反応する。いや普段はそうでもないのかもしれないが、オオタ ヒカリに言われると必要以上に反応する。それはそれで面白い。

「文句があるんなら、せめて私勝ってからにするんだね！」
「ならそうさせてもらおう！」

ヒカリの啖呵に白いRX-7が動く。

接近し左・右とワンツーパンチを繰り出す。左肩部に少し掠った。コックピットに振動が伝わる。反射的にヒカリも反撃。白と黒のRX-7拳撃の応酬を繰り広げる。

しかし2機ともそれらのほとんどを回避、時々拳が機体に触れ火花が散ることがあるがクリーンヒットは一つもない。

ヤジを飛ばしていた女生徒たちは、そのハイレベルは攻防にいつの間にか声を失う。見入る。自分たちのヒーロー「薔薇の女王様」ことアマノ カズミと互角に渡り合っている。そんな奴は沖女中探してもオオタ ヒカリぐらいしかないだろう。

だが、それも1分程で決着する。

2機の両拳がコックピット 腹部めがけて放たれる。同時の攻撃である。2機ともに避けることは叶わないだろう。

「勝負ありだね」

ヒカリのコックピットに衝撃は訪れなかった。
腹部装甲の数センチ手前で白い拳は停止していた。

だがヒカリの黒いRX-7もそれは同様であった。

コックピッドに衝撃吸収機構がそなわっていても直撃のダメージは非常に大きい。これで勝負は決した、そう感じたから2人は互いの攻撃を中止した。模擬戦で無暗に相手に傷をおわせる必要はないし、たとえ実戦だとしてもこれでは同士討ちだ。

「また引き分けね」

大粒の汗をかいたヒカリが満足気に言う。モニター上のカズミも息を弾ませながら答えた。

「そうね、残念だね。今日こそあなたとの決着がつけれると思ったのですけどね…」

「ハハ、よく言うわね。私が勝って終わりってことかしら」

「まったく…減らない口ですこと」

苦笑するカズミを余所に、ヒカリはロックを解除し白いRX-7に背を向ける。

「どこに行くんです？ まだ授業は終わっていませんわよ」

「私がいると他の子が練習できないでしょ。もう満足したし、邪魔者は去ることにするわ。じゃあね、薔薇の女王様」

黒いRX-7は背中越しに手を振るそぶりみせ格納庫へと去っていく。気持ちのよい汗をかき湿った掻きわけ。緑がかった黒髪から汗が軽く飛ぶ。今は熱いシャワーでも浴びたい気分だ。

「まったく」、呆れたようなカズミの声が聞こえた気もしたが、彼女は気にせず歩を進める。

彼女の名前は太田^{オオタ}耀^{ヒカリ} 超光速宇宙戦艦「るくしおん」の
生きのこりオオタ コウイチロウの実の妹である。

第2話 ヒカリとケーン 1

沖縄女子宇宙学校。

文面からすると一見女子高のようであるヒカリの通う高校。いや元々は女子高だったのだが、後にある事情から男子部が設立され、少数ながら男子学生も沖女には存在している。

本来は宇宙パイロットを花形に、宇宙ステーションの技術者・通信士・設計士など宇宙生活に関わるあらゆる職種を養成する……それがこの学校の昔の姿であった。

その方針が変わってしまったのはほんの数年前 西暦2017年のことである。

その年、地球圏では地球と宇宙の間で大きな戦争が行われていた。「ギガノス」戦争 宇宙移民たちの国であるギガノス帝国と、当時既に統一されていた地球帝国との間で勃発した大戦争。

1年間におよぶそれは、地球圏に大きな疲弊と損害をもたらした。軍部に限って言えば、当時の主力兵器MAとその多くの操縦者を失ってしまったことだ。損失は穴埋めしなければならぬ。

地球の勝利で終わった戦争の後、地球帝国は沖女を始めとする宇宙学校に対して命令を発信する。

次世代主力機計画「RX計画」の機体パイロットの育成を命ずる。貴校らに拒否権はない。拒否すれば軍部により接收し運営することもありうる

横暴である。完全なる戦争のしわ寄せが沖女を士官学校と変貌させ、その際男子部も併設されたのである。

なぜ帝国はこれほど性急に戦力を増強しなければならなかったのか？ ギガノスが滅び、敵のいないこの地球圏で。
理由は後に判明する。

宇宙怪獣

それに対する戦力として様々な方面で新技術・

兵器の開発、人材の育成が図られた。

その存在は沖女など士官学校に通うものなら、誰でも知るところとなる。当然、今シャワー室で汗を流すヒカリも知っている。当然カズミも。

しかし、「るくしおん」の一件で名を知られることとなったヤツらなのだが……なぜその事件より早く対応を開始できたのか？ 沖女の変貌は「るくしおん」事件の2年前である。

その答えを知る者はいない……

スーパーロボット大戦TOP ? Side The Earth
?

第2話 ヒカリとケーン

西暦2021年 6月31日 地球帝国日本州 沖縄女子宇宙学校
校舎裏

合同模擬戦を抜け出し、きれいに身支度を整えたヒカリは空を見上げていた。

明日から7月。夏本番。爽やかに広がるスカイブルー、巨大な入道雲が視界の隅に映るが強烈な太陽日差しを遮ってくれるものは少ない。こんな日は海で泳ぐのが一番だと思う。沖縄の美しい海に浸かれば、今の不愉快な気分も吹っ飛ぶことだろうに。

なぜなら今、ヒカリは沖女の校舎裏で、5人の男子生徒に囲まれていた。

校舎裏の日陰に腰を卸、吹き抜ける涼風を楽しんでいたところ

「てめえ、この前はよくもやりやがったな！」

これである。屈強そうな大の男が5人、三流の下っ端のようなセリフを吐いて現れヒカリを取り囲んだのだ。良い戦いをし、気持ちのよいシャワーを浴び、涼しく余韻を楽しもうとここに来たのに。緑がかった黒髪が涼しげに揺れるが、ヒカリの気分は台無しされる。

見覚えのない男子生徒にあんたは誰かと尋ねたところ、一人が激昂し言う。

「てめえと一昨日勝負した黒田だ！」

「……………ああ」

思い出した。5人がかりでロボットの私闘を申し込んできたグループがいたはずだ。あまりにも弱かったため5機まとめて1分程で片づけたやった気がヒカリはしてきた。

沖女では授業での模擬戦以外にも、生徒同士が機体を使い、練習を行ってもよいことになっている。ただし機体の修繕は自前で行うことになる。そのため積極的に私闘を行う生徒の数自体は少ない。

ヒカリは‘黒薔薇’の通り名で知られている。‘薔薇の女王様’の華やかさに比べて彼女は悪者的なイメージに捉えられていて、同じ実力者でもヒカリの方が明らかに喧嘩を売られることが多い。まあ……………それ自体は望むところなのだが……………。

しかし鬱陶しい。

「なによ。弱い男に興味ないの。だから、消えてくれないかしら？」

「このアマ！ 女のくせに生意気なんだよ！」

激昂していたリーダー格らしき男が拳をボキボキッと鳴らす。

「女だからって容赦しねえ！ この前の借りを今返してやるぜ！」

「情けないこと言うんじゃないわよ！」

ヒカリが腰を上げた。

「ロボット乗りが負けたからって、生身の女に暴力振るうおうなんて情けないと思わないのッ。リベンジするつもりならロボットでも持って来なさいよ！」

「うるせえ！」

突然、激昂男がムキになり殴りかかってきた。

情けない三流男だ。ヒカリはそう思う。私闘で負かした相手は数多くいるが、仲間を引き連れ復讐しにきた相手は初めてだ。

ヒカリは男のパンチをあっさり避ける　　と、一瞬で男の腕を取り、柔道の要領で地面に叩きつけてやった。ズダンッ、鈍い音がする。畳と違い地面は凶器だ、男は白眼をむいて気絶する。

「やりやがったな！」

案の定、取り巻きが声を荒げた。

ヒカリは思う。ロボット戦闘ならともかく、生身で男4人は流石に厳しい。だが、こんな相手に背は向けなくなかった。

「いいわよ、かかってきなさい！」

今にも男たちが飛びかかって来そうになる。

こちらから先に仕掛けやろうか……そう考えていた時だ。不意に、後方にいた男が短い悲鳴を上げて倒れた。また、一瞬に鈍い音がして隣と男も倒れる。倒れた男は頭を押さえながら地面で悶えている。どうやら何者かに頭を殴られたらしい。

「女の子には優しくしないといけないぜ」

それは赤いジャケットを羽織った若い男だった。一昔前の暴走族のように、茶髪を小さなリーゼントにしてある。身長はそれほど高くはない。だが太い手足はかなり鍛えこまれており、筋骨隆々という言葉が正に相応しい。

学生という雰囲気ではない、修羅場を超えた男の気配。しかし人懐っこい笑みを浮かべ、男は陽気に言う。

「怪我しないうちに帰った方がいいと思うぜ、ハハッ」

「誰だデメエ!？」

「おいおい、俺を知らないのか？ お前、戦史の授業すっかり聞いてないだな、こんな所で油売らずに勉強でもした方がいいんじゃないか」

「死ね、この馬鹿が!!」

もはやヤケツパチになった男のパンチ しかし避けられる。

すぐにジャケット男の拳骨が、すれ違いざまに男の鳩尾にめり込む。
内容物をまき散らして倒れる男に、

「バカっていう方が馬鹿なんだぜ」

そして、最後の一人に言う。

「おい、あんたも馬鹿かい？」

その男は倒された自分の仲間見回し、信じられないといった様子で動揺していた。女一人を囲みに来てこんなことになると思わなかっただけなのか、その場のノリで仲間たちに付いて来ただけなのか分からないが、後悔はしているようで目じりには涙が浮かんでいる。結局、彼は躊躇した後にジャケット男に突撃する。

「やれやれ」

男が拳を構えて言う。

「拳骨だ。当たると痛てえぞ！」

哀れ 岩石のように鍛えられたそれが、男の鼻骨と砕き顔面にめり込む。

彼は後頭部から地面に叩きつけられた。顔は血まみれになり、体はピクピクと痙攣している。

やばい、やりすぎたか……とでも考えているのか、男は微妙な表情を浮かべていた。間違いなく全員病院送りだろう。下手したら停学ものだろうか？ だが、この男に限ってそんな制裁を受けることは絶対にならないだろう。なぜなら

男はすぐにヒカリの方に笑顔を向ける。

「よっ、久しぶりだなヒカリ。お前、相変わらずスリリングな生活送ってんのな」

「大きなお世話。ケーン、あんたこそもう帰ってきてたんだね。任務は上手くいったの？」

ケーンと呼ばれた男は「当然」と答えた。

男の名前はケーン・ワカバ。

現在、沖女男子部3年生であり、ヒカリの悪友でもある。

そして、「ギガノス戦争」で名を馳せたD兵器の乗り手でもあり、対宇宙怪獣戦に向けて組織された先行遊撃マシーン兵器部隊「TO P」の一員でもあった

第2話 ヒカリとケーン 2

スーパーロボット大戦TOP ? Side The Earth
?

第2話 ヒカリとケーン 2

「ギガノス戦争」の英雄……ケーン「ワカバがそう呼ばれ始めてもう4年近く経つ。」

‘D兵器’、‘ギガノスの蒼き鷹’、‘機動宇宙要塞’……様々な非日常を経験し、乗り越えてケーンは今に至る。彼は今でも忘れることができない。あの日、あの場所でD兵器 ドラグナーと出会った日のことを。

そして、初めて銃口を向けた日のことを。初めてトリガーを引いた日のことを。初めて敵を撃破した日のことを……思えば、あの日はどこか頭のネジが外れてしまっていたように思える。

人を殺す それが誇らしく錯覚してしまえた日……やはり戦争は魔物だった。

戦争は人を狂わせる。いや、戦争は人が始めるのだから、本質的には人が人を狂わせているのかもしれないが。どちらにせよ、あの日ケーンは狂っていたのだろう。

今试着みてケーンはそう思う。

ライトにタップ……悪友にして親友の2人と共に戻れない一步を踏み出してしまったあの日……あの日からもう4年近くになる。

戦争は醜く、悲しい。二度と繰り返してはならない。

その考えに揺るぎはない……だが、ギガノスの残党はまだ世界中に散っており、ケーンたちは時折その掃討任務に狩りだされていた。今日もいつもと同じように鎮圧を完了し、いつものように沖女に戻る。

ってきたのだ。ルーチンワークのように繰り返す、だがその度にケーンは思う。

今は、人同士で争っている場合ではないのに……。

‘宇宙怪獣’ そんな強大な敵が存在しても人同士は争いを止めることはできないのだろうか？ いや、きっとそんなことはないはずだ、そうケーンは考える。

帝国各州からの知識・技術そして人材、それらが寄り集まって‘TOP’はできているのだ。TOPこそ人は強力し合えるということの証なのだ。ケーンは信じている。

だから迷うのだ。今日の任務は正しいのか？ 今こんなことをしていいのか？ と。

人類の敵は‘宇宙怪獣’なのに……と。

西暦2021年 6月31日 夕方 沖女周辺 商店街にある店「赤井屋」

「おいしいなあ」

店内にて、ヒカリは店の自信作というお菓子を頬張りながら、顔には至福の表情を浮かべていた。

店の名前は「赤井屋」。駄菓子屋として営業していたのが、店主の趣味で売り出した回転焼き「アンドロメダ焼き」がヒットしたことで、沖女生徒の間では結構人気になっている店である。

その後、ヒカリとケーンは沖女から離れ、ヒカリの希望で新作「カスタード味アンドロメダ焼き」を食べに、ここ「赤井屋」に足を

運んでいた。

「なあ、これ甘すぎやしないか？」

3口程齧ったケーンが眉を潜めて言った。

「やっぱりスタンダードな漉し餡のほうが俺は好みなんだがな」

「でもこれはこれでおいしいよ。色々な味が楽しめるのがアンドロメダ焼きの楽しみなんだから、もっと新しい味を作ってみてほしいわね」

「そついうもんかねえ……」

ケーンは持っていたアンドロメダ焼きを自分の皿に戻す。

ヒカリは好物のそれを食べ続け既に3個目に突入していた。ケーンの言うとおり漉し餡のアンドロメダ焼きが一番だと、自分も思っている。だが色々な味を受け入れるキャパシティを持つこの食品はやっぱり凄いなと、思いながらいつも新しい味を楽しんでいる。

3個目を半分程平らげたところでヒカリはケーンに聞いてみることにした。

「そついえば、今回の任務って一体何だったの？」

「ん……んー」

ヒカリの質問にケーンは少し言葉を濁し、「いつもと同じさ」と答えた。

任務が変わらない時ケーンの答えはいつもこうだ。いつもと同じ要するにギガノス残党の掃討である。戦争から4年近くたった今でも、奴らは各地でMAによるテロ行為を起こしたりしていた。

戦争を経験済みのケーンは、本当はそついった人と戦うような任

務はあまりつきたくないのだという。

沖女学生でありながら帝国軍に所属しているケーンと親友の2人は、時折上層部の指令でそういった任務に向かわねばならないらしい。内容は先ほどのとおりで時々人命救助などがあるそうだが。

「でも、大変だね。仕事しながら学生するのって」

「ははは、そんなことないぜ。ま、任務中の授業は全て出席扱いになるからな。胸を張ってサボれるってもんだぜ」

「いいよね。TOP部隊の役得ってやつ？」

TOP部隊

現行最強のロボット乗り集団である。

その一員であるケーン、そして彼の2人の親友タツプとライト。ギガノス戦争の英雄である彼らがなぜ沖女に通っているのかというと、元々民間人あがりである彼らに軍事のイロハを学ばせるためらしい。ケーンたちは勉強なんかしたくないと抗議をしたらしいが、その結果はここにいて彼をみればお分かりになると思う。

しかも任務のたびに狩りだされるのだからたまったものではない。

「でもさ、やっぱりケーンってTOP部隊なんだよね」

「……？　なんだよ？」

「結構頻回に任務に呼び出されてるしさ、こうして話してるとただの馬鹿野郎みたいだけど、戦争経験者だけあって操縦技術はすごいし……　なんかズルイよね」

アンドロメダ焼きを頬張り、呑み込んでから呟く。

「ケーンは私の知らないことをたくさん経験してる。特にロボットの戦いに関しては、戦争では兄貴と一緒に戦ってるし……　あーあ、私も早く実戦に出たいよ。学校なんてかったるいだけなんだもん」

「おう、そこは間違いなく同意できるぜ」

ケーンはジュースに付いてきたストローを口にくわえながら、さも面倒臭そうに言った。

「実戦で身に付けたことを、わざわざ一から教えてくれなくてもいいっての。下士官になるためだか知らないけどよお、オオタさんの言うことじゃなきゃ絶対来てないぜ。オオタさんの下で働いてる方が俺たちはよかったのによ」

「ケーンたちは兄貴の部隊で戦ってたもんね」

ヒカリは年の離れた兄のことを思い浮かべる。

兄は、彼女と同じ縁があった黒髪をしてはいたが渋い表情でいつも眉間にしわを作っていた。その鋭い眼光はヒカリにも遺伝していたが、人望・統率力・経験・実績　　まだ彼女が持っていないものを兄は持っている、自慢の兄だ。

軍に入ってから忙しさの合間縫い帰ってき彼女と遊んでくれた……ヒカリはそんな兄コウイチロウのことが大好きだった。

そして、目の前の男　ケーン「ワカバ　は、そんな兄の戦争中の姿知っている男の一人だ。

もう何度目になるだろう、聞き飽きることのない質問を繰り返す。

「ねえ、兄貴ってどんな感じだった？　どんな戦い方してたの？」

「そうだなあ……」

ケーンは語る。

「俺たちにとっては理想の上官だったぜ。確かに厳しいところもあったけどさ、部下思いだし、あの人の立てる計画は完璧だったからな、俺たちは安心して戦えたんだ。それにM A戦闘も完璧だったな。『帝国の黒い稲妻』は伊達じゃない、誰もあの人には叶わなかった

ぜ」

伝説のパイロット。ギガノス戦争でそう呼ばれた男の部下で、肩を並べ戦ったケーンは感慨深けにその頃を振り返る。

しかしすぐに言葉に詰まり、少しして深いため息を吐きながら呟いた。

「しかし、まさかあんなことになるなんてなあ……」

「宇宙怪獣、か……」

ケーンが「るくしおん」のことを言っているのだと、ヒカリには容易に想像がついた。

人類初のワープ搭載型宇宙戦艦「るくしおん」

その栄光

の船に兄オオタ コウイチロウはクルーとして乗船していた。ギガノス戦争での功績が評価されての結果だと聞かされた時、ヒカリはまるで自分のことのように喜んだものだった。

しかしおよそ1年が経つ頃、「るくしおん」は突如として消息を絶つてしまう。

ヒカリにとって正に青天の霹靂だった

兄は無事なのか？

当時の彼女はひどく心を乱れていたのを覚えている。

「まさかそんな化け物がいたなんて……子供向け特撮番組じゃあるまいし、兄貴の言葉じゃなきゃ絶対に信じられないよ」

結局、コウイチロウは生きていた。数少ない「るくしおん」の生きのこりとして、致命的

危機へのメッセンジャーとして帰ってきた。

「敵は宇宙にいる」

彼は帰ってきた、その言葉を伝えるために多くの傷を負いながら。そして、帝国中を激震が駆け巡った。すぐさま対策が練られ、軍事力の強化が決定される。「RX計画」の機体が世界中に配備された。その兵器の研修が義務付けられるなど沖女もより軍事色が強く変わってしまった。

ロボット乗りとして再起不能になった兄はその計画に深く関わっているらしい。今どこで何をしているのか、肉親のヒカリでさえ教えてもらうことはできない。

「宇宙怪獣め、許せない」

兄を傷つけた宇宙怪獣、ロボット乗りとしての生命を絶った宇宙怪獣、兄を自分から遠ざける原因となった憎むべきやつら。ヒカリの中に静かな激しい怒りが湧き上がる。

「そうさ、宇宙怪獣野郎は俺たちがぶっ潰す。そのためのTOP部隊だ……それにしても、ヒカリよお」

ケーンが珍しい見世物でも鑑賞するようにヒカリを眺め、下品な笑みを浮かべながら彼女に言う。

「お前は本当にオオタさんのことが好きなんだなあ」

「バ、バカ！ そんなのじゃないわよ！」

ケーンの言葉に思わず声を荒げてしまう。大きな声を上げてしまったため、店内の他の客や店主から視線が向けられる。恥ずかしい……自分でも顔が赤面しているのが分かった。

話題を変えないとまたいつ冷やかされるか分かったものではない。ここにいないあと2人の悪友、タップとライトのことでも話そうかとヒカリは思ったが、先にケーンが話を振ってきた。

「そういえば面白いネタがあるから教えてやるよ」

面白い？　なんだろう、とにかく話題が変わればそれでいいや、とヒカリはケーンにそれはなにかと尋ねてみる。

「実は明日、沖女に新しい教官が2人赴任してくるらしいぜ。それも沖女からTOP部隊への引き抜きも兼ねてるそうだ」

「TOP部隊！」

興味半分だったヒカリもその単語には耳を傾けざるを得ない。

「近々TOP部隊で隊員の大幅拡充が計画されててな、その一環として全国の士官学校にスカウトが来る手筈になっている。ヒカリ、お前にとっちゃ大チャンスってわけだ」

「そうね！　うまくいけば私もTOP部隊の一員になれるのね！」

「そゆこと」

TOPになれば兄にまた会えるかもしれない。なぜならTOPの主力機RX-7は、コウイチロウが深くかわる「RX計画」の産物であるからだ。

期待に胸が膨らむ。TOPに選ばれる自信、いや確信はある。沖女でヒカリに対抗できるのは、女子部ではアマノカズミ、男子部ではケーンら3人ぐらいのものだろう。

そしてケーンらは既にTOPである。

なら新入TOP部隊にはヒカリとカズミが選ばれるだろう。

自分が選ばれない理由はない。他の凡人たちよりも天才のヒカリが選ぶ方が、理屈としては正しいはずだ。そう思うと笑いがこみ上げてくる。

不思議なもので、普段は気だるい学校も行きたくてたまらなくウズウズしてきた。

明日が待ち遠しい。こんな感情は実に久しぶりなヒカリであった。教官として一体誰が来るのか？ まあ、それも楽しみではある。

こうして、ヒカリとケーンの一日はあっという間に過ぎていったのだった

第3話 ヒカリと新任教官

オオタ ヒカリには歳の離れた兄がいる。

名前はオオタ コウイチロウ。職業は軍人。‘帝国の黒い稲妻’の二つ名を轟かせ、ギガノス帝国を震撼させた伝説のパイロットだった。

歴史に名を残す兵であるが、家に帰れば妹のヒカリに対しては優しかった、彼女の自慢の兄であった……。

しかし、そんな兄も、亜光速空間で襲ってくる宇宙怪獣には文字通り手も足も出ず、深手を負い地球へと帰還する。

知らせを受け病院へと駆けつけたヒカリだったが、目に飛び込んできたのは、右目を挟まれ視力を失いベッドに横になるコウイチロウの姿だった。リハビリを経て退院に至った兄であったが、脱出の際の負傷は腰の神経を傷つけており、杖がなければ満足に歩行もできない状態であった。

伝説のパイロットと呼ばれたあの兄が……軍には復帰したが口ボツト乗りとしては廃業である。自分の目標である兄をあんな姿にしてしまったやつら この時覚えた怒りをヒカリは決して忘れないだろう。

この時から、宇宙怪獣を倒し兄の仇を討つことが彼女の目標になった。

しかし軍に復帰した兄とは、出発を見送ったあの日以来会えていない。軍の機密計画を指揮していて多忙だから戻る暇がないのだと、TOPのケーンが教えてくれた。

TOP部隊 ここに入れば宇宙怪獣と戦え、兄にも会える。しかし今日、沖女から引き抜きがあることをケーンが教えてくれた。卒業したら志願しようと考えていたヒカリにとっては最大のチ

ヤンスである。

こんなに情報流してケーンの奴は大丈夫なのだろうか、などと考
えながら床に付く。

明日が待ち遠しい。久しぶりの高揚感を胸にヒカリは眠りについ
た。

そして、今日も日は昇る。

スーパーロボット大戦TOP ? Side The Earth
?

第3話 ヒカリと新任教官

西暦2021年 7月1日 沖縄女子宇宙学校 校庭

翌日の昼過ぎの5、6時間目、沖女女子部では全校合同のマシ
ン演習が急遽とり行われることとなった。

マシーン演習を想定している校庭はそれ相応に広く生身で渡るに
は少々広すぎる。そこに全校生徒が各々のマシーンに搭乗し整列し
ており実に爽快である。

ただ一つ……

「 であるからして、諸君らには立派な宇宙パイロットを目指し
てもらいたい 」

これは拷問だろうか、いやそうに違いないと錯覚させられるほど
に、長く無為な校長の演説だけはどうにも我慢しがたい。日差しの
暑さも相まってコクピットは地獄の暑さだ。ほとんどの者がオート

バランスを起動し、校長の話を右から左へ流している。

それはヒカリも同じだった。ただし、なんの苦も無く直立姿勢を数十分維持しているのが他の生徒とは違う点なのだが。

「ねえねえ、あの話聞いた？」

話に耐えきれなくなった女生徒がオープン回線で友人に聞く。同じく回線を開きっぱなしにしていたヒカリにその会話が流れてくる。

「なになに、なんの話？」

「ほら、今日の演習って急に全校合同って決まったじゃん？ 実はさ彼氏に聞いたんだけど、男子部も午前中に急に合同演習することになったんだってさ」

「へー、そうなんだ」

他愛もない会話、女子部でやっていることだから男子部で行われなくても不思議ではない。

「それでなんで急に決まったんだろうねー、って聞いたら、今日新しい教官が二人配属になったんだって。だからその教官の紹介もかねて、教官の指導で合同演習をしたみたいだよ」

「そうなんだ。教官ってどんな人なんだろうねー、かっこいいのかな？」

「それが分かんないんだよね。彼氏も妙にへばっちゃっててさー、あまり必要以上のこと話してくれなかったんだ」

「珍しいね。あなたの彼氏タフなので有名なのだね」

「

ヒカリに聞かれているとは知らず女生徒たちの会話続く。

ケーンの言っていた通り沖女に新任教官が配属になったらしい。

彼の言っていた通りならその教官の目的はTOP部隊への引き抜き

のはずだ。男子部でも紹介されたということは、壇上でタラタラ語っている校長の話が終わった後自分たちの前に姿を現すはず。

……長い校長の話はようやく終わりを迎えた。

「実は今日皆さんにお集まり頂いたのには理由があります。

本日、7月1日づけで本校に配属になる教官を紹介します。彼らは軍本部から本校に来てくださったマシン操作のエキスパートです、皆さんしっかり勉強をさせてもらうように」

また長話になりそうな雰囲気醸し出した……今度は傍にいた教頭が声をかけたので話は一度そこで止まり校長は再びマイクに向かって言う。

「では一人ずつ壇上に上がってもらいましょう。一人目はマイヨ＝プラート先生です」

校長に促され一人の男が壇上に現れる。

長身の男だ。歳は20歳後半から30前半ぐらいだろう、髪を整髪剤でまとめいわゆるオールバックという髪型にしている。端正な顔立ちだが、軍部出身というだけあり、彼の鋭い眼光は幾多の修羅場を潜り抜けてきた証のようにさえ思える。

校庭に集合していた女生徒たちが一斉にざわめき出した。

「ちょっと、マイヨ＝プラートって……！」「あ、あれがそんなの……？」「知らないわよ！」
マイヨと呼ばれた男の姿を見て、女生徒たちは好き勝手に騒ぎ出す。

だが、彼女たちが驚いているのはマイヨという男の姿ではない。

「マイヨ＝プラート、元『ギガノスの蒼き鷹』か。これは超大物だね」

マイヨ「プラート、予想外にでてきた男の名前にはヒカリも驚くしかなかった。」

マイヨ「プラート　　ギガノス戦争で地球帝国を恐怖させたギガノス側のエースパイロット。蒼いMAを駆り戦場を駆け抜ける様はまるで鷹。間違いなく戦時最強のパイロットの一角だった男だ……それに確か、

「ケーン……あんたのライバルじゃないか」

あのお気楽野郎、知っててわざと言わなかったな。ヒカリの驚く顔を想像して楽しんでいるはずだ、絶対に。後で文句を言ってやるう。

壇上のマイヨが校長からマイクを受け取った。

「只今ご紹介いただいたマイヨ「プラート」だ。諸君の中には私の名を聞いたことのある者もいることだろう」

ハスキーな声で綴られるマイヨの言葉に女生徒たちは黙り、注目する。

「今の私は『ギガノスの蒼き鷹』ではなく諸君らの教官だ。私に教職の経験はないが、新兵に本場仕込みの技術を叩きこむ自信なら持っているつもりだ。よろしく頼む」

マイヨの自己紹介が終わると同時に女生徒たちから黄色い声を上がった。

伝説のエースパイロットが自分たちの教官になる。それが心を高ぶらせるのか、それとも顔立ちが整っていればそれでいいのか、テンションの高まった女どもは手がつけられないお祭り騒ぎだ。

「ったく……なにが面白いんだか……」

この手の話で盛り上がる気持ちがいまいちヒカリには分らない。教官とは言え、誰が来ようと大概自分より劣っている者ばかりだった。まあ流石に、今回のように伝説ともなると分かりはしないが今までそうだったので、そこまでの感情の高ぶりを他の人のようには得られない。どうしてもよくなりヒカリは目を薄め、2人目の紹介が終わるのを待つことにした。

途端に喧しくなった女生徒をなだめようと、マイクを校長が受け取ろうとする。

しかし、そのマイクを奪い取る者がいた。

「黙らんかッ、馬鹿者がッッ!!」

スピーカーが悲鳴を上げる程の怒声が飛ぶ。

マイクを持った男が、黒いジャージを着て片手でつき壇上にいた。

「まだ話は終わっていない! 貴様らも宇宙パイロットを目指しているのなら最低限の規律は守れ! 宇宙で規律を守れん者は真っ先に死ぬぞ!」

一喝。

男の言葉に騒いでいた女生徒たちは一瞬で静かになっていた。杖をつき五体不満足なその男は、校長にマイクを渡す。

「申し訳ありません。出すぎたまねをしてしまいました」
「いえいえ、いいんですよ。それがあなたの仕事ですから」

受け取った校長女生徒たちに言う。

「皆さん、ご紹介が遅れました。彼が沖女に配属される2人目の教官です」

マイクを受け取るジャージ男。自己紹介とっていいのか疑問なほど大きな声で叫び声を上げる。

「私がー、今日から貴様らにマシン兵器の操縦を指導するオオタだあー!!」

「えっ、あ、兄貴!？」

聞き覚えのある声に目を開けるヒカリ。そこに立っている男の風貌に彼女は当然のように見覚えがあった。

壇上に杖を持ち体を支える男。昔から黒を好むその男は、右目に立てに大きな傷がありそれを隠すように大きなサングラスをかけていた。眉間には険しいしわがより頬はこけ、以前よりも老けたように彼女は感じる。

そこに立っていたのはオオタ ヒカリの兄

「いいか、付いてこれないものは容赦なく叩き落とす! 覚えておけ!!」

オオタ コウイチロウは鬼のような表情で宣言したのだった。

第3話 ヒカリと新任教官2

オオタ コウイチロウ オオタ ヒカリの歳の離れた兄。

ギガノス戦争で、帝国の黒い稲妻、と呼ばれた男。「るくしおん」の事件の生きのこりであり、脱出の際の負傷でパイロットとしての生命を絶たれた男。

そして「RX計画」の創始者にして推進者である男。

その男が今、ヒカリの前に立っている。

見えない右目、杖なしでは立てない体……そう、あの日の、彼女の前から消えたあの姿のまままで……

スーパーロボット大戦TOP ? Side The Earth
?

第3話 ヒカリと新任教官 2

沖女、その校庭。

オオタ コウイチロウは片手を上げながら叫んでいた。

「いいか！ まず、今から全機のオートバランサーを切る！」

彼の手の中には手のひら大のリモコンが握られていた。

オートバランサー……その名の通り陸上において機体が地面に立つことを補助する装置だ。少々姿勢を崩したとしても装置の力で地に足をつけておくことができる。自動車のマニュアルとオートマの違い……多数の機器を扱うRX-7の難度はその比ではないのだが、

基本的な概念は同じである。

「お前たちもパイロットを目指しているなら自力で立ってみろ！」

沖女1年生が機体を扱えるのこのオートバランサーの恩恵が非常に大きい。それをコントロールする装置、オオタは一言そう言う手につけていたそのボタンを押した。

校庭中から響いていた音が少し弱まる。一瞬の間の後、同時に大きな音が上がり始めた。

すぐに「いやー、あんまりよ！」「ちよつと、勘弁してよ！」「いきなりそんなの無理よ！」

と、校庭中に生徒の悲鳴が広がりはじめる。青・黄・赤と信号機の色のように色分けされた各学年のロボットたちがよろめき、ある者は転び、腰をつき一瞬でその場は騒然となる。

しかしその悲鳴・騒音はヒカリの頭には届いてはいなかった。バランサーなしで茫然と立ち尽くした黒いRX-7……そのモニターには壇上でボタンを押した男の姿が映され、拡大表示されている。

その懐かしい顔にヒカリの視線は釘づけになっていた。

間違いない兄だ。オオタ コウイチロウだ。長い間音信不通だった兄が目の前にいるのだが、再会の喜びよりもこの状況に対する困惑が先に立つ。自分の兄が新任の教官だつて……？

「ケーンめ……今度会ったらぶん殴つてやる」

この事実を知っていたに違いない悪友に復讐を誓い、

「兄貴！」

コウイチロウに声をかけた。が、彼の視線はこちらに向くことは

ない。校庭中に響く雑音の嵐にヒカリの声はかき消されてしまっていた。

それならと、ヒカリは目の前を機体の壁をかきわけ前に出ようとする。その動きに懸命に姿勢を制御していた3年のRX-7が音を立てて倒れこんだ。亀のように手足をバタつかせるそれを尻目にし、他の3年たち押しのけながらどんだん歩を進める

と、

「少しお待ちになって」

可憐な声と軽い衝撃がヒカリに訪れる。振り向くと銀色のRX-7がヒカリの機体の肩を掴んでいた。ヒカリ同様に安定した姿勢を保ったままアマノ カズミが言う。

「あなた一体何をなさるつもりなの？ また昨日のように合同演習をメチャクチャにするつもりじゃないでしょうね？」

「うるさいな……あんたには関係ないでしょう」

苛立ったヒカリが手を引き剥がそうとレバーを操作する。しかしカズミの手は離れない、相当な力で掴んでいた。モニター上でカズミは顔を少し曇らせて言う。

「そういう訳にはいかないわ。あなたはいつも好き勝手をして授業をメチャクチャにするけど、今日という今日は許しません。いったい前に出て一体何をするつもりなの？」

ヒカリの表情に苛立ちが走った。

「だからあんたには関係ないって……」

「何度も言わせないで。今日は」

いつもと同じような説教……ヒカリは耳を閉ざすことにした。しかしカズミは機体の手を離すつもりはないようだ。煩わしい。叩きのめしてやるうかと、レバーを握る手に力がこもった。だがその時

「気をつけえええいつ……!!」

空気まで切り裂きそうなコウイチロウの怒声が、校庭中に再び響き渡った。

「いいかあ貴様ら！ 実戦は手動が基本だ！！ これからはオートバランサーの使用は一切禁じる！！」

「ええー！！」

女生徒たちから一斉に批難の聲が上がるがコウイチロウはそれを一喝する。

「自力で立てんような奴は学科からやり直せ！！ まずは手始めにそのまま全員校庭を50周！！ さあ、走れえ！！」

その言葉に女生徒たちはうろたえ、顔を見合わせていた。中々一人目が足を踏み出そうとはしない。ほんの5 - 6秒のことだったが、それでも業を煮やしたのか、コウイチロウは懷から拳銃のようなもの取り出し空に数発ぶっ放した。

実銃か空砲か区別がつかないが、音と威圧感が女生徒たちの間の空気を一瞬で凍りつかせるには十分。

「走れ！！」

サングラスがキラリと光る。

同時に堰を切ったようにRX-7の群れが悲鳴と共に走り出した。しつかり走る者、へつぴり腰でふらつく者、よたよたと千鳥足のよな歩みをみせる者……他者多様な行軍が始まる。

声の出ていない者には罵声が飛ぶ。ものの数分で校庭外周に口ボツトによる長蛇が出来上がっていた。

「私たちも行きますわよ」

しつこく掴んでいた肩を離れた。カズミの銀色のRX-7も颯爽と走り始め、その列へと加わっていく。

残されたヒカリはその長蛇を無視して、壇上へと向き直った。

「おいその黒いの！」

コウイチロウから檄が飛ぶ。

「お前もさっさと走らんか！！ 早くせんとさらに30周追加にするぞ！！」

「ちよつと待つてよ兄貴！」

外部スピーカーを通してヒカリの声が響いた。

兄貴？ その単語にコウイチロウの怒声が止んだが、最初に反応を見せたのは傍にいる新任教官マイヨプラットフォームだった。

「兄貴……オオタ、まさか彼女は？」

「……ああ、そうだ……そうだったな。ここに入れていた」

難色を示したコウイチロウ、しかし数秒程で黒いRX-7を見上げて言う。

「俺はお前なぞ知らん」

「ちょ、ちよつと兄貴、それってどういう意味！」

ヒカリは大声を上げた。知らない……そんな馬鹿な。さっきの間や態度を見れば分かる、コウイチロウはこの黒いRX-7にヒカリが乗っていることに気づいている。それを知らないとはどういうことだ、2年ぶりに再会した実の妹に対して。

初めは困惑していたヒカリだったが、すぐに悔しさと怒りがミックスされ顔色が少し赤く変わり始める。

「そのままの意味だよ」

マイクを受け取ったマイヨが、今にも噴火しそうなヒカリに淡々と語り出した。

「君が彼とどんな関係であるのかは知らない。だがその前に君は、この沖女の生徒でありこの演習に参加している身であるはずだ。そして我々は今日この学校に赴任してきた教官だ」

「だったら何だって」

「

「黙って聞きたまえ」

静かな声の中に潜む大きな威圧感と眼光、マイヨのそれにヒカリは息を飲んだ。

「我々と君との関係は教官と生徒だ、分かるかね？」

「分かるわよ、馬鹿にしないで」

「ならば何故君は我々の指示に従わない？」

走るロボット群を指差し、マイヨは問う。

「我々の指示には全て意味がある。バランサーなしでの長距離行軍は機体の制御技術向上には非常に効果的だ」

「そんなこと分かってる！ でも」

言葉が詰まる。

兄と話しがしたい。顔をしっかりと見たい。2年間何があったのか……兄に聞きたいことは沢山ある。目の前に兄がいる、演習なんてどうでもいい。機体から飛び降りて兄の元に駆け寄りたい。

思考を呼んだようにマイヨは微笑み、彼女にこう言った。

「語りたいことがあるのだろう……だがオオタの立場も考えてもらいたい。これが終わった後ゆっくり話せばいい、この後我々は職員室にいるからな」

「マイヨ……教官」

彼はヒカリがこれまで接した教官とはどこか違っていった。

技術面ばかり教えるくせに既にヒカリに追い抜かれて、ろくに指導もしなかった今までの教官たち 彼らにどこか腫れものを扱うようにヒカリは遠ざけられていた。彼女の心を察する言葉をかけてくれたものはいなかった。

「だからオオタ ヒカリ、今は走ってくれないか？」

凜としたマイヨの声、そして自分の心を察してくれたかのような言葉。確かにここで兄と話をする必要はなく、この後ゆっくり会えばいい。その言葉にヒカリは操作レバーを動かしていた。

黒いRX-7がロボットの流れの中に加わっていく。

そう、これが終われば兄と話することができる。ならこんな自分にとって役に立たないに訓練にだって参加した意味があるというものだ
ヒカリの機体は猛烈な勢いで女生徒たちをかきわけ走り

出していた

黒いRX-7が疾走していく。もたつきながら走る他の機体の3・4倍はあろうかというスピードだ。正に全力疾走という言葉しっくりくる、そんな速さ。

コウイチロウはそんな妹の姿をしばらく眺めていた。

「話通りのじゃじゃ馬だったな」

傍にいたマイヨに声をかけられた。

マイヨ「プラート　　ギガノスの蒼き鷹」と恐れられ、自分たちと幾度と死闘を繰り広げていた男。そんな男と共に教鞭を持つことになる。人生とは不思議なものだ。

コウイチロウはマイヨを認め、マイヨもコウイチロウを認め、互いの話しを夜更けまで語ったこともあった。ヒカリの事も話したこともある。相当の羽っ返りということも、自分が妹を心配しているということも、だ。

2年間に連絡を取ろうとしたこともあった。しかし自分は機密に関わっており暇もない。不覚にもあの時、2年ぶりの妹の声に思考は止まってしまっていた。

「すまなかったな、マイヨ」

「なに、気にすることはない」

この友の言葉には何度助けられたことだろうか。

コウイチロウは感謝しつつ、自分が沖女にきた理由を振り返る。

1つはTOP部隊選抜のため。ざっと見たところ、女子部では候補

はアマノ カズミ1人は既に確定といった所か。
そして、もう1つの理由を思い返し、校庭を見た。

校庭の内側、1年が整列していた辺りの場所にまだ1機のRX-7が残っていた。

赤いマーキングをしている。1年機だ。同じ位置でよろめき続け姿勢を制御するので精一杯なのが見て取れる。1歩踏み出そうとしバランスを崩し、体勢を整える。それを繰り返している 要するに最低レベルの操縦技術の持ち主だ。

コウイチロウは手に持っていた装置を操作した。
するとそのRX-7の腹部が上下にスライドし、コックピッドが外界にむき出しとなる。そこには栗毛の少女が汗だくになって乗り込んでいた。

「その1年！ マシンから降りろ！ 自分の足で50周してこい！！」

コウイチロウの声に女生徒たちから笑い声が上がる。
栗毛の少女は言われた通り機体から降り、涙目になりながら走り出した。マシン兵器訓練用の校庭、生身で50周も走りきれるものではない。だが少女は走り出した。

そう、彼女こそオオタ コウシチロウ来校のもう1つの目的。

少女の名前はタカヤ ノリコ。
彼の命の恩人、「るくしおん」艦長タカヤ ユウゾウの一人娘である

第3話 ヒカリと新任教官2（後書き）

会話を書くのがやっぱり難しい…

第4話 ヒカリとノリコ

走る。オオタ ヒカリは走り抜ける。長い校庭を50周、体は既に火照っている。

もうすぐ兄に会える、話ができる。実に約2年ぶり、本当に楽しみだ。TOP部隊入隊のチャンスと思い演習に参加していたが、そんなこともうどうでもよくなっていた。

はやく、放課後にならないものか…ヒカリは校庭を駆け抜け

時間はあっという間に過ぎ、沖女は放課後を迎えた。

スーパーロボット大戦TOP ? Side The Earth
?

第4話 ヒカリとノリコ

放課後 沖女 生徒指導室

「さあ兄貴、どういふことかーから説明してもらっからね」

ヒカリが机を叩きコウイチロウに対してにじり寄っていた。

場所は生徒指導室…5畳程のスペース、そこに小さなソファアが2つに丈の低い木製のテーブルが置かれ、2人は互いに向かい合い座っている。

また、机を叩く程度の音が大きく響く広さの部屋、その入り口はドア一つ…侵入者を阻むためか、ヒカリを出さないためか、マイヨ

がそこには陣取りドアにはもたれ掛かっていた。

兄弟の話を立ち聞きされるのはいい気分ではないが、彼なら他言はしないだろう。

「なんで約2年間1度も連絡よこさなかったのよ！」

確かに兄と再会できたことは嬉しい。だが今はそれよりも腹立たしさが先に立つ。たった一人の肉親に約2年の間音信不通、放置状態：幾らなんでも不誠実だろう。怒りの鉄拳で机の寿命を確実に減らすヒカリに、コウイチロウはしばらく黙したままだったがやがて口を開いた。

「『RX計画』 ヒカリよ、当然何のことかわかるな？」

「？ RXシリーズの開発計画のことでしょ？ もしくは対宇宙怪獣用決戦兵器の開発計画」

「そうだ。そして、その計画の発案者であり計画の指導者であるのが、俺だ」

コウイチロウがそういう立場であるということは先刻承知済みだ、特に驚くようなことではない。

「そんなこと知ってるし…それが連絡取れなかった理由だってわけ？」

「機密に関わっていたということ、それに加え激務のため自分の時間がほとんど取れなかった。言い訳でしかないのだろうが、その中で俺に余裕はなかった。日を重ねるにつれてお前の事を思い出す頻度も徐々に減っていた……」

苦笑するコウイチロウ。

そんな兄の印象が約2年前と大分違う、ヒカリは当然そんなこと

には気づいていた。いや、機体のモニター越しではなく、直接彼に会うことで初めて気づいた。

あの悪友ケーンのように筋骨隆々だった体は訓練に直接介入できなくなったためか細り、頬の肉は削げ頬骨が飛び出して見える。宇宙怪獣に関わり負った後遺症で使えなくなった筋肉が衰えていた。

昔の逞しい兄を知るヒカリにとって今の彼はとても儚げに見えてしまう。

そんな体で約2年頑張ってきたのだ、余裕など本当になかったのだろう……ヒカリに兄を責める気はなくなっていた。静かにコウイチロウの話を聞く。

「お前には本当にすまないと思っている。だが今人類には力が必要なのだ」

「力……」

「そう、そのためのTOP、バスター
いやマシン兵器なのだ」

先行遊撃マシン兵器部隊『TOP』 そして対宇宙怪獣

決戦兵器開発計画『RX計画』……これら2つにコウイチロウは深く関わっている。そうケーンも言っていた気がする。

宇宙怪獣に対抗するための大きな2本の柱、どちらか一方が欠けると成立しない人類の切り札。

だが『RX計画』は2年以上前、さらに言えば「るくしおん事件」より以前「ギガノス戦争」直後より存在している。それがどういうことなのか、ヒカリには分からなかった。
だから

「ねえ兄貴……」

ヒカリはコウイチロウに問う。

「マシン兵器……RX-7ってギガノス戦争直後から開発が始まったはずだよな？」

「……そうだ」

「じゃあなんで、対生物戦用の電撃兵装ばかり実装されているの？」

それは以前から気になっていたことだ。

RX-7 『RX計画』の1つの結論とも言えるこの量産機には、多量の不必要とさえ感じる電撃兵装が昔から実装されていた。

まず動力からしてMAとは違い、‘プラズマドライブ’を装備。さらにそこから発生する強力な電流を内蔵・外装武器に通電し使用する。そして実弾兵器など一切装備していないという、MAに比べる とまるで欠陥兵器……そう言っても過言ではないアンバランスさだ。ひとたび絶縁処理を施されてしまえば効果は半減してしまうだろう。そしてこの兵器が各士官学校に配備され始めたのが、約2年前。コウイチロウが消えた前後だ。

「もしかして、元々対人戦なんて想定していなかったんじゃないの？」

「………」

「それに兄貴が計画に関わっていたとしても、実戦配備が異常に早すぎる。兄貴がいなくなった時点で既に量産体制は完成していた……」

「……」

「………」

「……ねえ兄貴、私に隠していることまだ沢山あるよね」

「……ああ」

最後の質問にだけ静かにコウイチロウは答えた。

「ヒカリよ、悪いが部外者には教えられない」
「そうだよな」

当然の返答だったが、その言葉にどこか寂しさを覚えるヒカリ。
自分は兄の事を何も知らないのではないか、そう悲観的に感じてしまふ。

しかし

「だがそれが身内なら教えることもできよう」

そんなヒカリの内心を読み取った訳ではないだろうが、コ
ウイチロウがそう言い、続けた。

「ヒカリよ、TOPに入れ。俺たちの赴任はその選抜も兼ねている」
「兄貴……」

TOPになれ。そのコウイチロウの言葉でヒカリは思い出した。
今日の演習に参加したのはTOPに入るチャンスを手に入れるため
だったことを。

TOPに入れば宇宙に行くことができる。宇宙怪獣と戦うこと
ができる。兄と共にいることができる。自分が望んでいた光景
を手に入れることができる。

その切符はコウイチロウが持っている。なら入隊は決まったも同
然と、ヒカリは考えていた。

「兄貴、私TOPに入るよ」
「ダメだな」

ヒカリの決意は一蹴され、

「えっ？」

間の抜けた声を上げてしまった。綺麗な即答後、コウイチロウが続ける。

「俺は入れとは言ったが、入れるとはまだ言っていない。答えは1週間後、それまでは全校生徒の指導をし、7月7日までに選抜者を決める予定だ。このことは明日全校に伝える」

「なんだ……」

ヒカリは安堵の息をついた。チャンスは平等に与える、だから今は決められない。そういう意味で兄は言ったのだと。

だがコウイチロウは畳みかけるように言う。

「だがヒカリよ、今のままではお前をTOPに選ぶことはできん」

ヒカリは淡々と宣告された。

「今のお前には決定的に足りていないものがある。それを知り、学ばなければ、お前のTOP入りを認めることはできん」

「……なによそれ……」

頭が、体が一気に重くなるのを感じた。まるで鉛でも体に乗せているような感覚。顔を伏せ小さく呟いたヒカリの言葉は彼には届いていない。

「今女子部で選ぶならアmano カズミだろう。彼女なら」

「なんでカズミは良くて私はダメなの!!」

カズミなら その言葉が彼女の神経を逆撫でした。

狭い部屋内にヒカリの叫びが響く。つい振り上げてしまった手の平で机を叩き、コウイチロウをキツと睨みつけた。

「私は天才なのよ！　なんで天才の私がダメで、良くて秀才程度のカズミがTOPなの！？　理解できないわ！！」

「……ヒカリ」

「そもそも兄貴もおかしいわよ！！」

爆発……そう表現されても仕方ない程の感情が噴き出す。様々な感情、心という川の底に沈み溜まっていたそれが堰を切って溢れ出し、ヒカリはそれを制御することができなかった。

特に兄に認めてもらえないという苛立ちと怒り、そして不満がヒカリの口を動かす。

「わざわざ沖女に赴任したのは私を迎えに来たからじゃないの！？　私は兄貴に会えて嬉しかった！！　でもなんでそんなこと言うの！？」

「落ち着けヒカリ」

コウイチロウの声が遠く聞こえた。頬を生温かい液体が伝うのを感じる。もう抑えは利かなかった。

「私は天才なのよ！！　何だってできるわ！！　勉強もスポーツも、ロボット戦闘だって、誰にも負けたことはないわ！！　どんなに努力してきた相手でも私の前では頭を垂れるしかないのよ！！」

「……ヒカリよ、だからダメなのだ。今のままのお前では
「煩いっ！！」

コウイチロウの言葉を遮るヒカリ。
もうダメだ。もう今この場に居たくない。ソファから立った。

「どいて!!」

ドアに寄りかかっていたマイヨを涙目で睨みつける。

あっさり明け渡されたドアをくぐり、隣接している職員室に出た。騒ぎが聞こえていたのだろう、複数の職員の視線がヒカリに向けられている。刺さるそれらに今の自分の顔を見られたくはない。

ヒカリは廊下へ飛び出し、その場を走り去って行った

まったく…昔のままだ、全然成長していない

コウイチロウは開けっぱなしのドアを眺めながら深いため息をついた。

ヒカリは昔から自分の才能に絶対の自信を持ち、一切の努力を放棄してきた。それでも彼女は全てを上手くこなしていた。それが彼女のその傾向にさらに拍車をかけていた。

沖女に入り、環境が変われば、少しは良くなるかと楽観的に考えていたが甘かった。妹は昔のまま全然変わっていない。昔のまま成長を続けていた。

「お兄様も大変だな」

「マイヨ」

ドアを閉めながらマイヨが言った。

「気持ちは分かる。素質は十二分、もしかするとオオタ、お前以上かもしれない……だが、危うい」
「その通りだ」

サングラスの奥の目を細めながらオオタは呟く。

「あいつは何でもできすぎた。それ自体はいい事だ、悪くはない。だがそれ故に努力を放棄した、それどころか蔑んでさえいる……傲慢と言っている。できることの弊害とでも言えればいいのか……だが、今のままのあいつを宇宙に上げるわけにはいかん」

「そうだな」

マイヨが頷く。

「このままでは危険だな。早いうちに彼女は知っておいた方がいい」

「そう、それも俺たちのような大人ではなく同年代の娘で、それを受け入れることができる状況を作らなければならん」

「フツ、難儀なことだ」

苦笑するしかない。あのヒカリに対してそんなことができるだろうか？ 時間が欲しい。時間をかければきっと何とかできるはずだ。思案するコウイチロウ。しかし頭に浮かんだのは答えではなく一人の少女の顔であった。

「いかん」

「どうした？」

突然の声にマイヨがコウイチロウに聞いた。杖をついてソファから立ち上がったコウイチロウが言う。

「校庭に忘れ物をしていた」

「む……ああ、そうだったな」

マイヨは納得いったらしく、ドアを開けるとコウイチロウと共に

生徒指導室から出る。

視線を向ける教員たちを尻目に2人は校庭へと向かった。

沖女 校庭

こんなはずじゃなかった……。

校舎を出たヒカリは泣き枯らした瞳を擦りながら、校舎を出て校庭を歩いている。

こんなはずじゃなかった……約2年ぶりの再会、もつとお互いの時間を縮めることができる、そう思っていた……。だが結果はこうだ。理解できない
なぜ天才の自分が外され、アマノ カズミが選ばれるのか？

努力なんて糞だ。

今までにいただろうか？ 鍛え上げること、自分を磨くこと……即ち努力！ それをこなして自分に勝った人間が……？ はたしていただろうか？

いや、いない。

アマノ カズミ……あんなのは少し本気になれば叩きのめせる。ケイン・ワカバ……闘ったことはない、だが自分の前に平伏するのは時間の問題だろう。

どういつもこいつも……屑ばかりだ。

なのに何故……何故自分は選ばれない？ 天才の自分が？ 兄の……コウシチロウの考えが分からない。TOPに居れば一緒に戦えるのに、それを望んでいるような言葉をかけてくれたのに……！

自分に足りないものは何なんだろう……兄が言っていた知らなければならぬもの……はたして、それはヒカリの理解の範疇にあるものだろうか？

分からない。

重い……心も体も……普段より遅い足取りで校庭を横切るヒカリ。そんな彼女の視界に飛び込んできたモノがあつた

校庭の中央に正座するRX-7 そして外周を必死の形相で走り続ける一人の少女

苦悶の表情、跳ね上がる息に大粒の汗、既に限界を超えているのだろう虚ろな瞳がヒカリと交わる。栗毛の少女は何も語らず、ゆっくりと一步一步校庭の外周に歩を進める。

無駄な努力をする女が、また一人……その様子はどのようにヒカリには映っていた。

あの少女は確か、演習中に兄から罵声を浴びせられていた女だ。演習終了から夕に1時間は経っていた。その間走り続けていたのだろうか？ このロボット用の広大な広さの校庭を。

正に無意味だ、そんなことロボット戦闘に何の意味もないはずだった。

……だが、そんな光景が妙にヒカリの意識を引きつける。

「ちょっと、そこの1年生！」

思わずヒカリは声をかけていた。

話しかけられた栗毛の少女は驚いた様子で立ち止まり、静かに肩を揺らし息を落ちつけた。

「はあっ……はあ……な、なんですか？」

息を切らす少女とヒカリの視線がぶつかる。

ヒカリは思った。今日は理解できないことばかり起こる。

何故走る必要がある？ 教員も他の生徒もないこの放課後に、

一人で走り続ける意味などあるわけがない。

何なんだ、一体……誰も彼も訳が分からない……

「……なんで、あんたは走ってるの？」

話しかけられた少女はしばらくキョトンとした表情を浮かべていたが、やがてこう答えた。

「……私、マシーンを動かせなくてコーチに生身で走れって言われたんです」

愚直な、ヒカリはそう思う。だが少女はこう続けた。

「……でも、私は今自分にできること精いっぱい頑張りたいんです……」

……下らない、ヒカリはそう思う。

だが、その少女の言葉が、どこか心に引っかかる。

気まぐれに過ぎない だが、ヒカリは彼女の名前が知りた

くなっていた。

「1年生、あんたの名前は？」

「タカヤ ノリコです」

オオタ ヒカリとタカヤ ノリコ。それが彼女たちの出会いだった。

た

第4話 ヒカリとノリコ（後書き）

誤字が多かった…気をつけないと

第4話 ヒカリとノリコ 2 (前書き)

ちよつと短め

第4話 ヒカリとノリコ 2

時間というのは残酷だ。

誰にでも平等のようであるが、各々の置かれた状況で体感する長さが違ってくる。

楽しければ短く…辛ければ長く…今のヒカリは後者であつた。

兄に認めてもらいたい…そのために何をすればいいのか？

兄の言っていたヒカリが知らなければならぬものとは何なのか？

…皆目見当もつかない。

そのためヒカリは1週間私闘を繰り返した。嫌でも自分の強さが兄の耳に入るように。どうしてよいか 分からない故に、ただ必死に体を動かしていた。

…空しく…長い1週間が過ぎた。

そして、西暦2021年 7月7日 TOP選抜発表の日
がやってくる。

75

スーパーロボット大戦TOP ? Side The Earth
?

第4話 ヒカリとノリコ 2

沖女 校舎前 大掲示板

朝8時、ヒカリにしては珍しく早起したその時間には、既に女生徒による壁が出来上がっていた。皆が皆掲示板に張られた1枚の

紙を目当てに集まっている。

7月1日に伝達された事項の結果がそこには張り出されていた。

「ねえ見て、やっぱりお姉様選ばれてるわ!」

「流石お姉様ね、世界でも通用する実力をやはりお持ちになっていたんだわ」

「じゃあもう一人は誰かしら? お姉様と一緒に宇宙に上げられるのは……私かしら?」

馬鹿なこと言わないの、と名も知らぬ女生徒同士が話に華を咲かせている。

アマノ カズミ……「薔薇の女王様」はやはり選ばれたようだ。この沖女でヒカリに次ぐ才能の持ち主、秀才 彼女が選ばれるなら天才である自分は選ばれて当然、そう以前のヒカリは考えていた。

だが、今は違う。

兄と会い話をしてしまったことで、その盤石の如き自信は揺らいでいた。

お前をTOPに選ぶことはできん

あの言葉の残響はまだヒカリの耳に残っている。

この1週間：ヒカリはコウイチロウと会ってはいなかった。あれだけの醜態をさらして合わせる顔がない、当然それもある。

だが兄の言っていた自分が知らなければいけないことが、1週間経った今も分かっていない、そんな状態で顔をみせることはできなかった。

それに兄からの連絡もない。それは慣れっこだが、コウイチロウがヒカリに会う気はないという意味表示のように彼女は感じていた。だが最終的に兄は自分を選んでくれる ヒカリはそう内心

感じている。

「もう一人はやっぱり『黒薔薇』じゃない？」

『黒薔薇』 カズミとの対比で付いたヒカリの通り名を、女生徒の一人が口にした。

「お姉様と実力伯仲なのは『黒薔薇』だけだもの。悔しいけど彼女ってやっぱり凄いのよねえ」

「そうよねえ、やっぱり『黒薔薇』で決まりよね」

当の本人が背後にいることには気もつかず、女生徒たちは掲示板に目を向けた。

ちなみに7月1日に告知された内容はこうだ。

7月7日までの間に沖女女子部よりTOP部隊の選抜を行う。人数は2名。普段の演習等を通じ、本日付で赴任したオオタ コウイチロウ教官が選抜を行う。結果は7月7日朝掲示板に張り出す。各自努力するように、以上

その日の内に兄の達筆で書かれた張り紙が校内に張られ、翌日には全校放送がなされたという。まあ、ヒカリは授業をサボっていたので放送は聞いていなかったのだが。

ヒカリが内容を思い返していたその時、女生徒の1人から驚きの声が上がった。

「うそつ、『黒薔薇』の名前がないわよ！」

耳を疑いたくなる言葉がヒカリに聞こえてきた。
自分の名前がない……

「どういこと…!？」

低いトーンで呟かれたヒカリの言葉に騒いでいた女生徒たちが振り返った。

血の気の引いた顔、驚きに満ちた表情：様々な視線がヒカリに集中する。

ヒカリは無言のまま一步を踏み出した。威圧感からか、まるでモ―ゼの十戒の光景のように人垣が別れ掲示板への道ができる。

張り紙にはこう書かれていた。

通告

西暦2021年7月7日をもって、以下2名を連合宇宙軍第60条に従い

第3次新造ロボット計画パイロット候補生として、沖縄宇宙学校女子部代表に選出

帝国宇宙軍少尉に任官する

以後、所属は第7艦隊、上級戦艦エクセリオン

また、同2名は同年7月21日、1学期終了後

帝国宇宙軍衛星軌道基地シルバースターに転向する

高等科代表

女子部3年 アマノ カズミ

女子部1年 タカヤ ノリコ

以上

見間違いではない。何度見返してもそこにヒカリの名前はなかった。

なんだか頭が重く、目まいする。本当に兄は自分を外した。それにしても

「タカヤ ノリコ……」

誰だ？ ごく最近その名前を聞いたことがある気がする。

「ほらあの子よ。この間の演習で生身で走らされてた」

「あのグズの子？ どうしてそんな子が代表に選ばれてるの？」

隣の女生徒たちの話が耳に入ってくる。

それで思い出した。

1週間前、生身でグラウンド50周していた馬鹿な栗毛の少女
確か名前がタカヤ ノリコ。張り紙に描かれている名前と同じだ。

しかし理解できない。彼女はロボットを歩かせることもできていなかった。その屑が、真正正銘の屑が何故代表に選出されている？
そして何故自分の名前がない？

理不尽だ。屑と天才を天秤にかけ、結果、自分を振り落としたというのか。

何故なの……兄貴……？

怒りと悲しみが溶け合いヒカリの中で渦巻いている。

「なんでも父親があのお全滅した艦の提督なんだって。ほら、るくしおんって言ったっけ」

また隣の女生徒の会話が聞こえてきた。
るくしおん……提督……娘……そうか、そういうことか。兄の意

図を察したヒカリの表情が曇る。

「幾らなんでも、酷いよ兄貴っ……！」

直後、瞬間沸騰した感情に任せて掲示板を殴りつけていた。乾いた音が女生徒たちのお喋りを中断する。叩きつけた拳が痛むが、心の方が穏やかではいられなかった。

許せない！

そんなヒカリの激情を無視するかのように、呑気な声が聞こえてきた。

「ねえー、本当でしょ」

「ほんとだぁ……」

眼鏡をかけた少女と、その少女に連れられてきた栗毛の少女が言った。

タカヤ ノリコ 距離はそれなりに離れているが自分の名前が見えるらしい。タカヤ ノリコ……タカヤ提督の娘 兄の命の恩人の娘……それがどうした！？

ノリコ！ あんただけは許せない！！

屑のくせに！ ヒカリは怒りに支配される。

ヒカリは掲示板から張り紙を剥ぎ取った。それを茫然としているノリコの顔に押し付けた後、胸倉を掴んで彼女を睨みつけた。

「1年生……ちょっと来な」

「は……はい」

ヒカリはノリコを引きずり掲示板前を後にする。

残された眼鏡の少女と女生徒たちは、その光景を啞然とした表情で見送った。

ヒカリはノリコを連れてマシン兵器格納庫へと向かっていた

第4話 ヒカリとノリコ 2（後書き）

次回への繋ぎ 次回 ヒカリVSノリコ 沖縄遊びしにいつてから
書きます。

文章後で変えるかも。

第4話 ヒカリとノリコ 3

沖女 職員室

沖女の職員室に割り振られたデスクにて、

「私にはコーチが何を考えているのか分かりません！」

コウイチロウはアマノ カズミに詰め寄られていた。彼女の手にはどこから取ってきたのかあの張り紙が握られており、それをコウイチロウのデスクに置きながら言う。

「あの子はマシン兵器に乗ってまだ一カ月しか経っていません。宇宙に行くのは同じ3年のオオタさんが適切だと思います！」

カズミの言葉にコウイチロウはサングラスの奥の瞳を細めた。どう説明したものか…黙して考える彼を説明する気がないと捉えたのか、カズミの口調が強くなる。

「あの子は……タカヤ提督の一人娘だそうですね」
「……知っていたのか」

タカヤ ノリコがコウイチロウの所属していた宇宙戦艦「るくしおん」の提督であったことは、実は沖女内ではそれなりに有名な事実である。しかし赴任してまだ1週間のコウイチロウはその事実を知らなかった。

だが、彼が「るくしおん」艦隊の生きのこりという事実はおそらく沖女の生徒たちのほとんどが知らないだろう。

コウイチロウがその事をカズミに伝えると、彼女は狼狽した様子

で言った。

「え？……じゃあそれで彼女をパイロットに…？」

「馬鹿者！」

コウイチロウの大声にカズミがたじろぐ。

「いいか、この計画はお前が考えている以上に重要なものだ
人類の存亡をかけた問題なのだ。それを私の個人的感情で

」

そこでコウイチロウの言葉は途切れた。原因となった職員室の入り口に全員の視線が向く。大きな音を立て勢いよく開かれた職員室の扉、その前に扉を開けた少女が立っていた。

息を切らせ肩で息をする眼鏡の少女 ヒグチ キミコとい
う名のその少女が叫んだ。

「お願いしますッ、助けてください

！！」

直後、格納庫の方角から轟音が響いてきた。

スーパードット大戦TOP ? Side The Earth
?

第4話 ヒカリとノリコ 3

沖縄女子宇宙学校。

宇宙パイロット養成学校に姿を変貌させたその格納庫には、以前とは違いRX-7の大軍の姿しか見えない。以前は船外活動用の訓練用機材などが常備されていたが、現在では所狭しと8-9m級のそれらが四つん這いとなり、肩が触れ合うほどの隙間しかないスペースを共有している。

オオタ ヒカリの専用RX-7もそこに保管されていた。

黒いカラーリングを施された愛機 スペックこそ他機と変わらないが、沖女指定の3年カラーを使用していない。これはヒカリがE-8級だと認められた証拠であった。E-8級パイロットにしか沖女ではカラーリングの変更は許可されないからだ。

黒いRX-7 ヒカリは自分でノワールと呼んでいる機体を起動させた。

エンジンの駆動音が響き、モニター・センサーに電力が通じて暗闇だったコックピットが薄明るく照らし出される。RXシリーズに搭載されているOSが操作系・出力の設定を要求してきた。ヒカリは戦闘時のそれを選択する。

途端に搭載されている‘プラズマドライブ’の駆動音が一気に大きくなった。モニター上の出力係数が上昇、各関節ギアの機械音が反響する。

土下座をしているような姿勢から起き上がり二本の足で直立した状態をとった。

そして一歩踏み出し、狭い格納庫の通路に立つ。ヒカリの乗る機体の反対側の通路 格納庫の出口周辺には起動状態のRX-7が1機待機していた。胸部のカラーリングは赤：1年だ。タカヤノリコ……1週間前に見た醜態と比べると、心なしか重心が安定したように見える。

「せ、先輩……わ、私無理です……！」

1年仕様RX-7に乗ったノリコが言った。

「あの発表も何か間違いです！ 私、コーチに言って代表を辞退しますから！」

オープンチャンネル

全周囲回線で泣きことを漏らす。もし近くに起動したRX-7が居ればこの会話は全て聞かれてしまうだろう……だが幸か不幸か、周辺の動体反応はセンサーに表示されていない。今ここでどんな言葉を交わそうとそれを知る者はいない、ということ。

代表を辞退する……そんなことは当たり前だ。例え間違いであっても……いや兄に限ってそれはないだろう、何らかの意図があつてノリコを選び、彼女は自分の意志とは無関係に自分に土を付けた天才であるこのオオタ ヒカリに。

許せないッ！

しかも、ノリコはロボット操縦が‘ド’が付くほど下手で、代表に選ばれた理由も彼女の父親がタカヤ ユウゾウ提督だからであるう。

許さないッ！！

プライドを傷つけられた怒りと、兄に認められない屈辱と、兄に認められたノリコへの嫉妬……色々な負の感情が自分の中で渦巻いているのが分かる。

握りこむレバーの動きに従い黒いRX-7 ノワールがノリコに人差し指を突き付けた。

「タカヤ ノリコ、私はあんたを許さないわ！」

「そんな、どうしてですか！」

「どうして……？ 分かんない？ あんたが父親のコネで代表に選ばれたからよ！」

ヒカリの言葉にノリコの声が一瞬震えた。画面上でノリコの顔が歪んでいたがそんなのはお構いなしだ。

「大方、ここにもコネで入学したんでしょう！ でなきゃあんたみたいな屑がパイロット候補生なんてなれるわけないわ！ そうでしょう！？」

「ち、違ッ……！」

「こんな屑……こんな屑をどうして、兄貴！」

ヒカリの言葉にノリコが反応する。

「お兄さんって……まさか、コーチって先輩の……？」

「そうよ、私はオオタ コウイチロウの妹、ヒカリ……そして、あんたは兄貴の命の恩人タカヤ ユウゾウ提督の娘……兄貴を助けてくれたことには感謝してるわ、でもそれとこれは別問題……！」

ヒカリはノワールに人差し指を握りこませ拳を作る。狼狽したノリコはRX-7は構えも取らず、逃げ腰のまま一步下がらせた。

だがバランスを崩すことはなかった。コウイチロウにより校内のRX-7全機にはオートバランサーにリミッターがかけられているはずだが、不思議と彼女の機体の重心は安定している。

「そんな……コーチが、パパの船の生き残りだなんて……」

ノリコの間の抜けた声がヒカリに届いた。何も知らない無垢さ。

今のヒカリの神経を逆撫するにはそれだけで十分だった。

「だから尚更許せないのよ！」

レバーを付き出しフットペダルを踏み込む それだけでノ

ワールはコンクリの地面を陥没させる勢いで踏み出し、前傾姿勢でノリコに向かう。一瞬で間合いを詰める。ノリコが反応しレバーを動かそうとした時には黒い鉄拳が飛び出していた。

「 ツ！？」

腹部に直撃した衝撃にノリコは声にならない悲鳴を上げる。直後、ヒカリはレバーを軽く操作、ノワールが拳を付きたてた状態から前に一歩踏み出し、腕部を目一杯付き出した。

巨体が軽々と吹き飛ばされる。背後にあった格納庫の壁に背部を強打、轟音と共にそれを突き破りグラウンドにRX-7が放り出された。

ヒカリは壁に開けた大穴からそれを追い校庭へと踏み出す。

「こんな屑が……！」

大の字で地面に横たわるノリコの機体を見て吐き捨てる。

「こんな屑が、どうして……どうして！」

ギギギツ、と錆びたブリキの擦れるような音を響かせノリコは起き上がるうとしていた。そのRX-7の胸部を、ノワールは全重量を乗せて踏みつける。鋭い金属接触音とノリコの小さな悲鳴をセンサーが拾ってきたが、そんなものでヒカリの気は晴れなかった。

何度も何度も踏みつける。

堅牢な装甲を纏った胸部が徐々に傷だらけなっていく。

「やめないかッ!!」

それを制止したのはコウイチロウの一声だった。

モニターの端に杖をついた兄と、それに寄り添うようにアマノカズミ、そしてさっきの眼鏡の少女が映っていた。

「兄貴…」

ヒカリの目に映ったコウイチロウの表情　遠い昔に悪さを

して叱られた兄の表情とそっくりだ…サングラスの向こうで自分を見ら見つけているのがよく分かる。

しかし以前なら恐れていたその表情も、今のヒカリの感情の前には無意味だった。

「どう、兄貴！　兄貴の選んだ子より私の方が強いわ！　これで分かったでしょう」

激情に流された言葉、それを聞いたコウイチロウの眉が^{ひそまめ}顰まるのをヒカリが気づくことはなかった。

「私の方がTOPに相応しいってことが!？」

「……ヒカリよ、それではダメだと何故分からん……!」

コウイチロウの言葉も拒絶の部分だけしかヒカリには届かない。今ので何度目だろう…理解できない、兄のことを…コックピッドの中でヒカリの顔が歪む。

兄の選んだタカヤ　ノリコをこうして目の前で足蹴にしている、どう見ても自分が強いのは明白だ。そう理解できるだろう構図に兄

には見えているはずなのに、しかし彼は言った
それではダメと……。

「なんでよ!？」

ヒカリは叫んだ。

「なんでダメなのよ!？」

「口で言うのは簡単だ…だがそれはお前自身が知らなければいかんことなのだ」

コウイチロウはいつもの仏頂面でヒカリに言う。

「お前がそれに知ってくれば俺は…」

「……なによそれ、訳分かんない…」

やはりその言葉はヒカリには理解できなかった。

自分は別に強さを追い求めてきたわけではない。気がつけば周りより強くなっていただけだ。ロボット戦闘だけでなく、勉強・体術その他諸々…周りが勝手に落ちて行っただけだ。

元々、沖女入学当時の彼女はTOPになろうという考えは毛頭なく、兄がTOPにいるという知らせを悪友から知るまでは、TOPに入りたいなどとは思っていなかった。

なのにその兄に拒絶される。何度も…もう我慢できない。

「どうせ…この子がタカヤ提督の娘だからTOPに選んだんでしょ! だから私をTOPから外すんでしょ! 昔の兄貴はこんなことしなかったわ!」

「それは違うぞヒカリ!」

「何が違うの! その提督が頼りないせいで兄貴は大怪我したんじ

やない！？ そんな提督に義理立てする必要なんて何もないじゃない！！」

「ヒカリイ……いい加減にしろ！」

怒気を押し込めた声がセンサー越しにヒカリに届く。

しかしその時

「パパの悪口言わないでッ……！」

それ以上の怒りが眼下から見上げていることに気付いた。

ノリコのRX-7、無機質なその頭部から、まるでそこに彼女の表情が映し出されているような威圧感が向けられている。ドライブの出力をあげたのか、増した駆動音を外気に響かせ、ヒカリのノワールの足をしっかりと両手で掴み上げていた。

「このッ……！」

不意な事に体勢を崩したヒカリは、ノワールにその腕部を蹴り退けて後方に飛び退ることで姿勢を維持させた。

束縛から解放されたノリコのRX-7が鈍い音を響かせて起き上がる。ゆらりと、まるでダウンから立ち直ったボクサーのように姿勢を立てなおして、言った。

「私はいいの……でも、パパの悪口は言わないで！」

「な、何なのこの子……？」

ノリコの力の籠った言葉にヒカリは気圧される。

どういうことだ……とヒカリは思う。今までヒカリの攻撃を直撃して立てた者は数えるほどしかいなかった。だがこの一年は立ちあがってきた……これは何を意味する。

理解できない…兄も、ノリコも、何もかも…苛立ちだけが積もる。

「なんのつもり？ あんた程度がTOPになれると本当に思ってるわけ？」

「……思ってないわ……でも、私もいつかは宇宙に上がりたい……今は無理でもいつかは宇宙に上がって見せる…！そして、パパの仇を取るんだ…！」

タカヤ提督の仇、それはつまり宇宙怪獣のこと…ノリコもヒカリと同じ目的を持ち沖女に入学していた。

ヒカリも兄の仇を討ち、共に闘うためにTOPを目指している。そのためにタカヤ ノリコは叩き潰してその座を明け渡させるしかない。

タカヤ ノリコは潰すべき障害なのだ、そう認識したヒカリの行動は早かった。

ノワールにローキックを放たせる。力なく立ちあがったノリコのRX-7は容易に足首を駆られ転倒する…そう予想していた。

直後、金属同士の衝突音が響く。

しかしノリコは倒れておらず、機体の姿勢を低くして踏ん張ることでノワールの蹴りに耐えていた。

画面に映るRX-7の姿を見てヒカリは思わず舌打ちする。諦めの悪いノリコに追撃するべく操作を始めようとする。

「そこまでえ…！」

だがそこでコウチロウから2度目の制止がかかった。操作を中断しカメラで兄を捉えると彼は

「ヒカリよ、俺がタカヤを選んだこと、納得することはできないか？」

こう言った。

分かっているくせに、ヒカリが認めるはずがないと。ヒカリの声は怒りに震える。

「当たり前じゃない！」

「ならば、俺から一つ提案がある！」

宣言したコウイチロウがノリコのRX-7を指差した。

「ここにいるタカヤ ノリコとお前でマシン兵器による勝負をしてもらう！ 勝った方にアマノと共に宇宙に上がりTOPになってもらおう！」

「なッ ！？」

「無論今すぐというわけにはいかん！」

ヒカリの声を遮りコウイチロウが言った。

しかしヒカリは先ほどのコウイチロウの言葉に耳を疑っていた。目の前の1年に勝つだけでTOPにするとは…正気の沙汰とは思えない。ロボット戦闘の天才のヒカリと、マシン兵器に乗って1カ月のノリコでは結果は火を見るより明らかだ。

当然コウイチロウは条件を付けてきた。

「勝負は2週間後、我々が出発する21日の前日の放課後だ。当然だが、タカヤは俺が2週間目一杯しごく！ その日の勝負でお前が勝てばお前がTOP、タカヤが勝てばタカヤがTOPだ！ 異論はあるか！」

「そりゃ……私にはないけど」

鴨が葱しよってやってきた、とでも言えればいいのだろうか…ヒカ

リにとってこんな好条件はなかった。もしかして兄は自分にTOPに入ってもらいたいのでは？　そう思ってしまったいそうなこの提案、ヒカリに断る理由などない。

しかし当のノリコは困惑していた。

「待つてくださいコーチ！　私、急にそんなこと言われても困ります！」

ノリコの弱気な声にコウイチロウの視線がノリコに向く。

「それに私なんかが先輩に勝てるわけがありません！」

「タカヤ……お前は悔しくないのか？」

そう言うコウイチロウはかけていたサングラスを外した。常用しているその下から右目の大きな傷跡が露わになる。日の下に曝されたその傷は深く抉れ、目を背けたくなるような惨たらしさを見せていた。

「るくしおん」からの脱出の際に負った傷、それをそつとなぞる。

「俺は悔しいぞ、タカヤ」

コウイチロウの小さな呟きには確かな怒りが込められていた。鋭い眼光がノワールに向けられる。

「俺が生きていられるのは全て提督のおかげだ。その提督を馬鹿にする奴は誰であろうと許さん！　それがヒカリ、お前でもな！」

「ちょ、ちよつと待つてよ兄貴、あれは言葉のあやつてやつで……」
「聞く耳持たん！」

一喝。そしてコウイチロウはノリコに視線を向ける。

「タカヤア、お前はどんなんだ!？」

「私……私は……」

ノリコの言葉が詰まった。5・6秒程の沈黙。その後、意を決したのか覇気のある声が返ってくる。

「私だってパパを馬鹿にされるのは許せない……それに私だって宇宙パイロットを目指してるんだ。私だって、いつか宇宙に上るんだ!そしてパパの仇を討つんだ!」

その言葉を待ち望んでいたかのようにコウイチロウは笑みを浮かべた。

「よく言ったタカヤ! お前には才能もある、素質もある、だからTOPに選んだ! 2週間みっちり俺が仕込んでやる、TOPの座を自分の力で掴み取って見せる!」

「は、はい、コーチ!」

もう一人の当事者を置き去りにし、コウイチロウとノリコの話は進んでいる。

その光景を操縦席から見ていたヒカリの胸には、この日数度目の感情が飛来してきていた。形のない重しを持たされているような重量感、今すぐ飛びかかって行きたい……そんな焦燥感。

ああ、イライラする

嫉妬だ、この感情は。

兄の隣に自分はいない。代わりにタカヤ ノリコがいる。

タカヤ ユウゾウの娘というだけで、あの娘はヒカリが長年欲し

ていた位置にあてがわれている。こんなことが許せるか。

それになんだ今の茶番は？ 悪役にされるのは慣れているが、まさか兄にまでそんな扱いを受けるとは想像しなかった。

苛立ちが募る。2週間後と言わず、今すぐ廃棄品スクラップにしてやりたい気分だ

「では2週間後…7月20日の放課後にここで勝負だ！ 逃げるなよ、ヒカリ！」

なのでこのコウイチロウの挑発には耐えがたい引力を感じてしまった。

「望むところよ！！ そっちこそ首を洗って待ってなさい！！」

三下の脇役のような台詞……実際、この勝負はヒカリに益が大きいので望む所ではあるが、まるでコウイチロウにその言葉を言わされたように感じる。

ヒカリは破壊した格納庫へと向かうため機体を翻した。

誰もそれを止める者はいない…。

結局、これが今日コウイチロウと交わした最後の言葉になった

時間はまだ昼前、ノリコ・カズミ・キミコはそれぞれの教室へ、コウイチロウは自分の業務に戻って行った。

自主休業常連のヒカリは当然のように学校からふけていた。
サボタージュ

後で悪友のケーンたちと合流し行きつけの「赤井屋」で話に華を咲かせたが、7月20日に思いを馳せて、ある思いが胸によぎる。

あと2週間待たなければいけない。

今朝までの1週間はとても長く感じた。今度の2週間はどうか。

兄と喧嘩別れしてしまったので、また同じ様に長く感じるのだろうか。

TOPになれる望みが出ただけ、早く感じるのだろうか。
あと2週間後、7月20日には全て丸く収まる。

その時兄の隣に立っているのは自分だ、ノリコではない。

……ヒカリはそれからの日々をいつも通りに過ごし、時間は過ぎて行った。

ちなみにケーンへの1発は忘れずにプレゼントされたそうだ。

第4話 ヒカリとノリコ 3（後書き）

（楽屋裏）

カズミ「ちよつと、私たち出番少なすぎやしませんこと!？」

キミコ「お姉さまはまだいいですよ。私なんてセリフ3個ですよ」
カズミ「次回からは私が大活躍いたしますわよ!」

ウソです。

前回の更新からえらい時間がかかってしまいました（汗）
次は頑張ります。次回第5話「ヒカリとマイヨ（仮）」。

第5話 ヒカリとマイヨ

西暦2021年 7月14日 放課後

沖女周辺 海岸

上を見上げれば雲ひとつなく晴れ渡るスカイブルーの青空。
下を見れば珊瑚が砕けた粒の細かい白い砂が浜辺を埋め尽くし、
前を見れば透明度の高い海水が見果てぬ先まで続く。浜辺の水色は
ライトブルーとコバルトブルーのコントラストで美しく彩られてお
り、自然の成せる芸術が沖縄の海には広がっていた。

沖縄女子宇宙学校。

その士官学校は沖縄本島ではなく離島に建設されており、住民は
少なく、学生と元々の島民の比率は現在では同じ程度になっている。
人の少なさ故か、マシン兵器のカリキュラムに海中訓練が含ま
れていないためなのか、士官学校もあるため観光客は少なく島の自
然は破壊されずに残っていた。

「ギガノス戦争」の被害も皆無なこの島の浜辺は、隠れた海水浴
スポットとして勝手に沖女連中が決めつけ、放課後には学生が泳い
だり、逢引をしている様子は日常の風景として島民にも定着してし
まっている。

そして今日も一組の男女が浜辺で何かを行っていた。
ただし

「貴様あ、着地もまともにできんのか！」

男性の方は、黒いジャージを着こんでサングラスを付け、

メガホンで罵声を飛ばしており、女性の方かというと

「すみません、コーチ！」

狭く苦しいコックピッドの中で汗だくになりながら男に謝罪していた。

その少女 タカヤ ノリコは自機であるRX-7を起き上がらせながらこの1週間のことを思い返す。

あの日、3年の先輩であるオオタ ヒカリに因縁をつけられ叩きのめされた日：ノリコは本気でTOP辞退をコウイチロウに申し出るつもりであった。相手は‘黒薔薇’、と称される天才、自分は‘全滅娘’、と揶揄されることもある愚図：あの時点でやっとマシン兵器を立たせることができるようになってだけの自分が天才に勝てるはずがないと思っていた。

現実として歯が立たなかったわけだが、ノリコにだって夢はある。宇宙パイロットになり、宇宙怪獣を倒し父の仇を討つ、その一念。今は無理でもいつかはTOPをねらう、それがあの時のノリコの本音であった。

「もう一度だ、タカヤ！」

黒いジャージを着込んだコウイチロウの大声が響く。

ノリコはもう一度力強く操縦桿を握りこむ。

どこまでやれるか分からない、でも出来る限りやってみせる……！

1週間前の7月7日、その日が運命の分岐点だったとはノリコは知らない。

自力でTOPになる機会をコウイチロウが与えてくれた。親のコ

ネなどでは決してない。自分の力で掴み取るチャンスを手にしたのだ、たとえ可能性が1%に満たないとしても。

雑念はない。全ての感覚を今研ぎ澄まし、叩き上げる。コウイチロウの指導で成長する自分を実感することが高揚感となり、視線は1週間後の勝負をしっかりと見据えていた。

「根性を見せろ、タカヤ！」

「はい、コーチ！」

コウイチロウの檄を受けて機体を操作するノリコ。

RX-7が一瞬かがんだ後、全身のバネだけで飛翔する。内蔵が押しのけられるようなGがノリコを襲い、機体は一瞬で30m程の上空に到達した。

私の武器はたった一つ、努力と根性！

一瞬の滞空時間をおき、機体は自由落下し始めた。

ノリコとコウイチロウの特訓は続く……。

スーパードボット大戦TOP ? Side The Earth
?

第5話 ヒカリとマイヨ

同時刻 沖女周辺海岸

ヒカリはノリコたちが訓練している浜辺とは別のビーチにいた。
放課後、海水浴をするには徐々に太陽が陰り出すこの時間帯は絶

好のタイミングだ。ヒカリが秘密にしているこのビーチには地元民はたまに顔を出す、沖女の学生はほとんど訪れることがない。「赤井屋」の店長に教えてもらった彼女のお気に入り場所の一つだった。

沖合までひと泳ぎしてきたヒカリは黒髪についた水滴を払いながら、近くにあった岩場に腰を下ろし持ち込んだ水を一口飲む。強い日差しが髪の色を浮かび上がらせる。白いビキニを着こなす彼女の素肌を沖縄の日が凶悪に刺すが、UV対策には万全を期しているヒカリの肌は白雪のように白かった。

一息ついたヒカリは雄大に広がる海原に目を向ける。

ヒカリは海が好きだった。透きとおり吸い込まれそうな青が遠々と続き、この美の前では嫌なことや悩みなど小さな醜いことなのだと思わされる。眺めている間は無心でいられる、それがヒカリは好きだった。

「……………はあ」

しかし今日はあまり気分が晴れることはなかった。

悩みの種は2週間前に返ってきた実兄コウイチロウ、そして自分の代わりにTOPに選出されたタカヤ ノリコだ。

何度思い出しても腹が立つ。鮮明にイメージすることができ…

…兄の隣に居座るノリコの姿が。実力もないのに親のコネだけでそこに居る権利を得た泥棒猫。

そこはあなたの居場所じゃない……………！

泳いで涼んだ体も芯から湧き上がる感情と日差しで既に火照っていた。

この1週間は長かった、この後の1週間も長いのか……………ヒカリは時間の流れを恨みながら1週間後の勝負に意識を向ける。

1週間、あと1週間で全て決着がつく。兄の隣もTOPの座も取り戻し、ずっと湧き続けている負の感情も全部払拭することができる。

1週間……思い知らせてやる屑め……ヒカリは苛立ちを何かぶつける為もつひと泳ぎしようと、さらに一口水を含んで腰を上げた。その時視界の端に人影が映る。

「おーすっ、ヒカリ」

聞きなれた声と共に悪友のケーンがビーチに現れた。赤い海パンにサンダルという「俺はこれから泳ぐぞ！」と自己主張する格好をしているが、顔面には誰かに殴られた青痣がまだしっかり残っていた。

普段ならこれに黄色の海パンの白人と青色の海パンの黒人がセツトで付いてくるのだが今日は姿が見当たらない。

代わりに一人の男がケーンの後ろを付いて来ていた。

「いやあ、鷹の旦那がヒカリはどこだって五月蠅くってさあ」

「ケーン」ワカバ、その呼び方は止めると言っているだろう」

ケーンが背後を親指を立てて指すと、そこにはコウイチロウと共に赴任した新任教官マイヨ「プラートが立っていた。不愉快そうにケーンに言い返すマイヨだが、その格好は意外なことに上にアロハシャツ、下に短パン・サンダルという「夏が好き！」と主張しそうな姿をしている。

予想外な来客にヒカリは

「何か用ですか、マイヨ教官？」

愛嬌の欠片もない声で質問した。

「オオタ、お前は一体何をしている？」

おうむ返しするマイヨの声は実に淡々としていた。

「TOPを決する勝負が1週間後に控えている身でありながらこんな所で油を売っているとは……お前にそんな暇はないはずだぞ」

「いいんです。勝負の結果なんて見えてるんだから、私は何にもしなくてもいいの」

「ほら見る、思った通りの返事じゃねえか」

青痣作った間抜け面でケーン意地悪く笑う。この野郎、もう一つ傷を増やしてやろうか……ヒカリは憤った視線を悪友に向けた。

「あんたどういうつもりよ？　ここは私たちだけの秘密の場所ですよ！　部外者連れてきてんじゃないわよ！」

「ととつ、怒った顔もチャーミングだな、ヒカリちゃん？　なんて茶化すのはこのぐらいにしておくとして……」

ヒカリの主張を軽く流してケーンは言う。

「ここを教えちまったのは悪かったと思ってるさ。でもよヒカリ、鷹の旦那がお前のこと心配して聞いてきたんだぜ。『オオタ　ヒカリは大丈夫なのか？』ってよ」

「余計なことを言わなくていい」

マイヨは照れ隠しなのか咳払いをし、邪魔ばかりするケーンを押し退けた。

元「ギガノスの蒼き鷹」マイヨ「プラート」 戦時中に敵国

のエースだった男。ケーンやコウイチロウとは好敵手の関係にあっ

た彼だ。戦後兄たちとは通じ合う所があったのだろう。

この掛け合いにも嫌悪感は微塵も感じさせない、むしろ2人の間には旧知の親友といった雰囲気の流れていた。

マイヨがヒカリを見据える。

「お前は分かっているのか？ この勝負はコウイチロウがお前に与えた最後のチャンスなのだぞ」

「……呼び捨てにしてんじゃないわよ……」

ヒカリは誰にも聞こえない小さな声で呟いた。

この男もそうか……兄の隣に立つ人間の一人。今にして思えばケインだってそうだった。なぜ肉親の自分ではなく他人が兄の隣を埋めているのか？ 自分より兄に近い位置にすることができるのか、ヒカリには理解できなかった。

マイヨは謂れのない嫉妬を向けられていることに気づかない。

「それなのにオオタ、お前は何をしている。あいつがお前のことをどれだけ心配しているか、お前は考えたことがあるのか？」

「うるさいなあ！ 説教しに来たんなら帰ってよ！」

ヒカリが金切り声を上げた。

「兄貴の考えてることなんて分かるわけじゃないじゃない！ ずっと連絡も寄こさなかったのに、今度は急に帰ってきて私に変なことばかり言うし、TOPにはあんな屑を選ぶし訳分かんない！ 兄貴の考えてることなんて分かんない！ 私は昔みたいに一緒に居たいだけなのに！」

畳みかけるように思っていたことが声になって流れ出す。

自分は他人に弱音を吐くような女だっただろうか……心の隅に残

っている小さな冷静さでヒカリは自分を振り返った。

そんなことはなかったはずだ。昔から兄以外に弱みは見せたことはない。しかし今はその兄のことが理解できないでいる。自分はおかしくなってしまったのだろうか、兄が戻ってきた2週間前から。

ヒカリの叫びを静かに聞いていたマイヨが口を開いた。

「それが本音か」

その言葉が耳に届くとすぐにヒカリは赤面した。カーツ、と耳まで熱くなっているのが分かる。

「兄を慕えるということは良いことだ。かくゆう私にも妹が一人いるのだが」

「な、なによ！ そんな事いうために来たの！？」

ばつの悪さから声が震えるヒカリ、その様子をケーンはニヤニヤしながら眺めていた。やはり後で拳骨追加だ。

自分が脱線しそうになった事に気付いたのか、マイヨが仕切りなおす。

「兄を慕うのはいい。ならばなおのこと、お前はTOPに入るために努力するべきではないのか？」

「努力……ですって？」

ヒカリの一番嫌いな言葉が聞こえてきた。

「努力なんて凡人どもがやるものよ。天才の私には必要ないわ」

「……ほう」

「私は『黒い稲妻』オオタ コウイチロウの妹よ。兄貴だって昔から強かった。私だって強いわ、努力しなくても誰にも負けることは

なかった。大人にだってよ！」

「ほら見る、やっぱり俺の言った通りの返事じゃねえか」

水を差すケーン、ヒカリは彼を睨みつける。

「うるさい馬鹿！」と罵声を飛ばすヒカリを余所に、マイヨは口を閉ざしていた。

数秒の沈黙の後再び質問をヒカリに投げかける。

「お前は、コウイチロウが何の努力もしなかったと思っているのか？」

「……どういう意味よ？」

「そのままだ。コウイチロウが努力なしで昔から強かったと、本気で思っているのか？」

「当たり前よ！ 兄貴は私のヒーローなんだから！」

ヒカリは即答した。後々考えれば、かなり恥ずかしいことを口走っていたことに気が付くのだろう。しかし今の彼女にそんな感情は湧き上がってこない。

その返答に軽く相槌を打ったマイヨはこう言った。

「お前に見せたいものがある。付いて来い」

「ちよつと待ってよ！ 私、今水着なんだよ！」

「なら着替え終わるまで待ってやろう」

マイヨは身を翻し、そのビーチを立ち去った。
残されたヒカリはケーンに言う。

「なによアイツ！？」

「まあまあ、それよか早く着換えろよ。俺らはここ出たと所の車で待ってるからな」

「ちょっと、待ちなさいよ！」

止めるヒカリの手をすり抜けてケーンはその場を後にした。

「なんなのよ、もう！」

身勝手な男たちにヒカリは憤慨する。

ヒカリの秘密の場所にやって来て言いたい放題して、その上付いて来いと、あの教官はそう言った。時間は放課後、沖女内でもないこのビーチで彼の指示に従う義務はヒカリにはない。

しかし兄と同じく伝説になっているパイロット、マイヨ＝プラト。

‘ギガノスの青き鷹’の見せたいものとは何なのか……興味がないわけではない。

ヒカリは岩場の陰になりそうな場所を探した。手荷物を持ち、沖女の制服に着替えに行く。……時間にして10分程かったという。

沖女周辺 海岸

マイヨの持ってきた軍用のジープに揺られることしばらく、ヒカリは先ほどとは別の浜辺に連れてこられていた。

ヒカリの秘密のビーチと同じく海は煌めく美しさを見せている。彼女もこの浜辺のことは見知っていた。沖女の生徒が放課後によく

海水浴やデートに使用するスポットだ。

いつもなら人が居すぎて海が濁ったりすることもあるのだが、今日は普段と違い人氣が少なかった。

また浜辺の様子も違っている。白く広い砂浜には人の足やその履物の後がよく残っているものだが、今日のそれはサイズが桁外れに巨大だった。

大人一人が丸々収まってしまいそうな大きさの足形が浜辺のいたる所に付けられている。浜辺の景観が台無しである。そして浜辺には見知った顔の男性が声を荒げていた。

「根性を見せろ、タカヤ！」

「はい、コーチ！」

暑苦しいコウイチロウの声と巨大な足跡の主の声がヒカリの耳に届く。

直後見たことのある1年仕様のRX-7が空中にジャンプした。

重力を相殺ししばらく滞空してから地面に向かって自由落下し、RX-7は衝撃を受け止めきれず前のめり転倒する。

1年のRX-7にコウイチロウから罵声が飛び、それは慌てて起き上がった。

「何やってんだか……」

その様子を見ていたヒカリは思わず呟いていた。

ここに連れてきたマイヨに向かって言う。

「あれって兄貴と……タカヤ ノリコですよな？ 教官は見せたか

ったものって、これですか？」

「そうだ」

先ほどよりか幾分礼儀正しいヒカリの言葉をマイヨは肯定した。

「彼女とコウイチロウは1週間後の勝負のために今努力をしている。その様子を見てもらおうと思っただけ」

「……だから何だっけ言うんです？ あの子は凡人だから、屑だから努力しているってだけの話でしょう」

「そちらもそうだが、私が見てもらいたいのはコウイチロウの方だ」
「兄貴の……？」

マイヨに言われ、大声を上げているコウイチロウの方を見る。

いつもと同じ黒いジャージとサングラスを身につけ、片手に杖、もう片方にメガホンを持ちノリコに指示を出している。

別にいつもと変わらない兄の姿だった。そのことをマイヨに告げると彼はこう言った。

「奴は、コウイチロウは今自分の足で立っている。杖の力を借りてはいるが自力で地に足を着けている。それがどういふことか分かるか？」

マイヨの言葉の意味をヒカリは理解できなかった。

兄が立っていることを見せたかった？ そんなもの物心ついた頃から見てきている。

「だから何だっけ言うんですか？」

「……そうか、やはり聞かされていないようだ…… コウイチロウはお前に心配をかけまいとしていたから無理もないか」

「一体何が言いたいんですか？」

意味深なマイヨの態度にヒカリは少なからず腹立ちを覚えた。

この男が兄の何を知っているというのか。自分よりも兄のことを

知っているというのか。さらには自分のことも知っている口ぶり……自分を挑発しているのだろうか、このマイヨという男は。

マイヨは吠えるコウイチロウに視線を向けたままヒカリに静かに語り出した。

「オオタ、お前も覚えているはずだ。2年前の『るくしおん』事件の際にコウイチロウは生き残り地球へと戻った。だが全身に重傷を負い、今のように後遺症を残し、パイロットとしての生命を断たれた」

ヒカリは黙ったまま頷いた。

忘れられるわけがない。あの宇宙戦艦が宇宙怪獣に襲われ兄は再起不能になった。自分は奴らを倒し、兄の仇を取るためにTOPになるのだ。

彼女を一目見た後、マイヨは続けた。

「コウイチロウは地球帝国の病院に入院し最先端の治療を受けていたな。お前も当時よく見舞いに来てくれた、と奴から聞かされたものだ」

「……教官もお見舞い来てたんですか？」

「ああ、お前と会うことは結局一度もなかったがな」

出会っていたらいたで恥ずかしいので、ヒカリは会うことがなくて良かったと心に思った。

「さて話を戻そう。コウイチロウが立っていることの意味……彼が今立てていること自体が奇跡と言ってもいい」

「……奇跡？」

「実は2年前の事件の時、コウイチロウは右目の視力を失うと同時に、背骨

脊椎にも負傷を負っていてな……神経がボロボロ

に傷つき、一度は医師から二度と立てないと宣告されている」

「ッ！　で、でも兄貴はそんなこと一言も言ってくれなかった……！」

「言つたろう。奴はお前に心配をかけたくなかったとな。ベッドの上でお前と話している間も、戻らぬ足の感覚に恐怖と絶望を覚えていたそうだ」

マイヨの口を通じて出てくる事実にはヒカリは自分の耳を疑っていた。

知らなかった。確かに、兄は自分の病状を詳しく教えてくれなかった。マイヨの語りがデタラメである可能性はある。だが入院中に兄はリハビリの様子は見せてくれなかったし、彼が立っているのを見たのは退院する最後の日だけだった。

そう考えればマイヨの言葉は真実なのか？

衝撃を受けているヒカリに脇目を使いながらマイヨは説明を連ねる。

「だが奴は決してあきらめなかった。奴には絶望し嘆く暇も、歩くことを諦め安穩と暮らすことも決して許されなかった。宇宙から来る敵の存在を知ってしまったからな」

「……宇宙怪獣」

「そうだ。このまま何もしなければ間違いなくいつか人類は奴らに滅ばされるだろう。奴には寝ている暇などなく、血の滲むようなリハビリの日々が続いた。歩けるようになる保証はなかった。だが毎日、奴は努力し続けた」

「努力……」

ヒカリの最も嫌いな言葉

天才にはそんなもの必要ない、それがヒカリの持論だ。だが同じ天才である兄が努力をしていた……

……自分が信じていた兄の強さは努力して手に入れた姿……？

今まで努力を馬鹿にしてきたことは兄を愚弄し続けてきたことになるのだろうか？

ヒカリは複雑な気持ちになった。

「奴の努力と根性には目を見張るものがあつた。そして奇跡は起こり、奴は今あそこで立つことができている」

マイヨの言うとおり、ヒカリの視界に映るコウイチロウは危うげなく佇んでいる。

兄の激励を受け、ノリコのRX-7が再び跳躍した。数秒の空白の後着地。今度は衝撃を脚部の吸収材に分散させ、多少バランスを崩したが浜辺に足を付けることに成功していた。

ついこの間まで立つこともできなかった素人が、大きく飛びあがつて行く。ヒカリはその様を見ていられなかった。いや直視することとを嫌い、白い砂浜に目を落としていた。

なんだか胸の奥で訳のわからない感情が湧いてきていた。

「人は努力することで限界を超え、不可能を可能にすることができ
る」

マイヨの視線がヒカリに向けられていた。

「我々人類は努力しなければならない。生き残るために」

「……………たとえそうだとしても」

ヒカリはマイヨに向き直り、

「私は絶対に努力はしない！　今までだってそうしてきたッ、だから！！」

大きな声で叫んでいた。

認めるわけにいかない。認めれば、ヒカリの十数年の生き方を否定することになる。努力を認めることは彼女の自尊心が決して許さなかった。

認めない！ タカヤ ノリコ、私が正しいか、あんたが正しいか決着をつける！

ヒカリの意識は1週間後の勝負に向けられる。

その日こそ全てに雌雄を決する時だ。1週間という時間が足枷が高くそびえる障壁のように煩わしかった。

「失礼します！」

そう言うのと、ヒカリは浜辺に背を向け歩き出す。

ケーンとすれ違う。耳に残る機械の駆動音が背後から聞こえていた。

ケーンが何か話しかけてきていたがヒカリには届かない。彼女は足早にその場を後にした。

「どうだった、鷹の旦那？」

ヒカリの去った海岸でケーンはマイヨに尋ねた。

「一筋縄じゃいかないだろ」

「ふむ……だが手ごたえはあった」

顎に手を添え、考えを巡らせながらマイヨは応えた。

「コウイチロウもそうだが、私もあの素質はうまく活かしてやりたいと思っている。貴様もそうなのだろう、ケーン」ワカバ」

「なはは、ばれたか。皆、ヒカリちゃんにメロメロってなわけだ」

陽気に笑った後、ケーンは不意に真剣な表情になる。

「親の心子知らず、ってか」

「うむ、妹だがな。しかもコウイチロウの」

「たはー、ここは突っ込まなくていいんだぜ、鷹の旦那」

「そうか？ それよりその呼び方は止める」

「嫌だね」

2人の他愛のない会話は続いた。

徐々に夕暮れとなり、各々は自分の帰路へとつく。

運命の勝負の日まで、あと1週間

第5話 ヒカリとマイヨ（後書き）

更新速度をもう少し早くできないだろうか。

仕事もあるし無理か……なんて考えてる今日この頃です。

評価・誤字脱字の指摘などありましたら感想でお願いします。

次回第6話「ヒカリと努力と根性（仮）」

できれば1週間以内に更新したいです。

第6話 ヒカリと努力と根性（前書き）

やっとなともな戦闘シーンです。

第6話 ヒカリと努力と根性

西暦2021年 7月20日

沖女 格納庫前

午後19時を過ぎた頃、沖女校内は人の気配が疎らとなる。

日中は授業に演習に、と学生たちで溢れている校舎も、放課後は部活や自主練習でむせ返るような人溜まりができる校庭にも、今は人一人見当たらない。

夜の学校というのは奇妙な雰囲気放つ。触れてはいけない、目に見えぬ何かが潜んでいるのではないかと疑ってしまう。どの学校も隠し持っている夜の空気は沖女にも例外なく内包されていた。

しかし、現時刻で日はまだ落ち切っていない。そのため、夜の学校特有の気配は醸し出されていなかったが、それも時間の問題だろう。

いよいよなんだ……

夕暮れの空がノリコの頭上には広がっていた。強烈な西日に彼女は目をしかめる。霞む視界の先にはマシーン兵器用の格納庫があった。

ノリコはこの2週間の特訓を思い起こす。

コーチ オオタ コウイチロウによる厳しい特訓の日々。

彼の要求する行動に悉く失敗し、その度飛んでくる強烈な罵声に何度コックピットを涙に濡らし、逃げ出そうと思ったことだろうか。

だがノリコは逃げなかった。

今日の戦いのために逃走を図る気持ちを踏みとどませた。コウイチロウの言葉に耐え自ら奮い立たせて2週間を乗り切った。TO

Pになる最初にして最大のチャンスを掴むために、そして父の仇を討つために。

彼女の努力と根性は決して彼女を裏切らなかった。

今の彼女は機体を走らせることもできるし、跳ばすこともできる。3週間前とは違う。そのことは胸を張って言うことができた。

「タカヤ」

勝負の判定人であるコウイチロウが言った。

「できるだけのことはやった。後は全力でぶつかってこい」

「はい、コーチ！」

ノリコの決心は固まった。

絶対に勝つ。そして宇宙へカズミと一緒に上がるのだ、と。

付き添いで来てくれたカズミの方を向くと、彼女は心配そうな表情でノリコの事を見つめていた。無理はしなくていいと、彼女から声をかけられる。

ノリコは彼女に元気よく返事をした。だがその期待に応えることはおそらく不可能だろうとも思いを巡らせていた。

相手は天才 オオタ ヒカリ、カズミの対として、黒薔薇
'と呼ばれる実力者だ。

ノリコが全力で戦うのは当然だ。しかしそれで勝算が出てくるかと言われると、冷静に考えて疑わしいと言わざるを得ない。

だが絶対に勝つ！ 気持ちだけは負けるわけにいかない。最初から負け腰では、始まってすぐに勝負は決してしまうだろう。

徐々に格納庫が見えてきた。

2週間前、2人が壁に開けてしまった大穴は綺麗に修繕されている。
そして格納庫の入り口には、後光を浴びて一人の少女が立っている。

る。

「待ってたわ」

太陽で綺麗に浮かび上がる緑がかった美しい黒髪。そして顔立ち
は、同性のノリコでも思わず見とれてしまいそうな程に端正に整っ
ている。

だが可憐な外見とは裏腹に、強烈な気迫が彼女からノリコに向け
られていた。

「勝負よ、タカヤ ノリコ！」

美少女 オオタ ヒカリが吠えた。

ノリコは彼女に応える。

各々の機体を取るためにノリコたちは格納庫の中へと入って行っ
た。

スーパードボット大戦TOP ? Side The Earth
?

第6話 ヒカリと努力と根性

格納庫 ノワールコックピット内

ああ、長かった。

ヒカリが愛機のシートに腰かけ、初めに持った思考がそれだった。
2週間、いや1週間 浜辺でノリコの姿を見てから経過し

た時間の単位である。しかしヒカリの体感はその日数を否定していた。実に長い、一日千秋のように感じられた日々をヒカリは嫌悪すらしていた。

しかし辟易とする時間の流れの中で、ヒカリのタカヤ ノリコへの感情は少しずつ強くなっていた。

相手が格下だろうと手心を加える気は毛頭ない。

すぐさまイグニッションキーを挿入した。

直後、全ての計器類に電流が走り、暗闇のコックピット内が薄明るく照らされる。そして、ヒカリの入力を受け入れる為にOSがコンピューターを起動させ始めた。

「同じね」

ヒカリにとってこんな操作は慣れたもの、もう何百回と繰り返してきただろうか。沖女で授業に出るよりも数をこなしてきた手順だ。2週間前も同じだった。

「でも違う」

独り言が口からこぼれた。

待たされた分だけ、いつもは退屈なだけの待機時間が新鮮に感じられる。しかし同時にまだるっこさも覚えた。

早くしろ！ ヒカリは強く念じる。

待ち焦がれた時がついにやって来たのだ。

TOPの座を奪う日が。

自分の居場所、兄の隣を取り返す日が。

ヒカリが思い描く未来図を手に入れる日が、ついにやって来たのだ。

そして

私の生き方は正しい！ それを証明する！

ヒカリが操縦桿を力強く握りしめる。同時に目の前が開け、モニターが格納庫の中を映し出す。

ノワールを安定姿勢から起き上がらせ、プラズマドライブの出力を戦時の域まで高まらせた。すぐに動体センサーが周辺を索敵し結果報告を行う。自機周辺の影は数は一つ。

巨体を立ち上げるタカヤ ノリコのRX-7だけだった。

「出なさい。ここじゃ狭いわ」

ノワールが手招きしノリコの機体を誘導した。2体の機兵の足音が夜の静寂を破る。

格納庫の外は既に闇色に染まっていた。ヒカリは十分に広い校庭中央部に着くと振り返り、敵の姿を視界に収める。

「来たか」

2機から離れた場所でコウイチロウが呟き、愛用のスピーカーを構えた。

「いいかよく聞け、貴様ら！ ルールは一つだけだ。相手を戦闘不能にした者の勝ち、互いに日々の努力の結果を俺に見せてみる！」
「努力だって？」

ヒカリはノリコを睨みつけた。

「兄貴、努力なんて私に通用すると本気で思ってるの？ しかも相手はこの屑よ。ねえ、あんたはどうなの、‘全滅娘’さん？」

「私は……」

回線を通じてノリコの声だけが送られてくる。

「私は先輩に比べれば弱いし、才能もない。でも私にも意地ぐらいあります！」

「生意気に！」

憤りがヒカリの中でまた一つ大きくなった。

誰も自分のことを認めてくれていない。兄はもちろん、目の前にいる矮小な少女でさえ自分を否定する。マイヨやカズミ、顔も知らない他の女生徒たちでさえそうなのだろうか？

分らない……理解できない。

あの時から繰り返された思考が解決に至ることはついになかった。だが、もういい。

今は相手のことを分かつとするのは止めよう。獲物の心を汲み取る狩人などいない。今は実力を示し、自分のことを無理やりにも理解させてやる時だ。

戦闘レベルに高まったプラスマドライブの駆動音が耳に静かに残る。眼前の相手の拳動一つ見逃さぬように、焦点を一か所だけに向けると視野は狭くなる。

だが、暗闇の中でも相手の機体色が鮮やかに浮かび上がってきた。

「いくわよ、タカヤ ノリコ！」

ヒカリが叫ぶ。

ノリコは声こそ上げなかったが、RX-7の拳を構えることでそれに応えた。

両者共に準備はできている。遠目で見ていたコウイチロウはそう判断した。

「では、始めえい！」

コウイチロウの声がゴングの代わりとなり、戦いの火蓋は切られた。

始まった……！

コウイチロウの宣言がノリコの耳に届いた。操縦桿をグリップする手から出る汗がやけに冷たい。心臓は暴徒のように暴れまわって抑えることができず、息は荒くなる。

戦いが始まった。その言葉を聞き、これから身を投じる状況に強烈な現実感が湧いてくる。

コックピットに乗り込んだ時から2週間前の出来事が思い出されていた。

叩き飛ばされ、踏みつけられる恐怖、そして屈辱。

決してノリコの中から消えることのなかった痛みだ。

しかし、今のノリコはそれのみに支配されている訳ではなかった。

先手必勝……やるしかない！

体は問題なく動く。

ノリコはRX-7を突き動かした。

先手を打ったのはノリコだった。

兄の開始宣言を受けて後、ヒカリは一瞬考えていた。

ノリコをどう料理してやろうか？ 一秒にも満たなかったかもしれない。油断と言つていい、ヒカリのその思考の合間を縫つてノリコが先に動いていた。

マシンの膂力りきりきを地面に叩きつけ、その反動で一息に距離を詰めてくる。10m程のあった距離が互いに手を届く間合いとなった。

「ちッ！」

虚を突かれた。

予期しない動きにヒカリの反応が遅れる。

回避は間に合わない。ヒカリは直感に従い、ノワールに両腕を構えさせ、とつさに防御態勢を取らせた。

直後、RX-7から強烈なストレートが飛んでくる。

命中 コックピットに激しい揺れを伴い、鉄拳がノワールは数m後方に弾き飛ばされた。モニターにガードした左腕の損傷度が表示される。ダメージ軽微、問題ない。
だが

「いいぞタカヤ、その調子だ！」

コウイチロウの声援が聞こえた。

ノリコに向けられた激励がヒカリの心を刺激する。

なんでノリコなの、兄貴……

やられたのは自分なのに……肉親ではなく、他人を応援するのは何故なのか、ヒカリには分からなかった。

理解できない。何度目だろう……もう沢山だ。ノリコがいなければよかったのに。

視界に映るノリコのRX-7は拳を引き、巨軀を屈めていた。もう一度突撃してくるつもりのようだ。

「チャンスだタカヤ、一気に畳みかけろ！」

「はいコーチ！」

1撃目と違い距離は数mと短い。攻撃に全重量を上乗せできる距離だ。

案の定、ノリコの攻撃は加速を足した渾身の右ストレート。

ヒカリの口端が自然と綻んでいた。損傷を受けたノワールの左手に拳を握らせる。

ノリコはセンサー類の集中する頭部を狙ってきた。

「調子に乗るなあッ……！」

ヒカリは絶叫しながらレバーを操作する。

後方に飛び退ることも、側面に身を翻すこともしない。ノワールは前方に体乗り出しノリコの一撃を躲していた。

同時にノワールの左拳がRX-7の頭部を捉える。ミシリ、と左腕部に負荷がかかる音が聞こえた。しかし構わず振り抜く。

ノリコのRX-7は背部から地面に叩きつけられた。しかも反動が強かったため鋼の巨体が毬のように跳ね上がって一回転し、前のめりに倒れこんで止まる。

「終わりよ！」

ヒカリは勝利を確信した。

危なかった

一度千切れかけた意識を必死に繋ぎ止め、ノリコはコックピット内で起き上がる。

この戦いが生身であつたなら確実に終わっていた。

RX-7の優秀な衝撃吸収機構が役に立たないほどの衝撃だった。生身であつたなら確実に昏倒し、終わっていただろう。

だがこれはマシン兵器戦闘だ。カメラアイの一部が死んでいたが、頭部以下の部分のダメージは幸いほとんどない。

ノリコはまだ立ち上がることができた。

「まだ……まだあ！」

このまま倒れている方が楽に決まっている。

だが彼女は寝ている訳になかった。

コウイチロウとの特訓を無駄にしないため 特訓に耐え抜

いた自分の努力と根性を裏切らないために、ノリコは立ち上がる。

「うわああああっ!!」

悲鳴にも似た声をノリコが張り上げる。

まるで魂から絞り出したような叫び。RX-7はそれに呼応したかのように起き上がり、復活した。

「そ、そんな、嘘でしょう?」

その光景にヒカリは不覚にも驚きの声を漏らしていた。

ノリコのRX-7が起き上がったのだ。

頭部のバイザーは砕け、モニターの一部が死んでいるのは外からでも明らかだった。ヒカリから見てもボディの損傷は少ないように見える。損傷度を考えれば、起き上がって来ても不思議ではない程度だった。

しかし乗っている人間は生身だ。

不意を突かれ上、自力すら上乗せされた反撃で意識が刈り取られないはずはない。

この子、本当に人間……?

自分に倒され、立ちあがってきた相手など今までいなかった。

だがノリコは立っている。しかも相手は、マシン兵器に乗り出してまだ1カ月の1年生で、その中でも跳び切りの屑だった子だ。背筋に冷たいものが走った。同時に体の震えが止まらなくなる。自尊心をひどく傷つけられた気分だった。

「それが努力の成果ってわけ?」

ヒカリが呟く。

「分かったわ。何度でも倒してあげる……努力なんて無意味だって、教えてあげる!」

自分に言い聞かせるようにヒカリは叫んだ。

敵を睨め付け、捻じ伏せるべくノワールを動かそうとする。

だが先手を奪ったのは又してもノリコだった。

馬鹿の一つ覚えか？ 再び直進してくるが、その速度は先ほどの突進より心なしが早く感じる。

「こんのお！」

RX-7が間合いに入ると同時に、ノワールは両拳を鉄槌のように振り下ろした。

直撃。前進していた勢いが真下へとベクトルを変える。大地が悲鳴に似た地響きを上げ、RX-7はノワールの足元に平伏した。頭から突っ伏して、ノリコは地面を舐めさせられる。

今度こそ終わった。

2度目の確信と共に安堵が訪れる。だがそれを裏切るように、再びヒカリの背中を悪寒が襲った。

眼下を確認する。

RX-7が片膝をついてヒカリを見上げていた。

「うわああああッ！！」

「ひっ……！！」

ノリコが吼える。

RX-7が勢いよく跳び上がり拳を突き上げてきた。

眼前に迫る巨大な拳。やばい避ける、と考えるよりも早くヒカリはノワールを仰け反らせる。ほとんど反射と言っていい操作でヒカリは攻撃を躲す。

目の前の空気がチリチリと爆ぜているような錯覚を覚えた。それほどに紙一重だった。たかが1年が、天才の自分にここまで迫ると

は。

許せない。

ヒカリは全重量を乗せたストレートを、奇襲のアップercutを外されガラ空きになった敵の胴体へ、怒りに任せて打ち込んだ。

金属同士の接触音を轟かせ、RX-7は十数m弾き飛ばされる。

一度目と同じ様に前のめりに倒れこんだ。

RX-7のコックピットは腹部に存在する。その周辺を強打した。今度こそ気絶して起き上がれないはずだと、ヒカリは願いにも似た確信を持つ。

だがヒカリの信心はあっさり裏切られた。RX-7はまた振らつきながら立ち上がる。

「何なの……!？」

ゾクリッ、と悪寒が奔る^{はしる}。

何だこの感覚は？ ヒカリにとって初めての感情だった。

「何なのよ、あんたは!？」

叫ぶヒカリの声は震えていた。

ヒカリが感じている感情 それは恐怖と人が呼ぶもの。

ヒカリは初めて、敵に恐れを抱いていた。

ヒカリの声はノリコには届いていなかった。

先のヒカリが放った一撃は、確実にノリコの意識を削ぎとろうとしていた。筆舌に尽くしがたい衝撃がノリコの脳を激しく揺らし、

思考は朦朧とし視界は今も泥水のように淀んでいる。

頭で悪魔が囁く。

もついいよ、おまえは良くやったよ。

早く倒れたい。倒れて楽になりたい。

全身汗だけで、息も絶え絶えになっている。浮かび上がってくる本音、だが同時にもう一つの思考が頭をよぎった。

まだ、全てを出し切っていない……！

ああ、自分は馬鹿なんだな、ノリコは実感した。

自分は今、勝ち目のない勝負に挑み苦しんでいる。コウイチロウとの特訓で得たことを出し切っていないから何だと言うのだ。きつと出し切っても負ける。オオタ ヒカリはそういう相手だ。

ノリコは頭でそう考えている。

だが気持ちは正直だった。まだいける。諦めたくない。負けるにしても全てを出し切ってからだ！

脳裏に特訓中にコウイチロウが放った言葉が蘇ってきた。

< 他を頼るな。全身で感じ、心で判断しろ！ >

何故この言葉を思い出したのか分からない。

だがドロドロになった思考の末に一つの結論に辿り着いた。

そうだ…… なまじモニターなんか気にしているから……

どうせ視界は濁っていて、相手との距離も良く分からない。なら、見えなくてもいい。

ノリコはカメラアイの電源どころか、レーダーや他のセンサー類も全てカットする。

機器の光で煌々と照らされていたコックピットが、一瞬で完全な

漆黒へと落ちる。

常識では考えられない、自殺に等しい行為だった。

もう視界に広がるのは黒い世界だけだ。感じるのは機械の駆動音と操縦席に座っているという自分の触感のみ。

いやもう一つだけ知覚することができた。

鋼鉄の外壁を隔てて何かを感じる。大きな力の塊のようなもの。きつとあれは

ヒカリ先輩……

ノリコは何かに向かってRX-7を動かし始めた。

1歩1歩、ノリコのRX-7はヒカリに近づいて来ていた。

ヒカリはノリコ機の異変にすぐに気付く。

本来なら存在するはずの光が、ノリコ機の頭部には見えていなかったからだ。頭部に密集している全てのセンサー類が落ちてしまっているようだ。客観的に見てその事実には間違いはなかった。

モニターを切った！？ 何を考えているの！？

会敵時にリーダーが利かなくなるだけでも致命的なのに、自ら切るなど自殺行為としか言いようがない。絶壁のロッククライミング中に命綱を捨ててしまうようなものだ。

ノリコが分からない。理解できない……怖い。

もう嫌だ！

こんな馬鹿げた勝負はもう終わりにしよう。ヒカリは次の一撃で確実にトドメを刺す決意を固めた。

操縦桿から手を離し、コンソールを操作する。タッチパネルの画面にRX-7の武装一覧が表示された。ヒカリは複数の中から<トライアングルクロー>という項目を触れる。

<トライアングルクロー> Stand By.

ヒカリの選択したそれは、RX-7の前腕内に収納されている鋭利な短剣のような武装だった。使用時には拳の先まで突き出し、拳撃を剣戟へと昇華させる。威力といえばRX-7の強固な装甲を切り裂くことが出来る程だ。

コックピットを外して、これを胴体突き入れる。
それで終わりだ。

「タカヤ ノリコ」

<トライアングルクロー> Set Up.

その表示後、ノワールの右腕に鋭利な凶器が迫り出してくる。月明かりを受けて輝く様がその切れ味を物語っていた。

必殺のトライアングルパンチ 当てる、それで終わりだ。
戦いが始まってから初めての攻勢に出るため、ヒカリはノワールを走らせた。

ノリコとの距離は十数m、ノワールは一息に間合いに踏み込む。
時間にして1秒にも満たない。

至近距離に接して右腕を大きく振り上げた。

「 覚悟しろ！」

感じる。

視覚を閉じ、他の感覚に頼らざるを得ないノリコは確かに、それを感じていた。

最初は漠然とした何か　　輪郭のあやふやな光る球体のように思えていた、それは、時間経過と共に人型の光体へと変化していった。

‘それ’が自分との距離を詰めてくる。そして背筋に寒気が奔る。‘それ’は巨大な脅威となってノリコに襲いかかって来ていた。だから分かる。ヒカリが自分に引導を渡すため、強力な一撃を放ってくる。

やるなら今しかないッ！！

暗闇の中でノリコの双眸が開かれ、咆哮が上がる。
彼女は絞り出す、自分の中の全てを！

「うわああああッッ！！」

何度目の絶叫だろう。

耳を劈く雄叫びがヒカリの耳に届いた時、ノリコ機の姿は彼女の目の前から消え失せていた。標的を失った必殺の右拳は空しく空を切る。

そんな馬鹿な！？

盲目の敵に自分の一撃が躲された。ヒカリの時のように紙一重でない。視界に敵影は見えず、大きく回避運動を取ったことが分かる。

「今だ」

「ッ!？」

センサーの拾った外部音声にヒカリは戦慄した。

聴覚の促すままに視点は上空を誘導される。

ヒカリが捉えたノリコのRX-7は上空十数mに滞空していた。

そして、あるうことが全身から稲光を^{いなひかり}大氣中に撒き散らしている。

ノリコ機のプラズマドライブから異常な駆動音が響いてきた。ノワールのコックピッドにいても、ヒカリはそれを肌で感じる事ができる。

ヒカリにはタカヤ ノリコが理解できない。

マシン兵器に乗ってまだ1カ月なのに自分に勝負を挑み、食いつがってきただけでなく、恐怖すらヒカリに与えてきた。何もかも予想外だ。実現不能なことを悉く覆した少女をヒカリは理解することはできなかった。

だが、あの攻撃は分かる。

‘あれ’を受けるのは危険だ。

ヒカリが操縦桿を動かすが操作が利かない。トライアングルパンチで生じた体重移動の余韻で、ノワールの各部位は新しい命令を一時的に受け付けなくなっていた。

何故か、1週間前のマイヨの言葉が浮かび上がってくる。

<人は努力することで限界を超え、不可能を可能にすることができる>

「そんなこと……!」

否定しながらも、ヒカリはノリコの姿から目を逸らすことができなかった。

勢いを増す電光が網膜に焼き付いて離れず、一瞬心奪われる。ヒカリの必死の操縦に辛うじてノワールの腕部が反応した。脚部は動かない。もう避けられなかった。

次の瞬間、スパークが収まり、ノリコ機の右脚部に全てのエネルギーが集中した。

「イナズマアアキイイイクツ!!!」

ブーストの加速とプラズマを纏った巨人の蹴りがヒカリに降り注いで来る。

「いやああああッ!!」

死の恐怖に駆られ、動くノワールの腕部を十字に交差させた。だが、いとも容易く蹴り破られる。粉々になった部品が血飛沫のように宙を舞い、右脚がボディを深く抉った。ノワールの全身を稲妻が奔り、回路を通じて内部まで突き抜けていた。

一般にRX-7シリーズには絶縁処理が施されている。そのためコックピットまで電流が届くことは決してないが、センサー類を含む内部機構まで同様にはいかなかった。

火花を上げて全計器が爆ぜた。一瞬でカメラが死に、役目を終えたモニターは衝撃によって碎け散る。原型留めぬ様となった破片が跳弾のように跳ね回る。

その破片の一つが、ヒカリの顔を一文字に横切った。

ほんの一瞬の間を置いて、脳天に突き抜ける灼熱感が顔面を襲う。次に鼻腔に立ち込める鉄分の匂いと、顔を伝う温かい液体の感触。

「痛い！ 痛いよ！」

ヒカリは顔を覆い、天を仰いだ。

見えたのは、火花を飛ばす計器類に漆黒の鉄の壁だけ。スパーク以外にコックピットの内を照らすものはなかった。

激痛に苛まれながらも、血まみれになった手で操縦桿を動かす。

無我夢中で動かすがノワールが応えてくれることはなかった。

負けた……………

生々しい実感 まるで敗者への烙印のように傷が責め苦を
与え続ける。

痛みと絶望感が血とは違う液体を頬に伝わせた。

気が付くとヒカリは、泣き声を上げながら、兄に助けを求めている。
た。

兄は、どんな時もヒカリの事を守ってくれた自分のヒーロー。しかし今はノリコの味方なのだ。戦闘中もヒカリではなくノリコの事を応援していた。自分を助けに来てくれることなどあり得ない。

天罰なのだろうか、これは。今まで好き勝手してきたことに対する罰。

ヒカリの心に絶望が深く根を生やしていく。

「ヒカリィ！」

兄の声が遠くに聞こえた気がした。

幻聴まで聞こえ始めたか……………涙で目が霞みもう何も見えない。

コックピットの暗闇の中、ヒカリの意識は奈落へと落ちて行った……………。

第6話 ヒカリと努力と根性（後書き）

あまりやっちゃいけないことらしいですが、両者の感情を描くために、視点変更を連続して行ってみました。

読みにくいでしょうか？ 書いてる自分ではよく分かりません。
次回も第六話続きます。

第6話 ヒカリと努力と根性 2

次にヒカリが目を覚めたのは病院のベッドの上だった。

太陽が既に空高くから地面を見下ろしている。ヒカリには個室が宛がわれていた。壁に備え付けられた時計が12時を回っている事を、己が短針を使い主張している。

ヒカリはベッドから起き上がり、手洗い場の鏡を覗き込んだ。

鼻骨を横断し、頬骨の両端を結ぶ線を隠すように厚くガーゼが盛られ、テープで固定されている。触れると痛みが走る。だが構わずヒカリはガーゼを剥ぎ取った。

横一文字の大きな傷が、すらりと伸びる鼻と肌理細やかな肌を両断している。

既に止血と鼻骨形成、そして縫合は終わっていた。細い糸を使い、慎重に縫われている。ヒカリが女子だからだろう、可能な限り目立たなくしてやりたいという、執刀医の想いが見えてくるような仕事だった。

だがヒカリは、この傷を見てやはりショックを受ける。

美容の面ではない。敗北という事実が目に見えてしまうのが辛かった。

悪夢であれと願っていたが、傷の痛みが頼んでもないのに教えられる。

昨日の出来事は全て真実なのだと……。

夜は明け、日付は21日に突入していた。

この日は沖女1学期の終了日であり、そしてTOP部隊出発の日でもあった。

しかし、ヒカリに行動を起こす気力は湧いてこない。

病院にも居たくなかった。負けたという事実からも、ノリコに力添えした兄からも逃げ出したい思いに駆られた。

何故か、綺麗に畳まれた沖女の制服が枕元にある。

病衣からそれに着替えると、ヒカリは病院から抜け出した。

スーパーロボット大戦TOP ? Side The Earth
?

第6話 ヒカリと努力と根性2

西暦2021年 7月21日 14時頃

沖女周辺 ヒカリの秘密のビーチ

病院を抜け出した後、ヒカリの足は海岸線を進み、無意識の内に彼女のお気に入りの場所へと向けられていた。

青い海が眼前に広がり、突き抜けるような蒼天が頭上にある。

月並みな言葉かもしれないが、今日も沖縄の自然は美しく輝いていた。

しかしヒカリの眼に映る景色は、何だかうす暗く曇り、いつもの生彩を欠いているように見える。

終業式が終わったのだろう。制服姿の学生たちと何度かすれ違った。皆笑顔を浮かべており、沈んだ表情の者は一人もない。彼女たちの何人かはヒカリの様子に気付いたようで、ちらりと目を向けた後、仲間内で何かを話しながら去って行った。

決闘から1日が過ぎ、ヒカリの敗北の噂が既に広まっているのか

もしれない。

中には厭らしい表情を向ける女生徒もいた。視線が集まる度に顔の傷が痛むが、彼女は女生徒たちに一瞥もくれずに歩いた。

どれだけの距離を歩いたのかは覚えていない。

ふと視線を上げると、ヒカリの好きな沖縄の海が目の前に広がっていた。

よく遊びに来る、人気の少ない彼女のお気に入りの浜辺。腰掛けるのに丁度いい高さの岩も一つあり、ひと泳ぎした後にも休憩するヒカリの指定席になっている。

しかし、今日は既に先客が陣取っていた。

「待っていたぞ、オオタ」

「マイヨ教官」

沖女の新任教官

マイヨ「プラートが指定席を占拠し、ヒカリに視線を向けていた。気にいってしまったのか、今日もアロハシャツに短パン・サンダルという出で立ちだ。」

「お前なら、ここに来るだろうと思っていた」

予想外の人物の登場に困惑するヒカリに、マイヨが声をかけた。

何故マイヨがここに居るのだろうか。沖女の終業式がある日なのだから、教員である彼の体が浜辺で時間を潰すほどに空いているとは思えない。

しかしヒカリは、そこから先を考えることをしなかった。

1週間前の忠告を無視し、無様に負けた自分の姿を見に来た。それ以外の理由が、ヒカリには思いつかなかったから。

ヒカリは自分を嘲笑する。

「負け犬を笑いに来たんでしょう？」

「私は、生き様を通すために戦った者を笑いはしない」

マイヨが言った。

「勝敗は結果にすぎない。お前は自分の生き方を貫き、兄の愛を取り戻すために戦った。それ自体は素晴らしいことだと、私は思う」

兄の愛 そんな大それたモノじゃない。自分はただコウイチロウの隣に居ただけだ。だからノリコが憎かった。

そして努力をせずに相手に勝つということは、18年間続けてきた自分なりの生き方であり、ノリコの生き方とはまさに正反対のものだった。

努力し、不可能を可能にする。

マイヨの言葉をノリコは体現して見せた。それも天才である自分に対して。

あの敗北は、ヒカリの生き方が否定された瞬間だった。

「だったら何だって言っんですか？」

ヒカリの表情に影が差す。自然に語気が強まっていた。

「もう私には何もないわ……負けてTOPにもなれず、宇宙にも上がれず……兄貴にもきつと見捨てられた」

ヒカリの頬を涙が伝う。

「兄貴が帰って来た時から思ってた……私はきつと兄貴に嫌われたんだって。でももしかしたら、昔から嫌われていたのかもしれない。私が勝手に勘違いしてただけで、兄貴は私のことを鬱陶しく思ってたのかもしれない……」

自分はこんなに涙脆かっただろうか？ 兄が関わると、どうにも冷静ではられない。

確かにヒカリは兄の隣に居たかった。だが、コウイチロウはきつとそれを望んではないのだろう。だからノリコとカズミをTOPに選んだのだ。

ヒカリの中で失意だけが大きくなっていく。

「もう、私の居場所なんて何処にもない……」
「本当にそう思っているのか？」

ヒカリの呟きにマイヨが問うが、彼女は応える事ができなかった。数秒の沈黙の後にマイヨが力強く言う。

「それは間違いだ。お前はコウイチロウに愛されているよ。お前が気付けていないだけだ」

「……嘘だ」

「私は嘘などつかん」

マイヨが断言した。

「ならお前に問おう。何故病院のベッドで目覚めることができたと思う？ 大破したRX-7から、お前を助けだしたのは誰だと思う？」

「そんなの……」

あの時、意識を失っていたヒカリに分かるわけがない。人を集め、機械を使って救出作業を行う。それが普通だろう。そんな考えを余所にマイヨが言った。

「コウイチロウだ。奴がお前を助けたした」

「え……？」

「コックピット強制開放用のハッチを奴がこじ開け、パネルを操作した。まだ機体が熱を持っていたが、そんなことはお構い無しだったそうだ」

マイヨの言葉にヒカリは驚きを隠せなかった。

マイヨは、兄が大破した機体から自分を連れ出し、病院に送り届けたと言う。あの不自由な体の兄がそんなことが出来るのだろうか。ヒカリは俄かに信じられなかった。

「でも、じゃあ何故、兄貴はノリコの味方に付いたんですか？ 助けるぐらいなら、初めから勝負なんかさせなければいいじゃない！」
「……」

ヒカリは声を荒げた。しばしの沈黙の後、

「本来、これはコウイチロウの口から言うべきことなのだろうが……」

マイヨが徐におもむろ口を開いた。

「あの勝負は、コウイチロウがお前のためにと、行ったものなのだ」
「私のため？」

「これから、お前が身を投じるだろう戦場　宇宙怪獣との戦いで生き残るために、お前に欠けているモノに気付かせるための戦いだっただ」

マイヨの独白は続く。

「タカヤにあつて、お前に欠けていたモノが何であつたのか……タカヤに敗れた今なら分かるはずだ」

マイヨの言葉を受けてヒカリはすぐに悟った。

自分に欠落していたモノ 1週間前にマイヨが説き、ノリ

コが実践して見せたモノ。兄が自分に求めていたモノが何なのか、ヒカリは薄々勘付いていた。

ノリコに負けた今だからこそ、その言葉を認めることができる。

「努力と根性……」

ヒカリの言葉にマイヨは静かに頷いた。

「オオタ、お前には言っておこう。私たち人類が、宇宙怪獣と戦つて生き残れる確率は、限りなくゼロに近いだろう」

マイヨは淡々と言葉を紡いだ。

そして短い沈黙が訪れる。

「ギガノス戦争」の英雄

‘蒼き鷹’のマイヨ＝プラート。

宇宙怪獣とは「ギガノス戦争」の英雄にこうまで言わせる化け物なのか？ 奴らの姿を見た経験が、ヒカリにはなかった。彼女にとって、奴らの脅威は頭で想像するしか術がなかったし、兄も何も語ってはくれなかった。

だがマイヨが脅威の程度を教えてくれた。外見は平静を保っているが、心の中でマイヨは恐怖を感じているのかもしれないと、ヒカリは感じる。

再びマイヨは重い口を開いた。

「私は奴らの死骸しか見たことはない。だがそれで十分だった。奴らの脅威を いや違うな、もっと根源的な恐怖を肌で感じた

……奴らは我々人類にとっての‘死’だ」

マイヨが言い切った。

「戦慄したよ。あんな化け物が、いつか群れを成して殺しにやって来るのか、とな。希望はない。今のままでは虐殺されるのを待つだけだ」

「……じゃあ、なんで私たちがいるんですか？」

ヒカリがマイヨに訊いた。

沖女を含め、地球帝国は若い人材育成のための士官養成学校に力を入れている。「ギガノス戦争」では多くのパイロットを失った。帝国は人材補充と宇宙怪獣に対抗するために、まだ14、5の少年少女の養成学校入学を支援している。

宇宙怪獣を倒す、それが帝国の掲げた題目だった。

だからヒカリは沖女に入学したし、今までやって来た。しかしそれを否定するような事実がマイヨの口から語られている。希望がないのなら戦って意味がないではないか、ヒカリはそう思う。

「だからだ」

ヒカリの問いにマイヨが応えた。

「だから我々人類は努力せねばならん。生き残るために足掻き、不可能を可能にするために努力する。諦めればそこで終わるだけだ」
「でも、私は努力をしてこなかった」

ヒカリは自分の18年間を振り返る。

他人より物事を上手くこなせ、思い通りの結果をいつも手にしてきた。ただそれだけ……それだけなのに、努力している他人をいつ

も見下していた。

ヒカリは自分の行ってきたことに恥さえ覚える。何という矮小さだろう。他人を認めず、ただ自己中心的に生きてきただけの18年間……そう考えると、惨めにさえ思えてきた。

「平穏な時代ならそれも許されただろう」

マイヨは言った。

「だが今は奇跡が必要な時だ」

「奇跡、ですか？」

ヒカリの言葉にマイヨが頷く。

「それを起こす力を、私たちは若い世代に求めている」

マイヨの告白は終わった。

奇跡。

そのような言葉が、マイヨの口から出てくるとは思ってもいなかった。

宇宙怪獣との生き残りを賭けた戦い。そして勝利。ヒカリが沖女に入り目指していたモノの一つだ。

だがヒカリはまだ敵に出会ったことがない。今までの人生経験から、今度もきつと上手くいくに決まっていると、そう高を括っていた所が多分にあった。

だがそのような展開は望めそうにない。

圧倒的な戦力差を覆す何か そう、マイヨは奇跡を望んでいる。

多くの修羅場を潜り抜けた男が奇跡を欲している。自分は奇跡を起こすことができるのか？

多分……無理だろうな

以前のヒカリなら、自信たっぷり「できる」と公言していただろう。

しかし今のヒカリには理解できた。何の根拠もない肯定それは愚かさで無知から来る、ただの思いあがりすぎない。

ああ、私、なんて空っぽなのかしら……

ヒカリの中にあつた当然が彼女の手をすり抜けていく。敗北を知ること、18年築き上げた虚像は崩れ去った。残されたのは何も無い自分一人だ。

自分には、努力し掴み取ったモノが何一つない。顔の傷が疼きだした。

タカヤ ノリコの姿が脳裏に浮かぶ。彼女は屑なんかじゃない。今ならヒカリにも理解できる。彼女は努力で掴み取った力でヒカリにぶつかり、根性で立ち上がり、勝利を掴み取った。

あの時点で、ヒカリが彼女に劣る所など何も無いはずだった。つまり、タカヤ ノリコは奇跡を起こしたのだ。

兄貴が選んだ理由が分かった気がするよ

ノリコはヒカリより遥かに弱い。しかしヒカリにないモノを彼女は持っていた。

勝てっこないや……

奇跡を起こす何かを彼女は持っている。だから兄は選んだ。兄の隣に居るべきは自分ではなく、ノリコなのだと痛感する。

「オオタ」

マイヨが、涙ぐむヒカリに再び声をかけた。

「気に病むな。確かに試合には負けた。だが、真の意味で敗北はしていない」

マイヨがヒカリの指定席から腰を上げる。
ヒカリに向き直り、肩に手を当てて言った。

「お前はまだ生きているぞ」

マイヨの言葉の意味をヒカリは反芻した。

ヒカリたちの戦い 宇宙怪獣との戦いでの敗北が意味する
モノを、彼女は理解する。

「あの戦いで学んだことがあるはずだ。敗北を知り、死の恐怖を味わった」

「マイヨ教官……」

「お前なら立ち向かえるはずだ。宇宙怪獣という名の『恐怖』に」

マイヨの語気が心なしが強まった気がした。
死の恐怖。

あの戦いでの体験をヒカリは思い返す。自らが招いた絶対絶命の瞬間だった。殺されると、初めて直感した。身の毛もよだつあの感覚は、可能なら二度と味わいたくはない。
しかし

兄貴やノリコは、その感覚と戦うのよね……

コウイチロウたちの顔が浮かんだ。宇宙という地獄に、彼らは乗り込むのだ。

自分だけ身を縮めて隠れている訳にはいかない。

「教官」

マイヨに訊く。

「私に出来るでしょうか？」

マイヨが微笑を浮かべ、静かに頷いた。

「いいかオオタ、努力しろ。自らを磨きあげ、不可能を可能にしろ。

お前なら輝けるはずだ、タカヤと同じようにな」

「ノリコみたいに……」

「そうだ。いいかオオタ

」

マイヨが力強く語る。

「　　奇跡は起こすものだ」

「奇跡は起こすもの……？」

「それが、あの凄惨な戦争で私が好敵手^{とも}に教わったことだ」

「兄貴が……」

「ギガノスの蒼き鷹」のライバルと言えば、兄とケーンたちだ。

マイヨの言葉から読み取れる。兄たちも奇跡を起こすことで、あの戦争を終結に導いたのだ。

そう、ノリコのように

私はなれるだろうか……？

愚図で鈍間で弱いけど、本当に強いあの少女のように。

なれるかじゃない、なるんだ！

ヒカリは心の中で誓う。

一度負けたくらいが何だというのだ。ノリコは多くの敗北を味わいながら、それでも立ち上がってきたに違いない。それに、自分はこんな所で立ち止まるような女だったか？

違う。オオタ ヒカリは憎たらしいぐらいに、強くなければいけないのだ。

強くなってみせる。タカヤ ノリコのように。

顔の横一文字が痛む。

しかし、もうヒカリは気落ちすることはなかった。むしろ心の底から闘志が湧いてくる。

まるで、この傷がノリコと自分を繋ぐ架け橋のようにさえ思えた。マイヨはヒカリの様子を見ており、安心したような表情を見せている。

彼はヒカリの背後に回り、背中を軽く押し、

「行ってこい」

と促した。

「コウイチロウたちはまだ校庭に居るはずだ。今を逃したら、次に会えるのは十年以上先になるぞ」

「教官……はい、行ってきますす！」

後押しを受け、ヒカリは勢い良く駆けだした。

足取りはもう重くない。軽やかに体が弾み、沖女へと足が進んだ。だがヒカリはふと立ち止まる。振り返り、浜辺にいるマイヨに視線を向けた。

「マイヨ教官、ありがとうございました！」

ヒカリは生まれて初めて、相手に心から深く頭を下げた。マイヨは決まりが悪そうに微笑を浮かべていた。礼を終えると、踵を返し再び走り出す。

今日も青い海が眼前に広がり、突き抜けるような蒼天が頭上にある。

うす暗いフィルターはもう引かれていない。色鮮やかに美しい沖縄の自然が目飛び込んでくる。ヒカリは沖女に向かい走って行く

「私も、お節介焼きになったものだな」

浜辺に残されたマイヨが呟いた。

オオタ ヒカリ もう大丈夫だろう。病院に運ばれたと聞いた時には肝を冷やしたが、あの様子なら自分で走り続けることができるはずだ。

コウイチロウが望んだ奇跡に、希望の光に彼女ならきつとなれるだろう。

「よかったな、コウイチロウ」

自分の好敵手ともの名を呼び、頭上に広がる空を見た。

青が無限に敷き詰められていた。だがその先には漆黒の地獄が広がっている。

好敵手は再び黒き海に船出することを選んだ。その出発日が7月21日……今日である。

実際の船出は半年以上先であろう。その間、TOP部隊は宙間戦闘の訓練を受けることになる。その指導者はヒカリの兄、オオタコウイチロウだ。

そしてワープを使用し宇宙にでることは、地球に残る自分とは違う時間を生きること。ウラシマ効果と呼ばれる時間軸のズレ……再会は10年以上先になるだろう。空を見上げながら、マイヨは言った。

「行ってこい。留守の間、地球とお前の妹は私が守ってやる」

その独白を海と空だけが聞いていた

第1部 エピローグ1 ヒカリと好敵手との誓い

ヒカリは沖女への道を全力で走り続けていた。

息が弾み、汗が飛び散る。上がった心拍数は血流の勢いに拍車をかけ、顔の傷跡にも血液は廻って行く。負傷したのは昨日のことだから、激しい血流が刺激になり顔面を火傷のような痛みが覆っていた。

だがそれさえ、今のヒカリには高揚感に繋がっている。

彼女が目指しているのは沖女の校庭。

そこにTOP選抜のチームが集まっているはずだ。

オオタ コウイチロウ 血の繋がったヒカリの兄。

アマノ カズミ ‘薔薇の女王様’ と呼ばれる沖女の実力者。

そして、ヒカリを倒した沖女の1年生 タカヤ ノリコ。

7月21日はTOP部隊が宇宙に上がる日である。

沖女の終業式は終了し、時間は既に15時を回っている。

もしかしたら、もう出発していて校庭にはいないかもしれない。

そんな考えが頭を過った。しかしヒカリは目的地を目指して走り続けた。

間に合わなければ、次に会えるのは10年以上先だ。会わなければ絶対に後悔する。兄が消息を絶った2年前のような思いはもう二度としたくはなかった。

沖女に続く石段を一気に駆け上がる。

目の前が開け、見慣れた校舎とグラウンドが見えた。

「兄貴！」

ヒカリの声にコウイチロウたちが振り向いた。

スーパーロボット大戦TOP ? Side The Earth
?

エピソード1 西暦2021年 ヒカリと好敵手との誓い

石段を上がり、沖女の玄関口にあたる所にコウイチロウたちはいた。アマノ カズミとタカヤ ノリコの姿もある。だがケーンらの姿は見えない。現役TOP部隊の彼らは既に出発したのかもしれない。

息を切らすヒカりに、

「オオタ先輩……！」

初めに声を上げたのはノリコだった。ヒカリの傷を見て青ざめた表情になる。

「ごめんなさい、あたし……そんなつもりじゃ……！」

「いいのよ、ノリコ」

穏やかな声でヒカリが応えた。

「戦闘で傷を負うのは普通のことよ。私は気にしてないわ」

「え……？ でも……」

ヒカリの言葉が意外だったのか、ノリコは言葉を詰まらせ、カズミと顔を見合わせている。彼女らを余所に、ヒカリはコウイチロウを見つめた。

いつもと同じジャージ姿にサングラス、杖を着いて立っている。ただその両手には痛々しく包帯が巻かれていた。自分を助ける為に……申し訳なく思う。

「ヒカリ、もう傷はいいのか？」

杖の持ち手が痛むだろうに、コウイチロウはそんな気配は微塵も出さなかった。

本当は兄の傷の具合を知りたい。しかし兄は何も言わない。ならば聞くべきではないのだろう。

「痛いよ。でもこれは、今までの私への罰みたいなものだから」
「そうか」

兄らしい短く素っ気ない返事だった。
しかし、この声ももうすぐ聞けなくなる……そう思うと少し胸が熱くなった。

「3人共、もう行っちゃうんだよね？」

「ああ……次にこちらに戻ってくるのは10年後だ」

分かっていたことだ。だがコウイチロウの言葉で、10年という年月が急に現実感を帯びる。2年間、兄がいなくても寂しかった。しかし今度は10年、5倍以上の気が遠くなる時間だ。

「いいよ」

しかし、ヒカリの心は安らかだった。

「帰って来てくれるって、分かってるから大丈夫」

そうだ、2年前とは違う。10年だ。10年待てば、兄は帰ってくる。

なら、自分は頑張れる。

「私、待つてるから。兄貴の留守の間、地球は私たちが守るから。安心して行つて来てよ、兄貴」

「ヒ、ヒカリイ」

くしゃつと表情が一瞬歪んだが、コウイチロウはすぐにヒカリに背を向けてしまった。サングラスの下を指で弄っている。泣いているのかもしれない。

「カズミ、こんな兄貴だけお願い」

「ええ、オオタ いえ、ヒカリさんもお達者でね」

カズミと握手を交わす。彼女に名前と呼ばれたのは、これが初めてかもしれない。思えばカズミはいつも自分のことを心配してくれていたのだろう。

一度ぐらい特訓に付き合つてやればよかったかと、今更ながらにヒカリは思う。

「ノリコ」

「オオタ先輩……」

「ヒカリでいいよ。あんたは私に勝った。もう私とあんたは対等なんだから」

そう言うと、ヒカリはノリコの右手を力強く握りしめた。
ノリコは少々戸惑った様子だったがやがて口を開く。

「ヒカリ……先輩」

「まあ、いいか」

ノリコの精一杯の譲歩に苦笑いする。

「あんたは天才の私に勝ったんだ。胸を張っていいのよ！」

ヒカリはノリコの頭を掴むと乱暴に撫で回した。髪の毛が乱れ、ノリコはやはり取り乱して「あわわッ」とか「痛い」とか喋っている。

可愛らしい1年坊だ。こんな子を何故自分は、あそこまで憎むことができたのだろうか。自分の弱さ故だろうか。答えは分からないが急ぐ必要はない。自分には時間が沢山あるのだから。

多くの事を気づかせてくれたこの少女と、見守ってくれた兄たちにヒカリは本当に感謝している。

「ありがとう」

小さな小さな声で述べた謝辞は、離れていたコウイチロウたちには届かなかった。

だが近くにいたノリコには少し聞こえていたようで、

「ヒカリ先輩、何か言いました？」

「な、なんでもないわよ！」

照れ隠しに着き飛ばされ、バランスを崩して尻もちをついた。お尻を摩りながらノリコが起き上がる。

「いたーい、何するんですか先輩ッ」
「いいこと、ノリコ」

ヒカリは立ち上がったノリコを指差した。

「負けたら承知しないからね！」
「え……」

2週間前にも似たような光景があつたな、とヒカリは思い返す。
ノリコの驚いた態度も同じだったが、この2週間で2人の中身は劇的に変化していた。

ノリコは強く、そしてヒカリも多くのことを学んだ。2人は変わった、いい方向にだ。

ズキズキと傷が疼く。この痛みでさえ、自分とノリコとの絆にさえ思えた。

大きな声でヒカリが言う。

「あんたは私を負かしたんだ。宇宙怪獣なんかには負けちゃ駄目よ！」

「は、はい！」

「生きて地球に帰ってくるのよ！」

「はい！」

「帰ってきたら、また勝負しましょうね」

澁澁とした笑顔を浮かべ、ヒカリはノリコと再び握手を交わした。
もうすぐ別れの時が来る。次は10年越しの再会となるだろう。

ヒカリは心の中で誓ったことを口にした。

「あんたたちが帰ってくるまで、地球は私が守ってみせる。兄貴に負けない伝説のパイロットになってみせるわ！」

「私ももつと強くなります！ お姉様やヒカリ先輩みたいに強くなります！」

2人の誓いは響き渡り、互いの魂に刻みつけられた……

時は、西暦2021年 7月21日

こうして、世界の運命を左右する少女たちが、宇宙へと旅立っていく

第4世代型宇宙戦艦エクセリオン進宙まで、あと約7カ月

第1部 エピローグ1 ヒカリと好敵手との誓い（後書き）

これにて第1部終了です。

1か月ぐらいで書き上げるつもりだったんですが、意外と時間がかかりました（汗）

この後、番外編を数話挟んでから、第2部に移ります。
良かったら、読んでくださいね。

第1部 番外1 ひとつの終わりとひとつの始まり

西暦2017年、地球圏は大きな戦乱の渦に巻き込まれていた。

後に「ギガノス戦争」と呼ばれるその戦は、地球を統治する地球帝国に対して、スペースノイドの帝国である「ギガノス帝国」が反旗を翻したことから始まる。

ギガノスが開発した新型の人型起動兵器 MAの登場によって、MAの開発に遅れを取った地球帝国は劣勢を強いられることになる。

しかし、ギガノス側から亡命してきた科学者がもたらした「D兵器」が戦況を覆した。

ドラグナーと呼ばれる3機の試作機。

そしてそのデータを基に開発された量産機ドラグーンの登場により、帝国は劣勢を跳ね返し、ギガノスに攻勢をかけ始める。

地球帝国軍は拠点を次々と占領していき、戦況は覆された。開戦時の勢いを失ったギガノス帝国は、次第に虫の息となっていた。

そして西暦2017年末、ギガノス最後の拠点「宇宙機動要塞」への侵攻作戦を、地球帝国は開始する。

その作戦に彼も参加していた。

‘帝国の黒い稲妻’と畏怖された男 オオタ コウイチロウである。

スーパーロボット大戦TOP ? Side The Earth

？

第一部 番外1 ひとつの終わりとひとつの始まり

西暦2017年末

ギガノス宇宙機動要塞 周辺宙域

その日、宇宙は本来の静寂さを失っていた。

銃弾が飛び交い、爆散するMAの残骸とデブリがそこかしらに浮遊している。衝撃波は宇宙のエーテルを伝って響き、機体を揺らす。耳には届かないが、兵士の悲鳴と絶叫、そして狂気の声がその空間には間違いなく渦巻いていた。

そんな中

「先に行けい、マイヨ！」

狭いコックピットの中で、オオタ コウイチロウは吼えていた。

パーソナルカラーの黒に塗装されたドラグーンに搭乗し、戦場を駆けている。機動要塞と目と鼻の先の距離までできていたが、ここまですで何機のMAを撃墜したか分からない。敵の攻撃は激しく、彼も手心を加えている余裕などありはしなかった。

75mmハンドレールガンの弾倉を取り換えながら、僚機に通信を送った。

全身を青くカラーリングされたMA ファルゲン・マッフ
のパイロットが通信に答えた。

「すまん、コウイチロウ！」

「構わん！ ケーンたちを頼むぞ！」

ファルゲンのパイロット、マイヨ＝プラートはそう言うと、機動要塞の中へと突入して行つた。既にケーンたちは要塞内部へと侵入している。この戦争の首謀者はまだ要塞の中にいるはずだ。

きっとケーンとマイヨたちが、この戦争に終止符を打ってくれる。そうコウイチロウは信じていた。

「さてと」

マイヨを送り出した彼の機体のレーダーには、多くの敵性信号が表示されていた。

敵陣を突っ切つて来た彼らへの追撃部隊だろう。数は3機。全てゲバイと呼ばれる、ギガノス帝国の主力量産機だった。コウイチロウと同性能のハンドレールガンを全機片手に、猛スピードで彼の機体へと迫ってくる。

「いい度胸だ」

コウイチロウは機体を敵機に向け、コンソールを操作し武器選択画面を映し出した。

機体両翼に装備されている10連ミサイルポッドを選択する。ここまで相当数の弾薬をばら撒いてきた。このミサイルを発射したら、一度旗艦へと戻らねばならないだろう。

だが彼は、マイヨを送り出すという役目を、取り合えずは完遂させた。

自分が後を追うためには、補給が一度は絶対不可欠……そのため目の前の障害を排除するしかない。

ミサイルのロックオンサイトが3機のゲバイに重なった。

サイトが明滅し、発射準備が整ったことをコウイチロウに知らせ

る。

操縦桿にある発射スイッチに、彼が指を伸ばした。これを押すだけで、敵は宇宙空間の塵と化す。もう何度も繰り返してきた。今更、躊躇する理由などありはしない。

ボタンを押し込もうとする。

正にその瞬間だった

ゲバイの1機がいきなり爆散した。

「なっ！」

コウイチロウはミサイルの発射を踏みとどまる。

突然の事態に驚愕したのは彼だけではなかった。残る2機のゲバイも加速を止め、突如消失した味方機の反応を探す。原型を留めぬ姿で宇宙空間を漂っていた。パイロットは即死だろう。

その時間も、ほんの数秒だっただろうか。残った2機のゲバイは、コウイチロウのドラグーンに向き直る。

だがその直後、もう1機のゲバイが大爆発を起こした。

機体を象っていた部品が飛散し、爆圧がエーテルに乗って押し寄せる。離れたコウイチロウでさえ身じろぎする圧力に、近距離にいた敵のゲバイは吹き飛ばされていた。

遠くに弾き飛ばされ、慣性を背部ブースターで相殺して体勢を立て直す。

しかしその時、敵機の真正面を一瞬影が走った。

コウイチロウの眼に映るゲバイの巨体は、上下に分断されていた。すぐに爆発が起こり、彼のドラグーンを衝撃が襲う。

「何事だ!？」

一瞬で3機のMAが撃墜された。
即座に周囲の状況を確認する。レーダーに機体反応はない。味方機の援護、というわけではなさそうだ。

何故、レーダーが利かん!?

ドラグーンのレーダーは、機体の金属反応のみならず、傍受した電波の情報も統合して位置を割り出す。相手がよほど高性能なステルス機能を備えていなければ、確実にレーダーに映し出されるはずだ。

MAは機械の塊なのだから。
役に立たないレーダーから目を離し、コウイチロウはモニター上の動体センサーを見た。

「ッ!」

急速に接近してくる反応があった。
すぐ近く、方角は真上。ブースターに点火し、その場を離れる。
上方から襲いかかる‘何か’を回避したが、激しい衝撃が機体を見舞った。

コウイチロウはすかさず機体損傷をチェックする。右腕部を示すステータスが赤く変色していた。カメラを向けると、ドラグーンの右腕が鋭利な刃物で切り取られたかのような断面を残し、肘から先が無くなっていた。

「何なんだ!」

動体センサーから敵の姿をカメラに捉え、コウイチロウが叫んだ。

「何だ、こいつは!?!」

モニターには見たこともない敵が映っていた。

深緑色の体躯　人型ではないクモのような胴体に、4本の足と2本の巨大なハサミを持ち、それを覆うように巨大な外殻に包まれている。カニのような外観を持ったその化け物は、小さな頭にある8つの赤い目玉で獲物を探していた。

全高は10m程だろうか、通常のMAよりは小さめである。

しかし異様な外観と共に、敵の生々しさが彼に伝わってくる。背筋を寒気が走り、冷汗が全身の汗腺から噴き出してきた。

‘こいつ’は危険だ。

百戦錬磨のコウイチロウだったが、本能的に敵の脅威を感じ取り、腰が引けた。この敵はMAではない　機械ではない、生物的な‘何か’だ。

その緑色の巨大なカニの化け物は、ドラグーンから切り取った腕部を、両のハサミで弄んでいる。その強固な金属の塊は、まるで粘土細工のようにバラバラに引き千切られた。

「化け物め！」

コウイチロウは、ドラグーンの左に握られたハンドレールガンを化け物に向け、斉射した。75mmのメタルジャケット弾が、砲身で電磁加速され、高速で連射される。

直撃すればMAの装甲も貫通する性能を持っている。

だが弾丸は弾かれた。化け物の外殻の硬度とその丸みで、弾丸はあらぬ方向に飛んで行った。

傷は与えなかった。しかし、敵の怒りは買ってしまったようだ。赤い複眼でドラグーンを見据え、猛スピードで突撃してきた。巨大なハサミでドラグーンを切り裂こうとするが、コウイチロウはブースターを噴射させて攻撃を回避した。

化け物は慣性のままに遠ざかるが、姿勢を立て直し再び直進して

くる。何としても、コウイチロウの喉笛を切り裂いてやろう、という腹のようだ。

「舐めるなよ！」

ハンドレールガンが投げ捨てる和白兵戦用レーザーブレードを抜き放った。さらにミサイルを全弾ロックオン。重複する赤いサイトを確認するや否や、化け物に向かって撃ち出した。

虎の子のミサイルが、機体両翼のポッドから放物線を描きながら化け物に肉薄し、直撃する。一瞬に十連発の閃光が走った。対MA戦用の必殺武器だ、ただでは済むまいと彼は思う。

だが、期待は裏切られる。

「くそう！」

爆炎を突き抜けた化け物が突っ込んできた。

敵のダメージを確認する余裕がない。至近距離まで化け物が接近してきていた。残る武器は左腕部の剣のみ。

化け物がドラグーンを両断すべし、とオオバサミを振るう。ドラグーンは後方に跳び退り躲す。化け物の2撃目が来る。ドラグーンはそれに合わせて前進する。

「でやああああー!!」

コウイチロウは機体に化け物の下に滑り込むようにして、2撃目を回避する。そして化け物の比較的軟らかそうな腹部に、レーザーソードを突き刺した。剣の赤い粒子と緑色の体液が辺りに飛び散った。

そのままぶった切ると、綺麗な一文字に化け物の腹が割れる。正体不明の体内機関がグロテスクに撒き散らされた。敵が生物と仮定

するなら、間違いなく致命傷だ。
だが

「何い!？」

化け物のまだ動くハサミで、ドラグーンは左腕部を切り裂かれた。

マニピュレーターを2つとも失った。これでは、もう外装武器を保持することができない。ミサイルも討ち尽くし、コウイチロウは完全に丸腰となった。

くっ……万事休すか！

こうなれば、残された脚部を使って格闘戦をしかけるか？ だが化け物の機動性とハサミを用いた格闘能力を考えれば、それは自殺行為だと分かる。おそらく近づいた瞬間に、機体は上下に分断されてしまうだろう。

接近戦で勝ち目はない。

残る選択肢は逃亡しかなかった。

戦争が終結しようかという瀬戸際で、彼はこんな化け物に殺されるわけにはいかなかった。

コウイチロウは、すぐさまフルブーストで逃げ出そうと試みる。だがその時、化け物の様子がおかしいことに気が付いた。

「死んでいるのか？」

化け物は、ドラグーンの腕を切り取ったままの姿勢で事切れていた。コウイチロウの1撃がやはり致命傷だったようで、赤い複眼に光は無く、四足とハサミは動く気配を見せない。

「何だったのだ、一体？」

我が身に降りかかった出来事に、彼は驚きは隠しきれなかった。

正体不明の怪物 この敵は間違いなく生物だ、とコウイチロウは確信する。彼にその根拠を説明することはできない。だが地球に存在する微生物に、酸素を嫌うものがあることは知っている。同様に酸素のない宇宙空間で生息する化け物が、いても不可解でないのかもしれない。

ただ、常識で測れない存在であるのは確かだった。

コウイチロウは死骸をその場に残し、旗艦への帰路へと付いた。機体は戦闘能力を失っている。戦闘の真つただ中にいれば、敵の言的になるだけだった……。

結局、彼が帰還してから1時間後に、ケーンたちがこの戦争の首謀者を討ち取ったという報せが入った。

機体の損傷もあつて、その場に居合わせることはできなかったが、これまで戦績もあり彼は‘伝説のパイロット’と呼ばれるようになった。

化け物の死骸は秘密裏に回収され、地球帝国の化学班により様々な検査が行われた。コウイチロウは唯一の戦闘経験者として召集を受ける。彼はアドバイザーとして、帝国に籍を置いたマイヨ＝プラートと共に、この化け物の研究に携わった。

そう長く時間はかからず、幾つかの事実が浮かび上がってきた。

1つ目の事実。化け物は明らかに地球上の生物ではなかった。唯一、外見だけがクモとカニに似ているというだけで、体内構造が地球生物のモノとは違うことしか理解できない。

‘地球外生命体’と呼ぶに、この化け物は相応しい存在だった。

2つ目は、敵が人類を狙って攻撃しているという事実だった。

これは交戦したコウイチロウと、その戦闘データを踏まえた上で出された推論に過ぎない。しかし敵は躊躇なく彼を狙ってきていた。それだけは確かだ。

そして最後の事実は、人類にとって脅威になりうるものだった。

解剖の結果、この化け物の消化器官と思われる臓器は極めて未発達。否、不要さ故に退化したかのように、小さなものであった。

確かに鋭い牙と口はあり、排泄口まで消化管は繋がっていたのだ。

しかし全高10mを超す巨体を維持するための栄養を、吸収することができるとは思えない程粗末なものであった。

ではこの化け物は、どうやって活動エネルギーを確保していたのだろうか？

科学者の出した推論は2つだった。

1つは、植物のように太陽エネルギーを栄養に変換することができるのではないか、という推測。しかし、それが可能ならこの化け物に口が付いている必然性は無くなってしまふ。植物は動けない故に光合成を行うのだから、動物にそんな能力が備わっているとは考えにくかった。

もう1つは推測はこうだ。この化け物は働きアリのようなもので、王と呼べる化け物が、他に存在するのではないかという考えである。あるいは、寄生体と寄生主と似た関係。宿主の化け物が、宇宙空間の何処かに存在しているかもしれない、という恐ろしい結論に至った……。

同日、ギガノス戦争は終結し、地球帝国は地球と宇宙を完全に統

合した。

そして、この化け物に対抗するプロジェクトを立ち上げ、若い戦力の獲得に力をいれるようになった。コウイチロウは対生物用人型機動兵器開発に携わり、その計画は「RX計画」と呼ばれるようになる。

化け物は、宇宙怪獣、と呼称されるようになっていた。

時は流れ、西暦2018年、ワープを可能にした「超光速宇宙戦艦ルクシオン」が、外宇宙に向けて宙進する。

表向きの題目は、人類の生存可能な新しい惑星の発見であった。コウイチロウもその理想に共感し、新天地の発見に意欲を燃やしていた。

だが、彼は知っていた。宇宙怪獣の生態調査という、裏の目的が存在したことを。

そして「ルクシオン」は宇宙怪獣に襲われ轟沈し、奴らの存在を帝国は地球人類全体に公表した。

コウイチロウは思う。

あの日は一つの戦いに終止符が打たれたが、同時に新たな戦いの幕開けであったのだろう。長く苦しい、正にゴールの見えない戦いの始まりだった。

あれから4年以上が経過した。

人類は試行錯誤を重ね、第4世代宇宙戦艦「エクセリオン」艦隊を編成する。TOP部隊と共に宙進し、宇宙怪獣の根城を搜索し可能なら殲滅する計画が進められていた。

始まりを見た者として、終わりを見届ける覚悟は出来ている。

地球の未来はどうなるのか？ 宇宙怪獣に虐殺されるだけなのか？ それとも人類の取り越し苦労にすぎないのだろうか？

コウイチロウはよく悪夢にうなされる。
今日もそうだった

西暦2022年 3月1日

宇宙戦艦エクセリオン内 コウイチロウ自室

コウイチロウは自室の机で目を覚ました。

「夢か……」

日頃の疲れが溜まっていたのか、机に突っ伏して寝てしまっていた。

愛用の杖を手にとると机から立ち上がり、時計を確認した。短針は18時前を刺している。寝過ぎた訳ではなく、彼は胸を撫で下ろした。

本日、3月1日は、「宇宙戦艦エクセリオン」艦隊の宙進式の日である。

全長7kmに及ぶ超巨大な船体を誇るエクセリンを帰艦とし、その他多数の戦艦で構成された「エクセリオン」艦隊は、人類史上最大規模の艦隊であった。

その宙進式で、コウイチロウはタシロ タツミ提督に続き、TOP部隊への訓示を述べる予定になっていた。

いよいよ、この日が来たか……

彼は感慨にひたった。

タカヤ提督……見ていてください！

命の恩人に報いる時が近づいている。

だがこの船出は人類反撃の始まりに過ぎない。例の切り札の完成も急がなければならなかった。コウイチロウに残された時間はそう長くはない。

式のために身支度を整え始めた。

代えの洋服に手を掛ける。

その時、船体が激しく揺れ、どこか遠くから轟音が響いてきた。

「何事だ!？」

誰も彼の問いには答えない。衝撃と同時に、耳を劈くような仰々しい警報音が唸り始めた。手にとった服を投げ捨てると、彼は廊下へと飛び出していた。

アナウンスの音声が耳に届く。

「総員第1級戦闘配備。繰り返す、総員第1級戦闘配備。これは演習ではない」

自室に待機していたTOP部隊たちが一斉に飛び出し、格納庫へと群れを成して突撃して行った。

その中に、エクセリオンに同乗したTOP部隊のケーン・ワカバの姿もあった。彼のコウイチロウの視線が合う。

「オオタさん、一体何が起こってんだ!？」

「分かん! とにかく、貴様は機体への搭乗を急げ!」

「分かったぜ!」

ケーンは急ぎ格納庫へと向かった。

この騒ぎを受け、コウイチロウの脳裏に嫌な予想がよぎる。

「まさか……奴らか？」

悪寒が体を巡った。そうだ、この感覚はあの時のモノによく似ている……。

嫌な予感を胸に、コウイチロウはエクセリオンのブリッジへと足を運ぶ

第1部 番外1 ひとつの終わりとひとつの始まり（後書き）

第一部の番外編です。

この世界の過去にあった「ギガノス戦争」の話を絡めてあります。

本編のキャラ（と言って原作の主要キャラ）のオオタ コウイチロウの視点でお送りしました。

今回は、ドラグナーのケーン＝ワカバの視点でお送りする予定です。

ちなみにTOP世界の宇宙は真空ではなく、エーテルという物質に満たされています。そのためエーテルを介して衝撃波が伝わる現象も起きる、という設定で小説を書いています。

第1部 番外2 帝国の崩壊と運命の齒車

西暦2017年末、地球帝国はギガノス帝国に対し、最後の進軍を開始する。

「宇宙機動要塞」が最後の砦あるギガノスには、まさに背水の陣と呼べる戦いとなった。

後に「ギガノス戦争」と呼ばれるこの戦乱は、たった一人の黒幕を討ちはたすことで、驚くほどにあっけなく終息した。

黒幕の男の名を、ドルチェノフと言う。

前ギガノス帝国の総統であったギルトールを暗殺し、その罪をマイヨ・プラートに擦り付けた奸物。ギルトール暗殺後、中佐であったドルチェノフは自らを総統の地位に祭り上げ、ギガノス帝国を私物と化した。

汚名を着せられたマイヨは、ギルトールの意志を継ぎ、ドルチェノフと敵対する道を選ぶ。それは祖国への反逆であったが、もはやギガノスは彼が敬愛したギルトールの目指したものでは無くなっていた。

権力欲の塊であるドルチェノフに染められた帝国を、マイヨの中の義は許すことが出来なかったのだ。

ケーン・ワカバも最終決戦に参加していた。

この無意味な戦争の終結を目指し、宿敵であったマイヨに協力した。

彼の想いは理解できたし、何よりドルチェノフという男をケーンは許すことができたからだ。

ドルチェノフを搜索し、機動要塞の中に単身で突入する。

しかしケーンが愛機ドラグナー1型を駆り、要塞中心部に到達した時点で、この戦争の勝敗は決していた。地球帝国軍の攻撃に曝された要塞は既に機能を失い、重力に引かれて月面への落下を始めていたのだ。

このことで、もはやドルチェノフを探す意味をケーンは失ったことになる。

しかし彼は探索を中断しなかった。墜落までの時間が刻一刻と迫る中で、凄惨なこの戦争の終止符を自分の手で付けることを望んだ。マイヨと合流し、要塞のさらに奥へ進むケーン。

要塞の最深部

権力欲の権化はそこにいた。

スーパードロップ大戦TOP ? Side The Earth ?

第一部 番外2 帝国の崩壊と運命の歯車

ギガノス宇宙機動要塞 最深部

爆発音が木霊し、隔壁の振動が収まることがない。ギガノス機動要塞はもはや限界を迎えていた。月面の重力に引かれて、緩やかに落下を続けており、激突は時間の問題であった。

その最深部にケーンとマイヨの愛機、ドラグナー1型とファルゲン・マッフはいた。

全ては目の前の仇敵を討ち取らんがためである。

「やいドルチェノフ！ てめえには、色々世話になったなあ！」

ケーンが敵に向かって毒づいた。

彼の視界には、モニターを介して敵機の姿がしっかり映し出されていた。

全長30mはあろうかという巨大なMA 戦国時代の鎧武者を彷彿させる外見をしており、頭兜には三日月型の飾りが付けられている。

ギルガザムネと呼ばれるその機体は、最強最悪と呼ばれた悪魔のMAだった。鈍重な装甲の下には16門の機関砲と、100連装ミサイルが装備され、加えて周囲1kmを吹き飛ばす超弩級ミサイルも1発装填している。

まるで動く弾薬庫であるギルガザムネに、宿敵ドルチェノフは搭乗していた。

「おのれ小僧共、毎度毎度ワシの邪魔ばかりしおって！」

ブルーグレーに塗装された機体から回線が送られてきた。

「貴様らまとめて、刀の錆にしてくれるわ！」

そう言うと、ドルチェノフはギルガザムネに装備されたサーベルを抜き放った。20m近い長さがある。並みのMAなら一刀両断だろう。

「黙れ、ドルチェノフ！」

マイヨの声がケーンに耳に届いてきた。

「殿下を暗殺し、帝国を腐敗させた貴様を、私は許さん！ 覚悟しろ！」

「ガハハハ、逆賊めが、すぐに貴様もギルトールの元に送ってやるわ！」

マイヨの怒りを嘲笑うドルチェノフ。

やはりこいつは外道だと、ケーンは思う。ドルチェノフは生かしておいてはいけない。ここで討たなければ、いつか必ず災いの種となるだろう。ケーンは直感的に理解した。

ケーンは、今にも突撃しそうな雰囲気のマイヨに通信を入れた。

「ギガノスの鷹さんよ、聞いてるか？」

「なんだ、ケーン〃ワカバ」

苛立った声でマイヨが返答する。

「あいつは……ドルチェノフはここで倒さなくちゃならねえ。そうだよな？」

「当然だ！」

「なら、俺に力を貸してくれ！」

そう言い放ったケーンはドラグナーを操作し、忒刀のレーザーソードを抜刀した。エメラルドの粒子が剣を形作る。その忒刀を柄の部分で接合させ、2方向に剣が伸びた双刃形態を取った。

ドラグナーの様子を見たマイヨが軽く笑い声を洩らし、応えた。

「いいだろう。ならば、共同作戦といくか！」

ファルゲン・マツフモレーザーソードを構えた。蒼いレーザーが伸び、切っ先がギルガザムネに向けられる。

ギルガザムネはその圧倒的な火力が最大の脅威だった。特に100連装のミサイルポッドは一度発射されてしまえば、全て回避する

のは至難の技だろう。

しかし崩壊寸前の要塞内でミサイルは使えない。軽い爆発の衝撃でも、隔壁が崩壊してしまう程に崩壊が進んでいた。不幸中の幸いか、この状況がギルガザムネの切り札を封じてくれている。

だが、条件はこちらも同じだった。

2機で攪乱し、ギルガザムネに接近する必要がある。

全てを語らずとも、マイヨなら理解してくれると、ケーンは信じていた。ほんの少し前まで宿敵だった男なのに、味方になるとこれほど心強い相手もそうはいないだろう。

マイヨになら自分の背中を預けられる。

「いくぜ、マイヨ！」

「貴様こそ遅れるなよ、ケーン」ワカバ！」

この掛け合いを皮切りに、2機のMAはブースターで急加速しながら、ギルガザムネへと迫る。

「馬鹿めが！ 手間が省けたわ！」

ドルチェノフの声が響くと同時に、ギルガザムネの胸部装甲が展開された。

内部に仕込まれた16門の機関砲が唸りを上げる。75mmの弾丸がスコールのようにばら撒かれた。

ケーンたちはその攻撃を左右に急展開することで回避した。内蔵型故に、ギルガザムネの機関砲は正面にしか撃つことはできない。体勢を立て直される前に、ドラグナーとファルゲンがギルガザムネを挟むよう一瞬で陣形を整えた。

「帝国の崩壊と共に滅び去れ、ドルチェノフ！」

ギルガザムネがファルゲンに狙いを付ける。その刹那には、ファルゲンのブレードがギルガザムネを切り裂いていた。無防備に展開されていた胸部で爆発が起こった。

「おのれー!!」

ドルチェノフが怒気を露わに叫び声を上げる。ファルゲンを追うように、ギルガザムネが後方を振り返り、機関砲を発射しようとした。

しかし

「ドルチェノフ、これで終わりだああ!!」

ドラグナーの斬撃が、一瞬早くギルガザムネに叩きこまれていた。

ファルゲンの分と合わせて、×の字に裂かれた胸部が再び爆発を起こす。ドルチェノフの悲鳴と共に、機関砲と装甲板が弾け飛び、ギルガザムネはその巨体の膝を着いた。

「ワ、ワシは……まだ死ねん!」

驚くことに、ボロボロになったギルガザムネからまだドルチェノフの声が聞こえた。荒い息遣いがケーンに届く。先ほどの攻撃でおそらく負傷を負ったのだろう。

「ワシはギガノスの総統だぞ、こんな所で死んでたまるか!」

「往生際が悪いぞ、ドルチェノフ」

マイヨの言葉通り、この戦争の最後の一戦は終わっていた。コックピットのある胸部をギルガザムネは深く削られている。先ほどの

誘爆もあり、機体と操縦者両方が深手を受けているのは間違いなかった。

「何だ、動かんぞ！？ ええい、動かんかこのクズ鉄めが！！」

ドルチェノフの大声が響いてきた。しかしギルガザムネが動くことはない。

要塞の振動がより一層強くなっていた。

ケーンはドラグナーを出口へと向ける。

「行こうぜ、ギガノスの鷹さんよ」

「ああ、奴はもう終わりだ」

スピーカーからマイヨの声が聞こえると、ケーンは彼と共に脱出を始めた。

要塞が月面に引かれ始め、時間がかなり経過していた。落下の具合が分からないケーンたちに、時間は残されていなかった。機体背部のリフターから推進剤の噴射を全開にする。

ギルガザムネが見る見る内に遠ざかって行く。回線を通じて背後から流れてくる声をケーンは聞いた。

「貴様ら、ワシを助けんか！ ワシはギガノスの総統だぞ！」

権力にしがみつく男は、ケーンたちにこの期に及んで、懇願ではなくあくまで命令をする。

「貴様は、そこで朽ち果てろ」

マイヨの呟きがケーンの耳に残った。確かに、ドルチェノフには情けをかける価値もない。自分の欲のために戦争を操作していた諸

悪の根源 悪は滅ぶべきなのだ。

程なくして要塞の崩壊が本格的に始まった。揺れがさらに強くなり、脆くなった天井が崩落してくる。時間が残り少ない、そう感じたケーンはマイヨと共に脱出を急ぐ。

しかし雑音だらけになった通信回線に乗って、ドルチェノフの唸り声が聞こえてくる。

「ワシは死なんぞ……ワシがいる限りギガノス帝国は不滅だ……！
いずれ、再興してみせるわ……」

豪快な高笑いが響き、ドルチェノフの声は途絶えた。

捨て台詞のつもりだろうか？ 要塞はまもなく月に落着する。内部に居れば待っているのは確実な死だけだ。

ケーンはドルチェノフの言葉を振り切り、脱出に全神経を集中する。

ドラグナーとファルゲンが要塞を脱出してすぐに、ギガノス宇宙機動要塞は月面に激突した。圧倒的質量の地表に、要塞は成す術もなく砕け散る。それはギガノス帝国崩壊の瞬間であった……。

程なくして終戦宣言が発表された。

ケーンはこの功績からギガノス戦争の英雄と呼ばれるようになり、マイヨも地球帝国に迎え入れられることとなった。

悪夢が終わった。

惨たらしく無益な殺し合いが終わった瞬間であった

西暦2022年 3月1日

宇宙戦艦アクセリオン内 ケーン自室

ケーンは自室のベッドの上で目覚めた。

「夢か……」

久しぶりの休憩時間に軽く横になるつもりだけだったが、大分長い間眠ってしまったようだ。時計を確認すると、時間は18時を回っていた。ケーンはベッドから起き上がる。

今日、3月1日は、「宇宙戦艦アクセリオン」艦隊の宙進式の日であった。つまり、宇宙怪獣の根城を見つけ出すために、ケーンたちが外宇宙へと旅立つ日だ。

人類の天敵である宇宙怪獣。

ギガノス戦争が終結した直後に出現した新たな敵に、当時のケーンは辟易としていた。平和な日常に戻れると思っていた矢先だったため、彼がそう思うのも無理はなかったのかもしれない。

しかし彼は戦う事を選択した。

大切な人たちを守りたい、戦時中から抱き続けた彼の思いは今も生き続けている。

ケーンは立ち上がると、クローゼットから愛用の赤いジャケットを取りだした。

今更、昔の夢を見るなんて……

ジャケットを羽織りながら、昔を思い返した。

人間同士の殺し合い……それに比べれて、宇宙怪獣との戦いは良

心の呵責がない分、精神的には健全にいられるのかもしれない。

もう、人を殺すのには慣れたくなかった。

そんなことを考えながら、ケーンはエクセリオン宙進式出席への準備を整える。

身支度を終え、時計を確認した。時間にはまだ余裕がある。ライトとタップの所で時間でも潰すか、とケーンは部屋から出ることにした。

しかし廊下に1歩踏み出した瞬間、激しい震動がケーンを襲った。

「な、なんだ？」

ケーンは反射的に膝を着いていた。

彼の疑問に答えてくれたのは、艦内アナウンスと唸り声にも似たアラーム音であった。

「総員第1級戦闘配備。繰り返す、総員第1級戦闘配備。これは演習ではない」

嫌でも耳に着く警報音に急き立てられ、艦内に割り当てられた自室から次々とクルーが飛び出してくる。彼らは、自分たちのするべきことを理解していた。無論、ケーンもである。

ケーンは格納庫に向けて駆けだした。

その道中で、コウイチロウとすれ違った。

「オオタさん、一体何が起こってんだ！？」

「分からん！とにかく、貴様は格納庫へ急げ！」

「分かったぜ！」

短い会話を終えると、ケーンとコウイチロウは互いの持ち場へと

急行する。

宇宙戦艦エクセリオン ブリッジ

先に持ち場に着いたのはコウイチロウの方だった。

エクセリオンは全長7kmの超弩級戦艦である。

格納庫と言っても一つではなく、ケーンの乗機は離れた個所に安置されていた。加えて指揮官であるコウイチロウの部屋はブリッジ近くに決められおり、足の不自由な彼でもケーンより早くブリッジに辿り着くことが出来た。

「艦長！」

「オオタ君かね。待っていたぞ」

艦長と呼ばれた、恰幅のよい初老の男性が返事をした。

立派な口髭を蓄え、勲章の付いた白い軍服を纏っている。

エクセリオンの艦長、タシロ。タツミは眉間にしわを寄せ、空気に広がる映像に目を向けていた。

エクセリオンのブリッジは広い。何十人ものブリッジクルーに囲まれ、その中心に艦長席は存在した。その艦長席の前方、外周を一望できるブリッジの中央では、様々な映像が空中に映写されている。タシロが視線を向けていたのは、その内の一つだった。

桃色をした超巨大な三角錐が宇宙空間に浮かんでいた

表面には不揃いな凹凸があり、そこから緑色をした化け物が次々と飛び出し来ている。

あつと言つ間に宙域を埋め尽くす異形の化け物たち。

コウイチロウが見間違えるはずもない。

「艦長」

コウイチロウが言った。

「間違いありません、宇宙怪獣です！」

「なんてこつた……こんなタイミングで出くわすとは……！」

タツミは、頭を抱えるようにして帽子を被り直した。
オペレーターから彼に報告が入る。

「艦長、敵総数500を超えました！ いえ、550……600、
まだまだ増えています！」

「むっ……」

「艦長、やるしかありませんよ！」

コウイチロウがタツミに進言した。

「奴らを逃せば、地球の正確な位置が敵にばれてしまいます。そんなことになれば地球はお終いです！」

「そうだな、やるしかあるまい」

意を決したように、タツミはブリッジクルーに号令を発した。

「TOP部隊に通達！ 直ちに攻撃し、敵宇宙怪獣を各個撃破せよ」

！」

「了解！」

彼の合図を待っていたのか、通信兵は速やかに艦内にその旨を送した。命令をつけたTOP部隊が間もなく艦外へ飛び出してくるはずだ。

さらに、タツミは続けざまに指令を出した。

「操舵手！ 縮退炉の出力を戦時レベルまで上げ、出航可能な状態に急がせる！」

「了解！」

「砲撃班にも通達！ レーザー砲を撃ちまくって、TOP部隊を援護、兵隊どもを本艦に近づけるな！」

「はっ！」

「光子魚雷の装填も忘れるなよ！」

「了解しました！」

ブリッジクルーたちは、タツミの命令を理解し、連携・実行する。まさに彼らは、タツミという脳の信号を受け、それを忠実にこなす手と化していた。

TOP部隊は既に展開しつつあり、宇宙怪獣との交戦を開始していた。

「いいか、あのデカブツは我々が仕留める！ TOP部隊には魚雷装填までの時間を稼がせる！」

好々爺のような外見に反して、荒々しい態度でタツミは檄を飛ばす。

流石に、エクセリオンの艦長に抜擢されるだけのことはあった。見事な手腕だと、コウイチロウは感心する。

タツミが険しい表情でコウイチロウの方を向き直った。

「オオタ君。唯一の戦闘経験者として、TOP部隊への指示をお願いしたい」

「分かりました」

タツミの依頼を了承し、彼はTOP部隊への通信回線を開く。
運命の歯車が、今、回り始めた

第1部 番外編3 エクセリオンと運命への船出（前書き）

ドラグナー、いざ出陣！

第1部 番外編3 エクセリオンと運命への船出

宇宙戦艦エクセリオン 第7格納庫

コウイチロウがブリッジに辿り着きしばらくして、ケーンは格納庫に到着していた。

彼の乗機が収められるそこは、既に出撃準備に追われるTOP部隊で溢れかえっていた。各々が搭乗した機体が起動シーケンスを実行し、準備の整った者からメカニックに誘導されて外へ飛び出して行く。

「ケーン！」

野戦場さながらの騒ぎの中、彼に声をかけてくる者がいた。

聞きなれた声の主たちが、彼の愛機ドラグナー1型の前で待っている。黒人と白人の男性がそこに立っていた。

「タップ！ ライト！」

黒人の男をタップ、白人をライトと彼は呼んだ。

「一体、何がどうなってやがんだ？」

「知らねえよ、俺が聞きたいくらいだ」

タップが言った。ライトがそれに続く。

「ただ言えるのは、艦の外でドンパチが始まっちゃった、ってことだけだな。相手は何だと思う？ まさか、今更ギガノスの残党ども

だったりするのか？」

「さあな、考えても仕方ねえや。とにかく急ぐぜ」
『おう』

ケーンの掛け声に彼らの声が重なる。

タップはドラグナー2型に、ライトはドラグナー3型にそれぞれ搭乗した。

ケーンも愛機のドラグナー1型に乗り込む。

彼の1型と合わせて、「ドラグナー」は「D兵器」と呼ばれた戦時中のMAだ。　噛み砕いて言えば、5年前の最新鋭機　　骨董品である。

しかも「D兵器」は、地球帝国の量産MA「ドラグーン」のテストケースとして製造された。1型が接近戦、2型が砲撃戦、3型が電子戦にそれぞれ特化された試作機だ。

1機1機の性能は「ドラグーン」に劣っているが、ケーンたちはこの機体で戦争を生き抜いた。

性能が全てではない。彼らの真骨頂は連携にあるのだ。

「さあ、今日も頼むぜ相棒」

TOPでも珍しいMA使いは、慣れた手つきで起動を完了した。MAのコックピットは通常RX-7よりも複雑に計器が敷き詰められており、操縦においても難易度が高く、どうしても作業量が増えてしまう。そのため、地球帝国は熟練の足りない若者には従性の良いRX-7を推奨していた。

実際、TOP部隊でもMAを好んで使うのはケーンたちのような古参だけである。

ケーンがサポートAIと短い会話を終わると、核融合炉に一気に火が入り、ドラグナー1型は唸りを上げて覚醒した。1型を起こし、ハンガーに固定されていた専用のシールドを装備した。

眼下では、メカニックがケーンをカタパルトへと誘導している。誘導に従い、1型の脚部を発進用カタパルトに接続し、固定した。同時に、機体背部にあるリフターの出力も上昇させる。出撃の準備は整った。

直後に見舞われるだろうGに身構えたときに、その声は聞こえてきた。

「TOP部隊の諸君、聞いてほしい」

艦内放送と全周囲回線で、オオタ コウイチロウの声が響いてくる。

ケーンは手を止め、その放送に耳を傾けた。

「現在、エクセリオン艦隊は敵の攻撃に曝されている。攻めて来ている敵は、宇宙怪獣……諸君らが外宇宙で戦う予定であった、敵だ」「なんだって!？」

驚きのあまり、大声を漏らしてしまった。

宇宙怪獣……TOP部隊が、人類が戦うべき宿敵。

ケーンは、宇宙怪獣の根城を探し出すことが、エクセリオン艦隊の役目であると聞かされていた。他のTOP部隊も同様だろう。

倒すべき敵に先制攻撃を受けた。その動揺がざわめきとなる。伝播し、格納庫の中に広がっていた。

「落ち着け。そして、よく聞け」

コウイチロウが回線を通じ、TOP部隊をたしなめた。まるで壁に目でもあるかのようなタイミングで。

沈黙は一瞬で訪れる。

水面に波紋を生む水滴のように、コウイチロウの声だけが艦内に

浸み渡った。

「我々は負ける訳にはいかない。我々の背中には何がある？ そう、地球だ。我々の母なる星だ。その星を守るために選ばれたのが、諸君ら
TOP部隊だ！」

静聴する部隊員たちに彼は檄を飛ばした。

「いいか、死ぬことは許さん、必ず生きて帰れ！ 奴らを1匹残らず叩き潰し、諸君の初陣を勝利で締めくくるのだ！」

彼が大きく息を吸う音がケーンには聞こえた。
大きな、大きな声でコウイチロウが吼える。

「敵に目にももの見せてやれい！！」

「以上だ」と、コウイチロウが言葉を終えた。同時に、再び格納庫内が騒がしくなってくるのを、ケーンは感じていた。

集音マイクを通じて活気と戦意に満ちた声が聞こえる。動揺など微塵も感じられない。使命感と自尊心が部隊員たちを奮い立たせた。

コウイチロウの喝がそれを引き出したのだ。

コックピットにてケーンは、彼の直属の部下であったことを誇りに思う。

行ってくるぜ、オオタさん！

彼が見据える先には宇宙が広がっている。

発進許可が下りたことを伝えるシグナルが、赤から青色に変わった。リフターの噴射口から爆風が吹き出される。

「ケーンⅡワカバ、ドラグナー1型カスタム やってやるぜ
えー!!」

カタパルト射出のGがケーンを襲うが、すぐに軽い浮遊感が体を
包んだ。

彼は悪魔が巢食う地獄に飛び出した

スーパーロボット大戦TOP ? Side The Earth
?

第一部 番外3 エクセリオンと未来への船出

宇宙戦艦エクセリオン ブリッジ

コウイチロウは回線を切ると一息を着いた。

今、戦いの火蓋は切られた。船外ではTOP部隊と宇宙怪獣との
戦闘が開始されている。地球外生命体との初戦闘……規格外存在
に、この中の何割が生きて帰ってこれるだろうか？

それを知りつつ送り出す。自分は外道だ。コウイチロウは煮え湯
を飲む思いだった。

「すまないな、オオタ君」

タツミが言った。

「君には損な役回りをさせてしまっている」

「いいえ艦長、これは自分で選んだ道なのです。気になさらないで下さい」

コウイチロウは顔を上げ、現実を直視した。

モニターには宇宙怪獣の群れが表示されている。緑色の蟹のような兵隊が無数に乱れ飛び、宿り木のように体内からそれらを吐き出し続ける桃色の巨大宇宙怪獣。

エクセリオンの全周囲レーザー砲は兵隊を中々補足することができない。かと言って、この弱い火線では巨大な桃色の宇宙怪獣は揺るぎもしなかった。三角錐の形をした群れのボスは、いけしゃあしやあと戦域のど真ん中に居座っていた。

コウイチロウは奥歯を噛みしめる。

「艦長、我々是我々にできることを」

「うむ。砲撃班、魚雷装填急げよ！ 友軍を1機たりとも落とさせるな！」

「イエス、サー！」

タツミの指示にクルーが答える。

しかし宙進式前だったエクセリオンは、本来の戦闘可能な状態に未だ移りきれていなかった。

式には最低限の人員を除きクルーは参加予定であったため、タツミの指示に対するクルーの反応は鈍く、巨大な船体が仇になっていた。

コウイチロウは無力を呪った。体さえまともなら、今すぐ飛び出しているものを。

頼むぞ、ケーン……！

宙域の戦闘は激しさを増していく。

宇宙戦艦エクスセリオン 周辺宙域

ケーン「ワカバは驚愕していた。

敵の数、速さ、そして1体1体の戦闘能力の高さに脅威を感じずにはいらなかった。

緑色の宇宙怪獣の戦法は、巢を守るために大量に押し寄せる兵隊アリやハチに似ている。物量戦法 シンプルで効果的な戦い方だった。

既に何機かのRX-7が群がってくる敵の餌食となっていた。その勢いは止むことを知らず、猛威を振るっている。

だがケーンが、何より恐ろしく感じていたのは敵の物量ではなかった。

丸みを帯びた堅牢な甲羅。それがドラグナーの銃撃を受け止め、逸らし、全て弾き飛ばしていた。

ダメージを与えられない訳ではない。ミサイルが直撃すれば一撃で兵隊を落とすことができたが、甲羅に当たると致命傷にはならず、こちらに突撃してくる。

軟らかい腹を狙え。

以前ケーンはコウイチロウにそう教わったが、銃器で甲羅に守られた腹部を狙うのは至難の業である。RX-7の電撃兵装なら外殻からでもダメージを与えられるだろう。ケーンは初めてMAに乗っていることを悔いていた。

「この野郎！」

潔くハンドレールガンを捨てた。そしてレーザーブレードを抜き、柄と柄を接合させる。持ち手を回転させながら、接近してきた兵隊を躲し、腹を切り付けた。

避けた腹から緑の臓物が降りかかる。吐き気をもよおす深緑色が白い1型のボディを汚していた。

だが同時に理解する。射撃より斬撃の方が有効だと。

「こうなりや破れかぶれだ！ みんな纏めて叩き切ってやるぜ！」

接合させていた柄を分離し、1型はブレードを両手に構えた。

ケーンがフットペダルとレバーを操作すると、1型の核融合炉の出力が上がる。リフターが火を噴き、1型の巨体がぐいぐい押し上げられ、そのまま機体は一気に最大速度まで達した。

RX-7に襲いかかる兵隊の群れが視界に入る。

「かかって来な、化け物ども！」

1型の右肩に装備されたショルダーボムをそいつらに向かって投げつけた。着弾し、エーテルが衝撃波を伝える。ダメージは期待でしなかったが、狙い通り兵隊の注意は1型に向けられた。

兵隊の群れは完全に1型に標的を変え、巨大な鋏を突き入れようと迫ってくる。

「必殺ツ、ドラグナー3枚おろし！！」

1型は最大戦速のまま兵隊の間をすり抜け、ブレードを振るっていた。一拍置いてから、兵隊たちは腹から体液を撒き散らし、絶命した。

ケーンは亡骸を無視し、1型は戦場を駆け巡る。

ドラグナーは竜のように荒々しく暴れまわり、兵隊たちの腸を貪^{はら}り続けた。何十匹目になるだろうか。

目の前の兵隊を斬り捨てたケーンに、2型を駆るタップから連絡が入った。

「よー、大活躍じゃねえか、ケーン」

「へへ、まあな。それよりそっちはどうだ？ 射撃戦用の2型じゃ、ちつと辛いんじゃないか？」

「俺を誰だと思ってやがる。射撃の天才、タップ様だぜ」

自信溢れる返答がタップから帰って来た。

それに被せるように3型のライトから通信が入る。

「なに言ってやがる。背中がガラ空きだったくせしてよ」

「なははは、背中はお前に任せてあるからな。俺は安心して撃ちまくれるぜ」

「なんだお前ら、一緒に行動してんの？」

ドラグナー2型は足を止めての撃ち合いなら、無類の強さを誇る。その間、背後は無防備になるのだが、そこをライトの3型がカバーしているようだ。

しかし3型は電子戦特化型だったはず。武装もハンドレールのみという貧弱さだが、どうやって2型の背後を防衛しているのだろうか。

「光子バズーカだよ」

思考を読むように、ライトから返答があった。

実弾ではなく、エネルギーを収束させて撃ち出すドラグナーの最

強兵器だ。

「鉛弾じゃ齒が立たなかったからな、エクセリオンに取りに戻って
たんだ。エネルギーパックもたんまり取って来たから打ち放題だぜ」
「そうそう、ケーン、お前の分もあるぞ。2丁光子バズーカだ、な
はは」

「タップ、てめえ、人様の物勝手に使ってんじゃねえよ」

ケーンが苦笑いしながら、2人からの交信に答えた。

光子バズーカは連射が利かない。照射後、20 - 30程度の冷却
期間が必要だった。タップは2台のバズーカを交互に使うことで、
冷却によるタイムラグを短くしているようだ。相棒たちの暴れっ
ぷりがケーンには目に浮かぶようだった。

どうも彼らの言い草からすると、実弾は効果なしだが光子バズー
カなら有効のようだ。全ての光学兵器が効くのか不明だが、遠距離
武器が手に入るのはありがたい。

「じゃあ俺もそっち行くから、座標を転送してくれ」
「分かった、少し待ってる。ん」

ライトの声が一瞬途切れた。
違和感を覚えたケーンが訊く。

「おい、どうしたんだライト？」
「これは……戦域に超高エネルギー反応あり！ 兵隊どもじゃない
……やばいぞ、このエネルギー量！ 奴がなにかしようとしてやが
る！」

奴 その言葉だけでケーンは理解した。
兵隊どもを上回る馬力を持つ敵、そんな奴は1匹しかない。

戦場のど真ん中に巨大な質量で居座るグロテスクな三角錐。桃色の巨体に、光の筋が幾つも走り蠢いていた。その光が徐々に巨体の一か所が集まっている。その場所は三角錐で言えば頂点にあたる部分だった。

宇宙怪獣の頭なのか分からないが、その切っ先はエクセリオンに向けられていた。

「おい、やばいんじゃないか？」

「じゃないか、じゃない！ やばいんだよ！」

ライトが怒鳴った後、1型のコックピットに彼らの座標が送られてきた。

距離はそれ程離れていない。全速力ならすぐに到着できる。

「はやく来い、ケーン！」

「あいよ！」

ケーンが1型を走らせる。

兵隊たちを振り切りながら合流を急いだ。

一方、エクセリオンのブリッジにて、

「艦長！ 敵、巨大宇宙怪獣に高エネルギー反応です！」

オペレーターが敵の異変を大声で報告していた。

遠目に宇宙怪獣は小さく見え、そのエネルギー反応も目視できない。しかし、敵は実際にはエクエリオン級の巨大さを誇っていた。その姿を望遠レンズで拡大表示する。表面を血管がはしっているかのように光の筋が脈打っているのが、コウイチロウにも理解できた。

「砲撃手！ 魚雷の装填はまだか！？」

「あと、2、3分で完了の予定です！」

クルーの報告にタツミは頭を抱える。

「なんてこった……それでは手遅れになるやもしれん」

「大丈夫ですよ、艦長」

コウイチロウの言葉にタツミが頭を上げた。

決して強がりや気休めではない。そう断言できる自信が彼にはあった。

ケーンたちがやってくれる。彼は信じていた、自分の部下たちを。

「嘆いている暇はありません。我々はできることを、一つ一つ確実にやるしかないのです」

「……そうだな。その通りだ」

踏ん切りがついたのか、タツミは再び指揮を開始した。

コウイチロウはスクリーン上の敵を見据える。

急いでくれケーン、時間はないぞ！

思わず握った拳が皮膚を傷つけ、血が滴り落ちた。しかし痛みは感じない。それよりも激しい怒りが彼の中で育っていたからだ。非

力で無力な自分への怒りが。
コウイチロウは願った。

頼むぞ、お前たち！

信頼する部下たちが奇跡を起こすことを

タップとライトに合流したケーンは、一直線に目標に向かって突き進んでいた。

2型から受け取った光子バズーカを肩に担ぎ、エネルギーパックを装着する。全速力でとばしながら、バズーカのコネクターを繋げて発射準備が完了した。

「ライト、会敵までどのくらいだ？」

ケーンは陣形の先頭務める1型からしんがりの3型に回線を開いた。

桃色の宇宙怪獣に近づくにつれて、攻撃してくる兵隊の数が増えてきた。巢に近づけまいとするハチのように迫ってくる。

3人は、それらを卓越した操縦技術で躲しながら進む。

TOP部隊の中でもピカイチの腕前、戦争の英雄は伊達じゃない。

「30 いや、20秒！」

「よしお前ら、バズーカにチャージしろ！ ぶっ壊れても構わねえ

！ 全エネルギーぶち込んでやるぜ！」
「なはは、分かってらい！」

三者三様な会話を終え、3機が光子バズーカへのエネルギーチャージを開始した。

赤、青、黄と色の違う照射口に光が集まり、そして強くなっている。

その間も兵隊の猛襲は休まる暇もなかった。

しかし全て回避し、巨大宇宙怪獣の目前にまで接近に成功した。

でけえ……

ケーンの率直な感想だった。

20m近くあるドラグナーが遠くから見れば米粒のように見えるだろう。おそらく、エクセリオンの傍を巡回飛行している時、ドラグナーはそうにカメラに映っていたんじゃないだろうか。

そんな錯覚を覚える。

とにかく大きい。目の前に広がるのは三角錐の化け物ではなく、桃色の肉壁だった。何処に打ちこめば効果があるのか近すぎて見当がつかない。

「上だ！」

ケーンの掛け声で3機は急上昇を始めた。

巨大宇宙怪獣の表面の凸凹が凄く早さで流れていく。あまりに同じ風景が続いたが、しばらくして宇宙怪獣を眼下に見下ろせるようになった。

何処だ？

ケーンは射撃個所を探す。その時だった。

巨大宇宙怪獣の体に小さな穴が無数に空いたのだ。

相手の大きさに、遠近感が狂っているのだろう。毛穴のように見えるその穴から、10mクラスの兵隊たちがぞろぞろと這い出し来ていた。

ドラグナー迎撃のために兵隊を生み出しているのだろう。だがケーンはその瞬間を見逃さなかった。

「今だ、撃てー！！」

3機のドラグナーから三条の光線が発射される。

赤、青、黄色　三色の光線は互いに絡み合い、螺旋を描きながら一つの大きな光の筋となった。光子バズーカはその反動で吹き飛んでいた。

押し寄せる光に、射線上にいた兵隊たちは一瞬で蒸発した。よじよじと兵隊が這い出してきた穴に目掛けて光線は直進し、出てきたばかりの兵隊を吹き飛ばしながら穴に突入する。

空間を無音が支配した。

しかし数秒後、巨大宇宙怪獣の内部で爆発が起こり、黒煙が噴き上がった。

体表を廻っていた光の筋が明滅し、消えた。先端部は確認できない。大きすぎるのだ。

「高エネルギー反応消失！　逃げるぞ！」

「あいあいさー！」

ライトの宣言を聞いた3人は、脱兎のごとくその場から去ることにした。

怒り狂った化け物の相手などしてられない。3機の竜使いは一目散に逃げ出した。
ドラグナー

「艦長、敵、高エネルギー反応消失しました！」

エクセリオンのブリッジにてコウイチロウは報告を聞き、反射的に頷いていた。

ケーンたちがやってくれた。スクリーン上の宇宙怪獣から蠢いていた光が消えた。方法は分からないが、とにかくエクセリオンを狙っていたエネルギー体を消滅させることに成功したようだ。

「光子魚雷、装填完了しました！」

砲撃班からの報告にタツミは声を張り上げる。

「よし、諸君、反撃の時だ！ 敵に目にモノ見せてやるぞ！」

ブリッジクルーからの返事はなかった。

しかし彼らの注意は敵の親玉、桃色の巨大宇宙怪獣に集中している。

タツミの言葉を聞きもらすまいと、精神を研ぎ澄ましているに違いない。コウイチロウは胸の高鳴りを感じながら、その光景を眺めていた。

「砲撃班に通達！ 目標、敵、超巨大宇宙怪獣！ 艦前面の発射管を1番から4番まで開放せよ！」

「イエス、サー！」

タツミの指令を受けてクルーたちが動いた。

ブリッジから見えない個所にもそれは行きわたり、艦内のマンパワーを総動員し与えられた目的を遂行しているはずだ。

砲撃班からの通信をクルーが復唱する。

「光子魚雷、発射準備完了です！」

「光子魚雷、撃てええい！！」

タツミの合図を皮切りに、エクセリオン艦首から4発のミサイルのようなものが射出された。

光子魚雷、そう呼称される兵器は標的へと数秒ゆつくり前進した後、光の速度まで超急加速する。きらりと一瞬輝いた瞬間には、コウイチロウの視界から光子魚雷は消えていた。

その刹那、閃光が宇宙を奔っていた。

着弾点を中心に、巨大な光の球体が4つ展開された。それらは巨大宇宙怪獣を完全に包み込んでいる。光子魚雷が縮退反応で生み出した莫大なエネルギーと宇宙怪獣の細胞が対消滅を起こす。

白い球体が消失。悲鳴すら上がらない。

それほど一瞬で、巨大宇宙怪獣は光となって宇宙から姿を消した。

これが光子魚雷。現行における人類最強の兵器である。

「残存する敵を殲滅せよ！」

タツミの命令がオペレーターを介して、TOP部隊へと伝達された。

戦域にいる兵隊の動きが鈍っていた。司令塔であり宿主である巨大宇宙怪獣が消滅したことが影響しているのかもしれない。逆にTOP部隊の士気は上がり、形勢は有利に運んでいた。

「やりましたね、艦長」

勝利を確信したコウイチロウが言った。

タツミは大きく息を吐き出し、帽子を脱いで自分を扇ぎ出した。額には大粒の汗が浮かんでいる。

「ああ、この戦いは我々の勝利だ」

タツミの宣言にコウイチロウの頬は思わず緩んでいた。

スクリーン上の彼我戦力図も安心して見ていられる値になっている。TOP部隊が兵隊にとどめを刺す映像もブリッジには流れていた。全滅させるのは時間の問題だ。

「慌ただしい宙進式になってしまった……だが、これでよかったのかもしれない。なあ、オオタ君」

「はい。我々が進むのはイバラの道、それをTOPのメンバーも理解したでしょう」

「我々の旅路は今から始まるのだ」

コウイチロウはタツミの言葉に共感する。

外に目をやると漆黒の空間が広がっていた。

地上で見上げるよりも、遙かに美しく星々が煌々と輝いている。

知らない方が幸せだっただろう。この美しい宇宙に悪魔が巣食っているなど……。

戦闘終了後、エクセリオンは外宇宙へと約半年間の旅に出る。

宇宙怪獣の巣を見つけ、可能ならそれを殲滅する。それが目的だ。しかしエクセリオンの航海中、地球では10年以上の月日が流れることになる。

船体が光速に近づけば近づくほど、コウイチロウたちは地球の時間の流れから取り残されるのだ。

この世の法則から逃れられない。おとぎ話から名前を取り、ウラシマ効果と名付けられた摂理を覆すことは誰にも出来なかった。

彼は、地球に残してきた愛しい妹に思いを馳せる。

ヒカリ……行ってくるぞ……

コウイチロウに残された時間は少ない。

生きている間に、全ての決着を彼自身の手で付けたかった。

初陣の勝利は揺るがず、確実に敵の数は減っていく

それに、誰も気づくことはなかった。

戦場で実際戦うTOP部隊は元より、エクセリオンの有能なオペレーターでさえも、それを発見することができなかった。

エクセリオンの動体センサーだけはそれを機械的に捉えていた。

戦場に乱れ飛ぶ無数の反応、もはや人の眼では敵味方の識別も困難な乱戦状態。その中から一つの反応が離れていくことを、誰も気づくことはなかった。

アラーム音は聞こえなかった。

機械の誤作動なのか、人為的ミスなのかは分からない。

戦場を離れた1匹の宇宙怪獣が地球へ向かって、引力に引かれて進んで行った。

おそらくRX-7の電撃兵装の攻撃を受けたのだろう。兵隊はびっくりとも動かなかった。

引力に導かれるまま地球へと引きずり込まれる。

重い甲羅の側から大気圏へと突入して行った。

その時だ。

突入の衝撃で蘇生したのか、兵隊は突然足を動かし出した。必死

で引力から逃れようと蠢きだしたが、逃れることは出来ずに落下していく。

その光景を、宇宙に……いる誰もが見ることはなかった。

流れ星のように、兵隊は堕ちていく……

やがて宇宙怪獣の殲滅が完了し、出発の時間がやって来た。
それぞれの思惑を胸に、TOP部隊とエクセリオンは宇宙へと進む

宇宙戦艦エクセリオン帰還まで、あと十余年

番外編 エピローグ 希望の光と絶望の炎

スーパーロボット大戦TOP ? Side The Earth
?

第一部 番外編 エピローグ 希望の光と絶望の炎

沖女 ヒカリの秘密のビーチ

時間は午後20時を回っていた。

すっかり日は落ち、太陽に代わり月が空に昇っている。黄金色に輝くその満月、ヒカリのお気に入りの砂浜を照らす。珊瑚が砕かれて出来た砂粒が、まるで星のようにキラキラと煌めいて神秘的な雰囲気を出していた。

ヒカリはお気に入りの岩に腰を下ろし、雲ひとつない夜空を見上げていた。

「あ、流れ星」

夜空を流星が切り裂いて、どこか遠くに消えて行った。流れ星というのは、隕石が大気圏に突入し燃え尽きる最後の姿だという。燃え尽きることなく地表に落下することもあるという。

なら、あの流れ星もどこか遠くに落ちて、石集めが好きな子どもが拾い喜んだりするのだろうか。ヒカリはそんなことを考えながら、夜空を眺めている。

「ヒカリ、卒業おめでとう」

不意に声をかけられ振り返ると、そこには沖女の教官、マイヨ・ブラートの姿があった。

あれから半年が経過し、マイヨからの呼び名はオオタからヒカリに変わっていた。深い意味はない。彼の特訓を受け続ける内に自然とそうなった。

今日、3月1日は、オオタ ヒカリの卒業の日であった。

慣れ親しんだ校舎と友達に別れを告げ、それぞれの道を歩き始める、そんな日だ。多くの者は帝国軍人となり、しかしある者は民間の軍事関連企業に就職したりもする。いつか道が交わる時がくるかもしれない。淡い期待を胸に、生徒たちは卒業していった。

あの勝負以来、ヒカリは努力を続けていた。

マイヨの指導と恵まれた素質のおかげで、無双と言える実力を身に付けて、沖女をダントツの主席で卒業した。

しかし彼女の中の最強は自分自身ではない。

今でも顔の傷痕は時々疼く。

本当の強さを持ったあの少女、ノリコとの再会を夢見て、彼女は満点の星空を仰いだ。このダークブルーの空の果てに彼女はいるはずだ。

「もう、出発したのかな？」

「予定通りなら既に出航しているだろう」

マイヨが答えた。

「無事に、帰ってくるといいな」

「うん」

素直な答えがヒカリの口から滑り出した。

彼女はマイヨに感謝している。マイヨは忙しさの合間を縫ってヒカリの相手をしてくれた。今の自分があるのは、親身になってくれた彼のおかげだろう。

しかし、今日は彼からの巣立ちの日だ。寂しさを覚えずにはいられない。

ヒカリ、と名前を呼ぶマイヨの声に彼女は顔を上げる。

「向こうでも元気でやるんだぞ」

「教官……」

「いいか、努力をしろ。お前ならなれるはずだ、人類の希望に」

マイヨの言葉に、ヒカリはただ静かに頷いた。

ヒカリは変化していた。あの日以来、努力を怠ったことはない。全てはあの少女たちとの誓いのために。

待ってるよ、兄貴、ノリコ、カズミ……無事に帰って来てね

……

ヒカリの願いを聞き届けるように、夜空に一筋の流星がかかった。その流れ星にヒカリは願をかける。残念ながら3回願う前に星は姿を消した。

あの星はどこに落ちるのだろうか？

落ちるのが幸運の星であればいいのになと、ヒカリは思う。

今日も沖縄の自然は美しい。夜天は煌びやかに佇んでいた。

こんな夜が毎日訪れると、誰もが信じて疑わなかった

???

地球上の何処かある小さな無人島。

鬱葱と木々が生い茂り、騒がしい野鳥の鳴き声が森中に木霊している。地面は落ち葉と沢山の虫たちで埋め尽くされており、それを

餌にする動物も隠れていることだろう。島中に青臭い植物と獣の匂いが立ち込めていた。

頭上にある太陽がさんさんと降り注ぎ、島の自然は育まれていた。野生動物にとつては楽園と言えるだろう。

しかし楽園は、巨大な足跡によって踏みにじられていた。

丸い頭部が特徴的な金色のMAが、木々を押し倒し一か所に集合している。ゲバイと呼ばれる「ギガノス戦争」におけるギガノスの主力量産機であった。

3機がかりで「何か」を取り押さえており、その足元にはギガノスの兵が数人待機していた。「何か」に銃を構え、一人の男を守るように取り囲んでいる。

「がははははッ、これが宇宙怪獣か！」

男の眼前に横たわる深緑色の化け物

カニのような姿をし

たその宇宙怪獣は、微かに足を動かしMAたちの拘束から逃れようとしていた。しかし傷だらけになっている宇宙怪獣は、弱っているのか3機の手の中から抜け出すことは叶わない。

その様子をその男　　青髪の偉丈夫^{いしやうぶ}は得意げに見上げていた。刈り上げた頭と下卑た笑い声が特徴的な男だ。

「こいつの力さえあれば、ギガノスを再建することも夢ではないわ！」

「ドルチェノフ、総統閣下」

偉丈夫、ドルチェノフに声かける者がいた。

背が高く、華奢な体つきをした男だった。色が抜け落ちた白髪を逆立て、丸いサングラスをかけている。その上白衣まで着込んでいるものだから、森林の中でひどく浮いていた。

ドルチェノフはふんつと鼻を鳴らすと、白衣の男に道を空けた。

「分かつとるわ、この化け物はお前らの好きにせい。その代わり」

醜い顔を、ドルチエノフはさらに醜惡に歪ませて笑う。

「ギガノスの再建に全面的に協力をしてもらうぞ。分かっているだろうなあ、死の商人『NAGARE』のMr・Fよ」
「私は雇われの身……異存などあるうはずもない」

Mr・Fと呼ばれた白衣の男は殊勝な態度で答えた。

彼は、張り付けたような無機質な笑顔が浮かべている。サングラスに隠されて瞳は見えなかった。

「がはははは、よく言うわ。この死神めが！」

ドルチエノフが大声で笑い飛ばす。

人を小馬鹿にしたような笑い声だが、Mr・Fは無視して、宇宙怪獣の方に目をやる。

恐ろしい生命力で大気圏を突破したこの生物を、彼は笑顔で迎え入れた。

宇宙怪獣はドルチエノフによって回収され、島には火が放たれた。

豊かな木々は移り火するのに事欠かない。

島はあっという間に炎に呑み込まれた。

自然は破壊され、後には焦土だけが残るだろう。

撤退するギガノスのヘリの中で、Mr・Fはその光景を無表情の

まま見つけていた

番外編 エピローグ 希望の光と絶望の炎（後書き）

これにて第1部は完全に終了です。

次回から第2部「神魂合体ゴードンナー」編に移ります。
頑張って書くぞー！

第2部 主要キャラクター紹介（11/20更新）（前書き）

徐々に更新していきます（11/20更新）

第2部 主要キャラクター紹介（11/20更新）

スーパーロボット大戦TOP ? Side The Earth
?

第2部 キャラ紹介・設定など

? 登場予定作品

・ トップをねえ! Gunbuster (第1部 番

外?)

・ 機甲戦記ドラグナー (第1部・第2部)

・ 神魂ゴードンナーゴードンナー (第2部)

・ 高機動幻想ガンパレードマーチ (第3部? キャラのみ?)

・ 超機大戦SRX (登場するかも?)

・ あと作者オリジナル少々

? 第2部 主要キャラクター紹介

オオタ ヒカリ (太田 耀)

生年月日: 西暦2004年5月8日 20歳 女性

身長: 169cm 血液型: B型

搭乗機体: ドラグリーン バスターゼロ

本編の主人公。緑がかった黒髪の美しい女性で、鼻を横切る刀傷のような横一文字の傷跡が特徴。

「ギガノス」戦争の英雄オオタ コウイチロウの実の妹で、ロボット戦闘の天才。

バスターマシン零号機の改修時に、トウマにより増設されたサポートAI。

初起動時にヒカリの蹴りで疑似人格がくるってしまった、通称ポンコツ。

毒舌。

自律成長型AIであり、教育次第で性格が変わると思われるが、現在の性格は短気で口が悪い。

妄想スパロボOG的スペック（特に意味はないぞ！）

（ロボット形態時）

性格：短気・毒舌

特殊技能：合体 スニーキング ストーキング

精神：偵察1 挑発1 自爆1 潜伏1 脱力10 献身90

（バスターゼロ合体時）

性格：超強気・毒舌

特殊技能：分離

精神：偵察1 挑発1 加速10 不屈20 気合40 鉄

壁40

猿渡 ゴオ

男性 原作：神魂合体ゴードンナー

搭乗機体：ゴードンナー

ダンナーベースに所属する特機「ゴードンナー」の専属パイロットで、周囲が認めるベース最強の漢。

ダンナーチームのリーダーで、コールサインはダンナー1。

筋骨隆々な大男だが面倒見のよい面もあり、なにかと先輩としてオタ ヒカリの世話を焼いてくれる。しかしよくヒカリに「ゴリラ」扱いされている。

恋人のミラ・アッカーマンとの仲は盤石だが、尻に敷かれており、ミラの言うことには一切逆らえないらしい。

しかしミラが恋人のためか、ベース内有志が募ったアンケートでは「闇討ちしたい男」でダントツNo1を叩きだし、記録を更新し続けている。

ミラ・アッカーマン

女性 原作：神魂合体ゴードンナー

搭乗機体：ネオオクサー

ダンナーベースに所属する特機「ネオオクサー」の専属パイロットで、ゴオに次ぐベースの実質ナンバー2の実力者。

ダンナーチームの一員で、コールサインはダンナー2。

腰まで伸びる美しい金髪とグラマラスな体、そして温和な性格で、ベース内有志の募ったアンケートで「恋人にしたい女性」No1の座を守り続けている。

ヒカリとは一緒に買い物に行くなど公私ともに仲が良く、妹的な存在に思っている。

ナガレ トウマ（流 凍摩）

男性 年齢：24歳 身長：175cm A型

霧子に引き抜かれてダンナーベースにやって来た新任の科学主任。
なぜか手が冷たい。

葵 あおい
霧子 きりこ

女性 原作：神魂合体ゴードンナー

ロボット工学の優秀な科学者で、ダンナーベースの所長として総指揮を取っている。

赤い髪の毛が特徴的な女性で、子持ちであるとかないとか。
ベース内有志の募ったアンケートで一位に輝く程のヘビースモーカー。
！。

影丸 かげまる

男性 原作：神魂合体ゴードンナー

ダンナーベースの司令をしている、実は本名不明の男性。
あまり感情を表に出すことはないが実はかなりの熱血漢。

? 舞台

西暦2023年の地球・ダンナーベースなどが舞台となる

？主な登場機体・ロボット

ゴードンナー（1話より登場）

全高：39・6m 動力：シングルプラズマドライブ 特殊能力：
合体

原作：神魂合体ゴードンナー

ダンナーベースに所属する日本州最強のスーパーロボット。

圧倒的なパワーによる徒手空拳で敵を撃破する。

ネオオクサー（2話より登場）

原作：神魂合体ゴードンナー 特殊能力：合体・エンジェルウォール

ダンナーベースに所属するスーパーロボット。

ゴードンナーと共同運用前提で開発されており、エンジェルウォールという強力なバリアを持つ。

ゴードンナーTDM（2話より登場）

原作：神魂合体ゴードンナー 動力：ツインプラズマドライブ
特殊能力：分離

ゴードンナーとネオオクサーが合体して完成する最強形態。
接近戦で無類の強さを発揮する。

MBD-1A ドラグーン（1話に登場）

全高：17・6m 重量：約60t 特殊能力：ジャミング

原作：機甲戦記ドラグナー

「ギガノス戦争」時の地球帝国の主力量産MA。ドラグナーの長所をかき集めた機体で安定した高い性能を誇る傑作機で、この機体の量産で地球帝国は戦争に勝利した言っても過言ではない。

しかし現在では、対ロボット戦能力は非常に高いが、宇宙怪獣との戦闘を前提に開発された「RX-7」に主力量産機の座は奪われている。

ごく少数の人間が好んで使うという。

バスターマシン零号機（通称：バスターゼロ）

原作：作者オリジナル

ナガレ トウマとオオタ コウイチロウがガンバスター完成のためのテストケースとして製造したバスターマシン。

データ取り終了後はエクセリオンに搭載されることなく、地球に残され、トウマの手によってヒカリへと受け渡される。

本機体の新しい役割は、バスターマシン量産のためのデータ収集である。

元来2人乗りでMA式のコックピッドであつたが改修され、ガンバスターと同様のダイレクトモーションリンクを採用。

それに伴う搭乗人員の減少および処理能力の低下をサポートAI「ゼロ」で補い、脳波コントロールで機体を操縦する。

そのためパイロットの精神状態で機体に深刻なトラブルが発生する危険性も孕んでいる。

動力源は宇宙戦艦エクセリオン用のものを小型化した試作型縮退炉。出力が不安定であり、最大出力では機体のフレームが持たないため長時間の使用はできない。

戦闘スタイルは徒手空拳。

MAの流れで手持ち武器前提で製造されたため内蔵武器はガンバスターに比べて少ないが、ほとんど完成している武器が存在しないのが実情。

外見はスパロボの「ゲシュペンスト」を巨大化させたもの。プラズマステークの代わりに、両腕にプラズマステーク型の三連パイルバンカーが取り付けられ、背部に超大型のブースターを付けた機体と
思ってください。

分類：試作型超光速大型戦闘特機

所属：地球帝国 ダンナーベース

開発：ナガレ トウマ オオタ コウイチロウ他

生産形態：ワンオフ機体

全高：38.8m

重量：666t

最大戦速：????

動力源：試作型縮退炉

装甲材：試作型バスター合金、スペースチタニウム

燃料：アイスセカンド

推進機関：背部超大型熱核ギガブースター×1

姿勢制御用ブースター（肩×2 足×2）
バニシングモーター×1

操縦スタイル：ダイレクトモーションリンク

脳派感知デバイス

武装：トライアングルバンカー射出機×2

イナズマレック他電撃兵装各種

イナーシャルキャンセラー

他

必殺技：トライアングルバンカー3連、イナズマキック他
搭乗員：1名+1機

妄想OG的スペック（特に意味はないぞ！）

サイズ：L

HP：7500

EN：180

運動性：70（出力30%時）

装甲：1800

移動力：6（直線距離のみ12）

地形適正

空 B 陸 S 海 B 宇 S

特殊能力

イナーシャルキャンセラー

妄想武器・武装スペック（特に意味はないぞ！）

武器名称

・イナズマレッジ（格闘）

威力（無改造） 2800 射程 1 命中 +30

CT率 +20

EN消費 5 使用条件 出力30%以上

・トライアングルバンカー（格闘）

威力（無改造） 3500 射程 1 - 3 命中 +10

CT率 +35

EN消費 なし 使用条件 なし

・イナズマキック（格闘）

威力（無改造） 4500 射程 1 命中 0

CT率 +30

EN消費 40 使用条件 出力50%以上

・イナーシャルキャンセラー

効果 慣性制御装置

物理系の格闘・射撃（銃弾・ミサイル）の威力を2

000軽減する。

ただし爆風やその他の力は防げない。

EN消費 10 使用条件 出力50%以上

プロローグ2 絶望の炎

問い。

人類とは何ぞや？

この質問に人々はどう答えるだろう。

ホモサピエンス、万物の霊長、ヒエラルキーの頂点、世界の支配者……表現の仕方は、きつといくらかでもあるし、人によって考え方は様々なだろう……。

明確な答えを出せる者などいやしない。

仮に、議論を続けて答えが導けたとして、そんなものに意味があるだろうか？

答えが分かったところで、人は人であること止められない。

ナンセンスだ。

無意味だ。

しかしその男は結論を下した。

長年人類を観察し続けたその男の中には、揺るがない確固とした答えがある。

人類など、ゴミだ

いや、そんな表現では生ぬるい。

人類など悪臭と害悪を撒き散らすしか能のない、まさに汚物である。

それが男の持論であつた。

考えてもらいたい。

人類の生まれた母なる蒼い惑星。

地球にとって、人類の活動は恩恵となってきただろうか。

地球を人に例えるなら、森林伐採や掘削は生皮を剥ぎ取られているようなものかもしれないし、化石燃料の採取は体液を絞り取られるようなものかもしれない。

しかし地球は悲鳴をあげることではない。

男は、自然を破壊する人類を憎んでいた。憎悪とっていい。暗い感情は男が成人しても決して消えることはなかった。

だが男は、その感情を発露したことは一度もなかった。

自分も人間……しかも、権力も力もないことを知っていたから……。

しかし西暦2017年に、運命の出会いを訪れる。

宇宙怪獣

男は歓喜する。

深緑の力二に似た化け物の死骸が、神の遣わした救世主にさえ見えた。

それから、帝国の化学班に所属していた男は宇宙怪獣の研究に没頭した。

研究を続ければ続ける程、彼の持論の輪郭は太く濃くなっていった。

「人類不要論」
ることになる。

男は学会を追放され、狂人の汚名を受け

偽善か、下らん。男は自分を追放した学者たちを罵った。本質も分からぬ学者どもに正義などあるはずもない。男は喜んで、狂人の称号を背負う。

時は流れて、西暦2023年。

男の持論が変わることはなかった。

銀河系にとってみれば、人間の活動による恩恵など何ひとつない。

人類は銀河に浮かぶ、ゴミだ。

スーパーロボット大戦TOP ? Side The Earth
?

プロローグ2 絶望の炎

???

熱帯樹林が生い茂る密林の中で、

「止めてくれ！」

その男は懇願する。

男はゲバイと呼ばれるギガノス帝国の量産機に乗り、コックピットから周囲の惨状から逃げまどっていた。ゲバイを疾走させ、木々をなぎ倒す。レーダーには機体を負ってくる大きな影が表示されていた。

男はその影から逃げていた。

この戦闘も、ただの『新兵器』のテストだと聞かされていた。

男はギガノス残党兵の中でも指折りの実力を自負していた。さらに同程度の経験者が9名、彼と共にこの試験場へと乗り込みテストに当たっていた……はずだった。

もう、レーダーに味方機の反応はない。

男の操つるゲバイが何かに足をかけて転倒した。

轟音と共に男を衝撃がみまう。慌てて機体を起き上がらせようとする彼の視界には、八つ裂きにされ停止したゲバイが転がっていた。

「もう止めてくれ！　こんなのテストなんかじゃねえ、ただの虐殺だ！」

通信機の向かい側にいるはずの人間に乞う。

返事はない。

見殺しにするつもりだ、理解した男は急いでレバーを操作した。ゲバイは従順に右ひざを立て、起き上がろうとするが、それより早く目の前に大きな影が舞い降りてくる。

ずううん、と何とも重量感ある音を響かせて、影がゲバイの前に立ちはだかった。

男は戦慄し、コックピットの中で動けなくなる。

‘影’の荒い吐息が耳に届き、汗は止まらず、振るえも止まらず、男は涙ぐんだ顔を上げることができなかった。

「ちくしょお……」

家で妻が待っている。妻にはギガノスの残党兵をしていることは秘密にしていた。子どもを身籠っていたと、妻から連絡があったばかりだ。

「遠洋漁業の漁師」をしているはずのこの男は、こんな所で死ぬわけにはいかなかった。

「ぶっ殺してやる！」

心が絶望に彩られる前に、ゲバイに75mmハンドレールガンを

構えさせ、照準する。

男は目の前の巨大な‘影’に向かって発砲した。‘影’の着弾箇所から血飛沫があがり、男は「敵は倒せる」と確信する。

しかしそこで男の思考は途絶えた。

‘影’の放った無数の槍のようなものに、ゲバイは全身を貫かれていた。オイルを撒き散らしながら機能を停止し、動かなくなる。

巨大な‘影’が勝ち誇ったように雄叫びを上げた。

まるでジャングルのように木々が溢れるその「空間」に‘影’の声が反響する。

地下に造られたその「空間」で、監視カメラはその光景を全て記録していた

??? 監視ルーム

「空間」での出来事が、別室のスクリーンに映し出されていた。窓のない、息の詰まりそうなこじんまりとした部屋だった。そこで男は座イスに腰掛け、繰り広げられる惨劇を冷めた目で観察していた。

移動したのか、咆哮を上げた‘影’はもうカメラには映っていない。残されたのは無意味に破壊された森と10機のゲバイの残骸だけだった。

「ま、こんなものですか」

男が呟いた。

外見はまだ若い、にも関わらず色素の抜け切った白髪を逆立て、丸縁のサングラスをしている。さらに白衣を着ており、まるでなにかの研究者のようないでだちをしていた。

男は画面を見つめたまま冷めきったコーヒーに口を付けた。

苦みが口中に広がった時、ノックする音が聞こえ部屋のドアが開かれる。

「ミスタ・フレイム Mr・Flame……いえ、ミスタ・エフ Mr・F」

部屋の入り口から男を呼ぶ声が聞こえた。

Mr・Fと呼ばれた男が振り返ると、ギガノスの兵士が立っていた。

「もうそろそろ、お時間です」

「分かっています。すぐに行きますよ」

Mr・Fは座イスから腰を上げると大きく伸びをした。

兵士はそれ以上声をかけることなく入り口から離れて行った。

Mr・Fは、腕をぐるぐる振り回したりして凝り固まった筋肉をほぐしている。しかし視線はずれることなく、無意味に破壊された「空間」の木々に向けられていた。

ゲバイたちが逃走の際に押し折ったものだ。

テストする前から森に被害が出ることは分かっていた。しかしMr・Fはテストを決行させた。だから木々が倒木されたのは彼のせいといって過言ではない。

無益な……

彼の思考は冷めきっていた。いや、停止させているといい。

それは目的のための行動が彼の心を傷つけるのを防ぐため、逐一罪悪感に見舞われては先に進めないからだ。

ストレッチで気持ち体が軽くなった。

Mr・Fはドアを開け、部屋を後にする。

全ては目的のために。冷めきった感情の奥底に、静かに炎が燃えていた。

彼はまだ自分の持論を覆す程のなにかに出会っていない。

長い間、彼の持論は変わることはなかった。

人類など、銀河に浮かぶ、ゴミだ。

Mr・Fが立ち去った監視ルーム、そのスクリーンに大きな影が写り込んでいた。

「空間」でゲバイを破壊した巨大な「影」だった。

全高50mはある。太い4本足で大地を踏みしめ、全身を爬虫類のように堅そうな皮膚が覆っていた。さらに尾は長く、背には雄々しい2つの翼と先端の尖った多数の触手が蠢いている。

ファンタジー世界から飛び出したような姿のモンスターは、悠然と「空間」を闊歩し、雄叫びを上げた。その姿はまるで「竜」そのものだった。

やがて化け物はカメラの前から姿を消し、節電のため監視ルームの証明が落ちる。

暗闇の中に化け物の叫びだけが響いていた

西暦2022年、宇宙戦艦アクセリオンは宇宙へと旅立って行っ

た。

宇宙怪獣の根城を探し、人類の希望を紡ぐために、タカヤ ノリコはTOPとして出発したのだ。

光速航行する艦の中では時間の流れは遅くなる。エクセリオンの帰還は地球時間で10年以上先になる見込みである。

地球に残ったオオタ ヒカリは無事に沖女を卒業した。

沖女において主席であったヒカリは、とある機関にテストパイロットの候補として招かれることになる。

地球帝国は「RX計画」の一環として、対宇宙怪獣用の人型特殊決戦機体の開発を各州に命じていた。特機 俗に「スーパーロボット」と呼ばれる兵器の開発に携わっている施設が世界中にあり、ヒカリは日本州におけるその施設に配属となった。

ダンナーベース、そこがヒカリの新しい舞台となる。

猛者ぞろいのダンナーベースでもヒカリは努力を続け、次第に周囲から認められるようになっていく。

そうして、時間は流れていった。

西暦2023年10月半ば、変わらぬ平穏な日々が続き、季節は秋を迎えていた。

しかし、物語は再び動き出す。

ヒカリが沖女を卒業してから、実に1年半の月日が過ぎていた。そんな、ある日の出来事だった

エケエリオン帰還まであと約9年

プロローグ2 絶望の炎（後書き）

<次・回・予・告>

エクセレン「出張、ナンブ予告団、スパロボ学院から出張よん！」

キョウスケ「……………」

エクセレン「今日も借金返すため、あつーい予告を言ってみよー！」

キョウスケ「……仕方あるまい……（やけくそ）」

キョウスケ

「俺の名前はキョウスケ・ナンブ、この作品には一切なんの関係もない！」

西暦2023年10月、エクセリオンが宇宙に旅立ってから1年と6カ月が経とうとしていた！

そんな頃、ヒカリは窮地に立たされていた。

愛機ドラグーンと対峙する蒼い巨人、ヒカリは敵を倒すことができるのか！？

そして新キャラの登場で物語は再び動き出す！

次回「スパロボTOP」第1話「流の男」、どんな装甲だろうと打ち貫くのみ！」

エクセレン「提供はスパロボ学院からエクセレンとキョウスケ・ナンブでしたー。でも、私たちってこの作品でないのよねえ？」

キョウスケ「知るか」

エクセレン「もう、キョウスケのいけずー。では皆さん、次回でまたお会いしましょうねん」

第1話 流の男

西暦2023年、10月。

私が兄貴やノリコたちと別れて早2年近く経つ。

時の流とは不思議なものだ。ある時は早く、ある時は遅く……今、私は早い時の流の中に身を置いているのだと思う……。

ノリコたちと別れてから半年後、私は沖女を卒業していた。

身を持って知った努力の大切さ。私はノリコに教えられてことを半年間やりとおし、沖女での成績を主席で卒業することができた。

それが縁だったのだろうか、私は日本州屈指の研究施設であるダンナーベース（旧ジャパンベース）に指名され、そこへの配属が決定した。

ダンナーベースは「RX計画」の要である「特機」人型

特殊決戦機体の開発を請け負っている施設であった。人類存亡をかけた研究を行う場所。当然のように、最上級の腕前のパイロットたちが召集されていたのは言うまでもないだろう。

そこで私は、天才と呼ばれる人間が1人でないことを改めて知る。

猿渡 ゴオ。

ミラ「アッカーマン」。

藤村 静流。

誰にも私は敵わなかった。

彼らの強さは努力に裏打ちされたもの。努力を18年間怠ってきた私が、勝てるはずもなかったのかもしれない。

だが私は努力をした。

約1年と6カ月だ。

ノリコとの約束を守るため、私が彼女と別れてから努力を怠ったことはない。

強くなった、とは思う。

しかし、ノリコのように本当の意味で強くなったのかは分からない。

だから私は努力し続けるのだ。

この命が、燃え続けている限り！

スーパーロボット大戦TOP ? Side The Earth
?

第2部 第1話 流の男

所在地不明の荒れ地

木々一本生えていない荒れ地に、高層ビル程に隆起した高台が幾つも乱立している。人の気配はなく、あるのは機械の生み出す轟音のみ。

その場で

「くっ、このままじゃ……」

オオタ ヒカリは、悪態をつきながら操縦桿を握りこむ。

隆起した高台に身を隠しながら、彼女は登場する機体 量産型MAドラグーン のレールガンの弾倉を交換した。投げ捨てられた空の弾倉が地響きを上げるが、それは彼女の耳には届いてはいない。

75mmハンドレールガン、予備の弾薬は先ほど交換した弾倉が

最後だ。

ドラグーンの右肩に装備されたレールキャノンは使い尽くした。残るは背部リフターに搭載された、虎の子の12連装ミサイルポッドだけだ。

「これで決めなくっちゃ……」

ヒカリに勝機は無くなる。

彼女が相手をしている敵は強力にして強大だった。

人型兵器でありながら、男性の雄々しさを嗅ぐわせる体躯。そこから繰り出される必殺の徒手空拳は脅威であり、なにより並みの攻撃など耐え凌ぐ堅牢さも兼ね備えていた。またその巨体は、ダウンサイジングされていても20mは軽く超えている。

それにパイロットも並みではない。

ヒカリの正確な射撃を可能な限り躲し、防御し、彼女の弾薬が底を突くのを待っていた。

弾薬が無くなれば手数が減り、付け入られる隙が大きくなる。

消極的な手を打つわけにはいかない。

一撃必殺の手を講じる必要が、ヒカリにはあった。

接近する敵影が、ドラグーンのレーダーに表示される。数は1機だ。

「いつまでも良い気にはさせないよ……不意を突いてやる」

ヒカリは息を落ちつけ、レーダーから敵との距離と隆起した高台の関係を読み取る。

敵は脅威だが、1機だからこそその戦い方もできるはずだ。

ヒカリはドラグーンのミサイルの1基を敵の近くの高台に照準した。ロックオンアラームが耳に届くがまだ動かない。敵が近付くのを待ち

「　　今だ！」

ミサイルを発射した直後に、ヒカリはドラグーンを高台の影から飛び出させた。

視界が開け、敵の姿は目に映る。

敵は蒼い鋼の巨人だった。表情まで摸した頭部に、丸太のように太い四肢を持ち、力強さが漲った男性のような外見をしている。その双眸がヒカリのドラグーンを捉えた。

「見つけたぜえ！！」

蒼い巨人から男の声が聞こえ、ヒカリ向かって突撃する気配が見える。

しかし同時に巨人が隣接していた高台が爆発した。ドラグーンのミサイルが命中したようだ。

岩石となった破片が雪崩れのように巨人に降り注いだ。岩が巨体を埋め尽くし、姿が見えなくなる。だがその程度で倒れる巨人でないことを、ヒカリは重々承知していた。

追い打ちだ、このチャンスを逃すものか。ヒカリが機体进行操作した。

巨人が埋まっている場所に、ドラグーンに残された11発の虎の子と、75mmハンドレールガンをロックオンし、右腕部にレーザーブレードを抜き放つ。

背部リフターに火が付き、アフターバーナーにも点火してドラグーンは一気に加速した。

ミサイルと弾幕をばら撒きながら目標地点に接近。

ミサイルが瓦礫を吹き飛ばし、レールガンが着弾したのを肉眼で確認した。撒き上がる砂煙の中に突入し、トドメとばかりに、ドラグーン右腕部のレーザーソードを振り下ろす。

これでチェックメイト！

……の予定であった、が……

「まだまだ甘いな、ヒカリ！」

蒼い巨人のパイロットの声がヒカリに聞こえてきた。

同時に、ドンッ、という衝撃音と共に砂煙が渦を巻いて吹き飛ばされた。

眼前のモニターに傷ついた巨人の姿が現れ、その左手にはヒカリのドラグーンの腕部が掴まれている。

「ま、今回は少しばかり危なかったけどなあ」

「こ、このッ！？」

「逃がすか！」

ドラグーンを巨人の手から引き剥がそうとヒカリが操作する。

しかし、万力のような握力で締め付けられ逃げることは叶わなかった。

ミシリッ。

嫌な音がヒカリの耳に届いた瞬間に、モニター状の右腕部のコンデイションが赤く変色する。

直後、機体は拘束から解き放たれた。右肘から先は食いちぎられたように無くなっていった。いや、電気信号を伝えるケーブルがかかるうじて繋がっていた。

しかし戦う術を失ったヒカリはそれを引き千切り、ドラグーンに巨人からの逃走を図らせる。

だが、

「チェックメイトだ

……！！」

の声、そしてコックピットを強烈な振動が襲った。

縦揺れと横揺れに、ヒカリはコントロールレバーを握りしめて耐える。数秒で揺れは収まっていたが、画面には赤く大きな文字でこう書かれていた。

『GAME OVER YOU LOSE』

くそつ、とっヒカリは舌打ちしレバーから手を離れた。
今まで広がっていた荒野は消失し、コックピットは暗闇に包まれる。

コックピットブロックのハッチが解放されると、新鮮な外気が流れ込んできた。外気は汗で湿った緑がかった黒髪を涼しげに包み込んでくれる。

「お疲れ様、ヒカリちゃん」

ハッチの外から金髪の美女がタオルを手渡してくれた。

「ありがとうございます、ミラ先輩」

受け取ると、ヒカリは乱暴に顔と髪の手を拭いた。

ヒカリの端正な顔には、大きな横一文字の傷痕が残っていたが、今では触れるぐらいでは痛みを感じることはない。

一息つきコックピットの外に出ると、開けた空間と、優雅に立っている金髪の美女
ミラ・アッカーマンの姿が目飛び込んでくる。

「今回も負けちゃったけど来た頃に比べて見違えたわね、結構いい線いってたわよ」

「ありがとうございます、でもまだまだです」

ミラの称賛に自惚れないよう、ヒカリはミラに答えると同時に自分に言い聞かせる。

ダンナーベースのトレーニングルームに彼女たちはいた。

広い空間にトレーニング用の機材やシュミレーションバトル用のモジュールが設置されている。まるで卵か繭のような球体のモジュールは、ヒカリが使っていたもの以外にもう一つあった。

プシュー、とそのモジュールのハッチが開いて、

「ふうー、あつちいあつちい」

手で顔を扇ぎながら、大柄な日本人男性が姿を現した。

「お疲れ様、ゴオ」

ミラは小走りで男性に駆け寄っていく。

ゴオ、と呼ばれたその男はミラからタオルを受け取ると礼を述べ、豪快に汗を拭きとっていた。その様子を見て、ヒカリは「ちえつ」と舌打ちする。

猿渡　ゴオ、大男の名前だった。

「よおヒカリ、今回も俺の勝ちだな」

ゴオがヒカリを見つけて手を振っていた。

ヒカリは苦笑いを浮かべながらため息をつき、2人に合流するため近づいていく。

蒼い巨人のパイロット

猿渡　ゴオとのシュミレーション

バトルはこれで通算33回目……沖女の人オオタ　ヒカリが3回目の敗北を喫した瞬間だった。

第1話 流の男 2

「RX計画」……この言葉は、地球帝国が推し進めている対宇宙
怪獣用決戦兵器の開発計画のことを指す。

沖女等の士官学校に多数配備されている「RX-7」もこの計画
の一環として量産された。

宇宙怪獣戦を想定した過剰なまでの電撃兵装を装備し、生体組織
に関しては有効な攻撃手段を獲得したと言えるだろう。

しかし「RX-7」の完成の後も計画は推し進められ続けていた。
それはなぜか？

答えはいたってシンプル。

宇宙怪獣に対する決定的な切り札となる戦力を、地球帝国が求め
ていたからだ。

世界各地には「ベース」と呼ばれる研究施設があり、帝国の命令
で切り札の開発に取り組んでいた。

それは「ジャパンベース」でも同様であり、所長の「葵 霧子」
の手腕により一つの切り札が完成することになる。

蒼き巨人 その名をゴードンナー。

40mに迫る巨体を大型のプラズマドライブで動かし、徒手空拳
で敵を殲滅する。

特機……俗語で「スーパードロップ」と呼ばれるようになる兵器
の完成をもって、「ジャパンベース」は「ダンナーベース」と改名
した。

こうして、ゴードンナーはダンナーベースと日本州の守護神とな
り、後に続く特機の開発がベースでは続けられている。

切り札は一つである必要はない。多ければ多いほどよい。
そしてゴードナーがロボットである以上、操縦者は必ず存在する。

パイロットの名前は猿渡　ゴオ　　　　　ヒカリがシュミレーショ
ンで敗れた、名実ともにダンナーベースでトップの実力者だ。

ダンナーベース　職員食堂

時刻はちょうど昼時、ダンナーベースの食堂は腹を空かした職員
たちで埋め尽くされていた。食品の受け渡しコーナーには長蛇の列
ができ、テーブルの空席が見る見る内に埋まって行く。

躊躇していると席がなくなる戦争のような状況の中で、ヒカリた
ちはしっかり席を確保していた。

丁度3人分のスペースの小さな円状のテーブルで、

「ぶうええくしよい！」

ゴオが大きなクシャミを爆発させた。

唾が飛び散ってくるような気がしたヒカリは配膳用のトレイで顔
をガードする。汚いたりやありやしない。

「ずず……誰か俺の噂でもしてんのかねえ？」

「知らないわよ。ていうかアンタって、くしゃみの仕方がほとんど
おっさんだよな？　　ていうかおじん？」

トレイに唾は付いていなかったが、テーブルに置きたくなかった
のでとりあえず椅子立てかけることにした。

ヒカリの毒舌にゴオは軽く立腹した様子で、コーヒークップを掻
き混ぜていたスプーンで彼女に向けて言った。はっきり言って行儀
は悪い。

「おいおい、そりやないぜヒカリ。それよりよー、俺って一応先輩
なんだぞ。それも、かなりBIGだ。少しぐらい可愛らしい声で『
猿渡先輩ッ』ぐらい、言えんのかお前は？」

「うわッ、キモ。ゴリラが喋ってますよ、ミラ先輩」

上ずった声のゴオにかなり引きながら、ヒカリは優雅に食後のコ
ーヒーを飲むミラの方を見る。

そうねヒカリちゃん、彼女は天女のような微笑みを2人に向けて
いた。

ミラの言葉に少なからず衝撃を受けたようで、

「……なあ、俺泣いていいのかな？」

「男は泣いちゃだめよ」

心折られ項垂れるゴオ、追い打ちのようなミラの言葉に彼の巨体
が風船のように萎んでいく。まあ錯覚なのだが、実際一回り小さく
なっているようにヒカリには見えた。

「冗談よ、ゴオ」

ミラは優しい笑顔をゴオに見せる。

「でも人前で泣いたりしちゃだめよ。貴方の泣き顔は私だけのもの

だからね」

「おお、ミラ、やっぱり君は優しいな。君は俺の女神だよ、ヒカリとは大違いだぜ」

「……まったく、また始まった……」

目の前でイチヤつきだす先輩二人を見て、ヒカリは呆れ声を上げた。

ゴオはミラのお腹に抱きついて頬を擦りつけ、悦に入った表情をしている。ミラはその頭を子どもでもあやすように優しく撫でていた。

見てるヒカリの方が赤面してしまう。飲みかけのコーヒーをテーブルに置いて、止めに入りたくなるのも仕方ないことだろう。

「ミラ先輩、そういうのは自室でやってくださいよー」

ヒカリの言葉に反応したのは、ミラではなくゴオだった。

「うつせえ、ヒカリ。一人身だからってひがむんじゃねえよ」

イラッ。

そんな擬音が聞こえてきそうな表情がヒカリに浮かんだ。なんだろう、この言い草は？ 腹が立つ、本当に腹が立つ。

「なに言ってるの？ 本当に五月蠅いわね、このゴリラ」

「なんだと、やんのかコラ」

「上等よゴリラ、喧嘩なら買っわ」

「よし、その生意気な鼻っ面圧し折ってやるぜ」

ミラに抱きつくのを止め、ゴオが机から立ち上がる。

「ふんツ、アンタのその先輩面を醜く歪ませてあげるわ」
「いい加減にしなさい、2人とも大人げないわ」

ヒカリも続くが、和やかな声でミラが2人を制止した。

「悪いのは全般的にゴオなのは確かだけど、ヒカリちゃんもいちいち挑発に乗っちゃ駄目よ」

「はい、すみません、ミラ先輩。以後気をつけます」
「異議あり！」

被告から異議申し立て、はいどうぞ、と裁判長ミラが発言権をゴオに与える。

「俺は悪くない！俺は根拠なき誹謗中傷を受けた被害者のはずだ！」

「異議あり！」

「はい自己弁護士のヒカリちゃん、どうぞ」

「アイツがゴリラなのがいけないと思います」

「そうね」

裁判長の素早い判決が下る。

言葉の暴力がゴオのハート切り裂く音が、ヒカリには聞こえた気がした。

「猿渡　ゴオは有罪。罰としてなんでも一つ私たちの言うことを聞くこと」

「……………俺、泣いていいよな？」

しよげるゴオにミラが言う。

「ダメよ。私の言うこと聞けるわよね、ゴオ」
「はい……すいません」

ミラの言葉に素直に頷くゴオ。

図体の大きなゴオがミラにいいように扱われている様子は、「美女と野獣」というより、猛獣と調教師の関係に似ているように思えた。全てを掌握され完全に尻に敷かれている。しかし、ゴオがそれを嫌がっている様子をヒカリは見たことがない。

ミラもゴオと戯れているときに、最も活き活きと楽しそうにヒカリには見えた。

要するに、この2人は相思相愛なのだ。

ダンナーベース最強のパイロット猿渡　ゴオと、No.2のミラ・アッカーマンは誰もが羨む理想のカップルだった。

ヒカリは2人に目をかけられ、よく行動を共にする。

ヒカリがダンナーベースに配属されてから1年半、2人の乳繰り合いはもう見慣れた日常の風景と化してしまっていた。

しかしヒカリは思う。

いい加減にして欲しい、って思うときも多いよね……

見目麗しく、すれ違った他人が思わず振り返りなくなる

ヒカリには間違いなく、そのレベルの美貌は兼ね備わっていた。

沖女を卒業して1年半、あの頃残っていた少女っぽさは割と影を潜め、可愛いより綺麗な部類に入るようになってきている。

しかしこの20年間、ヒカリに浮ついた話は一つもなかった。

沖女時代はその傍若無人ぶりで男を寄せ付けず、ベースに配属されてからも持ち前の気の強さが災いしたのか男に声をかけられたことは少ない。

それどころか、ベースの有志が募ったアンケートで「なんか生意気な新人」部門でダントツ1位を取ったりしていた。

しかしヒカリの耳にその事実が届くことはなかったため、彼女の態度は変わることなく、男の「お」の字も見えない身持ちの堅さだった。

……少し、寂しいかも……

目の前で談笑するゴオとミラを見て思う。

ヒカリだって年頃だ。

恋人が欲しくないわけではない。

まあできれば、兄のようなしつかりとした信念を持った年上の男性がいいな……と選り好みしているのも、恋人ができない理由の一つではある。彼女に自覚はまったくないのだが……

「おい、ヒカリ」

物思いに耽っているとゴオが急に声をかけてきた。

「お前、あの話聞いたか？」

「あの話？」

なんのことだろう？ ヒカリは首を傾げる。

「この所、ギガノス残党の活動が活発になってきてるだろ。俺たちも掃討作戦に参加させられるし、忙しいたらありやしねえ」

ゴオが迷惑だぜ、と眉をしかめながら呟いた。

そのことならヒカリだって当然知っている。むしろ、沖女時代からケーンの愚痴を聞いていた分、他人より実感が伴っているくらい

だ。

エクセリオンの出発後、ギガノス残党のテロが活性化しているのは周知の事実である。

「それがどうかしたの？」

「いや、どうかしたのってなあ……現状で人類の内輪もめに駆りだされることほど無意味で、しんどいことはねえだろうが」

「アンタ、本当におっさん臭いわね。まだ若いんだから、文句言わずに働きなさいよ」

「へいへい、どうせ俺はおっさんですよーだ」

半ば開き直りだろう態度を見せて、ゴオは続けた。

「それより、どうもギガノス残党の連中に手を貸している連中がいるみたいなんだ」

「なによそれ？ この地球帝国全盛の時代に、そんなこととして得する連中が本当にいるの？」

「それがあるみたいなのよねえ」

コーヒーを飲みほしたミラがカップを置いて言う。

「ヒカリちゃん、死の商人、って言葉知ってる？」

「それぐらい知ってますよ」

誰でも一度ぐらい耳にしたことがある言葉だと、ヒカリは思う。

死の商人　　確か、営利目的で敵味方を問わず兵器を販売する人物・組織のことを指した蔑称のはずだ。敵味方に武器を流して戦力を均等にすることで戦争を長引かせ、それにより消耗した兵器を売りつけることで暴利を貪る外道たち。

小さな紛争やテロ屋にも加担しているらしく、ヒカリの耳にも噂

が入ることもある。

「ギガノス」戦争のような大きなものに関しては、言わずもがなである。

「ギガノス残党の活動活発化の裏には死の商人が関わっている、そんな噂が後を絶たないのよ」

ミラの言葉に被せるようにゴオが言う。

「死の商人『NAGARE』……ギガノス戦争の裏でも糸を引いていたらしい。

ほら、あの戦争も開戦直後は地球帝国が圧倒的に不利だったのに、ドラグナーの強奪を契機に一気に盛り返しただろう？

あれも『NAGARE』が裏で手引きしてたっていう噂もあるんだぜ」

「でも噂は噂でしょう？ 尾もヒレも付くものでしょうが」

「ま、その通りだな」

事実・真実が、人の口を介することで歪むことはよくあることだ。この噂にもそういった所が多分にあるはずだろう。

しかし潜伏していたギガノス残党問題の表在化は、確かに腑に落ちない部分が多いのも事実。

死の商人『NAGARE』、ね……

まるでリアリティを伴わないが、そういった組織があるのは間違いないだろう。人の不幸で飯を喰う連中は、残念ながらいつの時代にも存在する。

ヒカリは思わずため息をつきそうになった。

全館放送がかかったのは正にそのときだった。

「ダンナーベース職員皆様にお伝えします。これより講堂で新技術主任の着任式を執り行います。皆さまは1400までに講堂に

」

食堂中の職員が一斉に放送に耳を傾ける。ゴオがなにか思い出したように手を打った。

「そっぴや今日だったな、新しい技術主任の着任式。すっかり忘れてたぜ」

右に同じく忘れていたヒカリも、それが数日前から通達されていたことを思い出す。

日本州最大の研究施設であるダンナーベース。

「RX計画」に携わりたいという研究者たちが集中するが、振るいに掛けられるため実際に働ける人間の数はかなり少ない。

一般に秀才・天才と呼ばれる人間が集まり特機を研究・開発している場所がここ、ダンナーベースであった。

つまり、ダンナーベースの技術主任は、それ相応以上の能力の持ち主ということになる。

「今までは所長の葵博士が技術主任を兼任してたものね。その葵博士が直接引き抜いたって噂は本当なのかしら？」

「だとしたら相当優秀なんだろうなあ」

ミラの呟きにゴオが感心して、うんうんと頷いている。

別にゴオのことを褒めた訳ではないのに……苦笑しながらヒカリはテーブルから腰を上げる。

「じゃあ行きましょう、ミラ先輩」

「そうね、ヒカリちゃん」

「お前ら俺は無視かよ」

3人は空になった食器を返却口へと持っていき、その足で講堂へと向かう。

ダンナーベース 巨大講堂

ダンナーベースは特機の開発・研究機関である。

そしてベースは帝国各州に1つずつ存在し、専門に研究している技術体系はそれぞれ違ってくる。

「RX計画」の最終目標は宇宙怪獣と戦う多くのスーパーロボットの開発することである……各ベースのノウハウで開発されたスーパーロボットたちは、それぞれ特性が違ってくるのは想像に難しくないと思う。

至極当たり前のことだが、各々が得意とする技術の研究成果を発表する場がベースには必要となってきた。

今ヒカリたちがいる講堂は、そういった目的のための場所である。

「結構、集まってますね」

ダンナーベースの講堂は、200 - 300人は軽く収容できる巨大な階段教室となっていた。着任式数分前には講堂は既に満席とな

り、立ち見の職員もおり講堂はすし詰め状態となっている。
ヒカリたち3人はちゃっかり席を確保し、着任式開始を今かと待っていた。

「皆暇なのか、新しい技術主任が気になるのかどっちでしょうね？」
「後者だと思いたいわね」

周りの人垣をミラは見ながら呟いた。

ヒカリたちパイロット勢は出勤がないときは自主トレーニングに勤しんでいるが、ダンナーベースの職員のほとんどは科学者や技術者たちだ。自分たちの新しいボスになる人間のことが気になるのは分らないでもない。

そんなことをヒカリが考えていたそのとき、講堂を支配していたざわめきが急にぴたりと止んだ。

1400時、定刻きっかりにダンナーベース所長の葵 霧子と司令の影丸が現れたからだ。

注目が集中する中で壇上には、霧子ではなく影丸が上がる。

「みんな、集まってくれているようだな」

影丸がしぶめの声で話を始めた。

「今日みんなに集まってもらったのは他でもない。

長らく空席だった技術主任の席が決定したこと、その者を紹介するためだ。ここからは所長の葵 霧子博士に説明してもらう。博士、どうぞ」

「ああ、ありがとう」

霧子は影丸からマイクを受け取り壇上へと上がった。

くばらせていたメンソールの煙草を、胸の谷間から取り出した携

帯灰皿で処理すると話を再開する。

「ふー、まあ堅苦しい話や難しい話はなしにしようじゃないか」

堅苦しい影丸と打って変わって軽い、というか気だるそうな雰囲気の霧子。掴みどころがない、そんな印象を他人に与える女性だった。

「要するにだ、私が認めるレベルの人材がいなかったから技術主任は長い間空席だったんだが、中々どうして、いい奴が見つかったねえ……そいつに技術主任を任せてみようかって話さ」

霧子はそれだけ言うとは豊満な胸の谷間から取り出したメンソールに火をつけ、また吹かし出した。お前の胸は某ネコ型ロボットのポケットか、などとヒカリは心の中でツツコミを入れていたが、それは一先ず置いておくことにする。

「もういいよ、入りな」

「は、はい！」

霧子の呼ぶ声に一人の男性が講堂の入り口から中へ入って来た。

白衣を着た細身の若い日本人、多くの人が抱いた彼の第一印象だった。

無造作に伸びた黒髪はあまり整えられてはいない。フレームレスの眼鏡の下には緊張からか、童顔ぎみの顔に張り付けられたような笑みが浮かべられていた。

階段教室に座るヒカリたちにペコペコとお辞儀をしながら壇上に向かう。

しかし

「うわっ！」

職員の方ばかり見ていたためか、壇上に上がる際の段差に足を引っ掛けて転んだ。

ズダンッ、という大きな音が響いた後にはシーン、と白けた沈黙だけが残っている。

なによアイツ？

カッコ悪いやつ……ヒカリが男に持った第一印象だった。

会場から小さな笑いが上がる中、男は霧子に手を出され慌てて起き上がる。

霧子に礼を言い、壇上につくとヒカリたちに向き直る。

「えー、先ほどはお恥ずかしいところをお見せして申し訳ありませんでした」

幾分緊張の取れた笑顔で男は言った。

「ご紹介に預かりました、新しく技術主任に着任することになった
ナガレ流 凍摩^{トウマ}』、24歳です。どうぞよろしく」

再び会場をどよめきが覆った。

トウマと名乗った男の年齢に「おいおい、本当にあいつが新しい主任かよ!」「若すぎだつて!」「葵博士なに考えてんだ!?!」「若造め」など、驚きと妬みの声が次々と上がっていた。

無理もない。

日本州随一の研究所の主任だ。

博士号を持ってもなれる保証はない。現にトウマの年齢に嫉

妬している面々の中には、博士号を持ちながら主任になれない者も何名が見受けられた。

衝撃を受けたのはヒカリも同じだったが

ナガレ、だつて……？

トウマの姓に既視感デジャウを覚えていた。

死の商人『NAGARE』。

それは、食堂での会話で出てきた単語だった。

ただの偶然。冷静に考えて、そうに決まっている。しかしなにか妙だ、ヒカリの勘がそう告げていた。

「五月蠅いぞ、お前らー」

いつの間にか霧子がマイクを握っていた。

「若いからつてなにか問題があるのか？ 余所はどうだか知らないが、ウチに年功序列なんて言葉はないぞ。実力ある者が上に上がる、少なくとも私が所長の間はそうさせてもらつ」

少し立腹した様子の霧子に大半の職員は口を詰むんだ。マイクは影丸に渡す。

それでも文句を言う職員は少数だがいるものだ。

霧子は紫煙をすばすば撒き散らしていたが、すぐに我慢できなくなったのかマイクを影丸から強奪する。

「トウマは私が見つけて連れてきた。文句がある奴は、私を所長の座から下ろしてみろんだな。

以上、解散！」

「は、博士、もう終わりですか？」

「解散！ さつさと仕事に戻りな！」

背後から声かける影丸を無視して、霧子が宣言した。

自らの人選を批難されたのが余程気に食わなかったのか、マイクを壇上に叩きつけて講堂から足早に去っていく。博士ー、と影丸も後を追って講堂を後にした。

2人の居なくなった講堂はすぐに騒がしくなった。

「博士の気まぐれにも困ったもんだよな」

ゴオが苦笑いをしていた。

「まさかあんなに若い奴を連れてくるとは思ってたぜ」

「そうよね」

ヒカリは壇上に取り残されたトウマを見下ろした。

「ま、私よりは年上なんだけどさあ、ロボット開発のトップがあの
お兄さんっていうのはちょっとどうかと思うわ」

「あらそう？ 私は可愛くていいと思うわ」

ミラがヒカリを見て笑っていた。

「ヒカリちゃんは、ああいう子はダメなのかしら？」

ミラの言葉には、恋人とか付き合うとか、そういう意味を含まれているのが深く考えなくても分かる。

どうだろう？ トウマを見下ろして、ヒカリは考えてみる。

置き去りにされて戸惑っているのだろうか、トウマは顎に手を当

ててなにか思案している風だった。24歳の割に顔はそこまで大人びていない、笑えばきつと可愛らしい笑顔になるんじゃないかなろうか？ 顔は及第点だと、ヒカリは思う。

しかし登場が良くない。

いきなりズッコケルような3枚目は自分の好みではない。自分は兄のように1本真の入った志を持ち、頼りがいのある男性が好みなのだ。

「冗談じゃないです」

自分に言い聞かせるように言った。

「あんな情けなさそうな男は嫌ですよ。どうせなら頼りがいがある逞しい男性がいいです」

「ゴオみたいなの？」

「ゴリラは嫌です」

ミラの質問にヒカリは即答。

「お前ら、ええ加減にせんと俺も怒るよ」

何時もの3人の会話になっていた。

着任式がうやむやの内に終わってしまったため、講堂に溜まっていた職員たちは自分の仕事場へと戻り始める。少し人数が減ったところで、ヒカリたちも外に出ようと席を立とうとする。

そのときだった。

「待ってください」

トウマが残った職員たちに声をかけたのだ。

「少しお聞きしたいのですが、この中にダンナーチームの方はいらっしゃるのでしょうか？」

ダンナーベースのパイロット編成は基本的に3人一組になっている。戦況に臨機応変に対応し、生存率と作戦成功率を高めることが目的である。

ダンナーチーム 要するにゴオ、ミラ、ヒカリの3人の事であり、ゴオがゴードンナーのパイロットだからこのネーミングになった。他にも藤村 静流のガンナーチームが有名だが今回は置いておこう。

ゴオ、ミラはダンナーベースのトップ2のため有名であり、職員たちはトウマの言葉に反応した。

多くの眼がヒカリたちの方に向けられる。

トウマもヒカリたちに笑顔を向けた。

「ダンナーチームのNo.3、コールサイン『ダンナー3』のオオタ ヒカリ曹長さん」

「え、わ、私……？」

「ああよかった、まだ居たんですね」

突然名前を呼ばれて戸惑うヒカリを余所にトウマは言った。

「貴女に話があります。良かったら後で僕の研究室に来てください」

「ちょっと待って、という」

「お待ちしますよ」

それだけ言い残すと、トウマは講堂を後にした。

職員たちもぼそぼそとなにか喋っていたが、すぐに出口に向かって移動を再開した。

予想外の出来事にヒカリは茫然と立ち尽くす。

トウマは多くの職員のいるにも関わらず名指しで自分呼びつけた。

それはつまり

「どういうこと？」

「気にいられたんじゃないの？」

は、ゴオの言葉。

「ヒカリちゃん、玉の輿よ玉の輿」

は、楽しそうに笑うミラの言葉。

他人の不幸は蜜の味？ 呼び出されたのが自分でなければ、その動向を想像しながら楽しむことができるのだろうか。ミラのように。なんなのだろうか。とにかく行ってみるしかない。

ヒカリは一先ずゴオたちと一緒に講堂から出ることにした。

第1話 流の男 2（後書き）

3
まで続きます

第1話 流の男 3

講堂から出たヒカリたちは一路トウマの研究室を目指した。

目的地にはすぐ着いた、そう一言で表現できればよいのだが、如何せんダンナーベースの敷地面積はかなり広大だ。

その中から個人の研究室、それも配属されたばかり部屋を探すのは相当の労力を要した。

着任式から1時間が経過して、ヒカリたちはようやくトウマの研究室に辿り着く。

できることなら2人にも一緒に付いて来てもらいたかった。

しかし指名されたのはヒカリ個人であるため、研究室の中にまで付いて来てもらうわけにはいかない。

意を決したヒカリは、トウマの研究室に足を踏み入れた。

ダンナーベース トウマ研究室

「失礼します」

ヒカリはスライド式の自動ドアをくぐり、部屋の入り口で一礼した。

顔をあげると殺風景な部屋に数台のコンピューターとテーブルがあり、荷解きしていない段ボール箱がそこかしこに山積みになっていた。散らかっている。荒れていると言うほどではないが、生活感のある汚らしさでもなかった。

ヒカリの声にパソコンに向かって作業していたトウマが振り返った。

「やあ、待っていましたよオオタ ヒカリさん」

曹長ではなくフルネームで呼び、座イスを回したトウマがヒカ리를笑顔で迎え入れた。

「どうぞ、そこに座ってください」

「あ、はい」

ヒカリは彼に促されるまま研究室にあったテーブルに着いた。

トウマはコーヒーマーカーで作ったコーヒを白いカップに注いでいる。

その間にヒカリは部屋に視線を走らせた。

第一印象は殺風景、段ボールが詰まれて散らかっているが他にはなにもない。

着任式が今日だったから、この部屋にはごく最近越してきたのだろう。初めて招待された異性の部屋にしてはあまりに味気なかった。

なにを考えているんだ、私は……！

ヒカリは柄にもなく緊張している自分に気付く。

男の部屋だからなんだというのだ。なにもない部屋なんか空き室のようなものだ。

それにトウマはヒカリの好みではない。自分は兄のような男性が

好きなのだと、自分に言い聞かせるように頷いた。

「一人でなにを納得なさってるんです？」

トウマが対面に座りながら、カップをヒカリに差し出していた。

「この部屋を見て楽しいことでもあるんですか？」

「え……いえ、なんでもありません」

部屋を見回していたのをトウマに気付かれていたようだ。

ヒカリは自分の顔が赤らむのを感じていた。かなり恥ずかしい。その様子を見ていたトウマは、

「？ 変な人ですねえ」

と首を傾げていた。

変なのはお前の方だ！

なぜ着任早々にヒカリのような下っ端を呼びつけるのか？ まず上役と交流を深めたらいいのに、ヒカリはそう思いながら、トウマからカップを受け取る。

やはりこの男は自分の好みではない、自分は兄のような

内心憤りを感じながらヒカリはカップに口を付けた。苦い、ブラックだ。だが旨い。

「さてと」

トウマも一口飲み、話を切り出した。

「ではまず、貴女のことはなんと呼べばいいでしょう？」

「はあ？」

「呼び名ですよ、よ・び・な。

オオタ ヒカリ曹長だとか、曹長と呼ぶのも堅苦しいですし、第一僕は研究員であって軍人ではないですし」

ぼりぼり、と頭を掻きながら聞いてくる。どうも冗談ではなさそうだった。

オオタだろうが曹長だろうが好きに呼べばいい。ヒカリはダンナーベースに所属する軍人だし、ベース内ではトウマの方が立場は明らかに上だ。

どの道、ヒカリに拒否権はない。

「どうぞ、好きなように呼んでください」

「じゃあ、ヒカリさんと呼ぶことにしましょう」

いきなり名前呼び、敬語だが丁寧だか馴れ馴れしいのか良く分からない相手だった。

まあいいか、とヒカリは自分を納得させることにし、本題を切り出すことにした。

「ナガレ博士、私をここに呼んだ理由を教えてくださいませんか？」

「ああ、僕のことトウマで構いませんよ。お互い様ですし、貴女も堅苦しいのは苦手でしょう？」

「ナガレ博士ッ」

「……………（ズズー コーヒーを飲む音）」

「……トウマ博士」

「はい、なんででしょう？」

トウマがにこやかな笑みで応えてくれた。

どうやらヒカリにも自分のことを下の名前で呼ばせるつもりのようなのだ。

初対面の男性を名前で呼ぶなんてことできるわけがない。今でこそ「ゴリラ」呼ばわりしているゴオでさえ、1カ月ぐらいの間は「猿渡先輩」と呼んでいた時期がヒカリにはあるのだ……ゴオはそのことを忘れ去っているのだが。

とにかく、ダンナーベースに所属している以上はヒカリに拒否権はなかった。

どうも、この男と話しているとペースが狂う。ヒカリは頭を抱えた。

ヒカリの感情を知ってか知らずか、トウマはコロコロと笑う。

「あはは、貴女は面白いですねえ」

「……トウマ博士」

「ああ、そんな怖い顔をしないで下さい。すぐに本題に入りますから、でもその前に……」

トウマは持っていたカップを置いて、指を鳴らした。
すると研究室の扉が独りでにスライドして開かれ、

「うおお！」

「きゃっ！」

扉に寄りかかってなにかしていたと思われる1組の男女

ゴオとミラが部屋になだれ込み、折笠って倒れた。仲の良い親子亀のように、ゴオの背中にミラが乗りかかっている。

扉の前でなにをしていたのだろう？

大方、中の会話を盗み聞きしていたに違いないだろうが……。

「そんな所で寝てないで、貴方たちも一緒にお話しませんか？」

「はは……いや、しかしね……」

ヒカリの蔑むような視線に気付いたゴオが苦笑いを浮かべた。

「ほら、俺ら邪魔者だし？」

「なーにが邪魔者ですってえ？」

ヒカリのこめかみが引きつる。

「な・に・の、邪魔を、しに来たのかしら？」

「そりゃあれだぜ！ 2人だけの時間っていうかあ、熱いベレーゼっていうか、蜜月の時間っていうか あ、と、とにかくそんな感じ……」

「ふーん」

ゴオが熱弁を振るっていた間にヒカリは席を立ち、ゴオの目の前に移動していた。

手には熱々のコーヒーが入ったカップ。

ヒカリのどす黒いオーラに言葉を詰まらせ、ゴオはヒカリを見上げながら訊いた。

「あのヒカリさん、なにを？」

「あ、手が滑った」

ヒカリの手から黒いマグマの如きコーヒーが零れおちた。

それはを飛沫を上げてゴオの頭に勢い良く注がれる。

「ノオオオオオツ！？」

「あらあら？」

少し冷めたと言え、数分前に注がれたコーヒーだ。

熱いに決まっているそれを頭に浴びせられたゴオは跳び上がり、

部屋の中を転げ回った。香ばしさを漂わせながら身もだえする彼を、ミラは心配するでなくただ眺めていた。

ゴオの体の頑丈さは化け物並みなので、このぐらいどうということはないだろう。

ふんっ、と鼻を鳴らすヒカリを眺めてトウマは笑っていた。

「いやー、貴女たちは面白いですねえ」

「……………」

「ああ、ごめんなさい、そろそろ本題に入りましょうか。どうぞ、ゴオさんもミラさんも聞いていつてください。ヒカリさんはもちろん、ダンナーチームの今後にも関わる話ですので」

「分かりましたわ、トウマ博士」

ミラはゴオを引きずりながら促されるまま机に着いた。

トウマは再び人数分のコーヒークップを取りだし、ブラックを注いで配り終わると自分も席に着き、話を切り出した。

「ヒカリさん、貴女にお願いしたいことがあります」

「私に、ですか？」

なんだろう？ 小首を傾げるヒカリにトウマは、その前に、と問いかけてくる。

「貴女、いえダンナーチームの皆さんは『バスターマシン』という言葉聞いたことがありますか？」

トウマの声は真剣そのものだった。彼は柔らかな笑みを浮かべたままだったが、声に力があり、ヒカリたちの意識を集めるには十分すぎた。

声だけではない、この単語もだ。

「『バスターマシン』……?」

ヒカリはその単語を呟いていた。

彼女はその言葉を聞いたことがあった。

あれは確か……沖女を卒業しダンナーベースに配属されて間もない頃のことだ。

配属されてからの数カ月間、毎日のように繰り返された新人研修の中にその言葉は出てきたのを覚えている。

「オオタ コウイチロウ氏が進めた『RX計画』の一つの完成形、それが『バスターマシン』、そして『ガンバスター』だ」

教官が熱く語っていたのを、ヒカリは良く覚えている。

自分の兄が立ち上げた『RX計画』、そして『バスターマシン』と『ガンバスター』
それらはエクセリオンに搭載され、兄と共に宇宙へと旅立ったという。

現行最強のスーパーロボットだと、教官は言っていた。

兄が関わっている特機、最強であることは間違いないと、ヒカリは確信している。

しかし、なぜトウマからその言葉が出たのだろう。

「博士、なぜ『バスターマシン』なのですか?」

コーヒを啜りながらゴオが聞いた。火傷はもういいらしい、タフだ。

「『バスターマシン』、その言葉は俺らテストパイロットは全員知っている。しかしそれは今地球上にはない。エクセリオンと宇宙に上がったモノの話をしてどうなるって言うんです?」

ゴオの言葉にヒカリは静かに頷いた。

エクセリオンの帰還はまだまだ先のことだ。

この博士は、ないモノの話をしようと言うのだろうか？

『バスターマシン』……この単語を知っていたことに、トウマは満足そうな笑みを浮かべた。

「そうですね、1号機も2号機もエクセリオンと共に旅立ってしまった。今、地球上には存在していません」

「では、なぜこの話を？」

「ゴオさん。私が存在しなかったのは、1号機と2号機です。

『バスターマシン』が地球上に存在しない、とは一言も言っていないよ」

「……と、いうことは？」

ミラの質問にトウマが答える。

「もう1機の『バスターマシン』は存在する。それも貴女たちのすぐ傍にね」

コーヒーを飲みほしたトウマが、にこりと微笑む。

宇宙に上がった2機以外に『バスターマシン』が存在する、トウマの言葉にヒカリは衝撃を覚えた。

十余年の間、ヒカリは兄のコウイチロウに会うことはできない。

『バスターマシン』は兄の手掛けた最強のスーパーロボット……

思い出以外に、兄が地球に残して行ったものがあつたのだ。

嬉しい。

そして一目でいいから見てみたい。兄の残して行った『バスターマシン』を。

「良い目だ。やはり、私の考えに間違いはありませんでしたね」

そう言うのと、トウマは机から立ち上がり、ヒカリに手を差し伸べた。

この差し出された手を、自分はどうすればいいのだろうと戸惑っている、

「英雄オオタ コウイチロウの妹にして、ロボット戦闘の天才、オオタ ヒカリさん」

凜とした声でトウマが言った。

「貴女に託しに来ました。最初にして最後の『バスターマシン』を」

流^{ながれ}凍^{とう}摩^ま、彼から差し出された手を、ヒカリは無意識の内に掴んでいた。

第1話 流の男 3（後書き）

<次・回・予・告>

エクセレン「ハァーイ、出張ナンブ予告団、呼ばれてなくても只今参上！」

キョウスケ「……それでは、ただの迷惑行為だぞ」

エクセレン「えーと、借金の金利を1%上乘せして計算するとー」

キョウスケ「仕方あるまい、今日も元気に次回予告をいかせてもらおう！」

キョウスケ

「黒い巨体、逞しい腕、特機とは人類の希望の光である！」

ヒカリの兄コウイチロウと流 凍摩が作り上げた一つの究極がそこにはあった！

その黒き巨人の名はバスターマシン

次回、スパロボTOP

第2話「巨神遊戯」

どんな装甲だろうと、打ち貫くのみ！」

エクセレン「スパロボ学院もよろしく！（ギリآم風に）」

キョウスケ「次の勝負に勝って、早く借金を返さねば……」

第2話 巨神遊戯

とあるエレベーター内

「しかし、あの博士も性格歪んでるよなあ」

猿渡 ゴオは格納庫に直通のエレベーターの中で毒づいていた。
しかしその顔に嫌悪感はなく、笑顔を浮かべていた。
まるで悪戯を思いついた子どものような表情に見える。

「着任して早にこんな遊びを思いつくなんてよお、普通じゃねえぜ。
うん、変わってる」

「あら、その割には嬉しそうじゃない」

隣に立っていたミラ・アッカーマンが尋ねる。

「へへ、まあな。実を言うと俺もこういう遊びは嫌いじゃねえ」
「もう……本当、いつまで経っても子どもなんだから」

ミラが呆れてため息を付いた。

しかし、へへへ、と頭を掻くゴオを見てミラは顔をほころばせる。

「でも、あなたのそんな所、私は好きよ」

「お、嬉しいこと言ってくれるじゃねえか」

「ふふ、それに私も、こういう遊びもたまには必要だと思うわ。き
つと、ヒカリちゃんにも良いガス抜きになるでしょうしね」

オオタ ヒカリ。その名前が出たことにゴオは苦笑を洩らす。

「……ホント、ミラはヒカリのことを可愛がるよなあ」

「あら、だってあの子、可愛いじゃない。それよりもゴオ、なあに、嫉妬？」

「バツ、そ、そんなんじゃないよ！」

「ふふふ、そんなゴオも好きよ」

「冗談混じりのミラの言葉にゴオは、敵わねえな、と呟いて答える。2人は2人だけの空間で会話を楽しみながら、格納庫へとゆっくり向かっていった。

ダンナーベースがいくら巨大だと言っても、直通のエレベーターの乗っている時間は1分にも満たないだろう。

ゴオたちの隣に彼らの妹分、オオタ ヒカリの姿は見当たらなかった。

今、彼女は流 ナガレ トウマ 凍摩博士と一緒に別行動中だ。

普段は自分のことを貶したり、ぎゃいぎゃい騒がしい分、居なくなると日が消えたように静かになる。

無論、それが嫌だという訳ではないのだが……彼の考えは、軽い衝撃音と重力により中止することになった。

「着いたか」

眼前のドアが自動で道を空け、彼らは目的地に辿り着いた。

ダンナーチーム用の専用格納庫。

40mに迫ろうかと言う蒼い巨人 ゴーダンナーと、それ

と夫婦のようにハンガーに固定されている女性型の特機が目に入る。滑らかな曲線に括れた腰、端正な顔立ち、絵画の中から飛び出してきたように思える外見は、およそ戦場に似つかわしくないのかもしれない。

その戦場を駆ける戦乙女 ヴァルキリー だった。

ネオオクサーはミラの愛機であ

巨大な特機専用の格納庫には、ヒカリの乗機のドラグーンの姿は見たらなかった。

しかし彼女も二度とあの量産機に乗ることはないだろう。

「バスターマシン、か」

ゴオはトウマの言葉を思い返す。

パイロットを生業にするものなら一度は耳にするこの言葉を、あのとき聞くんなんて夢にも思わなかった。

ギガノス戦争の英雄オオタ コウイチロウが手掛けた切り札バスターマシン、そして唯一にして最強の特機と言われるガンバスター。噂ばかり先行して尾ヒレがついているに違いないが、エクセリオと共に宇宙に旅立ったことを考えると、その実力はあながち嘘ではないのだろう。

いいじゃねえか。いい遊びだぜ、流^{ナガレ} 凍摩^{トウマ}博士よお……

自然にゴオの口端は上がっていた。遊び。そう、これは遊びだ。

自分たちはこれから模擬戦を行う。

最強の特機『バスターマシン』とだ。

パイロットなら、これを笑わないでいられるか？

「あらあらゴオ、はしたない顔になってるわよ」

「おうっと、いけねえいけねえ」

ミラの言葉にゴオは顔を手で張って気合を入れた。

そして蒼い巨人を見上げる。

戦場で栄えるだろう雄々しき雄姿がそこにあった。

「あれからもう1年半か。もうそろそろ、本気でやってやってもいいかもな」

「そうね。これからは条件も互角だし、ね」

2人はヒカリが配属になってからの1年半を振り返る。

初めに突っかかって来たのは勿論ヒカリだった。シュミレーターで軽くあしらってやってたら、余程悔しかったのか2人の後を付け回すようになったのを覚えている。

1人暮らして自炊などしないらしく、ミラが猫に餌をやるように食事に招待するとのこのこやって来たのも覚えている。

いつの間にかミラに懐き、先輩ッ、と呼ぶようになっていた。自分はいつまで経ってもゴリラ呼ばわりなのだが……。

可愛い後輩。

2人の中では、これがヒカリへの共通認識であった。

「たまには、マジになるぜ」

「あら、そういうゴオも好きよ」

これは殺し合いではない、遊びだ。

精いっぱい楽しもうではないか。そして噛みしめよう、可愛い後輩の成長を。

2人はそれぞれの乗機への搭乗を開始した。

スーパードット大戦TOP ? Side The Earth ?

第2部 第2話 巨神遊戯きょしんゆうぎ

ブリーフィングルーム

「貴女に託しにきました。最初にして最後のバスターマシンを」

そう言った新任技術主任の手を、ヒカリはなんの抵抗もなく受け入れていた。

思ったより体温の低かった手はひんやりと冷たく、自分の手を心地よく冷やしてくれたのを覚えている。

そんな彼が申し出てきた提案がもう1つあった。

「ダンナーチームの皆さんにはこれから模擬戦をしてもらいます」

それも特機、ゴードンナーとネオオクサーとで、これからヒカリが受け取るバスターマシンと行う。

耳を疑うが、トウマは確かにそう言った。

無茶苦茶だ。

ゴオたちは伝説のバスターマシンと戦えると聞き、意気揚々と準備に向かった。

しかし彼らはダンナーベースのトップ2、しかもシュミレーションでダウンサイジングしたのではなく実機を使った模擬戦……さらに自分の機体はスペックも聞いていない上に上手く扱える保証はない。

トウマは全戦全敗の自分になにをしるというのだろうか？

「別に勝つ必要はありません」

バスターマシンの説明のため同伴したブリーフィングルームでトウマが言った。

「貴女の役割を一言で言うなら、データ収集です。つまり、戦うことに意義があるのです」

「データ収集……？」

なんのためのだろう。首を傾げるヒカリにトウマが説明してくれた。

「簡単・丁寧に分かりやすく説明するならば、貴女に預けるバスターマシンはある目的のために改修された試作機です」

「試作機…… ケーンたちのドラグナーみたいな？」

身近に試作機に乗り戦った人間がいたヒカリには想像は難しくなかった。

試作機、要するに後の量産機に繋げるためのテストケースである。

ケーンたちのドラグナーと帝国の量産型MAドラグーンの関係は、その最たる例であろう。

3機のドラグナーの長所を全て兼ね備えた傑作機ドラグーンの登場で、地球帝国はギガノス戦争に勝利したと言っても過言ではない。しかし試作機と言っても、一概に全て良品ばかりではなかった。試験的な技術を搭載することは負荷が大きく、整備の手間も増える。さらに色々な面で不安定であったり、敵側に奪われて厄介なことになるケースもある（ドラグナーはその例だ）。

そのため、ヒカリは試作機にはあまりいいイメージを持っていなかった。

ワンオフモデルで性能がいくら高かろうが、従性が伴っていないければ無意味だ。

兄のコウイチロウも確か似たような意見だったと思う。

「まあ、そんなこと言わないで」

トウマがにこやかに言う。

「ダンナーベースに居る分には基本設計者の僕がメンテは全て責任を負いますし、ヒカリさんのフォローも全てさせてもらいます」

「フォ、フォロー……それに全部って？」

「？ ああ、私生活には関与しませんよ。プライバシーは守ります、これは契約の基本ですしね」

「あ、当たり前じゃない！」

ヒカリはつい大声を上げてしまった。

常識的なトウマの対応に勝手に勘違いをし、自意識過剰に叫んでしまった。

頬を上気させるヒカリを、トウマは不思議そうな表情で眺めていた。

ああ、もうっ、ペース狂う！

自分のショートの髪の毛をボサボサに掻き乱したい気分だった。というか、いつの間にか敬語で話していない自分がいるのに気づいていたが、トウマが気にしていないようなので取り合えず良しとする。

「と、とにかく、やるしかないんでしょう？　じゃあ早く機体の説明をしてよ！」

「ああ、そうでした。失敬失敬」

ヒカリの言葉にトウマはPCを操作して、ブリーフィングルームの画面にPCの映像を投影した。

そこには黒い、人型のロボットが映しだされていた。

特機の巨体はがっしりと太く逞しく、ゴードンナーの曲線的なラインとは違って刺々しく鋭角なラインをしている。頭部カメラアイはRX-7と同じゴーグルタイプで、背部にはかなり大きなジェットブースターが装備されていた。

さらに特徴的なのは両前腕部に装着された巨大な3連装の杭打ち機
パイルバンカーだった。

銃火器のような装備は見当たらないので、それはオプション装備なのかもしれない。

しかしまあ、何というか、凄い。

ゴテゴテして力強く、邪魔する者は全て粉碎してしまいそうな雰囲気漂っている。

華々しさなど不要とばかりに全身を黒で塗装され、ただ戦うためだけに作り上げられた戦闘兵器のような、いかにも兄の好みそうな外観をしていた。

「どうですか？」

トウマが手を組み、自信ありげに聞いてきた。

「全高38.8m、総重量666t、装甲材は試作型バスター合金とスペースチタニウムを最硬になる割合で使用、推進装置は熱核ギガブースター、動力には私の兄が発明した試作型縮退炉を使用し、最大出力は990」

「ストップストップ！」

ヒカリがトウマに待ったをかける。放っておくと延々と話続けそうだったから。

「時間がないんだから要点だけにしてよ、要点だけに」
「ああ、失礼しました」

咳払いをしてトウマは続ける。

「掻い摘んで言えば、このバスターマシンはガンバスターの試作型でした。」

ガンバスターの基本設計の完成と製造開始に伴い、お倉入りしていたものを改修したものです」

「リサイクルってこと？」

言ってみたものの、これは例えが不味かったかとヒカリは思った。しかしトウマの方は「そう、その通り！」と気にする素振りは全くない。

基本設計者なのだった。少しは怒れよ、という考えは心の中に留めておくことにした。

「現状で強力な機体を眠らせておく理由はないですからね。それにこの機体には新たな役割を担ってもらわないといけません」

「さっきも言っていたけど、それってなんなの？」

「よくぞ聞いてくれました！」

いやいや、訊くように話の流れ作ったのアンタでしょ？

聡明なヒカリは心の中でだけ突っ込みを入れることにした、話が進まないから。

「ガンバスターの量産！ そのためのデータ収集こそが、このバスターマシンの新たな役目なのです！」

ドバーン、と背後で荒波が打ちあげているような鬼気迫る表情でトウマが熱血していた。

「へー」

「あれ、どうしたんですか？ 意外に興味が無さそうですね」

「いや、だって私ガンバスターって見たことないから、量産って言われても実感沸かないかなー」

画面のバスターマシンを眺めるヒカリ。

「でもこの特機がそのための試作機って言うんなら、きっとガンバスターっていうのは凄いいんだろうし、量産される機体もドラグナーの比じゃないってことは分かるわよ」

「そうですね、そうですね！」

『RX計画』の新たな第一歩、その礎となるのがこのバスターマシンなのですよ！」

不必要にテンションを上げられてもこっちが困る。

ヒカリはトウマの話を傾聴するのを止めることにした。

知りたい情報は訊き出す方が早そうだ。

「凄いのは良く分かったわ。

でもこの後模擬戦でしょ？ 出来れば操縦方法ぐらい教えてもらいたいんだけど……」

「ああ、失礼失礼。では、こちらをご覧ください」

トウマがPCを操作すると画面の映像が切り替わる。

等身大の人形が立っている映像とその隣にデフォルメされたバスターマシンの映像が並んでいた。人形の手、足、肩にはロボットアームのようなものが伸びて取り付けられており、頭部には小さな髪

飾り様の装置が取り付けられている。

……なんだろうこれは？ ヒカリの正直な感想だった。トウマに訊いてみる。

「これがコックピットです」

なもので、ヒカリにはトウマの答えが信じられなかった。

普通のコックピットと言うものは単座式なり複座式なり、とにかく座って操縦するように作られている。機体のスペースの問題で立っているより座っている方が空間を有効に使えるし、なにより安定性が良いのが普及した理由だろう。

これでは攻撃を受ける度に転んでしまうではないか。

それに機体操作作用のコンソールがほとんど見当たらないのも、本当にコックピットなのか不審に思う理由の一つだった。

「嘘つかないでよ。こんなコックピットあるわけないでしょう」

「いえいえ、これがコックピットなんですってば」

トウマの答えは変わらなかった。

ヒカリは、そんなはずはない、と少しムキになってしまう。

「コンソールは何処？」

「ありません」

「操縦桿は？」

「ありません」

「……フットペダル？」

「ありませんよ」

ないない尽くしてどういうこと？

こんなものは、もはやコックピットではない。

ただの筒だ。命令をインプットする装置がなければ、機械が動いてくれる訳がないじゃないか。

「……どうやって動かすの？」

「体で動かせばいいんですよ」

「……………」

微笑を浮かべるのトウマの顔が、なんだか馬鹿にされてるみたいで無性に腹が立った。

埒が明かない、とはこういう時を指すのだろう。

百聞は一見にしかず。案ずるより産むがやすし。ブリーフィングルームで燻っているよりも、実際にコックピットを見た方が早いに決まっている。うん、間違いない。

「もういいわ、後は乗ってから聞くことにするから」

「そうですか？ 僕はまだ説明したりないので」

「私はもうお腹いっぱいよ。格納庫、行きましょう」

「あ、待ってください。案内しますから」

トウマが慌ててPCの電源を落とし、ヒカ리를エスコートするように手を取ってきた。

「こっちです」

「う、うん」

トウマの冷たい手がヒカリには涼しく、心地よく感じた。

手の冷たい人は心が温かいという、俗説を聞いたことがある。本当だろうか？ トウマに関しては本当なのだろうな、とヒカリは思った。

しかしブリーフィングルームを出た所で気恥ずかしくなり、手は

解いてもらった。

「あつ」

そしてヒカリは、もう1つ重要なことを聞いていないことを思い出す。

「そういえば、あのバスターマシンの名前を聞いてなかったわ」

「ああ、そうでした。すっかりうつかり」

「すっかりつてアンタねえ、これはかなり重要なことよ」

「名は体を表すですか？ ま、あのバスターマシンは確かにそれを地で行ってますしねえ。」

いいですか、あの機体こそ、最初にして最後に地球に残されたバスターマシン

トウマの声に力が宿った気がした。

言霊というのを信じているわけではないが、名前はその者を形作る重要なファクターだ。気持ちの入れようも名前いかんで変わってくるものだ。

トウマがああ黒い特機の名前を言い放つ。

「その名も、バスターマシン零号機ゼロノイチ、通称バスターゼロ！
地球人類の希望の光です！」

「バスターゼロ……」

言葉の余韻をヒカリは楽しむ。

ゼロ。無を表し、最初の数字でもある。全てはここから始まる、そんな感じ。

良い名前だ。

少し安直ではないかと思わないでもないが、ヒカリにはこのくら

いがちようどいい。

新たな相棒、バスターゼロ。

機体の眠る格納庫へ向かい、ヒカリとトウマは駆けだした

第2話 巨神遊戯（後書き）

<バスターゼロについて>

作者のオリジナル機体です。

作者には絵心がないので、既存のロボットの外見を借用したいと思います。

外見は「スーパーロボット大戦」シリーズに登場するゲシュペンをイメージしてください。

巨大なブースターも付いているので、イメージ的にはタイプRVが一番近く、あれを40mサイズに巨大化し、マッシブにした外見です。

そしてその巨大なゲシュペンストの両腕に、これまた巨大な3連パイルバンカーが装備されている……そんな外見のイメージです。もちろん色は黒。

次回から実際に動きます。

第2話 巨神遊戯 2

バスターゼロ格納庫

ヒカリが案内されたのは特機専用の格納庫のすぐ傍に隣接された格納庫だった。

プレハブのような仮設の巨大なスペースにハンガーだけが設置され、巨大な黒い特機が転倒しないようにしっかりと固定されている。

「これがバスターゼロ……」

あまりに無骨に佇む巨人に、ヒカリは思わず感嘆の声を上げていた。

MAとは一線を越える力強さを内包しているように見える。

ヒカリの愛機であるドラグーンとは違う大きな存在感を彼女は感じていた。もちろん、大きさが関与しているのは間違いないだろう。しかし、それだけではない何かバスターゼロに宿っていると感じるに十分な雰囲気、この人型にバスターマシンからは香ってくる。

「……なんて言うか、凄いね」

「でしょう。私の作った最高傑作の1つでしたからね」

ヒカリの呟きにトウマが答える。

「バスターマシン零号機 バスターゼロ、今から、ヒカリさんにはこれに乗って模擬戦をしてもらいます」

「分かってるわ。でも、あんなコックピットで本当に動かせるんでしょうね？」

バスターゼロを見上げながらヒカリが訊いた。
ブリーフィングルームで見た映像を思い出す。

そうだ、あんなコンソールも操縦桿もないコックピットで、この巨大なバスターマシンを動かせるのか？

疑問に思っていることをぶつけるもトウマは飄々とした笑みを浮かべていた。

「大丈夫ですよー。ヒカリさんは操縦にだけ集中していてくれれば大丈夫です。」

他の出力制御や雑事は、全て搭載されたサポートAIが行うようになってますから」

「サポートAI？」

トウマの説明を聞き、ヒカリには思い出すものがあつた。

サポートAI

機体の操縦を補助するために搭載されている人工知能のことだ。

確か、ケーンたちの乗るドラグナーにも似たモノが装備されていると聞いたことがある。元々民間人であつたケーンたちが、ぶつつけ本番で機体を動かすことが出来たのもこのサポートAIの存在が大きかったと、彼らは言っていた。

しかしサポートAIは機体に直結されるため、熟練パイロットには従性の妨げになることが多いとも聞く。

そういったモノがバスターゼロには搭載されているのか？

もつとも、コンソールもないあのコックピットでは、AIの助力を得なければ機体の制御など行えないだろう。

搭載せざる得ないのも無理はないような気はする。

必要に駆られて付けられた機能にロクなものはない、そうヒカリは思っのだが……。

「まま、そうわずに一度試してみてください。機体の従性はRX-7の比ではないはずですから」

「……そうよね。どちらにせよ、乗らざるを得ないんですものね……いいわ、乗るわ」

ヒカリは自然とため息を付いていた。

そんなヒカリの様子を見守りながら、トウマはどこから真つ黒なパイロットスーツらしきモノを取りだしてきた。

人体の急所になる部分は金属が取り付けられ、闇に溶けそうな黒衣はどことなく忍者を彷彿させる。

「そうそう、操縦時はこの耐G用のマッスルスーツを着用してくださいね」

「マッスル……パイロットスーツじゃなくて？」

「はい、人工筋肉繊維で作られていますので、ヒカリさんの筋力を飛躍的に高めてくれます。それに」

トウマはにこやかな笑みを浮かべて言った。

「着ないと吐いちゃいますよ、多分。最悪、骨とか折れちゃうかもしれませんね」

「いや、ほがらかに怖い宣告されても困るんだけど……」

失敬失敬、とトウマは謝罪してマッスルスーツを片手でヒカリに渡す。

受け取ると同時に、ずしり、と異様な重量感がヒカリの両腕に伝

わって来た。人工筋肉繊維製、なるほど普通のパイロットスーツよりは遥かに重い。

トウマはこれを片手で持っていた。

実は意外と馬鹿力？

とにかく、ヒカリはマッスルスーツに着替えることにした。

自分は外からサポートすると言い、トウマは格納庫から去って行った。模擬戦を見ながら指示できる場所に移動することだった。マッスルスーツは着用する際にボディラインにフィットするように収縮してくれた。

全身の筋肉が締め上げられる感じ。

最初こそ違和感を覚えたが、慣れてくると体が軽くなり、普段よりダイナミックな動きが出来そうな気分になる。

「……しゃあないわね」

更衣室で着替え終えたヒカリはバスターゼロを見上げて言った。

ナガレ トウマだけでなく、兄であるオオタ コウイチロウも開発に関わったという。

だから、この漆黒の特機に憧れが無いわけではない。

純粹に戦うために生み出され、人の想いを映し出す鏡のように動く鋼の巨人。

ヒカリはこのような機体が嫌いな訳ではなかった。

近づいてハンガーに設置されたパネルを操作する。すると床がゆっくりとせり上がり、ヒカリの体をバスターゼロのコックピットのある胸部付近まで持ち上げてくれた。

「本当になにもないわね……」

胸部装甲が展開されコックピットが剥き出しになっていた。

ブリーフィングルームで見せられた映像どつりにコンソールや操縦桿の類は何処にも見当たらない。

ただコックピットが一番奥　　単座式のコックピットでシートが設置させる場所に相当するのだろう　　には等身大の鉄板のようなものがある。

良く分からないが、操縦時はあそこに体を固定でもするのだろうか？

しかし鉄板以外に目立つた操縦機類が本当に見当たらない。

「サポートAI、ないと確かに動かせそうにないわね、これは」

独り言を呟きながらヒカリはコックピットの中に入る。

中は意外と広く、直径2m程の球体状になっていた。球体状の壁はおそらくモニターで外部情報などを表示するのだろうが、とにかく動かせなければ意味がない。

「イグニッションキーは何処よ？」

これまた独り言。

コックピットにはモニターと鉄板以外に目立つたものは見つからない。

「ん、なにかしらこれ？」

しかし無機質な鉄板の裏側に、白い光沢のある球体が迫り出しているのをヒカリは発見した。

大きさは手のひらで掴めるぐらい、外見は一昔前の火災報知機のような。病院の天井とかに取りつけられている、あれである。

しかし特機のコックピットに報知機など不要だろう。火災が発生

したときなど撃墜されるときに他ならない訳だし、隠すようにして設置している理由が不明だ。

もしかやイグニツションキーか、という考えに至ったヒカリは球体を掴んでみた。

反応なし。

左右に回してみようとするも回転せず、押しても引いてもビクともしない。

「なんなのよ、このポンコツ！」

一向に事態が進展しないことに対して怒りを覚えたヒカリは、それをぶつける様に球体に蹴りを加えた。完全に八つ当たりである。

バチツ、ヴンツ……

すると急にコックピット内の光源が灯る。

モニターと思われた壁が消えた。

いや、全周の壁に外部映像が映し出されたため視界が開けたように錯覚する。

コックピットハッチが自動閉鎖されて密閉された。

しかし、周囲に映る外部映像のためか不思議とヒカリが閉塞感を感じることはない。

『ようこそマスター』

どこからともなく男性の声が聞こえてきた。

『これよりマスター登録を行います。どうぞ、コントロールパネルに背を預けて下さい』

「サポートAIか、いきなり声だけ聞こえてくるってのも気味悪い

わね……ま、いいか」

『網膜パターンなど、パーソナルデータの取得を開始します』

AIに言われるままコントロールパネル 鉄板に体を預け

ると、今までのつぺらぼうだった鉄板の各所に穴が開き、多数の口
ボットアームが展開されてヒカリの体を拘束した。

「なっ？」

手と足、肘に膝と、およそ人体の主要な関節部分がロボットアームで保持された。結構な力で絞めてくる。トウマ曰く、骨が折れるとはもしかしたらこの事なのかもしれない。

同時に余ったロボットアームがヒカリの瞳孔を照らし、網膜パターンを登録を完了した。

『登録完了。マスター、名称登録をお願いします』

「オオタ ヒカリよ。ねえ、それより、これどうにかならないの？」

ヒカリが体を縛るアームを見て言う。

『名称登録完了。ダイレクトモーション開始』

「ちよつと無視してんじゃないわよ。どうにかしなさいよ、これ」

『ネガティブ否定。それは機体の操縦に不可欠な部品ですので、外すことはできません』

感情籠らぬ声でAIは答えた。

そう言えば、トウマに見せられた映像にもアームで固定された人形が映し出されていた。そして人形の隣には、デフォルメされたバスターゼロの姿があり……もしかしてこのアームは……。

恐る恐る右手を動かしてみた。

重い。アームのせいでもかなり重いが、マッスルスーツのおかげで動かせないことはない。

眼前に手の平を持つてくると、モニターにはバスターゼロの手が映し出されていた。

なるほど、そういうことか。得心できたが、

『ロック』

AIの声と同時にアームが固定された。

もはや幾ら力を入れてもビクともしない。まるで山でも背負っているようだ。

『まだ全行程が終了していません。勝手な行動は慎むように』

「なにすんのよ、このポンコツ！ 私はこの機体を操縦しなきゃいけないのに、完全に拘束してどうすんのよ！」

『否定。^{ネガティブ}まだダイレクトモーション導入が完了していません。完了すれば拘束を解除します。それに』

淡々とAIは言い、

『私はポンコツではありません。私の呼称は^{コードネーム}ゼロ。バスターマシン零号機のサポートAIです』

さり気なく自己紹介していた。

バスターゼロのAIだから『ゼロ』、なんとまあ安直と言っかなんと言っか……しかしヒカリはそう言うのは嫌いではない。

ゼロの声は、どこことなく憤りを感じさせた。名前があるのにポンコツ呼ばわり、人なら怒ってしかるべきだろう。

AIに感情があるのかは分からないが。

「じゃあゼロ」

ボジティブ
『肯定』

「さつさと済ませて行きましょう」

ボジティブ
『肯定』 脳波検知モジュールを装着し、ダイレクトモーションは完了です』

鉄板からアームがせり出し、ヒカリの頭に髪飾り大の装置を2つ装着した。

『ダイレクトモーション、リンク完了。操作法を説明します』

ゼロの声を聞き、トウマから操縦法を聞き忘れていたのを思い出す。

というより、埒が明かなかったので聞かなかったのだが、ダイレクトモーションという操縦法は見たことも聞いたこともない。

手足はヒカリの動きに追従して動くのだろうが、その他の作業はどうするのだろうか？

RX-7やMAでは、コンソールを使った出力調整や武器選択などの仕事は山のようにある。

しかし、バスターゼロのコックピットにコンソールと思しきものは存在しない。

『出力調整、その他の雑務は全て私が請け負います』

ああ、そんなこと言ってたっけ、とヒカリはトウマの言葉を思い出す。

『マスターにはコックピット内で体を動かして頂きます。』

右手を動かせばバスターゼロはそれに従い、蹴りを放てばバスターゼロも蹴りを行います』

先ほどヒカリが右手を動かしたとき、バスターゼロの右手は動いていた。

体の各部に装着されたアームが機体に直結しており、ヒカリの動きに連動してバスターゼロを動かすのだ。

ダイレクトモーションリンク、つまり機体に直接動きを繋げるということだろう。

四肢の動かし方は分かったけど……

他の問題が一切解決していない。

歩くときはどうするのか？ 走るときは？ 跳ぶときは？ 加減や程度はどうするのか？

素朴なヒカリの疑問に、ゼロは質問を受ける前に答えてくれた。

『四肢を動かす格闘以外の動作、つまり歩いたり走ったりや武器の選択などの行動は、全て頭の中でイメージするようにしてください』

「イメージ？」

『頭部の脳波検知モジュールから思考を解読し、私を経由して動作がバスターゼロにインプットされます』

ゼロの言葉の意味をヒカリは考える。

思考がそのままバスターゼロにインプットされて、動作に繋がる、ということとは。

「つまり、考えるだけでバスターゼロが動いてくれる、ってこと？」

ボジティブ

『肯定。あくまで実現可能な範囲ですが』

「それは……凄いね」

ヒカリは感嘆の声を漏らしていた。

ロボット操縦とは、レバーを動かせば全て済むような単純なものではない。

訓練された兵士が複数の作業を行うことでやっと動かすことができる、とても高度な技術なのだ。

無論、全ての行動をマニュアルで入力しては戦闘など行うことは出来ないだろう。

そのため全てのロボットたちはモーションパターンを登録して使用している。そうすることで特定の動作をスムーズに行えるようになるからだ。

RX-7やMA、そして特機にしろ、この概念に違いはないはずである。

しかし今のゼロの説明は違った。

思考するだけで機体が動く？

それは思考をそのまま動作としてインプットし、動作として発現できるということ。

つまり、考えが即実行されるため、モーションパターンの登録など不要、ということになる。

これ、画期的な技術じゃないの？

トウマの顔が脳裏に浮かんだ。

いつも笑顔を浮かべてヒカリのペースを乱すあの男。

間違いなく只者ではない。伊達に若くしてダンナーベースの技術主任に抜擢されたわけじゃない、ということか。

『マスター』

ゼロが声をかけてきた。

『疑似人格プログラムに破損を発見。』

初起動時にプログラムのインストールを推奨していますが、いかが
しましょう?」

「破損? それで動作に支障が出る可能性は?」

ネガティブ
否定」

「じゃあ入れていいわよ。動けば問題ないし」

ポジティブ
肯定。インストール実行します。

しばらく会話できなくなりますが、バスターゼロのサポートは引き
続き行います」

ゼロが言い終わると同時に、バスターゼロは固定されていたハン
ガーから解放される。

『どうぞ』

「ありがとう」

ヒカリが礼を述べるがゼロからの答えは返ってこなかった。イン
ストールとやらを開始したようだ。

「さてと」

本当に上手く動くのだろうか?

不安がないわけではない。取り合えずヒカリは、先ほど動いた右腕
動かしてみることにする。

ロックが解除されたためか、先ほどのような重量感はなく、自然
に腕を動かすことができた。

右手、動く。

バスターゼロもそれに追従。

左手も動き、両拳を握ったり開いたりしてみる。バスターゼロは
ヒカリの動作を機体に反映して動いてくれていた。

次は、歩く。

ヒカリはまず歩くことをイメージする。

1歩、まず1歩だ。右足を軽く踏み出すイメージをした。

するとバスターゼロがイメージした通りに右足を踏み出し、ハンガーから片足を下ろしていた。

次は左足。もう一度右足。右左、右左とヒカリはイメージする。

頭の中で繰り返し広げた光景を、バスターゼロは実現し歩いてくれている。

気持ちいい。まるで自分が巨人になったかのような感動を覚える。RX-7は従性に優れていたが、この動かしやすさは確かにその比ではない。

ただ少し、重量のためか動作が重いのが玉に傷だが。

「慣れれば、最高の操縦法かもしれないわね」

技術が確立して量産されれば、この操縦法は間違いなく普及するだろう。

バスターゼロでのデータ収集は、そう言った意味でも有意義なものかもしれない。

「さて、行きましょうか」

ヒカリは頭の中でバスターゼロに走るように命令した。

バスターゼロは格納庫の出口に向き直り、駆け足で外へと向かう。演習場を目指し、バスターゼロは燦々と降り注ぐ太陽の下に駆け出した。

第2話 巨神遊戯 2（後書き）

この話で登場するバスターゼロのサポートAI「ゼロ」。

この話での彼のモデルは「フルメタルパニック」の「アル」です。

このお話で登場する作者のオリキャラは彼が最後だと思います。

さて、次回はいよいよバスターゼロの初陣です。

よかったら読んでくださいね。

第2話 巨神遊戯 3 (前書き)

バスターマシンVSゴードナー&mp・ネオオクサー。
勝敗はどちらに降るのか？

巨神たちの遊びが始まるのでございます……なんつって。
今回戦闘シーンのため長めです。

第2話 巨神遊戯 3

演習場 監視塔

ダンナーベースには機動兵器の模擬戦を行うための演習場が存在する。

ベースから少し離れた所に増設された広大な敷地には、演習を監視する監視塔以外にはなにも遮蔽物はなく、ただ単純に機体の操作技術だけがものを言うようになっていた。

シュミレーションバトルだけでは身に着かない実戦の勘を養うため、実弾の使用まで許可されている。

無論、死傷者が出ぬよう監視塔から観察する。

そういう意味では、戦闘を止めることもできるため安全と言えば安全なのかもしれない。

演習場には既に2機の特機 ゴーダンナーとネオオクサーの姿があつた。

まだ対戦相手の機体は現れていない。

「すいません、遅れました」

監視塔に辿り着いたトウマが、先に到着していた葵 霧子所長と影丸司令に挨拶をした。

「あ、もうゴオさんたちの準備はできてるみたいですね」

「ふっ、当然だ」

演習場に待機するゴーダンナーとネオオクサーに対しトウマが声

を上げると、霧子がそれに答えた。

「練度が違うよ、練度が。たかが演習の準備程度なら10分もかからないさ」

「そうですね。それに比べてヒカリさんは初めての特機……」

「うむ。しかしそれを考慮しても遅すぎる気がするが……」

影丸が顎に手を当てながら呟いた。

トウマがヒカリと別れてから既に30分は経過していた。

トウマはベースに慣れていないため時間を喰ってしまったが、演習場は彼が徒歩30分で到着できる程度の距離だ。

特機であればもう着いていても不思議ではないはず。

「なにか、トラブルでも起こっているんでしょうか？」

「ふふ、いいさ。待つのもまた一興」

霧子は監視塔の椅子に腰かけ、愛用のメンソールを吹かせながら不敵な笑みを浮かべる。

「私の造ったゴードンナーと、トウマが造ったバスターマシン、どちらが優秀かな？」

「はは、ご期待には添えると思いますよ」

霧子の笑みに対しトウマがナチュラルな笑顔で対抗した。

「お手並み拝見といこうじゃないか」

霧子は口の端を上げて言うと、新しい煙草を取り出し火を付けた。トウマの鼻に紫煙が届き、ヤニ臭さを覚えるが耐えられない程ではなかった。

それに目の前の葵 霧子博士に、彼が不快感など抱くはずもなかった。

行き場をなくしていた自分と兄を、地球帝国の科学チームに引き入れてくれた恩人だ。兄は既に研究班から離脱していたが、その恩をトウマは一生忘れることはないだろう。

「お、来たぞ」

演習場の端から漆黒の特機

バスターゼロが姿を現した。

ズシンズシン、と重低音を響かせながら駆けてくる。その足取りから不安定さを見つけることはできない。

頑張ってください、ヒカリさん

オオタ コウイチロウの妹、ロボット戦闘の天才オオタ ヒカリ。
あの機体は、バスターゼロは若い力にこそ託すべきなのだ。
自分が見出した操縦者に、トウマは心の中でエールを送っていた。

「そろそろ始めるか？」

「そうですね、お願いします」

トウマの答えを聞いた霧子は、外部スピーカーの電源に手を伸ばした。

ダンナーベース 演習場

輝く青空、今日もダンナーベースの頭上には日本晴れの空が広がっていた。

バスターゼロのコックピットは全周囲型のモニターをしている。当然、頭上の空と輝く太陽もコックピットに立つヒカリの頭に降り注いでいた。

バスターゼロの黒色の機体は良く熱を吸収し、今や熱した鉄板のように熱くなっているにちがいない。

「よお、遅かったじゃねえかヒカリ」

蒼い巨人 ゴーダンナーと、それに寄り添うにして女性型の特機 ネオオクサーがモニター上には表示されていた。

ゴーダンナーは猿渡 ゴオの、ネオオクサーはミラ・アッカーマンの愛機である。

「逃げ出しちまったかと思っただぜ」

演習場への到着が遅れたヒカリに、ゴオから嫌みにも似た言葉が送られてきた。

「冗談、誰がアンタなんか背中を向けるもんですか」

まったく失礼な事を言う男だ、とヒカリは思っていた。

今まで挑む挑まれるは別にして、ヒカリは目の前の勝負から逃げたことはない。

ゴオだってそれは知っているはずだ。

彼はいつも挑まれる側だったのだから……要するに今の彼の言動は、ヒカリに対する挑発なのだ。

「今日こそ、ボコボコにしてゴリラのいる動物園に送ってあげるわ」
「おー、怖」

ヒカリが親指を立てて先を下に向けると、ダイレクトモーションが即応して、バスターゼロも親指を地面に向けてくれる。

素晴らしい従性だろう。

一方、ゴードナーはおどけて見せるように肩をすかしていた。優れた操縦技術をそんなことに使わないでもらいたいものだ。

「揃ったようだな」

監視塔から葵 霧子所長の声が聞こえてきた。

「ではこれより、ゴードナーとネオオクサーペア対バスターゼロによる模擬戦を開始する。正確なデータ収集のため実装武器の使用を許可するが、相手を殺傷することが目的ではない。

これ以上は危険と判断した場合、こちらにある緊急停止装置を作動させてもらうからそのつもりでな」

緊急停止装置……外部からのアクセスで機体の運転を強制終了させる装備だ。

機体の強奪などに備えて、ダンナーベースの機体にはすべからく実装されていた。

無論、切り札の特機であるゴードナーとネオオクサーは言うまでもないだろう……ヒカリのバスターゼロはどうだが不明ではあるが。

どちらにせよ、ヒカリが目の前の2機と戦うことになるのは間違いない。

そびえる壁のように立つ、ダンナーベース最強の2体の特機。
対して自分はトウマと兄が手掛けたバスターマシン。
面白いじゃないか、パイロット冥利に尽きるというものだ。

「それじゃあ、模擬戦を始めな！」

霧子の歯切れの良い啖呵が監視塔から響いてきた。

「先手必勝よ！」

合図と同時に、ヒカリは攻撃を仕掛けることにした。

ゴードンナーとの距離は目測100m以上あるが、ヒカリはバスターゼロの背部巨大ブースターを噴かせて、距離を詰めるようにイメージする。

奇襲はいつでも勢いよくだ。

先制攻撃をモノにして、イニシアチブ自分のモノにするのだ。

頭の脳波感知モジュールがヒカリの思考を理解し、バスターゼロの熱核ギガブースターが火を噴いた

「え、きゃッ

」

ヒカリの言葉尻を吹き飛ばす程の、強烈なGが彼女の体に押し掛かっていた。

バスターゼロはその推力で巨体を急加速して、ゴードンナーとネオオクサーの間をすり抜けてしまう。

一瞬で流れてしまった風景と腹を圧迫する圧力に、ヒカリは吐き気を催した。

しかしそれまで脳波感知してしまったのかバスターゼロはバランスを崩して、頭部から演習場の地面に激突、勢い余って何度も地面に叩きつけられながら進んでいく。

うえええっ、と、止まれ、止まれ止まれ！

懇願にも似た思考を感知し、ブースターが止まってバスターゼロは地べたに這いつくばるようにして停止した。

痛い、それに気持ち悪い。

コントロールパネルに固定されたままのヒカリは、トウマが吐くかも、悪くて骨折と言っていたことを思い出す。

確かに、この対G用マッスルスーツ……必需品かもね……

色気のない漆黒のスーツがGを和らげてくれてなければ、おそろく吐しゃ物でさらに色気のない姿になっていたことに違いない。筋力強化されてなければ本当に骨が折れていたかもしれない。想像を絶する未体験の超加速だった。

「おい、なにやってんだヒカリ？」

「あらあら、ヒカリちゃん大丈夫？」

「くっ……」

屈辱だ、敵役2人に心配されるなんて！

「うつむ、やはり、脳波コントロールだと慣れていなければ制御が不安定になりますね」

「あははは、欠陥品だ欠陥品！」

監視塔から、ギャラリーである天才博士2人の会話が聞こえてきた。

うつ、そういうことは先に言っておいて欲しかった、とヒカリはトウマに対して思った。

……まあ、面と向かって言っても「いやあ、うつかりうつかり」で済まされそうだが……。

だが、従性が高すぎるというのも考えものかもしれない。スペックも完全に把握していない現段階では、無茶なイメージはせず、ブースターも使わないほうが無難だろう。

ヒカリは機体を起き上がらせた。

結構な速度で地面に激突したにも関わらず傷一つない、バスター合金は伊達ではなかった。

「かかって来なさい！」

「あ？ 先手必勝って言ってたの誰だよ？」

「う、うるさいわね！」

コックピットで赤面するヒカリ。

もういい、武装はなにかないか？

周りを見渡すも、全周天式のモニターしか見当たらない。

ああ、そうだ、コンソールがなかった。

「まあいいや。ミラ、まずは俺から行かせてくれよ」

「いいわよ、その代わり、私の分も残しておいてねゴオ」

「分かってるって、ははは」

ゴードンナーがバキバキ指を鳴らしながら、和やかな会話を交わして歩いてきていた。

駄目だ、完全に舐められている。

早く武器を……駄目だ、ヒカリが慌てて手を動かしても、バスターゼロが連動して動くだけだった。

「そうだ、ねえ、ゼロ」

ヒカリはバスターゼロのサポートAIに話しかけた。

「なにか武器はない？　ゴオにひと泡吹かせてやれるような強力やつだよ」

『……………』

ゼロは無言のまま答えなかった。

代わりにモニターに武装一覧が表示された。

『出力係数30%』

使用可能内蔵武装　トライアングルバンカー　イナズマレッグ』

トライアングルバンカー…………バスターゼロの両腕に装備された大型の3連パイルバンカーのことだろう。

しかしイナズマレッグとはなんだろう？　それに出力30%って低すぎるにも程がある。

こうしている間にもゴードナーはゆっくりこちらに迫ってくる。それはまるで、故意にヒカリに時間の余裕を与えているように見える。

どちらにせよこのままではシュミレーションの二の舞、いやもっと惨めな負けが待っているだろう。

「ちょっとゼロ、もっと他にいい武器はないの？」

『……………』

返事のないゼロにヒカリの苛立ちは募る。

「ちょっと、なんとか言いなさいよ」

『……………うるせえな』

「え？」

感情の籠った、具体的に言うと「低血圧の男が、朝に無理やり起こされたときに見せるかなりキレ気味の声」に似た音声が、狭いコックピット内に響いた。

ヒカリ、絶句。

ゼロはこんな話し方をしていなかった気がするが……ゼロの音がコックピット内に響く。

『俺様に命令してんじゃねえ！』

「え、えええええっ！？」

つい30分前まで無機質な応対をしていた新しい相棒の豹変に、ヒカリは驚きを隠しきれない。

「おやあ、これはおかしいですね」

ヒカリの様子を観察していたトウマが回線越しに呟いた。

「僕の用意していた『疑似人格プログラム』はこんな性格ではなかったはずですが……」

「疑似人格プログラム……？」

トウマの言葉を聞き、ヒカリはその単語を聞いたことがあるのを感じ出した。

確か格納庫から出陣する前に、豹変する前のゼロが聞いてきたはずだ。

「インストールしますか？」、と。

そしてこうも言っていた。

「疑似人格プログラムに破損が見つかりました」、と。
「いやあ、まさかね……そんな馬鹿な！」

「ヒカリさん、バスターゼロの起動前になにか乱暴なことしませんでした？」

「そんな乱暴なことしたりしなわよ。特機だって精密機械」

トウマの質問にヒカリは自信満々に答えようとして、

「あ」

と、自分の行いの記憶が頭に色鮮やかに蘇って来た。
蹴った。

確かに蹴った。

コントロールパネルの後ろに隠れるようにして出っ張っていた、
白い半球を思い切り足蹴にしたはずだ。

思い出されるそのときの音

バチッ、ヴン！

……あれか。嫌な汗がヒカリの額を濡らす。

「……したんですね？ まったく、もう」

「う……」

「元々『疑似人格プログラム』は操縦者との円滑なコミュニケーションを図るために用意していたものです。

僕が用意したのは『男らしくて、強くて優しい男性』をイメージしたプログラムのはずなんですが……」

『お前ら、俺様を無視して話してんじゃねえぞ！』

会話に割って入ってくるゼロのため息を付いてトウマが言った。

「淒く、男らしいですね」

「これじゃあ、ただの俺様野郎だよ！」

『俺様を無視すんなんて言ってるんだろ、このボケども！』

ヒカリが頭を抱えると、体のロボットアームを通じて、バスターゼロも頭を抱えるポーズを取ってくれる。

もう、こんなところまで再現しなくてもいいのに、ヒカリは心の中で嘆いていた。

そんなときトウマがヒカリに声をかけてきた。

「それより、ヒカリさん危ないですよ」

「なによ、少しぐらい悲しみに浸らせてくれても

って、え

？」

トウマの指摘にヒカリの視線はモニターに戻った。

するとどうだろう、巨拳を振り上げたゴードンナーが目の前に居るではないか。

「ゴードンナーパンチ」

間延びしたゴオの声と共に放たれた鉄拳を、バスターゼロは躲すことが出来なかった。

豪快な金属音と共に胴体にクリーンヒットする。

「きゃあーーーー！！」

『ぎゃあーーーー！！』

そして、1人と1体の悲鳴と共にバスターゼロは叩き飛ばされた。監視塔を揺らすほどの大きな地響きが、衝撃となってヒカリの体突き抜けた。

息が止まってしまいそうな程のダメージだったが何とか耐え、ヒカリはバスターゼロを起き上がらせる。

『痛ってー、おいしつかり避けやがれヒカリ!』

先に口を開いたのはゼロの方だった。

『しつかりしろよ、お前マスターだろ?』

サポートAIに呼び捨てにされたヒカリのこめかみには、何本か青筋が走っていた。

発進前、ゼロは確かに言っていた。

「動作に支障は出ない」と。

あのAIの保障に間違いはなかったが、代わりにヒカリのメンタルバランスはもうスタボロだ。

「……アンタ、マスターの意味分かってないでしょ、このポンコツ!」

ヒカリは思わず叫んでいた。

『あん? マスターはマスターだろうが。それより俺様の名前はゼロだ、間違えんじゃねえ!』

「うるさいよ、このポンコツ!」

『なんだと、このマスターめ!』

「ポンコツ!」

『マスター!』

「ポンコツ!」

実に不毛な争いがコックピットでは勃発していた。

回線を通じて声が漏れていたのか、ゴードンナーからゴオの呆れた笑い声が入ってくる。

「はっ、なにをやつとんじゃお前は？」

ゴオが鼻で笑ったのを、彼女たちが聞き逃すはずがない。

「なんですって!？」

『なんだと、コラ!？』

ゴオの一言で1人と1体の殺気がゴードンナーに向けられた。

ああ、イライラする。

この胸の中の怒りを、ヒカリは全てゴードンナーにぶつけてやることに決めた。

「いいことゼロ。アイツが諸悪の根源、青ゴリラよ」

『ほう……なあヒカリ、実を言うと、俺様は地球とド えもん以外の青い奴は大嫌いなんだ。』

ちなみに赤も嫌いだ。金色と黒以外は皆死ねばいいと思っている』

ゴードンナーがモニター上でヒカリを見据えていた。

シュミレーションで何度も辛酸を舐めさせられた相手だ。

ゼロの告白を聞いてから、なんだか青というだけで悪のような気がしてしうがなくなった。

「あら奇遇ね。ちょうど私も、アイツをボコボコにしたいでしょうがなかったのよ。」

ゼロ、協力してくれる?」

『Fuck You! OKだヒカリ、ぶっ殺してやるぜ!』

どこで学習したのだろう、ゼロは下劣なスラングを吐き捨てた。
下品な言葉だが今のヒカリの心情を表すにはちょうどいいのかもしれない。

猿渡　ゴオめ、目にモノ見せてくれる　　　　ヒカリとゼロの思考と目的が一致した。

AIに思考という概念があるかは別として、この新しい俺様な相棒とは意外と上手くやっていけるかもしれない、とヒカリは思う。
ヒカリは腕組みをしてゴードンナーを睨みつけた。

「行くわよ、ゼロ！」
『合点承知！』

腕組みをしたままのバスターゼロ、その周辺に立ち込めていた霧
囲気が変わった。

じりり、と空気が揺らいで見える。

バスターゼロから放出される熱量が明らかに増加していた。

バスターゼロに搭載された試作型の縮退炉　　　　宇宙戦艦用エ

クセリオンに搭載されたエンジンの試作型　　　　が唸りを上げ始

めた。燃料のアイスセカンドが少量ずつ相轉移し、その轉移較差の
間から莫大なエネルギーを抽出して動力へと変換する。

本来なら膨大なエネルギーを必要とするワープ使用前提の、規格
外の動力炉がバスターゼロには搭載されていた。

出力係数40%。

具体的な数字が、腕組みしたままのバスターゼロのモニターには
表示されている。

「へっ、やる気になるのが遅えなあ、ヒカリ」

パイロットは霧囲気の変化に敏感だ。

ゴードンナーが大きな拳を握りなおし、ヒカリに構え直していた。

「さっきの貸した。お前に先行を譲ってやるよ」
「後悔しても知らないわよ！」

ヒカリはゴードンナーの懷に飛び込むイメージを頭に浮かべた。
背部ブースターの馬力は先ほど嫌というほど思い知ったが、この
際だ、もう一度使ってやる。

いや、今度こそ使いこなしやると心の中で決意する。
ゴードンナーの大きな胸に飛び込んでいくイメージで、バスター
ゼロは1歩目を踏み出した。

「ゼロ、武器は？」

『トライアングルバンカーなんかどうだ、ヒカリ？』

両腕に装備された3連パイルバンカーだ。

「いいわ」

『OK、初弾Set Up、超電磁加速用エネルギー充填完了済み、
いるでもいいけるぜ』

息の合ったやり取りを交わし、直後にはバスターゼロのブースタ
ーが火を噴いた。

意識をもぎ取られそうなGがヒカリの体を襲うが、

「速い！」

その苦痛の代価は、回線を抜けてきたゴオの驚きの声として現れ
た。

圧倒的な早さの踏み込み。MAなど比ではない速度の加速を乗せ
て、右手のバンカーをゴードンナーに向けて叩きつける。

「ちい！」

「遅いわ！」

ゴードンナーは腕でバンカーを受け止めようとする。

しかしそれよりも早くバンカーの鉄芯がゴードンナーの胸に命中した。

だが通らない。

堅牢というに相応しい装甲がトライアングルバンカーを見事に受け止めていた。

「まだ、これから！」

『風穴開けてやるぜえ！』

トライアングルバンカーの鉄芯射出装置に送られていたエネルギーが爆ぜる。

レールガンと同じ仕組みで超電磁加速された鉄芯が

『「トライアングルバンカーッ！！」』

咆哮と共に打ち出された。

装甲に接触した状態から鋭利な鉄芯がゴードンナーを襲う。

接触音が唸り、ゴードンナーは吹き飛ばされた。

「くっ、やりやがったなヒカリ！」

装甲貫通には至らなかったが、ゴードンナーの胸部装甲は大きく窪んだ。

ゴオの聲がヒカリに確信させる。いける、このバスターゼロなら猿渡 ゴオと十分に渡り合える。

電磁誘導され射出装置の中に収められた鉄芯は、次回射出に向けて充電を開始した。破損せぬ限り何度でも使える主力武器、それがトライアングルバンカーだった。

「今度はこっちから行くぜえ！」

ゴオが宣言すると、ゴードナナーはバスターゼロに突っ込んできた。

蒼い巨体がヒカリに肉薄し、ゴードナナーが鉄拳を振るってくる。

『ヒカリ、脚だ、脚を使え！』

「脚？ こう！？」

ゼロの助言のままにヒカリは蹴りを放った。

ダイレクトモーションがコントロールパネルを通じてバスターゼロ口を突き動かす。

稲光を纏った右脚がゴードナナーの拳を迎撃した。

「なに！？」

「うわっ！」

ヒカリは思わず目を覆ってしまう。

拳と蹴りが接触した瞬間に、対生物用の超高压電流がゴードナナーを奔っていた。

特機であるゴードナナーにそれは致命的になることはないが、物理的な衝撃で拳を弾き飛ばされた。

ゴオからは信じられない、といった風の声が漏れ出ていた。

「おいおい、まじかよ？ ダンナーのパンチが防がれるなんてよお……軽くショックだぜ」

「あらあらゴオ、大丈夫？　なんだか苦戦しているみたいね」

ネオオクサーからミラの声が聞こえてくる。

「なんなら、私が代わりましょうか？」

「へっ、そんな必要ねえよ。でもまあ」

楽しそうに笑うゴオの声。

「バスターマシンか、こりゃあ予想以上だぜ。どうだミラ、お前も一緒に遊ばねえか？」

「ふふふ、もう子どもなんだから……ねえ、ヒカリちゃん？」

身構えるヒカリにミラが話しかけてきた。

「せっかくの機会だし私もこの戦いに参加していいかしら？」

「ミラ先輩……」

「実機での戦闘なんて、この機会を逃したら二度と来そうにないものね。それに」

ヒカリの好きなミラの優しい声が耳をくすぐる。

「私も、貴女がどこまで成長したのか見せて貰いたいわ。

あれから、もう一年半になるんだもの、子猫がどこまで大きくなったのかとても気になるわ」

「……先輩、私だっていつまでも」

『うるせえ、ブス！！』

ゼロが吠えた。

「あなたの背中ばかり見ている訳じゃないですよ」というヒカリ

の言葉は、ゼロの大きな暴言によってかき消される。

『いつも上品そうな顔しやがって、そんな奴の方が腹の底ではなに考えてるか分からねえもんだぜ!』

「ちょ、ちよつとゼロ、止めなさい!」

『大方、彼氏に隠れて浮気しまくってるんだろ? このビッチ!
!』

ピキイ、額に青筋が走りまくるミラの顔が、ヒカリの脳裏に浮かんだ気がした。

「……………」

「……………あのミラ先輩?」

ミラは無言だ。普段から温厚なミラが本気で怒ったところなど、ヒカリはベースに来てからの1年半で一度も見たことはない。

しかし常時優しい人が怒るとどうなるのかは、世界の共通認識で間違いないと思う。

ひでえなあこりゃあ、とゴオの呟きが聞こえた。

なにか弁明しなければ、ミラにかける言葉をヒカリが探している
と、

『やったぞヒカリ、これで敵は戦闘不能だ』

色々と逆撫でしてくれるゼロの声が聞こえてきた。

「……………この」

『おおつと褒めなくてもいいぞ。俺様は当然のことをしただけだからな。』

だがそれでも褒めたいというのなら、あえて受けようじゃないか。

そうだな、言葉の魔術師^{マジシャン}とでも呼んでもらおうか』
「黙れえっ、このポンコツ!!」

饒舌に、無意味な言葉を吐くだけでなく unnecessary な仕事を増やしてくれる AI に、ヒカリの怒号が炸裂した。

「このポンコツめ、ミラ先輩になんて事いうのよ!？」

『なんだ素直じゃないな。俺様はヒカリの心の内を代弁してやっただけだというのに、この恥ずかしがり屋め』

ああ、姿があつたら殴りたい……そのとき。

「うふふ、そうなんだ……」

「ひっ、ミ、ミラ先輩?」

低いドスの聞いたミラの声がヒカリの体を震わせた。彼女のこんな声聞いたことが無い。

怒っている、間違はなく怒っているというか激怒していた。

「ち、違うんですミラ先輩今のは全部ゼロが言ったことで私はそんなこと一つも思っていないんですよ」

慌ててヒカリが弁解するが、早口のあまり語尾を噛んでしまった。

「ぜーろー?」

明らかにキレているミラの声。

ヒカリはゴオに救いを求める視線を送ったが、ゴードナーは腕組みをしたまま事を傍観していた。

普段ゴリラゴリラ言っている仕返しなのだろうか、肝心な時に役

に立たない男は嫌いだ。

『ああ、それと俺様の名前はポンコツじゃねえ、ゼロだって言ってるんだろが！』

今更そんなことを掘り返すゼロの言葉はスルーすることにした。
ゼロの空気を読まない発言にヒカリは思う。

前言撤回、コイツ最悪！

帰ったらトウマに疑似人格をデリートしてもらおう。
自分の行い（蹴り）を棚に上げての思考だったが、ミラの言葉でそれは遮られる。

「ヒカリちゃん、そのバスターマシンは一人乗りのはずよね？」
「いや、そうなんですけど、そうじゃないって言うか……」
「言い訳はよさない」

ミラは冷たく言い捨てた。

その直後、離れた場所で観戦していたネオオクサーが動く。その
臂力りよりよくを活かして空高く跳躍し、バスターゼロに迫って来た。

「悪い子にはお仕置きよ！」

ネオオクサーが右脚でバスターゼロの頭部を狙う。
しかしゴードナナーより幾分パワーが劣る蹴りは、バスターゼロ
の腕で簡単に弾き返すことができた。

だがネオオクサーは弾かれた勢いを利用して空中で身を翻す。
回転を活かした強烈な踵落としがバスターゼロの頭部に命中した。
ヒールが頭部装甲にめり込み、強烈な縦揺れがヒカリを襲った。

「行くわよ、ゴオ！」
「あいよ！」

ミラの声かけにゴードンナーが動いた。

ヒカリがバスターゼロの体勢を立て直すほんの一瞬で、機体はゴードンナーとネオオクサーに挟まれる陣形となった。

まずい、特機の格闘を無防備に喰らえば、確実に行動に支障が出る。

「ゼロー、なんとかしなさい！」

『イエツサ、いや違うアイマムか？』

余裕綽々、ふざけたゼロの声がコックピットで響いた。

そしてモニターに表示される出力係数が上昇し、50%に到達する。

バスターゼロからの排気がさらに熱を持ち、ラジエーターがフル稼働し始めた。

「これで終わりよ！」

「ダンナーコンビネーション！」

2機はバスターゼロを挟み討ちにし、同時に拳を叩きつけてくる。MAを一撃で粉碎する拳骨が二つ、左右から迫ってくるのは恐怖以外の何者でもない。

だが刹那、バスターゼロ周辺の空間が奇妙に歪んだ。

『イナーシャルキャンセラーだ、受け止めなヒカリ！』
「ちっ！」

ヒカリは両手をかざし、直撃寸前の拳をバスターゼロの手で掴んだ。

しかしこの程度で防ぐことは敵わない。直後に襲うだろう衝撃にヒカリは歯を食いしばった。

だが衝撃は襲ってこなかった。

「おいおい、嘘だろ？」

代わりにゴオの間の抜けた声が聞こえてきた。

バスターゼロが2機のパンチをあっさり受け止めていたのだ。

イナーシャルキャンセラー 本来、宇宙戦艦のワープアウ

ト時の強烈な慣性を相殺する、ワープ用のブレーキのようなモノがバスターゼロにも備わっていた。

慣性は物理法則だ、移動するもの全てに適応される。

要するに、それで2機のパンチの勢いを削いでキャッチした、そういうことなのだがヒカリはその事を知らなかった。

目の前の出来事に驚きながらも、今が、絶好のチャンスだということとは理解していた。

「やああああっ!!」

マッスルスーツで強化された筋力で、2機を思い切り引っ張る。

リアルに重い、持っているモノの重量がヒカリに繋がっている口ポットアームにフィードバックされているようだ。

ヒカリはそれを引き切り、バスターゼロに引き寄せられた2機が機体の眼前で正面衝突した。

「うわっ！」

「きゃあ！」

ゴオとミラの悲鳴が聞こえた。

2機が体勢を崩している、今こそ好機。

「ゼロ！」

『イヤハー、Rock'n Roll！！』

バスターゼロの縮退炉が唸りを上げて、さらに出力があがる。
出力60%、戦闘開始時の2倍だ。

『右腕部バンカー、初弾、次弾、3弾目充電完了！ 行け、ヒカリ！』

「トライアングルバンカーッ！！」

バスターゼロが勝機とばかりに右腕を振り上げ、2機に向かって振り下ろした。

狙うは防御態勢の整っていないゴードナー、今なら直撃できるはずだ。

しかしそうは問屋がおりさなかった。

「エンジェルウォール！！」

ネオオクサーが間に割り込み、自慢の防御障壁を展開させた。

シングルプラスマドライブが作り出す純粋なエネルギー障壁は、イナーシャルキャンセラーとは違って慣性だけでなく全てを打ち消す。

バンカーの鉄芯が障壁に接触し、エネルギーが火花となって爆ぜ、受け止められた。

「ヒカリちゃん、貴女にゴオはやらせないわ」

ミラの声が聞こえてきた。

「正直驚いたわ……強くなったものね」

「いいえミラ先輩、驚いてもらうのは……」

「これからだぜえ!!」

1人と1体が吠える

『「いちッ!」』

バスターゼロの右腕から炸裂音が響いた。

バンカーの1発目が発射され、鉄芯がネオオクサーのエネルギー障壁に大きくめり込んだ。

『「にいつッ!」』

次弾が電磁加速されて打ち出された。

1撃目と近い場所に打ち込まれ、エンジェルウォールはさらに大きく押し込まれる。

「くっ……そんな!？」

『これで』

「3連よ!!」

3弾目の鉄芯が撃鉄の弾きに似た音と共に射出される。

エンジェルウォールはさらに押し込まれ、大きく歪み……大きな音を立てて砕け散った。

その余波をともに受けたネオオクサーは後方に吹き飛ばされ、熱を持ったトライアングルバンカーは次回攻撃に備えて再装填される。

「やるじゃねえか」

ネオオクサーを優しく受け止めたゴードンナーから、ゴオが言った。

「まさかこれ程とはなあ、正直舐めてたぜ」

「舐めてた、ね。その言葉尻だと少しは認めてくれたところかしら？ 光栄だわ」

「ヒカリよお、心にもねえことを言うもんじゃねえぜ」

ゴオの言葉には、どこか皮肉に似たものが含まれていた。

実際、コックピットでは苦い笑みを浮かべているかもしれない。

猿渡 ゴオ、彼はダンナーベース最強のパイロットである。

彼とゴードンナーの真の力はまだまだこんなものではないはずだ。

「ミラ」

ゴオが声をかける。

「合体だ、やるぞ」

「え、でも……なんにも演習でそこまでしなくても……」

ミラの言葉が濁る。

合体、それは体を一つに合わせること。

ヒカリは今までの作戦で、ゴードンナーとネオオクサーが合体したところを見たことがなかった。

ギガノスのMA程度なら、合体する必要性など生じるはずもないからだ。

「ミラ、ヒカリは全力で俺たちに向かって来ている」

真剣な声がヒカリの耳にまで届いた。

「なら俺たちも全力で迎え撃ってやる、それが先輩の務めつてもんだぜ」

「……そうね、ゴオ」

ミラがゴオの言葉に頷くのが、まるで見えるようなやり取りが終わる。

そんな貴方だから私は貴方の事が……、よく聞こえないミラの呟きがヒカリの耳に残った。

ゴードンナーに抱かれていたネオオクサーが大地に立ち、バスターゼロに向き直った。

ゴードンナーとネオオクサーのプラスマドライブが高周波を出しながら回り始める。

「いくわよ、ゴオ！ ドライブチェンジ、ゴオッ！」

ミラの声と共に、ネオオクサーは空中高く飛翔する。

「おお、ミラ！ ドライブチェンジ、ゴオオオオッ！」

ゴオの掛け声と同時に、ゴードンナーも天高く跳び上がる。

燦々と照り輝く太陽をバックに、2機のシルエットが重なった。

来る！

ダンナーベース、日本州の要である研究所の最強中の最強が。その最強を迎え撃つために、ヒカリとバスターゼロは身構えたの

だ
っ
た。
。

第2話 巨神遊戯 3（後書き）

次回はいよいよゴードンナーTDMの登場です！
勝負の行方はどうなるのか？

果たしてヒカリはゴオに勝てるのか？
レッツ、下剋上……なんつって。

第2話 巨神遊戯 4（前書き）

やっと更新……自分、まじ遅筆。

やっぱり合体はスパロボ好きのロマンだね。

第2話 巨神遊戯 4

この瞬間を、猿渡 ゴオはまさに歓喜していた。

「ドライブチェンジッ、ゴオオオッ!!」

熱い雄たけびを上げながら、彼は愛機、蒼き巨人ゴードンナーを大地を蹴り、空高く跳び上がらせていた。

今、彼の眼下には漆黒の特機 バスターマシン零号機が立ちふさがっている。

伝説のパイロットであるオオタ コウイチロウが手掛けた機体……霧気もさることながら、その戦闘力を実感して、ゴオは久しぶりの苦戦に胸躍らせていた。
楽しい。

葵 霧子にゴードンナーのパイロットとして選ばれてから今まで、これほどまでに心を熱くさせてくれる敵に出会ったことがあっただろうか？

いいや、おそらくこれが初めてだろう。

確かにミラ・アッカーマンや藤村 静流は強い。
しかし違うのだ。

彼が求めていたのは荒々しさ、そう言っても差し支えない血が沸き立つような戦いであった。

いいぜ……ヒカリ

久しぶりの苦戦、そして快感にゴオは敵パイロットの顔を思い浮

かべていた。

いつも自分に突っかって来てはあしらっていた後輩が、いつの間にか自分に迫る程に成長していたことに喜びすら覚える。

認めてやるよ、お前は強敵だ！

だから理解させてやろう。

ヒカリが自分の背中を追い越すことは、まだできないのだと。いずれその時が来るのだとしても、それは決して今ではないのだ。

見せてやるぜ、ゴードンナーと俺たちの真の力を！

ゴオが合体シーケンスを開始すると、ゴードンナーは瞬時に装甲を展開し、胸部になにかを取り込むように大きなスペースをもつ形態へと変化した。

そしてゴオのパートナーミラのネオオクサーは華奢な肢体を折りたたみ、ゴードンナーの胸部スペースにドッキングする。

エンゲージ
ENGAGE!!

結合、を意味する英語がモニターに表示された。

次の瞬間、ゴードンナーとネオオクサーのプラズマドライブが連結して共鳴、単体では成しえない程のエネルギー量を作りだす。

ゴードンナーの機体色が燃え上がるような赤色に変化、余剰エネルギーが爆炎となって頭部から噴き出し、四肢のシリンダーモジュールが解放された。

ゴオの足元のハッチが開き、ミラの操縦席が移動、単座だったコックピットが複座式になる。

「ゴードンナーTDM!!」
シンドライブモード

太陽のように熱く燃える紅き巨人
の最強が降臨した。

ダンナーベース最強中

演習場 監視塔

「ふふ、あの子、ゴオの奴を本気にさせちまったね」

監視塔で観戦していたトウマの耳に霧子の呟きが聞こえてきた。
トウマの提案で始まった演習はヒートアップし、猿渡 ゴオ側が
切り札である合体を慣行、着地してバスターゼロに対する。

ゴードンナーTDM……霧子の造り上げたゴードンナーとネオク
サーが合体することで完成する、ゴードンナーの最強形態であった。

「ま、これでゴオの勝ち揺るがないわ」

自信ありげに霧子が視線を向けてくる。

TDMは、プラズマドライブを連動させることで莫大な動力を生
み出す。ただ単に1つ、1つの動力が足されるのではなく、相乗効
果により数倍のエネルギーを発生させることができた。

1+1が3にも4にもなり得る……言うやすすし行うは難しい装置
の実現に、霧子は成功していた。

その結晶がゴードンナーTDM、彼女の切り札でもある。

「さて、どうでしょうね？　結果は最後まで見てみないと分かりませんよ」

ならば自分の切り札はバスターゼロの潜在能力、そしてそれを引き出しうるヒカリの存在だ。

彼女が日本最強を前にどこまでやれるのか見てみたい。
見てみたいのだが……

「ふふ、あんたも存外負けず嫌いみたいだね……ま、なんにせよ、そろそろコイツの出番かもね」

霧子の手握られる小さなリモコンスイッチ。
それを横目に、トウマは演習場で構えるバスターゼロに目をやった。

ヒカリさん、貴女の可能性を僕に見せてください

今まさに、第2ラウンドのゴングが打ち鳴らされようとしていた。

演習場

ヒカリは目の前に降り立ったゴードナーTDMを見て呟ていた。

「これがゴオの切り札か……明らかに、さっきとは雰囲気が違うわ

ね」

赤く変色したゴードンナーはネオオクサーを取り込む事によって、まるでパンプアップしたレスラーのように前胸部が肥大化していた。フル稼働するプラズマドライブの波形が、まるで無限の記号を描くように透けて見えている。

余剰のエネルギーが噴き出し、火炎の超人とっていいような印象を受けた。

「合体、か。

少し反則臭いけど、これはこれでなんだか燃えるシュチュエーションね」

『ケツ、どうせ嫁さんと合体して興奮してんだろ。赤面して恥ずかしいねえ、赤ゴリラちゃん』

毒舌を吐くゼロだが、その言葉がゴオに届いているのかは不明である。

別に聞かれたくもないので、ゴオからのリアクションがないのは別に構わなかったが、

「ちょっとゼロ、アンタ本当に口悪いわねえ。気が抜けるから変なこと言わないでくれない？」

『だってよお、俺様は赤いの大嫌いなんだぜ。早く消火しちまおう、ヒカリ』

「ま、そこは同感かな」

無駄に人間臭いゼロとの会話を終え、ヒカリはゴードンナーに構えた。

モニター上の出力係数は60%のまま。

先ほどはこれでネオオクサーのバリアを破壊することができた。

しかし合体した今となってはどのようなだろう？

「そついやアンタって敵の戦力を分析したりできないの、AIなんだし？」

『ヒカリよ、俺様は万能だぜ』

ゼロは自信満々に答えたが……。

『しかしイヤだね。できんことはないけど、メンドイし』

「アンタねえ……本当にAIなの？ ……ふう、いいわ、データだけ分かってもしようがないし」

どんな相手だろうとヒカリのやることは変わらない。

情報があるにこしたことはないが、戦闘中にハッキングをかけて下手に処理能力が落ちる方が問題だ。

ゴードナナーをコアに合体している様子だし、基本的な戦闘スタイルは変わらないだろうと推測した。

『そうそう、漢ならどんな相手でも撃ち貫くのみ、だぜえ』

「私は女よ。それにしても撃ち貫くか……ねえ……ゼロ、この機体に射撃武器はついてるの？」

『バスターゼロは漢の子！』

「……要するにないのね、まったく……」

ゼロの答えにヒカリは再びため息をついた。

射撃武器がない。

これだけで戦闘の幅はかなり狭まってしまった。

合体してパワーアップしたゴードナナーに接近戦を挑むのは、無謀というか、かなり厳しいモノがある。

だがやるしかない。

「おい、ヒカリ」

ゴードンナーのゴオから通信が入って来た。

「どうした、かかって来ないのか？」

ダーダンナーが手招きしている。

高い操縦技術をまた無駄に使った挑発だ。先手を取らせてくれるつもりらしい、舐められたものだ。

「うるさいわね、作戦会議中なんだから少し黙っててよ」

「おいおい、戦場でそんな悠長な」

「演習でしょ。30秒だけ待って」

ゴオは「しゃあねえ奴だぜ」と呟きを漏らして、ヒカリの希望に答えてくれた。

なんだかんだで、優しい男なのだ。

この隙にヒカリはゼロに尋ねる。

「ゼロ、出力ってどこまで上げられる？」

『安定して上げられるのは70%までだぜ』

「70%って……100%は無理ってことなの？」

『出来ねえことはねえけどよ、バスターゼロの動力は、元々宇宙戦艦用の試作型縮退炉だ』

縮退炉 氷の同位体アイスセカンドを相転移させることで

莫大なエネルギーを抽出する炉心だ。

おそらく、現行で存在するロボットや戦艦の動力の中では、最も馬力のある品物だろう。

ゼロは言う。

『40mサイズの特機じゃあ、80%以上の出力に機体フレームが長時間持たねえんだよ。下手すりゃ機体が崩壊して、炉心がズドンだ。』

そんな理由もあって、バスターゼロはお蔵入りしてた訳、ドゥーユー・アングスタン？』

「なによそれ、欠陥機じゃない！」

『そんなこと俺様が知るか！ だからこそ、ガンバスターの開発が決定したんだろうよ』

ゼロの言葉を要約してみよう。

70%以下の出力ならバスターゼロは安全に戦闘ができる。

しかし80%以上の出力で戦闘すれば、バスターゼロは時限爆弾付きのロボットに早変わりする、といった所か……。

冗談じゃない、危険すぎる。

『ヒカリは知らねえようだから教えといてやる。』

ガンバスターの機体サイズは200m超 縮退炉の力を完全に制御して使いこなすには、そのクラスの巨体と堅牢さがないと不可能って話だぜ』

200m……バスターゼロやゴードナーの軽く5倍だ。

想像しがたい巨体だが、今はそれよりも目の前の敵、ゴードナーTDMをどうするかが重要だった。

ヒカリはゼロに訊く。

「70%まではいけるのよね？」

『出力調整など俺様にかかれれば造作もない。やるか、ヒカリ？』

「ええ、行くわよゼロ！」

『任せとけ!』

縮退炉の唸りが強まったのは、ゼロの咆哮がコックピットに木霊した直後だった。

画面上に出力係数70%と表示され、機体が動かしてもいないのに微振動し始める。

時折、機体表面を小さくスパークが奔っており、これ以上出力を上げるのはなんだか躊躇わた。

なるほど、これが今出せる最大戦力ということか。

「ヒカリよお、もう30秒は経ったぜ」

「そろそろ始めましょう」

ゴオとミラの声が聞こえてきた。

「言われなくても、こちらから行かせてもらいます!」

ミラの言葉に答え、ヒカリはゴードンナーに突進するイメージを描く。

射撃武器がなく、演習場に遮蔽物もなかった。作戦など立てようもない。

ならばとヒカリは考えた。

思い切りよく、正面切つてのガチンコ勝負だ。

『やれえ、ヒカリ!』

一瞬で至近距離に詰めたバスターゼロのトライアングルバンカーを振るう。

遠慮は一切しない。3連を叩きこんでやる。

「バンカーッ!!」
「甘いぜえ!!」

ゴオの声が聞こえた刹那に一閃、振り上げられたゴードンナーの脚にバスターゼロの腕は蹴り上げられていた。

トライアングルバンカー、不発。

ヒカリの一瞬の思考を余所に、ゴードンナーは蹴り上げた足を踵落としの要領でバスターゼロに叩きつけてくる。

「くっ!」

慌てて腕でそれをガードさせるが、強烈な威力に演習場の地面が大きく窪んでしまっていた。

腕部損傷表示は一撃でイエロー、まともに格闘を受けるは厳しい。そんなヒカリの考えを読むかのように、ゴードンナーが後ろ回し蹴りを放ってきた。

「うっ!」

左腕部で防御するも、強烈な衝撃と共にバスターゼロは大きく吹っ飛ばされてしまった。

脚から着地することができたものの、左腕のバンカー射出装置が火花を上げている。

『左腕部トライグルバンカー破損、使用不可! 赤ゴリラの野郎、やりやがったな!』

「くそ、一体どうなっているの? さっきはバンカーを直撃できたのに……」

頭を振って呟くヒカリに、ゴードンナーからゴオが話しかけてき

た。

「ヒカリよお、来る手さえ分かってりゃ、幾らでも対処の仕様があらうってもんだぜ」

「くっ、ゴオ……！」

「それに、お前は少し俺たちのことを舐めてかかって来なかったか？」

合体してもゴードンナーはゴードンナー、動きそのものが変わる訳じゃない、とかよ？」

図星のゴオの言葉、ヒカリの額に冷や汗が流れる。

「合体した以上は俺がメインパイロット、ミラがサブパイロットだ。普段の操縦での雑務……出力制御や管制制御の雑務はミラがやってくれる。」

つまり、俺は操縦に専念できるってこった」

ヒカリに語りかけながら、ゴオはゴードンナーをバスターゼロ目掛けて走らせてきた。

ゴードンナー右前腕部のシリンダーモジュールが回転する。

炎に似たエネルギーが右腕に集中し、まるで拳が燃え上がっているように見えた。

「それに俺はゴードンナーのパイロット、要するに接近戦のスペシヤリストだぜ。」

ヒカリ、お前は俺の土俵に上がったのさ

「

ゴードンナーが右腕を振り上げた。

来る ヒカリは横っ跳びを想像しゼロに伝える。

「カウンターナックルッ!!」

ゴードンナーの腕から炎球のようなエネルギー体が発射された。バスターゼロはブースターを吹かして、炎球を回避する。炎球は少し離れた場所で四散した。

直後、強烈なGから解放されたヒカリの目には、じりじりと黒く焦げて残された炎球の道筋が入って来た。なんと言う凄まじい熱量だ……直撃すればただではすまない。

「まだまだ行くぞぉ!」

ゴードンナーからカウンターナックルが3連発で打ち出された。迫る炎球、ヒカリはそれをバスターゼロにステップさせて躲す。

「合体すると中距離戦闘も可能なの!？」

『この火の玉ボーイめ! 行っただれヒカリ、接近戦だ!』

「言われなくなっただ……!」

次々と打ち出されるカウンターナックルをステップで躲しながら、ゴードンナーとの距離を徐々に詰めていく。

あと一足飛びの距離まで接近したとき、バスターゼロはブースターを使って一気に肉迫し、

「イナズマレッグッ!!」

超高圧電流を流して威力をいや増した蹴りをゴードンナーにお見舞いした。

「だから甘いつて!」

しかしゴードンナーの裏拳で、バスターゼロのイナズナレッグは弾かれる。

続けざまにゴードンナーの鉄拳が降って来たが、機体を擦じらせることで回避に成功した。

直後にバスターゼロがローキックを放ち、それは命中したがその程度ではゴードンナーは揺らぎもなかった。

「どうしたヒカリ、その程度かよ！」

「くそっ……！」

真剣のような手刀をゴードンナーが抜き放ち、バスターゼロはそれを腕部をクロスさせてガードする。

再び、直下型地震に匹敵するのではと錯覚するほどの縦揺れがヒカリを襲う。

『左腕部損傷率50%、ヒカリ、これ以上格闘を貰うんじゃねえ！行動に支障がでるぞ！』

分かっている、ゼロの忠告など百も承知だ。

しかし接近戦を仕掛けている間の被弾は必至である。

かと言ってこちらの攻撃は防がれ、あちらの攻撃は当たる……離れたらばカウンターナックルの洗礼を受ける……このままではギリ貧だった。

意表をつく攻撃、それしかない！

手刀を弾きのけると、それに合わせるようにゴードンナーの前蹴りが飛来する。

ヒカリはそれを、バスターゼロに後ろに飛び退らせて躲した。バスターゼロとゴードンナーの間に少し距離が空く。

「ゼロ！」

「任せとけ、俺様に不可能はねえ！」

ヒカリの思考を脳波モジュールを通じて読み取ったのか、ゼロはヒカリの声に呼応した。

ゴードンナーは少し離れた途端にカウンターナックルで攻撃してきた。

燃え盛る巨大な火球がバスターゼロに迫る。

エネルギーの塊である火球を直撃すればただでは済まないだろう。しかしヒカリはそれを躲した。バスターゼロのブースターを噴射し、一瞬で上空高く飛翔したのだ。

「なに！？」

ゴオもバスターゼロが空中に逃げるとは思わなかったようであった。

しかし飛行能力のない40mの巨体が空中に浮けば、それは格好の的である。

ゴオは戦闘のプロフェッショナルだ。

チャンスは逃さない。案の定、カウンターナックルが襲いかかって来た。

「ゼロ、これは耐える！」

『根性オオ！！』

イナーシャルキャンセラーはエネルギー兵器には利かない、バスターゼロの装甲だけが頼りだった。

腕だけでなく、脚部も使って空中で亀の甲羅のようにがっちり防御する。

爆音を響かせて、カウンターナックルがバスターゼロに直撃し、炎が機体を包んだ。

元々損傷していた左腕部バンカー装置は弾け飛び、左腕部にはレツドアラート。

しかしこの間に、右脚部にパワーを貯めた。

「イナズマ踵落としッ!!」

バスターゼロは炎の中から飛び出して、ゴードンナーに踵を叩きつけた。

「ぐあッ!?!」

予想外の動きだったのか、ゴードンナーの頭部にバスターゼロの踵が直撃した。

金属が軋む耳障りな轟音がヒカリの耳に届いて来る。

666tの巨体から繰り出される蹴りを終えて着地すると、ゴードンナーは地面に膝をついていた。

「よし!」

『ざまあみろ、赤ゴリラめ!』

ヒカリが歓喜の声を上げるが、

「ちっ、やってくれんじゃねえか」

ゴードンナーはすぐに立ち上がって来た。

ダメージが無いわけではなさそうだが、やはりイナズマレッグの直撃1回程度では倒せる相手ではない。

「完全に意表をつかれたぜ。だがなヒカリ、2度目はない。もう俺に油断はないからな」

「一撃喰らっておいで良く言っわね」

ヒカリは強気にゴオに返答していたが、彼女には彼の言葉に込められた意味を探ることができなかった……。

ゴオが自分程度は相手にならないと吐き捨てた言葉なのか。

それとも機体の回復のため、時間稼ぎのために投げつけたブラフなのか。

ヒカリには分からない。しかし

「……アンタなんか……負けてられないのよ……！」

以前から思っていた言葉を、ヒカリはコックピットの中で呟いていた。

「条件対等で……負けちゃ、あの子に申し訳立たないでしょうが……！」

目の前に立ち塞がる特機は、日本州最強の鋼の巨人だ。

天才 葵 霧子博士が作りだした史上最高の傑作機と言っても良いだろう。

日本でゴードナーTDMに勝てる機体など存在しない……しかしヒカリは思う。

だから、どうしたと言うのだ！

ヒカリは負ける訳にはいかなかった……あの少女との約束を守るために！

約束したんだ！ あの子に負けない、兄貴に負けないロボット乗りなるって！

敵は強い。

だからどうした？ そんなことは関係ない。

ヒカリは誓ったのだ。あの後輩の子のように強くなると、あの子たちに誓ったのだ。

「そうかい、分かったぜヒカリよお」

ヒカリの耳にゼロの声が聞こえてくる。

「おめえ、見かけより熱い女じゃねえか？ 俺様は嫌いじゃねえぜ、そういう女」

「……スケベね、アンタ」

ゼロは勝手にヒカリの思考を読み取っていた。

脳波検知モジュールを付けている以上、思考がゼロに流れているのは仕方ないことなのだろう。

しかし知っているとしても、言葉に表すことないじゃないか。

「人の思考を読まないでよ」

「わっははは、すまねえすまねえ、でもそれが俺様の仕事なもんでね」

ダイレクトモーションリンク……四肢の動き以外は、サポートAIに頼らなければならない。

だからゼロの言葉は真つ当なものだし、バスターゼロを動かす以上避けては通れないモノだ。

そうだと言って、ヒカリの怒りを避けることなど出来るはずもない。

ゼロは彼女の過去覗き見たのだから。

しかしゼロは言う。

『そういうマスターじゃなきゃ、俺様だって命を懸けられねえぜ』
「ゼロ……？」

どこか覚悟を決めたような雰囲気、ゼロの言葉からは漂ってきた。

『……いいか、ヒカリ……一瞬だ』

命を懸けた決闘に向かう戦士のような声色をゼロは持っていた。

『一瞬なら、力を引き出してやってもいい』

力を引き出す……それはバスターゼロに直結しているゼロには、命を懸けるに等しい言葉だろう。

だが彼は言ったのだ。ヒカリの感情を読み、それに命を懸けてもいいと。

トラブルメーカーなだけだと思っていた相棒が言った言葉……ヒカリはそれに感銘を覚えていた。

「……ありがとう、ゼロ」

『よせやい。俺様だって、赤ゴリラが嫌いなだけだぜ……後はお前次第だ、ヒカリ』

ゼロがヒカリに命を懸けてくれた。

はっきり言っておこう、これは演習だ。

演習で命を落とすことほど、兵士にとって無意味なことはないだろう。

兵士にとって最上に意味あることは、生きる、ことなのだから。生き残らなければ、名誉など手に出来るはずもないからだ。

しかしヒカリとゼロが懸けたのはプライドだった。

ゼロは主への信頼を、ヒカリは好敵手との誓いを、この勝負の瞬間に懸けたのだ。

だからこそヒカリは思う。

この勝負だけは絶対に負けるわけにはいかない。

「行くわよ、ゼロ！」

『合点承知！』

迎え撃つ態勢を取ったゴードンナーに向かって、ヒカリは真正面からバスターゼロを突撃させた。

「俺に油断はねえってのに、いい度胸だヒカリ！」

ゴオの声が聞こえてきた。

猿渡 ゴオは、ダンナーベース最強のパイロットであるのは間違いないだろう。

先ほどのような不意打ちが2度も通じるとは考えにくかった。

だからどうした！？

ヒカリはこんな所で負けてなどいられない。

事実として、ゴオに33回もシュミレーターで負けていたとしても、こんな所で負けてなどいられない。

タカヤ ノリコと誓った約束のために、こんな所で負けてなどいられない！

脚部に装備された電撃兵装……ならばきっとできるはず！

やってみる！ いや、やってやる！

きつと、自分にも、バスターゼロにもあの技ができるはずだ！

「トライアングル、バンカーツ！！」

「っ！？」

ヒカリの咆哮と同時に、バスターゼロの地面に突き立てたバンカーが炸裂した。

演習場のアスファルトが砂嵐のように巻き上がり、粉碎された破片で視界が塞がれた。

ヒカリは打ち上げられた破片を蹴り飛ばし、そしてバスターゼロの臂力を全開に空中へ飛び上がった。

「今よ、ゼロ！」

『縮退炉、出力80%！』

バスターゼロの内部が唸りを上げ、機体が電光に包まれていく。

「目隠しのつもりか！」

ゴオの視界は粉塵に包まれていた。

トライアングルバンカー

あの妙な杭打ち機を、自分のゴ

ーダンナーに再び叩きつけてくるものだと思っていた。

しかしヒカリはそれを地面に打ち付け、巻き上がった土煙でゴオの視界を奪っている。

肉眼で敵

バスターゼロは確認できなかった。

「ミラ」

ゴオは眼下のミラに言った。

「索敵だ！」

「やってるわ！」

ミラからの返答は作戦中のものそのもの……余裕は感じられない。敵は何処に居る？ 正面からか？ 側面からか？ さすがに背後までは回れないだろう。

そう考えていた瞬間、数個の影がゴオの方に飛び込んできた。

「くっ……！ なんだ、岩か！？」

打ち碎かれ、勢いを持ち弾丸となった地面をゴーダンナーが叩き落とす。

「上よ、ゴオ！」

「なにっ！？」

ミラの声にゴオは視界を上に向けた。

バスターゼロの黒い巨体がそこにあり、巨体は稲光に包まれていた。

なにかをするつもりだ……そう、ゴオは直感する。

「ミラ、ハートブレイカーだ！」

「え？ ……でも」

ミラの声には戸惑いを感じられた。

ハートブレイカー

それはゴードンナーTDMの必殺技…

…それを可愛い後輩に叩きこむのか？ そんな語気が込められている。

だがそんな状況ではなかった。

「やれ！ やらなきゃやられる！」

「……分かったわ、ゴオ！」

ゴオの声にミラが出力を上げた。

2基のプラズマドライブのエネルギーが、ゴードンナーTDMの右腕に全て送られる。

「ハートブレイカーアアツツ！！」

2人の咆哮と共に、必殺の右腕が唸りを上げる

ゴードンナーTDMの右腕部に力が集中していくのを、ヒカリとゼロは感じていた。

『全出力、右脚部に集中！ やるぞお、ヒカリ！』

出力80%の縮退炉のエネルギーがバスターゼロを駆け巡り、御しきれぬそれが雷光となって機体表面を奔り抜けた。

余剰エネルギーも含めた全てが、バスターゼロの右脚に集まってくる。

コックピットのヒカリの足にも感じる……そんな錯覚を覚える程の力が湧きあがって来た。

見せてやるわ、猿渡 ゴオ！

沖女時代、天才であつた自分が敗れた必殺技……自分の顔に傷をつけた、タカヤ ノリコの必殺技を！

横一文字の顔の傷が痛み、ヒカリに力を与えた。

そんな感覚と共に、ヒカリはバスターゼロの機体を動かし、ブースターを最大出力で吹かせた。

「これがマシン兵器乗り、伝統の大技」

黒い巨人が赤い巨人に舞い落ち、

『「イ・ナ・ズ・マアアアアアアアアッ」

ゼロが共に吼える。

『「キイイイックッ……」』

過去にヒカリが敗れた雷光の右脚が落雷のようにゴードンナーへと落ちていく。

しかし

「ハートブレイカアツツ

！！」

ゴードンナーの右腕がバスターゼロの右脚に放たれた。

両者が接触し、凄さまじい衝撃が演習場を駆け抜けたが、全重量とパワーを乗せたイナズマキックがその程度で防がれるはずもない。一瞬の内にゴードンナーの右腕を蹴り碎く……はずであった。

ゴードンナーの右拳とバスターゼロの右脚が衝突した。

合体してからこれまで、体感した事のない衝撃がゴオとミラを襲う。

ググググツ、とゴードンナーの右腕がバスターゼロに押し込まれていく。

マジか！？ ゴードンナーが押されるとは！？

ゴオは信じられなかったが、これは事実だ。
ハートブレイカー単発では勝てない！

「ミラあ！！」

「分かってるわ！！」

シリンドーモジュールにチャージした力を、2人は炸裂させた。

「フルスロットルッ！！」

1撃目に続く、破壊的な2撃目がゴードンナーの右腕から放出された

「フルスロットルッ！！」

回線からゴオとミラの声が聞こえてきた瞬間、ヒカリの乗るコックピットに強い衝撃波がせり上がって来た。

体内を通り抜けるような強い刺激。息がつまりそうだった。しかしそれだけでは済まなかった。

続けざまに3発、最初の右腕との衝突と合わせると5発の衝撃波がヒカリを襲う。

「がはっ！」

『野郎ッ、死ねやああ！！』

あまりの威力に肺から空気が押し出され、ゼロの咆哮が耳に入ってくる。

同時にバスターゼロの右脚は、ゴードンナーの右腕から弾かれるようにして吹き飛ばされた。

バスターゼロの右脚から火花が散る。

『損傷率70%！ 行動に支障がでる、出力も抑えるぞヒカリ！』
「くっ！」

バスターゼロが膝を付いてしまう。
だがそれはゴードンナーも同様だった。

「ぐう……！」

ゴオの苦悶に似た声が聞こえて来る。
見るとゴードンナーの右腕からも黒煙があがり、ダラリと力なく動かなくなっていた。

まさか演技かとヒカリは一瞬思ったが、上がる黒煙とピクリとも動かぬ右腕を見る限りそうとは思えない。

バスターゼロのイナズマキックが、ゴードンナーの右腕を粉碎したのだ。

しかし

「ゼロ、歩ける？」

『無茶言わない！ フレームにヒビが入ってんぞ！』

代償は大きかったようだ。

直撃していれば勝負は決していただろうが、それではパイロットもろとも爆散していたかもしれない。

ゾッ、とするような攻撃をしたことに、今更ながらヒカリは気づいた。

「それまでだよ！」

コックピットに葵 霧子の声が響いた。

その瞬間、ゴードンナーの動きが完全に停止する、緊急停止装置

とやらを使ったようだ。

助かった……！

それがヒカリの素直な感想であった。

そうだった、これは演習なのだった……機体を使った練習、いわば遊びなのだ。

自分の攻撃にゴオたちは耐えてくれた。

殺さないですんだ……そんな安堵感がヒカリを包む。

「お疲れ様です、ヒカリさん」

モニターに通信が入り、スピーカーからトウマの声が聞こえてくる。

「すみません、この案は少しやりすぎだったようですね。

しかしいいデータが取れたと思います」

「くっ……アンタねえ」

トウマの最後の言葉にヒカリは怒りを覚えた。

データ収集……確かに最初から言っていたことだ。

確かにヒートアップして、殺し合い1歩手前まで持って言ってしまったのは、ヒカリたちであるのは間違いない。

しかしその言い草はないだろう？

もう少しで自分は、親愛なる先輩ミラとゴオを殺してしまうかもしれない。しれなかったのだから。

しかしトウマはそんなヒカリの感情を読むことなどできないのだろう、ニコニコと笑顔を浮かべていた。

……なんというか、怒る気にもなれない。

ペースを崩されたヒカリは、もはや怒鳴る気力も失せていた。

霧子の号令で演習の幕は閉じ、ゴードンナーは完全に沈黙していた。決着つかずとも、幕は下りたといった所だろうか……

「ではヒカリさん、後でゼロと一緒に僕の研究室まで来て下さいね」
「はあ、AI連れてどうやって行けっというのよ？」

まったく、トウマの言葉はいつもヒカリのペースを崩す。
バスターゼロのサポートAIを伴って、精々広くて10数M×Mの部屋にどうやって入れというのだ？

訳が分からない……そんなことを考えていると、

『オラ、ヒカリ。外に出るぞ』

足元の、20・30cmサイズの白い球体から声が聞こえてきた。
白いボールみたいな本体から、玩具のような手足が生え、本体には黒くて太い眉毛とクリクリした豆のような目が表示されている。

……なに、これ？

それがヒカリの最初の感想だった。

『なに黙ってんだよヒカリ。俺様だよ、俺様』

そんなことをほざきながら、白い球体ロボットはヒカリの肩にジャンプして着地した。

俺様？ ……まさか、まさかね？

通信越しにトウマの声が聞こえてくる。

「ちなみにゼロは機体から脱着可能ですからね。
これからは相棒として、ヒカリさんと生活を共にしてもらいます」
「えっ、そんなの初耳なんだけど！」

トウマはこの白い球体ロボを「ゼロ」と言った。

ヒカリの言葉にトウマは、いやあすっかりうつかり、と頭を掻いている。

とう言うことは、この肩に乗ってる球体が先ほどの戦闘で共に戦ったA Iということになる。

しかしこの外見……なんと言おう、無駄にツヤツヤしていて病院や建物の天井に張り付いているような火災報知機のような光沢に、ヒカリは見覚えがあった。

コントロールパネルの裏にあった半球！？ 私が蹴ったやつだ！！

『よろしくなあ、ヒカリ！』

ヒカリの回想を無視して、ゼロは耳元で大声で話しかけてきた。

『風呂場まで御一緒するぜ！』

「失せる、このポンコツ！」

ヒカリの魂の底からの叫びだった。

肩に乗る白い球体 ゼロ。

自分の蹴りで疑似人格が狂ってしまったポンコツA I……

誰か助けて……！

この日ほど、自分の行いを悔いた日はない……後にヒカリはそうミラに告白していたという……。

しかし、それはまた別のお話である。

第2話 巨神遊戯 4（後書き）

<次・回・予・告>

エクセレン「テレビアニメで大活躍！ やったぜウルフ、ことキョウスケ・ナンブいざ参る！」

キョウスケ「何処へだ？ それよりエクセレン……金貸してくれないか？ 昨日、タスクに高レートマージャンでオケラにされてな……」

エクセレン「ワーオ、ガツカリウルフ！ 皆はこんな大人になっちゃ、ダメダメよん」

キョウスケ「あの、お金……」

エクセレン「欲しかったら予告してねん SHOUT NOW！」

キョウスケ

「俺の異名はベーオウルフ（関係なし）！

次回からあのオタクが参戦するぞ！

次回、スーパーロボット大戦TOP第3話『交換留学』！

どんな相手だろうと、蹴り碎くのみ！！ 究極ッ、ゲシュペンスト
キイイイイクッ！！！」

エクセレン「コールゲシュペンスト！」

でも次のお話に、ゲシュペンストキックは出ないのであしからず。
スパロボ学院もよろしくねん？」

スパロボOGのアニメは最高ですね。

「武神装攻ダイゼンガー」の回が待ち遠しいです。
頑張れ、スタッフ。

第3話 交換留学

ダンナーベース トウマ研究室

「残念ながら、それは無理ですねえ」

研究室で言った、ヒカリの言葉に対するトウマの答えがそれだった。

今、ダンナーベースにあるトウマの研究室で、ヒカリは彼と二人きり。

周りの目を気にせず大声を出せる環境でヒカリの申し出た意見の内容、それは……

「なんでよ！？　なんでコイツの疑似人格をデリートできないのよ！？」

『コイツとはなんだヒカリ！　俺様の名前はゼロだって言ってんだろ！』

二人きり、のはずの空間に響くもう一つの男性らしき声。

ヒカリの足元で大声で不満をわめく白い球体……その奇妙な物体の表面には、極太の黒眉毛とクリクリな目が浮かび上がっていた。マンガのような表情をみせる球体に、金属製のロープみたいな手足とその先に団子のような掌（？）が付いている。

この物体の名前は「ゼロ」　　バスターゼロのサポートAI

……らしかった。

トウマに申し出たヒカリの願いとは、ゼロにインストールされた疑似人格をデリートすることである。

「だから無理なんですつてばあ」

若干間延びしたトウマの口調にヒカリは苛立ちを覚えた。

「なんで駄目なのよ!？」

「サポートAI……なんて言ったのがまずかったですかねえ……」

痒くもなさそうなのに頭を掻きながらトウマは答えた。

「実はゼロは、バスターゼロのサポートAIというよりは、システムの中枢なんですよね。」

バスターゼロを通じて得た戦闘経験を蓄積し、機体にも反映するためには必要不可欠とされていますか……それぐらい重要な存在なんですよ、ゼロは」

『えっへん、俺様は凄いだろう!』

眼下で張る胸もないのに胸を張る白い球体……ゼロがそれほど大切な存在だとはヒカリには思えない。

「でも疑似人格ぐらい削除できるでしょう!　せめてコイツを元の『遅しくて、優しく強い男性』の人格に戻してよ!」

「あっはっは、それは無理ですよ」

『なにを言うヒカリ、俺様は男らしいぞ!』

ゼロの言葉はスルーするとして、トウマの言葉は無視できない。
無理……どうということだ?

「疑似人格をデリートするには、全てのデータをリセットしなければ不可能です」

死刑宣告に似たトウマの言葉が浴びせられた。

「データ収集が目的なのにデータ削除しては、それこそ本末転倒ですからねえ」

「そ、そんな……」

「ま、自分の招いたことと思って下さいね、ヒカリさん」

トウマが朗らかな笑顔をヒカリに向けた。

ヒカリの脳裏には、あの時の光景が蘇る。

バスターゼロ起動時に加えた、あの八つ当たりにも似た自分の蹴りを……

『よろしくなあ、ヒカリイ！』

自らの蹴りが生み出した厄介事の塊にヒカリは頭を抱えてしまう。

もっと、おしとやかになろう！

そんな無理な理想を掲げながら、ヒカリとゼロの共同生活は始まったのだった……

スーパードット大戦TOP ? Side The Earth ?

第2部 第3話 交換留学

ダンナーベース ヒカリの部屋

【ゼロとの共同生活 1日目】

ヒカリはその日の勤務（訓練）を終え、一日でかいた汗を洗い流すためにシャワーを浴びていた。

今日も特に出勤要請はなく、平和な1日であった。

あのポンコツAI、ゼロを見せたことでミラの誤解も解けたし、ヒカリの心は少し平穏を取り戻していた。

心地よく肢体を流れる熱い水滴が心と体を癒してくれる。

「はぁー、気持ちいい……」

「おいーす、入るぞヒカリ」

「きゃー……ッッッ！」

劈くようなヒカリの悲鳴。
つんざく

突然風呂場の扉が開いたかと思うと、彼女の足元には白い球体ロボ ゼロがおり、自分を見上げていた。

自分の裸体をゼロに見られている。羞恥心よりも先に怒りが湧きがつてきた。

湯気で体は良く見えないのだろうが、ゼロの侵入は肝が潰れるぐらいの驚きであり、ゼロはというと、ない首を傾げる代わりに表示された太い眉毛をひそめて、

『なに悲鳴上げてんだよ、ヒカリ？』

と訊いてきて、そして勝手に納得したように手を叩いた。

『そうか、俺様の心配をしてくれたんだな？』

優しい所もあるじゃねえか、ヒカリ。でも俺様なら大丈夫だぜ。俺

様はこう見えても、しっかり防水仕様で 』

「さつさと出て行きなさいよ、この変態ロボ!!」

『うわ、この、なにをする!?!』

勝手に勘違いして場違いな発言をするゼロをヒカリは持ち上げ、風呂場の扉を開けて外に放り出した。

ガインツ、とゼロが壁にぶつかる音と共に悲鳴とクレームが聞こえてきたが無視する。

まさか乙女が入浴中の風呂場に闖入していくとは……まったく、不屈なAIもいたものだ。

しかもそんなAIが、バスターゼロのシステム中枢だと言っただから笑えない。

シャワーを浴び終えたヒカリが体を拭いてバスタオルを巻き、風呂場を出るとそこにはゼロが立っており、彼はクリクリな目でヒカリを見上げて呟いた。

『ふむ、こか』

「死ねえッ!!」

メキヤア!

ヒカリの足蹴がゼロに炸裂した。

しかし機械のためか相当にタフで、何処に行くにもくっ付てくるゼロをあしらっている内に1日目は過ぎた。

【ゼロとの共同生活 2日目】

ヒカリはこの日の勤務を終えて、自室にて食卓に付いていた。

この日は珍しく出撃……と言うほどのものではないが、出勤要請がかかった。

近年まれに見る豪雨が関東地方を襲い、それによる大規模な土砂崩れが発生したための、その整理のためにダンナーチーム他数チームが出張ることとなった。

ヒカリはトウマのデーター収集ですという鶴の一声で、バスターゼロを駆って瓦礫の除去に勤しむことになった。

その際判明した事だが、集中力を欠いて漫然と作業しているとバスターゼロは誤作動しやすいようだ。

何度が転倒を起こし、瓦礫撤去の手間を増やしゴオやミラに説教を食らう羽目となった。

しかも基地に帰還したのは22時、愛用している売店や食堂は当たり前のように閉店……ゴオたちも自室へと戻っていき……今に至る。

『おいヒカリ、なんだあその飯は？』

食卓に並ぶ食事を見て、ゼロが声を荒げた。

大皿にはアンドロメダ焼き（漉し餡）が山のように盛られている。アンドロメダ焼きはヒカリの母校、沖女のある沖縄で人気の回転焼きのようなお菓子だ。最近沖縄内では冷凍食品としても売り出されているようで、わざわざ通販で買って冷凍庫に保管していたものだ。

それを見たゼロが、目を明滅させながら文句を言った。

『なんだこりや？ 炭水化物の中に餡が入ってんのか、ほとんど糖分の塊じゃねえか！』

ロボット乗りがこんな食事していいと思ってるのか！』

「うるさいわねえ、好きなんだからいいでしょ」

ゼロを無視してヒカリは解凍したアンドロメダ焼きを一口頬張る。甘く、懐かしい味だ。関東の方でアンドロメダ焼きはメジャーではないので、ヒカリがお目に掛かる機会は少ないのだ。

多少味が落ちるが、それでも満足気な表情で2口目を口に放り込むヒカリ。

その光景にゼロは、まるで昔のギャグ漫画のキャラのように、頭に怒りマークを浮かべていた。

『よせ、止める、食べるんじゃない！ まさかこれ全部食べる気が、太るぞ！？』

「むぐむぐ……いいわよ、どうせ全部燃えるし」

『じゃあせめてもつとバランスのいい食事をしねえか！』

まるで姑が新妻に諫めるように、もつと緑黄色野菜を取れだとか、卵の白身は良質のたんぱく質が取れるだとか……口うるさく言うてくる。

「鬱陶しいわね！ そんなの分かってるけど、料理なんて作れないわよ！」

『なんだと！ そんなのじゃ嫁の貰い手なんて付かねえぞ！』

「なによそれ、台所は女の仕事場とでも言いたいわけ？ 古いわねえ、アンタのAI腐のうみそってんじゃないの？

私はいいのよ、料理の出来る彼を見つけるから」

『へっ、一度も告白されたこと無い癖によく言っぜ』

プチイツ！

鼻も無いのに音声で鼻で笑ったゼロの言葉に、胸を張り言い張っていたヒカリの中で、なにかの琴線が切れた。

「なんでアンタがそんなこと知ってんのよ！？ このポンコツ！！」

『なんだとお……俺様の名前はゼロだって何回も言ってたろうが、このマスターめ!!』

「ポンコツ!!」

『マスター!!』

そんな不毛な言い争いを続けている内に、2日目は過ぎていった……。

【ゼロとの共同生活 3日目】

ダンナーベース 食堂

今日の昼休みもダンナーベースの食堂は賑わっていた。職員たちは談笑し、バランスの取れた旨い食事を口に運ぶ。日々の食事は健康な生活の大事な糧なのだ。

そんな食堂の中でヒカリは

「もう無理、もう限界!」

珍しく弱音を上げていた。

ゴオとミラと同じ机に座り、いつもなら平和に食事を楽しむヒカリであったが、机の上には弱音の原因であるゼロが我が者顔で闊歩していた。

『なんだここは? 広いし、栄養バランスの取れた食事がそこかしこにあるじゃねえか!』

職員たちのトレイに乗る定食に目をやり、大声で喚き散らす。

『実にけしからん！　こんな場所があるからヒカリが自炊をしないのだ！』

よおし、ここは俺様が人肌脱ぎ、店主に話を付けて来てやるから安心しろ、ヒカリ！』

「もうイヤ、コイツ最悪！」

「話が一切噛み合ってねえな」

ゴオは、意気揚々と机から飛び降りようとするゼロを片手で掴み、苦笑し、憐れみと呆れの籠った視線をヒカリに向けていた。

ゼロの大きさは20cm程、少々大きいゴオの大きな手と握力で簡単に自由を奪われていた。

ゼロはゴオの手から逃れようと、玩具のような手足をバタつかせる。

『俺様を離せ、このゴリラめ！』

「……握りつぶしちゃうか？」

「駄目よゴオ。それでも一応特機のコアなんだから」

ミラがゴオを嗜める。

「まさか特機のシステム中枢が本体から分離するなんて、見たことも聞いたこともない話よね」

「そうだよなあ……こんな少し大きいソフトボールみたいなロボットが、あのバスターマシンのコアとはねえ……世も末かもな」
『んだと、このゴリラ！』

ゼロは短い手足で暴れ、暴言も吐くが、ゴオの手の拘束から逃げ出すことはできないようだ。

大きめのソフトボール……ゼロの姿を説明するにはぴったりの表

現かもしれなかった。当たると痛そうだが、ゼロを使ってキャッチボールでもやれそうな容姿をしている。

ヒカリは、このボールロボットがバスターゼロのシステム中枢と説明された時、正直自分の耳とトウマの頭を疑っていた。

だつてそうだろう？

こんな口の悪いポンコツロボが、ゴードンナーと互角の戦いを繰り広げたバスターゼロのコアだなんて……信じられない、というより信じたくない。

しかしヒカリはこの3日をゼロと共に過ごし、昨日はバスターゼロで出勤までしていた。

その際、ゼロがバスターゼロのコアであるというトウマの説明は、嘘ではなかったことを痛感していた。

ゼロがコントロールパネルにドッキングしないと、バスターゼロは指一本動かすことが出来なかったからだ。

ヒカリは認めるしかなかった。

「これからの戦闘……ずっとアンタと一緒になのね……」

『おう、俺様と一緒に戦えることを光栄に思いな、ヒカリ！』

「はあ……」

ゼロの言葉に、ヒカリはため息しか出せなかった。

ゼロを掴んだままのゴオがヒカリに訊いてきた。

「でもよお、なんでわざわざ機体から分離させる必要があるんだ？ 戦闘時にサポートするだけで構わないんだから、普段からヒカリの傍に置いておく必要なんてないだろうに」

「私もそう思つて、トウマ博士に質問したんだけどね……」

既にヒカリも、3日前に行ったゴードンナーとの演習の直後に質

問をしていた。

返って来たトウマの答えはこうである。

「なんでも

『常日頃から行動を共にしマスターの行動パターンを把握していれば、有事の際の情報伝達やサポートが、より円滑で効果的なものになるはずです！ たぶん』、って言ってた」

「たぶんってなんだよ？」

あの博士、バスターゼロが試作機だからって、色々試験的なモノを搭載しまくってるみたいだな」

ゴオが呆れたように呟いた。

しかしミラは感心したように頬に手を当て、ゼロを指先で遊びながら言う。

「でも、それはとても有意義なことだと思うわ。サポートAIを同伴することで、作戦効率が上昇するのなら皆そうするべきよ。

もちろん、客観的データが出るのはまだまだ先だし、疑似人格もこの子の真似はしない方がいいとは思っけどね」

『なにしゃがる、このビッチ！』

指で突かれて立腹したゼロの謂われない毒舌が飛ぶが、ミラはそれをスルー出来る程度には大人であった。

「ふふ、ヒカリちゃん、頑張ってね？」

「そんなー、助けてくれないんですかミラ先輩？」

ミラでなく、ゴオが豪快に答えた。

「ひひ、仕事の一環だと思って諦めんだな、ヒカリ！」

『ゴリラも偶にはいい事いうじゃねえか！』
「もう、やだー」

今までの自分の日常が音を立てて崩れていく様が、ヒカリには簡単に予見できたという。

平穩つて築くのは大変だけど、きつと崩壊するのは一瞬なんだなあ……なんて彼女は実感していた。

もはやゴオの手からの脱出は諦めたのか、ゼロは玩具のような手足をブラインと垂らしていた。

そしてジイーとヒカリの方を見つめている。

「……なによ？」
『俺様に惚れると火傷すんぜ！』

それはとても自信満々の声だったと言う。

「……^{スクラップ}解体場ってどこかしら？」
「おいおい、落ちつけよヒカリ」

真顔で本音を漏らすヒカリを、ゴオが苦笑しながらだめていた。結局、ゼロを交えたままでヒカリたちは昼食を取る羽目になった。

ゴオの掌から解放されたゼロはすぐにテーブルから降りて食堂内を駆けまわろうとするので、結局食事の間はヒカリが足で踏みつけておくことにした。

なにしゃがるツ、とゼロの怒声が響いていたが無視する。
しかしこれではまるで躰のなっていない犬である、困ったものだった。

ヒカリは食後のコーヒーに舌鼓を打ち始める頃に、埃を払ってゼロをテーブルの上に戻してやることにした。

するとまた食堂に駆け出そうとするので、結局ゼロはゴオの掌の中に戻るようになってしまった。

自由を奪われて吼えるゼロを無視して、ゴオがヒカリに訊いてくる。

「そっぴやヒカリ、この話はもう聞いたか？」

「この話？ 一体なんのこと？」

『離せ、このゴリラ！』

ゴオが話題を振って来た。

「静流の奴のガンナーチームが異動になるって話だよ」

「え！ 静流さん、どこかに行っちゃうの！？」

初めて耳にする情報に、ヒカリは驚きの声を上げた。

基本的に、ダンナーベースのパイロットたちは3人一組でチームを組むようになっていた。

目的は、作戦達成率および効率の向上と、生存率の向上である。

どれだけ卓越した操縦技術の持つパイロットだろうと、数の前には無力だ。

圧倒的数の宇宙怪獣戦を想定し、最小単位の小隊を複数編成しておくことで多様な状況に対応できる。

それがダンナーベース所長である葵 霧子博士の考えであった。事実、ゴオをリーダーとするダンナーチームを筆頭に数多くのチームが編成されており、先日の土砂撤去作業のように、チーム単位で様々な任務に派遣されるシステムとして運営されている。

そしてダンナーベースで、ダンナーチームと唯一拮抗している力を持つチームの名前こそがガンナーチームであり、そのリーダーが

藤村 静流だった。

ヒカリも当然面識があり、シュミレーターで敗北を喫したこともある猛者だ。

「なんでも、技術交換の一環なんだとよ」

「技術交換？」

ゴオの台詞をそのまま返すヒカリに、彼は説明してくれた。

「『RX計画』の最終目標覚えてるか？ 宇宙怪獣に対抗できる特機を作り上げることだ。

世界各国のベースや研究所が、帝国の立ち上げた計画に従って特機の作成に勤しんでる。ま、ゴードンナーもその成果の産物だわな」

ゴードンナー 葵 霧子博士の開発した日本州最強のスーパードロイド。

ネオオクサーと合体して完成するTDMは、ヒカリの乗るバスターゼロを圧倒するほどの実力を有していた。

しかしゴードンナーの完成で「RX計画」が完成した訳ではなく、計画の最終目標は宇宙怪獣を殲滅し、地球を護りうる切り札をより多く作り上げることだ。

「ずっと自分の所だけで研究するのもいいかもしれないが、それじゃマンネリ化するし、新しいアイデアも生まれてこない。

だからベースと研究所同士は定期的に技術の発表会や、交換交流を行っているんだ」

「その話なら聞いたことはあるわ」

ゴオの言葉にヒカリは頷く。

「でも、ガンナーチームってベースの主力の一角じゃない？
静流さんたちとトレードするなんて、ちょっと信じられないわ」

ハッキリ言おう。それでは戦力がガタ落ちになってしまうと、ヒカリは思っていた。

ヒカリの所属するダンナーチームは彼女が特機乗りになったことで、メンバー全員が特機保持者になったことになる。

ダンナーチームの戦力は大幅に増強されたと言っても過言ではないが、ガンナーチームにも特機乗りは存在する。

リーダーの藤村 静流と、その愛機コアガンナーだ。

ゴードンナと違い射撃戦に秀でた機体とチーム編成で、ダンナーベース2強の一角である。

「まあ、それだけ今回の交換は博士にとって魅力的ということだろう」

「静流がいなくなるのは寂しいけど栄転だもの、祝ってあげなくちやね。それに交換機関が終了すれば戻ってくるのだし」

ゴオとミラは物悲しげな表情を浮かべていた。

彼らと藤村 静流は同期の仲間だと、ヒカリは聞かされたことがある。

ヒカリ自信があまり静流と関わることはなかったが、ミラに負けず劣らずの美人で彼女よりも少し勝ち気な所がある女性だったのを覚えている。

「てな訳で明日は非番だし、今晚にでも送別会を開こうと思っているのだ」

『行く行く、俺様も行く！』

ゴオの言葉にゼロが反応したがスルーされる。

「どうだヒカリ、お前も非番なんだし良かったら参加しないか？」
「そうよヒカリちゃん、人数は多い方が楽しいですもの。是非参加してね」

「でも……」

送別会に招待されたヒカリだったが、了承の言葉は彼女の喉から出てこなかった。

もちろん静流は知らない仲ではないし、シュミレーターで刃を交えたこともある。

しかしヒカリは思う。

自分が送別会に参加することは、せつかくの同期水入らずに水を注ぐことになるのではないだろうか？

ゴオ、ミラ、静流……この3人でお互いの昔話に華を咲かせ、これからの事を語り合うのが一番似合っているような気がした。

招待を断ることは無礼だと知りつつもヒカリは答えた。

「すいません、今日はちょっと外せない用があつて……」

「あら、それは残念だわ」

無論、ヒカリに用事があるなど嘘である。

しかしミラは眉をしかめて信じている様子だった。

少し心が痛むが、こう言う以外に断る術をヒカリは思いつかなかった。彼女は意外と不器用なのだ。

そのとき、昼休憩の終わりを告げるチャイムが食堂内に鳴り響いた。

「昼休みも終わるか。行くぞミラ、ヒカリ」

「ええ」

『俺様を離しやがれ、このボケども』

ヒカリたちは下膳し、食堂を後にする。ゼロは終始、ゴオの掌に掴まれたままであったという。

ダンナーベース周辺にある街

その日の勤務もつつがなく終了し、時刻は既に夜の19時を過ぎようとしていた。

10月も終わりに近づいたため日が暮れるのも早くなり、夜の街は電灯の明かりに包まれている。

人で溢れかえっている街中をヒカリは一人で歩いていた。

肌寒いので黒いコートを着込み、その下はジーンズに白いセーターという厚着だ。10月の夜は冷えるとはいえ、少々着込みすぎな感否めない。

しかし沖縄育ちのヒカリは寒さには弱いのだった。

肩にかけた手提げ袋の中からゼロがひょいっと顔を出してきた。

『よお、ヒカリ。なんで送別会に出なかったんだ？』

「ちよつと、無暗に顔出さないでよね」

辺りを頻りに見渡すゼロのバックの中に押し込みながらヒカリが答えた。

「静流さんたちは同期同士なのよ。積もる話もあるだろうし、私が

居てもお邪魔虫っていうか……と、とにかく、こういう時は氣を使うのが礼儀ってもんなの！」

『そついうもんか？』

「そついうものよ」

ゼロに諭しながらヒカリは寒空の下、夜の街をあてもなくぶらついていた。

今日は用事がある。

そうミラたちに言ってしまった手前、ダンナーベースの自室に籠っているわけにもいかず、特になにをするでもなく歩いていた。

こうして街に繰り出すのは実に久しぶりだったが、1人では何とも味気ない。

急なヒカリの都合に捕まる友人もいるはずもなく、放置しておきたかったものの背中を追跡してくるゼロを仕方なくバックに詰めて彷徨っている次第であった。

今頃、美味しい物食べてるんだろうな……

空腹から静流の送別会に想いを馳せてしまう。

勤務終了後、すぐにベースから出発してしまったのでなにも口に入れていなかった。

街に出てきたのだから甘い物でも食べようか。

ヒカリは店を物色し始めようとした、まさにそのときだった。

「アメリカ州一番人気の対戦ゲーム『バーニングPT』の導入イベント開催中だよー！」

ゲームセンターの前で呼びこみをしている店員の声が耳に付いた。

「君も今日からロボットパイロット！」

このリアルな操縦性を是非この機会に試してみてくださいーい！」

ロボット、という単語にヒカリは興味を惹かれた。

「ロボット？ 最近のゲームってどうなってるんだろう？」

『面白そうだな！ 行ってみようぜ、ヒカリ』

すぐに顔を出したがるゼロを引っこめながら、ヒカリは店員に尋ねてみることにした。

「ねえ、バーニングPTってなんなの？」

「おお、よくぞ聞いてくれましたお嬢さん！」

店員は大げさにリアクションを取り、身ぶり手ぶりを交えながら説明し始めた。

「アメリカ州の研究所で開発され実在しているPTパーソナルトポイザードモジュールやAMというロボットを、ゲームで実際に動かせる画期的なアーケードゲームなのです！」

もちろん、登場する機体は全て実在のモノばかりなのがこのゲームの売りなのです！

そのアメリカで大人気のゲームがに初上陸した訳ですよ！」

「ふーん、実機をゲームでねえ……」

要するに操作を簡略化したシュミレーションのようなものだろう。一般人がロボットに接する機会は無と言っているいいので、人気を博するのも当然のことなのかもしれない。

それに実機を動かせるように作っているということは、おそらく広告塔のような役割もそのゲーム機に持たせているはずだ。

若者に感心を持ってもらい、人材発掘の機会を増やそうという魂

胆だろうとヒカリは予想した。

「ギガノス戦争」の後遺症で、地球帝国の若い人材の不足は深刻なのだ。

「PTね、^{メタルアーマー}MAと似たようなモノなのかしら？」
『とにかく入ってみようぜ、ヒカリ！』

ヒカリも興味を惹かれるのは確かなので、ゼロの言葉に促されるままゲームセンターの中に入って行くことにした。

ゲームセンター内 バーニングPTコーナー

ゲームセンター内には種々様々なゲーム機が設置されていた。学校帰りの高校生や街で遊んでいる若者たちが、各々の好きなゲームに興じている。

しかし明らかに他を圧倒する人垣が「バーニングPT」のコーナーには出来上がっていた。

「勝者、テンサン・ナカジマー！ 凄い！ これで19連勝中だあ！」

巨大な観戦用スクリーンの前に立った司会者らしき男が叫んでいた。

画面には巨大な砲身と奇妙な体を持つロボットが映し出され、W

INNERと表示されていた。

スクリーンの両隣りにはカプセルのような物体が2つ並んでおり、敗者と思われるプレイヤーがその中から出て来ている様子を見ることが出来る。

おそらくあのカプセルがゲームの操縦席なのだろう。

「ひゃっはー、どいつもこいつも弱すぎるっての！」

勝者側と思われるカプセルが開き、大きな顎が特徴の少年が勝ち名乗りを上げていた。

「この俺様に勝てると思う奴は挑んでこいっての！ 返り討ちにしようってばよ！」

「おおーっと、テンザン・ナカジマ不敵な挑発です！ 誰かこの生意気な糞ガキを懲らしめてくれる人はいないのかー！」

司会者がコーナーに集まってくれた客に声をかけるが、ザワメキが上がるだけで誰も名乗り出ようとしない。

もしかすると、勝ち目がないという風に考えているのかもしれない。

テンザンと呼ばれた少年のプレイスタイルをヒカリは見えてはいないが、彼の下衆な笑みに不快感を覚えていた。

人を見下し、馬鹿にしたような目。

まるで昔の自分を見ているようで気分が悪かった。

「やるわ」

手を上げたヒカリに観衆の視線が釘付けになる。

「その生意気な顎を力チ割ってあげる」

「おほお、豪気だねえ姉ちゃんよお！」

見るからに下品な顔つきは、注視しているとコメカミに青筋が立ってしまいそうである。

ぶっ殺ッ、と今にもバックから飛び出して来ようとするゼロを押さえながら、テンザンの顔は極力見ずに司会者に尋ねた。

「アイツをケチヨンケチヨンにするにはどうすればいいの？」

「おおーっと、挑戦者はなんとゲームの素人かあ！？ これは既に勝負あつたかあ！？」

どうも司会者は会場の空気に当てられているようで、ヒカリに向かって失礼な言葉を吐いてきた。

ヒカリはバッグで司会者の頭を打ってやる。

中のゼロが当たって、ガインッ、と痛そうな音がした。

「あのカプセルに乗ればいいのね？」

「は、はい、左様で御座いますお嬢様」

頭を押さえながら答える司会者を余所に、ヒカリは「バーニングPT」のカプセルに乗り込んだ。

中に入ると自動でカプセルが閉鎖され、うす暗い室内の画面に「コインを1個入れてください」と表示される。

財布の中を見ると壹萬円札ばかりしかなく、小銭入れになけなしの100円玉が一枚あるだけであった。

「泣いても笑っても1回勝負ね」

『安心しろ！ 勝てばきつと、もうワンモアチャレンジだぜ！』

人目が無くなりゼロがバッグから飛び出してくる。

ヒカリは投入口に100円玉を入れ、ゲームを開始した。

第3話 交換留学（後書き）

その2に続きます。

第3話 交換留学 2（前書き）

第3話はこれで終了です。

第3話 交換留学 2

ゲームセンター バーニングPTコックピット

コインを投入したヒカリの目の前に広がっているのは実に見慣れた風景であった。

2本の操縦桿にフットペダル、そして操作用のコンソールにモニター…… 4日前まで彼女の戦いの日常にあった風景だ。

3日前にバスターゼロに搭乗し始めてから見ていない、ごく普通のコックピットに見えた。

『ゲームにしちゃ意外と難しそうだな』

メタルアーマー
「MAに比べれば楽勝よ」

簡易操作マニュアルに目を通すとコンソールは武器選択程度にしか使用しないし、ブースターの出力もフットペダルで決定、機体は操縦桿の動かし方で走るや飛ぶが出来るようだ。

出力調整や面倒な索敵など存在しないらしい。

要するに目の前の敵に集中していればよく、不意打ちや伏兵もないのであろう。

流石はゲーム、戦場経験者にはぬるま湯みたいなものだ……とヒカリが思っていると、機体の選択画面に移行していた。

バーンナルト邸ーボードモジュール
「PTとAMから選べるみたい。

テンザンってガキのは…… AMのバレリオンっていうのね。じゃあ私はPTっつと」

『そんな選択基準でいいんかい？』

「ゲームだから別にいいじゃない」

画面に選択可能PTの全体画像が映し出された。

ゲシュペンスト、シュツツバルド、ビルトシュバイン……これらが全て実在するPTなら、軍事オタクには垂涎の一品であろう。

操縦桿を傾けて機体をスクロールさせてみた。

その中でヒカリの目にとまった機体があった。

「ゲシュペンストMk-?、腕の棒がトライアングルバンカーに似てるわね。これにしよう」と

『だからそんな選択基準でいいんかい?』

「ゲームだからいいの」

ヒカリは武装と射程距離・威力を一瞥しただけで、選択機体をゲシュペンストMk-?に決定してしまった。

武装はスプリットミサイルにマシンガン、内蔵装備のプラズマステークのみだ。

武装は追加や変更ができるようだが、それには別料金が必要なようなので無視する。

「待ってたぜえ、姉ちゃんよお」

機体決定と同時にヒカリのゲシュペンストはバトルフィールドに転送されたようで、目の前にはテンザンのバレリオンが待ち構えていた。

外の観戦用巨大モニターにも映し出されているようで、カプセルの外からは歓声が聞こえてくる。

「一瞬でボロ雑巾にしてやんぜ!」

「可愛げゼロね、アンタ」

ヒカリは懐かしい2本の操縦桿をしっかりと握りこみ、フットペダ

ルに足をかけた。

対戦ゲームであるので当然のことだが、敵戦力はテンザンのバレリオン1機のみ。

バレリオンは頭部に巨大な大砲を撃ちだす砲身が装備されていた。装甲も厚そうで、足を止めての撃ち合いになれば勝ち目はおそらくないだろう。

「それではテンザン・ナカジマ対 ええっと、ハンドルネー
ムどうします？」

開戦の合図を打とうとした司会者が、ヒカリの名前を聞いていないことを思い出したようだった。

本名を明かすも恥ずかしいし、もしかして知り合いが聞いていても嫌なので、ヒカリは適当な名前を考えようとした。
が

『俺様の名前はゼロだ！』

「はい、ゼロですね。分かりました！」

「……………はあ」

勝手に返事をしたゼロの声を、やはり会場の空気に当てられている司会者は男の声だと気づかなかったようだ。

この際名前なんてどうでも良いのでヒカリはつつ込まないことにした。

無暗につつ込んだら負けだ。勿論漫才的な意味ではない。

「それではテンザン・ナカジマ対ゼロ戦、開始です！！」

司会者の開始と同時に、

「ひゃっはー、死ねやあ！」

テンザンのバレリオンの大砲が火を吹いた。
開幕直後の不意打ちだった。おそらくこれで何人も撃墜してきた
のだろう。

しかしヒカリは、機体を半歩横に開くことで砲弾をあつさりと紙
一重で躲す。

「な、なんだとお!？」

「アンタ、バカでしょ?」

ヒカリは鼻で笑った。

「そんな誘導性の低そうで明らかに真っ直ぐ弾が飛びそうな武器、
油断してなきや狙いが正確な分避けるのなんて簡単よ」

『死ね、顎!』

「なんだこのアマア!！」

ゼロの暴言にテンザンが切れていたが、それを尻目にゲシュペン
ストは駆け出す。

スムーズな走りを見せながら、手持ちのマシガンで乱射した。
連射性能重視のため弾がバラけ、半分程しか命中しない。

しかしバレリオンの装甲は厚く、マシンガン程度では貫通できそ
うになかった。

「豆鉄砲なんて効かないってばよ!」

テンザンがバレリオンの大砲を連射してきた。

ヒカリはそれを軽くステップさせて回避、確実にマシンガンをも
中させていく。

装甲で跳弾するが、それが刺激となっているのか鈍いバレイオンの動きがさらに遅くなり、射撃精度も低くなる。

「つまないわね」

『折角だから遊ぼうぜ、ヒカリ!』

ゼロの言葉にヒカリは頷いた。

100円入れたのだから、100円分は遊ばせてもらおう。そう思ったヒカリはゲシュペンストの足をわざと止めた。

「もらったってだよ!」

途端にロックオン、バレイオンの大砲が火を吹く。

特機でもない機体が、大砲の一撃をもらえばそれだけで致命傷だろう。

しかしバレイオンの砲撃が始まるよりも早く、ゲシュペンストは残弾の残っているマシンガンにバレイオンに向かって投げつけていた。

大砲がマシンガンの残弾の火薬に引火し、爆発を起こす。

「うおっ!?!」

テンザンが怯む。

その隙にゲシュペンストは空中に跳び、

「スプリットミサイルッ!」

バックパックに装填されている2基のミサイルポッドを両方射出した。

マザーポッドがバレイオンに向かって飛来しその弾頭を展開、内

部より無数の小型ミサイルの雨が降り注ぐ。

「うおおおってばよ!」

テンザンのバレリオンは回避運動を取りながら大砲を連射する。するとたちまち小型ミサイルは撃墜されていき空中で幾らか爆散した。

だが全て撃破することは敵わず、数発がバレリオンに直撃し土煙と舞い上げる。

「くそっ、何処だつてばよ!」

苛立ったテンザンの声が聞こえてきた。

いい気味だ、と思いながらヒカリの操縦するゲシュペンストは土煙を跳びこし、バレリオンの背後に着地する。

着地までの一瞬でヒカリはコンソールを操作、BMセレクトをインファイトに、選択武装をプラズマステークに変更する。

「明日のためにその」

『相手をぶつ殺すつもりで、決りこむように打つべし!』
「なっ、後ろかってばよ!」

ヒカリとゼロの声に気付き振り返って来たバレリオンの頭部に、カウンターの要領でゲシュペンストの右拳がヒットした。

「うげっ」

バレリオンの巨大な砲身状の頭が大きく揺らぐ。

ヒカリはコックピットで左レバーを大きく引き絞った。するとゲシュペンストは左腕を大きく振り上げ、装備された3本の棒

プラスマステークにエネルギーがチャージされる。

「明日のためにその二」

『すかさず必殺の一撃を叩きこむべし!!』

バレリオンはまだ体勢を立て直せていない。

いくら装甲が厚かろうと、隙だらけの体勢で必殺の一撃を受けて耐えられる機体などいはいないだろう。

しかしこれはただのゲームだ。機体を破壊しても人は死なないので、100円分しつかり遊ばせてもらおうとヒカリは思う。

『「ジエエエツトマグナムッ!!」』

気前よく雄叫びを上げながら、ゲシュペンストは必殺の左拳を叩きこむ。

バレリオンにステークが接触した瞬間、電磁加速された棒が敵内に叩きこまれて内部を引き裂き、バレリオンはその場で爆散した。

紅い爆炎を背景に画面には「PERFECT!!」と表示される。

「成敗、なんちゃって」

『よっ、日本一イイ!!』

相席していたゼロが、どこからか日の丸の扇子を出して勝ち名乗りを上げていた。

直後にカプセルの外からは歓声と共に、テンザンの悔しそうな声が聞こえてきていた

結局、この「バーニングPT」というゲームは勝ち抜き式になっているようで、しかも現在導入キャンペーン中ということも

あり、負けない限り無料で再プレイが可能とのことであった。

時刻は20時を回っており、ベースに帰るにはまだ早すぎた。テンザンに勝ったヒカリには次々と挑戦者が現れる。

100円を入れてプレイを開始したこともあるし、暇も持て余していたヒカリはゲームを続行することにした。

ただ相手を圧倒するだけではつまらないので、適度に相手の攻撃に被弾してやり、ギリギリで相手が勝ちそうになる所で巻き返してやる。

普通にやってはヒカリの圧勝になるため、これが詰将棋のような感覚で意外に楽しかった。そんなことを繰り返していると、

「あと少しで勝てそうだ！」

なんて声も上がり始める始末で、ヒカリは相手に事欠かなかった。こういうプレイスタイルが、ファンサービスの役割を果たしているのならそれもいい。

ただし再戦してくるテンザンだけは、全戦力を持ってケチヨンケチヨンにしてやったが……そして時刻は23時を回る。

「勝者ア、ゼロオ！ 凄い、凄すぎる、お前は一体何者なんだ！ 実に怒涛の99連勝、100勝まであと一歩だぞお！！」

カプセルの外から司会者の声が聞こえてきた。

「しかし残念だ！ もうすぐ当店は閉店してしまう、さあ、最後にゼロに挑む猛者はいないのか！？」

流石にもう客も掃けてしまったのか返って来る声はなかった。

99連勝、十分すぎるぐらいに楽しんだろう。

この時間なら送別会が長引いていようとヒカリが呼び出される

ことはないはずだ。ヒカリはそろそろゲームを止めてベースに戻る
うかと思っていた。

カプセルを開放しようと手を伸ばした時、

「俺が挑戦するぜ」

声を上げる者が現れた。

ヒカリが扉を開けて手を上げている男を確認する。

茶髪の18歳ぐらいの男性であった。いかにも自信ありげな表情
をしている。

「おおっと、爆勝女王ゼロに挑む勇者が現れたぞ！ ええっと、お
名前聞いてもよろしいですか？」

司会者の質問に茶髪の男性が答える。

「俺の名前は天上天下マン！」
てんじょうてんが

「うわっ……ダサ」

挑戦者の青年の名乗りに思わずヒカリは一步後ずさっていた。
会場に残っている観客たちも一様にそう思っているに違いないと
思う。

しかし当の本人は気づいていないのか、無視しているのか、我関
せずといった顔でヒカリを見て指を向けてきている。

「爆勝女王ゼロ、あんたは俺が倒してやるぜ！」

「う……！」

ヒカリは逡巡する。

冷静になれば、もうこの「バーニングPT」を続ける理由もなく、

時間が時間だったので帰ろうと思っていた。

それに、こんな変なネーミングセンスをした男の相手はしたくない。

声に出せぬ本音を感じ取ったのか、ゼロが代わりに答えてくれた。

『受けてたつぜ！』

「おおーっと、流星は爆勝女王ゼロオ！ 天上下マムの挑戦を受けるようだー！」

「ちよっとゼロ、どういうことよ！？」

勝手に挑戦を受けてしまったゼロに、ヒカリは小声で文句を言った。

ゼロは黒豆のような目をパチクリさせながら、怒られている理由が分からない風であった。

「私もう帰るつもりだったのに……！」

『え、そうか？ 俺様はてつきり、天上下マムを叩きのめすもんだと思ってたぜ！』

「アンタね……私のことなんだと思ってる訳？」

『え？ うーん？』

ゼロは眉を曲げて、腕を組み、頭にクエスチョンマークが出そうな勢いで本気で考え込んでいた。

ヒカリはため息をつき、シートで頭を悩ますゼロを押し退けた。シートに腰かけると、カプセルを閉めて再プレイの準備をし始める。

「もういいわよ。言っちゃった以上、やるしかないもの」
『だよな！ やはり俺様の行いに間違いはないのだ！』

つつ込まない、絶対につつままないぞ、と心に誓いながらヒカリは操縦桿を握った。

選択機体は99連勝中のゲシュペンストMk-?だ。
テンザンとか言うガキみたいにジェットマグナムで沈めてやる。
機体選択が終了した途端、ゲシュペンストはバトルフィールドへと転送された。

真つ平らで障害物のない高原が視界に飛び込んできた。

そこには既に天上天下マンの機体も準備万端で待ち構えていたが、
「あれってゲシュペンスト？」

ヒカリが連勝する内に見慣れた自分の機体が目の前に立っていた。
しかし色は白である。

「タイプTTって書いてあるわ」
「今にも泣き出しそうだな！」

ゼロの言うとおり、天上天下マンのゲシュペンストは全身純白であり汚れ一つ付いておらず、ヒカリには美しいというより弱々しい印象に映った。

ビームライフルを片手に装備しているが、それ以外に目立った武装は見えない。

ヒカリのゲシュペンストにあるプラスマステークもなかった。

「さて、時間も押し迫っておりますので、制限時間60秒1本勝負にしたいと思います！」

外で司会者が言う。

「両者とも異論ありませんか？」

「俺はそれでいいぜ」

天上下マンの声が聞こえてきた。

「私もいいわよ」

ヒカリも条件を受けた。

1分も必要ない、瞬殺してやる……ヒカリがブレイの準備を整える。

「では、天上下マン対ゼロ戦、開始してください！」

司会者の掛け声と共に、画面には「READY」という赤い文字が表示された。

そして直後にピーという機械音と共に、「GO！」という文字が現れ、勝負の幕が上がる。

「先手必勝よ！」

ヒカリはゲシュペンストのジェットノズルを点火させ、距離を詰めるながらマシンガンの弾をばら撒いた。

マシンガンは1発1発の命中精度は低いかもしれないが、それを補う弾の数がある。

ヒカリ程の腕前で狙い撃たれるその射撃を、完全回避するのは至難の技だろう。

しかし

「お前の攻撃は既に見切った！」

天上下マンは、世紀末救世主のような台詞を吐きながら、

横っ飛びであっさり攻撃を躲した。

地面に手をついて機体に受け身を取らせ、回転させて体勢を持ち直す。

地に足を付けると同時にビームライフルを連射してきた。

赤色の光の筋が走り抜ける。

「ちっ」

ヒカリは予想外の反撃に面食らうも、連続ステップでビームを回避した。

ふざけた名前だけど……できる!?

「バーニングPT」は今日初めてやったゲームだ。

遊びで被弾してやつたりしていたが、冗談抜きで攻撃が命中しそうになったのは天上天下マンの攻撃が初めてだった。

ヒカリはマシンガンを構え、敵の白いゲシュペンストを捉えながら機体を走らせる。

天上天下マンはビームで弾幕を張ってくるため容易に接近することが出来なかった。

『おいヒカリ、1分しか時間ねえんだぞ』

「分かつてるわよ!」

時間に余裕があるなら、射撃戦に徹して隙が生じたところで懷に飛び込むのだが……時間制限がある以上、多少強引にならざる得ない。

ヒカリはテンザン・ナカジマを仕留めた戦法を取ることにした。コンソールを操作し、スプリットミサイルを敵機にロックオン、2基とも発射する。

マザーポッドから分離した子ミサイルが、天上天下マンの白ゲシ
ュペンストに向かっていく。

「甘えっ、T-LINKリッパー!!」

しかしヒカリのミサイル発射と同時に、敵機も3基の円盤状の物
体を射出していた。

直後にその円盤から鋭利な3本の刃が生え、空中で高速回転しな
がらミサイル群に向かって飛来する。

T-LINKリッパーが子ミサイルを切り裂き、空中で全て爆破
させた。

「うそ!」

無数のミサイルが全て落とされるとは、なんと言っ誘導性の高い
武器だ。

硝煙が雲となり塞がる視界……その煙の中からT-LINKリッ
パーが突き抜けて向かって来た。

正確にゲシュペンストを追尾してくる。

回避するのは難しいだろう。

「舐めんじゃないわよ!」

ヒカリはゲシュペンストに装備されていたプラズマカッターを抜
刀した。

迫る3基のリッパーを一瞬の内に切り払う。

光の剣筋が三閃。

T-LINKリッパーは真つ二つ裂かれて、爆散した。

そしてヒカリはプラズマカッターを、槍投げの要領で天上天下マ
ンのゲシュペンストに投擲する。

しかしそれも切り払われ、地面に落とされてしまった。

「やるわね！」

「そつちこそ！」

ヒカリの言葉に天天下マンが答えた。

二人の間には往年の好敵手同士のような空気が流れている。

3日前の猿渡　ゴオ戦に似たピリツと緊迫した空気……それをまさか街のゲーム機で味わえると思ってもみなかった。

頭が冴え、ヒカリの視野が狭まって行く。

目の前の敵、白いゲシュペンストの拳動一つ見落とさないように集中した。

しかし、

「タイムアップ！　それまでです！」

水を指す司会者の声と共に、画面には「DROW」の赤文字が浮かび上がった。

制限時間に達したようだ。やはり1分間という時間は短すぎる。

「ちえっ」

『野郎、中々やるじゃねえか』

ヒカリは舌打ちし、悪態を付くゼロをバックに押し込んでカプセルから外に出た。

ゲームセンター内の客はほとんどいなくなっており、店員たちが店内の掃除を始めていた。ゲームの筐体の電源が既に切られているモノもあった。

「バーニングPT」にあれだけ群がっていた人だかりもすっかり霧散している。

「よおゼロ、あんたやるじゃねえか！」

対面のカプセルから出てきた対戦相手、天上下マンが声をかけてきた。

その茶髪の男性は少年のような無邪気な笑顔を浮かべていた。

「俺に、あそこまで付いて来れる奴なんて初めてだ！」

「それはこちら台詞よ」

ヒカリは思っ たままのことを口にした。

「まさか、一撃もヒットさせられないとは思わなかった」

「ははは、そこはお互い様だぜ。」

日本じゃまだ導入されて日が浅いのに、ここまでの腕の上級プレイヤーがいた方が俺は驚きだね」

「日が浅いって……もしかして、アンタってこのゲームの開発スタッフかなにか？」

アーケードゲーム「バーニングPT」……店頭では今日導入されたと宣伝されていた。

となれば、日本でプレイできるのは開発スタッフか関係者ぐらいのものだろう。

でなければ、外国に住んでいたかだ。

「うんにゃ、違うぞ」

天上下マンは後者の様だった。

「俺、実は用事があって昨日までアメリカに住んでたんだ。日本に

帰って来たの今日さ」

「ふーん」

「時間が出来たんで、日本にいた頃の行きつけの店に来てみた訳」

「へえ、じゃアンタって元々ゲーマーなんだね」

天上下下マンは「バーニングPT」において、ヒカリに追従できるだけの腕前があった。

あのゲームは操縦方法が実際のMAのモノに酷似していたからこそ、ヒカリは99連勝なんて無茶な記録を樹立できたのだが……。

ロボット戦闘の天才である自分に対抗できる程の腕前……要するにこの天上下下マンは、「バーニングPT」を異常なまでにやり込んだ廃人ゲーマー、といった所だろうか？

ヒカリがそんな失礼なことを考えていると、天上下下マンが不思議そうな表情を浮かべていた。

「なんだよ？ お前だって、ゲーマーだろ？」

「失礼な。私がこのゲームをやったのは、今日が始めてよ」

「え、マジ！？」

天上下下マンが興奮して叫んでいた。

「凄えよ、アンタ！ 天才だぜ！」

「そ、そう？」

天上下下マンの目は、星でも瞬いているようにキラキラしていた。鼻息も荒いので、思わず腰が引けてしまう。

「今度開催されるバーニングPTの大会に出てくれよ！」

決勝で白黒着けようぜ！ なっ、な！？」

「分かったわかった、分かったから少し落ちついて頂戴」

時刻は午後23時。

ヒカリはダンナーベース内に住んでおり特別門限なんてないが、そろそろ帰宅のし時だろう。

この時間ではほとんどのお店が閉まっているし、開いていると言えば飲み屋ぐらいモノだ。

上がったテンションで暴走しかけの天上下マンに、ヒカリは別れを告げることにした。

「今日がありがと、楽しかったわ」

「こっちこそ、サンキューなぜロ」

『おつよ!』

バックの中から聞こえた男性の声に天上下マンは首を傾げた。

「今、そのバックから男の声が聞こえたような……」

「気のせいよ」

「そっか、そうだよな!」

天上下マンはそれで納得したようで、ゲームセンターの入り口へ向かうヒカリの背中に元気に手を振ってくれていた。

「縁があつたらまた会おうぜ!」

こうしてヒカリの夜遊びは終わったのだった。

結局、藤村 静流はこの翌日にアメリカへと旅立って行った。

昨日の送別会でなにがあったのか、ヒカリは知らない。

しかし静流は涙を流し、見送りのゴオの胸に頭を預けていた。

昨日のことは知らないし、知っていたとしてもヒカリにかけられる言葉きつと限られていただろう。

ほんの数分ゴオは静流の肩を抱いてやっていた。

ミラもそれをただ黙って見つめていた。

顔を上げた静流は涙を拭き、晴れやかなどこかすっきりした笑顔を浮かべていた……

こうして、静流はアメリカの研究所へと出発した。

交換期間がどのくらい分からないが、いつかはこのダンナーベースに帰って来るだろう。

ゴオとミラの寂しげな顔に、ヒカリは既視感デジャヴを覚えていた。

兄のオオタ コウイチロウ、同級のアマノ カズミに後輩のタカヤ ノリコ……彼女たちが地球に帰還するのは一体いつになるのだろうか？

正確な日数をヒカリが知ることはできない。

しかしヒカリは、それでもいいか、とも思っていた。

どれだけ長い時間になろうとも、自分は約束を守るだけだ。

自分を負かした、あの弱いけれど本当の意味で強かったタカヤ ノリコとの約束を。

強くなつて、アンタが帰って来るまで地球を護ってみせるよ、
ノリコ……！

静流の旅立ちを、ヒカリは友と重ねながら見ていたという。
藤村 静流が帰って来る日まで、ダンナーベースも日本の平和も
護って見せる。

新たな誓いを胸に、今日もヒカリは訓練に励む

そんなこんなで、翌日。

ダンナーベース 食堂

静流が旅立って1日、彼女がいなくと思うと寂寥せきりょうの思いはやはり
湧き上がって来るのだが、人間は生きているとやはりお腹が空く。

ヒカリたちは今日の昼休みも、食堂で昼食を取っていた。

「そつえばさー」

ヒカリはすっかり失念したことを、ゴオとミラに訊いた。

「技術交換ってことは、向こうからも当然来るんだよね？」

ヒカリはアジフライ定食のアジに、タルタルソースをたっぷり付
けて口に放り込んだ。

さくさく、ジュワー、と触感と魚の旨みが口の中に広がる。

ゴオは特盛りのカツ丼を口に頬張りながら答えた。

「むぐむぐ……なんでもテスラむぐむぐヒ研究むぐって所らしいぞ」
「口の中のモノなんとかしてから喋りなさいよ」

ヒカリに呆れられるゴオが、昨日静流の涙を受け止めていた男と同一人物だとは思えない。

もしかして、早くも静流のことを失念しているんじゃないだろうか、このゴリラは？

そんなヒカリを余所にゴオは、ごくり、と口の中の物を飲み込んで、

「なんかな、俺たちが送別会してた日には、既に日本入りしてたらしいぞ」

「え、そうなの？ それで静流さんも急にアメリカに行かなくちゃいけなくなった、ってこと？」

「やっぱり、そういうことなんでしょうね」

ミラが優雅に食後のコーヒーを楽しみながら言った。

『旨そうだなお前ら。俺様にも寄こせ！』

「口ないでしょ、アンタ」

食堂ではいつもと変わらない他愛ない会話が繰り広げられる。

例え誰かが居なくなっても、そこにいる人たちが生活を止めるわけじゃないから日常は続くのだ。

しかし今日来る日常が、昨日と同じモノだという保証は何処にもない。

「おっ、こっち空いてんじゃない。早く来いよ、マイ」

「ま、待ってくれリユウ！」

「ん……この声？」

どこか聞き覚えのある声がヒカリの耳をくすぐった。

そんなに遠くない日に聞いた記憶がある。あれはどこでだっただ

ろう？

そうそう、確か街のゲームセンターでだ……そんな事をヒカリが思い返していると、トレイに定食を乗せた一組の男女が現れた。桃色の髪の少女と茶髪の若い男性だ。

「あ」

「あ」

見覚えのある茶髪の男とヒカリは目があった。

「アンタは……」

「爆勝女王ゼロじゃねえか！」

大声を上げる茶髪の男

天上下下マン、

「こんな所で奇遇だなあ……」

『貴様は天上下下マン……!!』

彼に触発されたゼロがさらに大声で叫んだ。

そのため食堂中の視線が、痛く矢のようにヒカリに突き刺さって来た。

お願いだから見ないで、頼むから喋らないで天上下下マン……とヒカリは懇願したと言う。

「爆笑女王？」

「知り合いなの、ヒカリちゃん？」

「う……」

送別会の日には抜け出してゲーセン行っていました、とは言えないヒカリ。

「そうか、ヒカリって名前なのか」

天上下マンが、ヒカリの横の空いているスペースにトレイを置きながら自己紹介した。

「言いそびれてたな。」

俺の名前はリュウセイ・ダテ、アメリカのテスラ・ライヒ研究所からやって来たんだ!」

「えええええっ!？」

ヒカリは思わず大声を發してしまっていた。

再び食堂にいる職員たちから痛い視線が跳ばされてくる。

しかしそんな視線など屁の河童 天上下マンこと、リュウセイ・ダテは天真爛漫な笑顔を振りまいていた。

「今日付けでダンナーベース所属になるからよろしくな!!」

それがオオタ ヒカリとリュウセイ・ダテの出会いだった。

新たな厄介事の出現と再会に、ヒカリは嬉しすぎて思わず涙目になっていったそうなの……

第3話 交換留学 2（後書き）

<次・回・予・告>

エクセレン「後書き界の女王、エクセレン・ブラウニングいざ参る！」

キョウスケ「……」

エクセレン「本編が闇に飲み込まれそうになった、その時！ 後書き界より天女のように降臨し、世界を光と笑いで包み込むのよん」

キョウスケ「……突っ込まんぞ」

エクセレン「えー、キョウスケのいけずー、ガツカリー」

キョウスケ「（イラッ）……それよりエクセレン、後書き界とはなんだ？」

エクセレン「後書き界……それは原作では主役級の扱いを受けているキャラにも関わらず、この作品に出してしまったがために見せ場を失ってしまった者たちが堕ちる救いの場」

キョウスケ「救いの場に、堕ちるのか？ 矛盾しているな」

エクセレン「なに言っているのよキョウスケ？ 私たちもその一員じゃない？」

キョウスケ「失敬な。俺はスパロボ学院の方ではそれなりに出張っているぞ」

エクセレン「最初の2話だけだけどねん」

キョウスケ「……」

エクセレン「さあさ、見せ場よ！ ここが私たちにとっての吉本なのよー！」

キョウスケ「寸劇であり喜劇でもある……ということか？」

エクセレン「うふふ、そうよ。じゃあそう言う訳で、新劇団員紹介行ってみよう！！」

ガラガラガラ（扉が開いて誰かが入ってくる音がする）

静流「こんなところに呼び出すなんて、私を誰だと思っているの！？」

エクセレン「はい、本編でアメリカ行きになってしまった藤村静流さんです。口癖は『私を誰だと思っているの？』よん」

キョウスケ「とんだ自意識過剰だな」

静流「な、なにここは！？ 私は確かアメリカに向かう飛行機に乗っていたはずなのに……！！」

エクセレン「後書き界にいらっしゃーい」

キョウスケ「ということは……暗に本編で出番なし、ということか？」

静流「な、なんなの貴方たち！？ 不吉なことを言わないでよ！！」

キョウスケ「……哀れな。せつかなので藤村 静流のキャラ紹介でもしておこう」

ペラリ（カンニングペーパーをめくる音）

キョウスケ

「藤村 静流、コアガンナーのメインパイロットで口癖は『私を誰だと思ってるの！？』だそうだ。

ちなみに原作でアメリカに行くのはゴオで、彼の事が好きなのに告白できず、ゴオが帰ってきた時には既にミラが付いてきていたという、ま・さ・に負け犬だな。

その実力はまさにエース級だが、敵に恵まれず敗戦続き……」

エクセレン「まさにザ・かませ犬。ド ゴンボールの言えば、三つ目禿げ以上惑星俺様王子未満ってところかしら？」

静流「なに、この酷い言われ様！？」

キョウスケ

「『私を誰だと思っているの（超棒読み）』の言葉の割にはパチンコでは役立たず、さらにその不幸は行き止まることを知らない。なんと原作では死んでしまいうらしいな」

エクセレン「ワーオ、まるで私みたい。ちなみに最終話まで出張るみたいだから、どうなるかは見てのお楽しみね」

静流「そんなことより、私を早く元に戻しなさい！ 私を誰だと思っっているの！？」

キョウスケ「煩いスケだ。無視して次回予告に行くでしょう」

静流「まさかの放置プレイ！？」

キョウスケ

「俺の名前を言ってみろ！！」

テスラ・ライヒ研究所から異動して来た天上天下マンこと、リュウセイ・ダテとSRXチームの面々。

食堂でリュウセイとマイとの話に華を咲かせるヒカリたち。

だがそのとき、所長の霧子の怒声が響き渡る「このボケども！」と。

次回スーパーロボット大戦TOP、第4話『SRXチーム』

どんな相手だろうと、打ち貫くのみ！！」

エクセレン「神魂合体ゴードンナーもよろしく！！」

静流「え、出番これで終わり！？」

注：静流は原作では大活躍です。作者は決して静流が嫌いではありません。男共に言い寄られています。

次回はSRXチーム全員集合するので、良かったらお付き合いくださいな。

第4話 SRXチーム（前書き）

冒頭部分は長つたらしい解説です。

最近ではスパロボ学院をメインで執筆しているので、こちらの更新は遅れます。

宜しければお付き合いください。

第4話 SRXチーム

ダンナーベース 指令室

「RX計画」

それは地球帝国が推進する、対宇宙怪獣用決戦兵器開発のために立ち上がった計画の名称である。

「ギガノス戦争」終結時に存在を認知された宇宙の化け物たち。宇宙に巢食う悪魔たちに対抗するための兵器を開発する。

「RX計画」は、まさに人類の英知を結集させた一大プロジェクトである。

このような計画が立ち上がった背景には、帝国上層部や政治家たちの利を懸けた駆け引きが隠れているのは間違いないだろうが、なにより既存の兵器では宇宙怪獣に対抗できないという事実が大きかった。

ちなみに当時の主力兵器

メタルアーマー

MAは、「ギガノス戦争時」既に量産体制に入っていたが、オオタ コウイチロウと宇宙怪獣の遭遇時にその相性の悪さを露呈していた。

宇宙怪獣の中で最も矮小な存在とされる、兵隊級。

その雑魚にも、MAの実弾中心の射撃武器は通じなかった。

強固かつ丸みをもった外殻が、螺旋運動を伴う弾頭を逸らしてしまっただけであった。

接近戦は有効であったが、腹部などの比較的軟らかい部分を狙わねばならず、技量の違いによって効果的な攻撃を行えない可能性を

孕んでいた。

宇宙怪獣は1匹ではない。

それこそ天文学的な数字の数があると推測されている。

仮にMAで宇宙怪獣1匹と相討ちに持ちこめたとしても、圧倒的戦力を保有する宇宙怪獣を相手にその戦い方は、人類の敗北を意味するも同然である。

だからこそ、地球帝国は多くの切り札を求めた。

一機当千に値する戦闘能力と生存能力を有し、なおかつ低コストで量産可能な兵器……帝国の最終目標はそれである。

葵 霧子の傑作、ゴードンナーも「RX計画」で作成されたモノで戦力としても申し分ないがコスト面の問題は致命的であった。

集団戦闘におけて、試作的なワンオフ機体など愚の骨頂だ。

整備の手間、代替パーツの確保や特殊な操縦技能を有した人材の育成など問題点を上げればきりがないだろう。

仮にパイロットが死亡した場合を想定すれば理解できるはずだ。

特殊な技能を要求する機体は、その時点で使い物にならなくなる。つまりは、存在意義をな成さなくなるのだから。

相手が人類ならともかく、宇宙怪獣の存在は数も戦力も驚異的だ。猿渡 ゴオのようなパイロットが、2度も霧子の前に出現するという保証はなかった。

ゴードンナーは、霧子の最高傑作という自負はあるが通過点にす

ぎない。

彼女は歩みを止めるつもりはなかった。

だからこそ、葵 霧子は流 凍摩のプランに賛同したのだ。

バスターマシンの量産……実現すれば、地球帝国のロボットのシェアを独占するだろう。

無論、問題は山積みだ。

その中の一つに装甲と耐久力の上昇に比例して、暴走的に増えってしまった機体重量が問題として上がっている。

MAは推進剤を活用した高い空戦能力を有していたが、特機の重量で飛行するのはやや……いや、かなり無理がある。

なにより機体重量によるパーツの消耗や破損が致命的だった。

だからこそ、霧子とトウマは、テスラ・ライヒ研究所の技術を求めた。

画期的。

そう言っても過言ではない、その技術を。

「このディスクの中に、テスラドライブのデータが？」
「ええ」

霧子は指令室で、そこに出現した女性から一枚のデータディスクを受け取っていた。

手の中にあるそれこそが、霧子がテスラ・ライヒ研究所と技術交換を望んだ目的であった。

テスラ・ドライブ。

重力質量と慣性質量を別個に変化させることで、高効率の推力を得る事できる高効率反動推進装置だ。

この装置を使えば、今まで10の距離を進むのに10の推進剤が必要だったのが、半分やそれ以下に抑えることができる。

その応用はそれだけには留まらず、理論上機体を飛行可能にした
り、自重圧壊を防いだりと多岐にわたる。

テスラ・ライヒ研究所から異動してきた女性は青い髪をし、スポーツサングラスをかけている。

彼女の後ろには、緑髪の女性と金髪の男性が直立不動で待機していたが、今は話に加わってこないので置いておくことにした。

まさにクールビューティーと形容していいだろう外見の女性に霧子は訊く。

「対価はなんだい、ヴィレッタ・バディム隊長さん？」

「ゴードンナーの合体シーケンスのデーターよ」

ヴィレッタと呼ばれた女性が答えた。

「合体は、私たちのプロジェクトのアキレス腱と断言しているわ。

単機で戦況を変え得る兵器、それが私たちの目指しているモノ……

『RX計画』から幾重にも枝分かれたプロジェクトの一つで、私たちのチームの取り組んでいるモノよ」

「……SRX計画、ね」

霧子は、指令室にある豪華な椅子の背もたれに体を預けながら呟いていた。

テスラ・ライヒ研究所は、PTという新しい分類の機動兵器の開発に成功している。

現状では電撃兵装豊富なRX-7や、飛行かつ高速機動が可能なドラグーンが地球帝国の主力であるが、それに取って代わるのは時間の問題だった。

なにせ、テスラ・ドライブがあるのだ。

現行のPTは飛行不可能だが、テスラ・ドライブを搭載し、飛行可能となればドラグーンなど骨董品になると言ってもいいだろう。

しかしそれ程革新的な技術を、テスラ・ライヒ研究所は霧子にあっさりとは差し出してきた。

自分から申し出た霧子だったが、半ば駄目元であつた感は否めない。

要するに、相手側にとってゴードンナーの合体データーはそれほど魅力的ということになる……。

ヴィレッタが霧子に言った。

「ゴードンナーの合体とツインプラスマドライブのデーターはとても魅力的よ。私たちの手の内を明かしても惜しくはないわ」

「そこまですて合体を成功させたい機体、ね……なんだか頼もしくもあり、末恐ろしくもあるね」

苦笑する霧子。

しかし霧子はあることを思い出した。

ヴィレッタの後ろに待機する緑髪と金髪の2人……しかしSRXチームの隊員数は確か、と思い再びヴィレッタに質問することにした。

「そういえば、他の隊員たちは？」

「さあ？」

外見とは裏腹に、無責任なヴィレッタの言葉が指令室に響き渡つた

スーパードット大戦TOP ? Side The Earth
?

第2部 第4話 SRXチーム

ダンナーベース 食堂

「ふおんでよー、ふおれはちはほほへほもほっほ」

「リュウセイ、口の中を先になんとかしてよ」

ヒカリは目の前の男性に向かって言った。

昼休みも半分以上が経過し、食堂の中に職員の姿は少なくなっている。

まさかの再会を果たした、対面の席に座って定食を頼張る茶髪の男性
リュウセイ・ダテは口の中身を味噌汁で流し込み、お椀を置いてから声を上げた。

「そんでよー、俺たちはここへ来たってわけさ。

ゴードンナーを参考にして、俺たちの合体を成功させるためにな」

「私たち以外にも、隊長を合わせてあと3人来ているぞ」

リュウセイの隣に座っている桃色の髪の少女 マイ・コバヤシが説明してくれた。

彼女は慣れない手つきで焼き魚を解していて口に運んでいた。

しかし不器用なのか慣れていないのか小骨が沢山残っていたので、ヒカリは彼女に代わって身を解して上げた。

ありがとぅ、と少女のように答える彼女の笑みは、実に幼く見え

る。

「アンタ、一体何歳なの？ 別に子どもが戦うな、とは言わないけど……」

「分からない」

ヒカリの質問にマイの表情が陰る。

「実は、私には昔の記憶がないんだ。覚えているのはリュウたちと出会ってからのことぐらいかな？」

「昔は病院にいたんだよな」

「うん。リュウはよくお見舞いに来てくれたし、外にも連れ出してくれたな」

「ははは、懐かしいなー」

能天気なリュウセイの笑いに引かれて、マイにも笑顔が戻る。

リュウセイを見つめるマイの頬はうつすら赤らんでいた。妹が兄を慕う……というよりは、一人の男性としてリュウセイに惹かれていたのかもしれない。

拙いながらの女の勘で思ったヒカリだったが、おそらく、いや絶対リュウセイは気付いていないだろう。

この、にぶチンめ。

「他の3人はどんな奴なんだ？」

「そうね。静流の代わりにやって来たんですもの。私も気になるわ」

ゴオとミラが食後のコーヒーも終えて、リュウセイの方を見ていた。

「まずはクールビューティーな隊長のヴィレッタ隊長だろ。」

あとは金髪ムツリつつ込み野郎のライと露出大好きな緑髪のチー
ムリーダーのアヤだな」
「アヤは私の姉なんだ」

マイがリュウセイの言葉に補足した。

しかし彼女の口の周りには解してやった魚の身が少し付いていた。
なんというか幼いな。あとでタオルで拭き取ってやろっと、ヒカ
リは思いながら呟いた。

「全部でたった5人か。それで静流さんの抜けた穴を補えるのかし
ら？」

「むむ、それは聞き捨てならないな」

リュウセイが不服そうに反論した。

「俺たち結構強いんだぞ。なんなら、シュミレーターで前の決着つ
けるか？」

「無理よ」

「なんで？」

「私の特機って、操縦システムが特殊だから普通のシュミレーター
が使えないの」

ヒカリがコーヒーを飲みながら答えた。

ゴードナーはシュミレーションで使えるが、バスターゼロは使
えない。

ヒカリがこんなこと言うのも、昨日静流を見送った後に実際試し
てみたからだ。

ダイレクトモーションリンクは特殊な操縦方法であるので、通常
のシュミレーターで訓練することは叶わなかった。

そもそも、立って操縦するようなスペースが一般的なシュミレー

ターにはない。

「だから私の特機と戦いたかったら実機使っしかないわね」

「じゃあ、それでいいからやろうぜ」

「アンタね、死にたいの？ 特機って、M Aだって蹴りやパンチ一発でオシヤカにできるのよ」

「じゃあ、ゲーセン行こーぜ、ゲーセン。次こそ俺の本気を見せてやるぜ！ 今度こそタイム無制限で決着を」
「アンタ、ちよつと黙りなさいよ」

うるさいリュウセイの口をヒカリは掌で塞いだ。

あまりゲーセンに行ってたことを、ゴオとミラの前で口走らないでもらいたい。静流の送別会に参加せずにゲーセンで遊んでいたなんて知れたら説教モノだ。

なお、隣のマイの頬には米粒が追加されていた。

ホントに幼いな。米粒取って食べてやろうか、とヒカリは思いながらリュウセイの口から手を離れた。

そういえば食事中の男の口を押さえるとか汚いな、とヒカリがお絞りで手を拭いていると、

『おっす、俺様ゼロ！ 無視されて寂しいぞ！』

「そっぴやヒカリ、これなに？」

テーブルの上に立つ20cm大の球体を指差すリュウセイに、ヒカリは即答した。

「ポンコツ」

『吾輩はA Iである、名前はゼロ！』

「へー、すっげえ、動いてるよ！」

ひよい、とリュウセイがゼロを持ち上げた。
そして観察するようにじっくりと見回す。
ゼロはどこが頬なのかも分からない体を赤く染めていた。

『きゃー、リュウセイさんのエッチ！』

「ははは、おもしろー。こいつって自律成長型のAIなのかな？
テスラ研のロボとかマリオン博士にみせたら喜びそうだ」

「やめなよリュウ。分解されて、マ改造されちゃうよ」

『いやー、^{スクラップ}分解はいやー！』

分解、か。

なんなら、ついでに蹴りで狂った疑似人格も直してもらいたい。
流石にバスターゼロのコアを分解されては堪らないが、ゼロの
身がどうなっているのかは気になった。

案外、中に小人が住んでたりして……などと考えてヒカリを余所
に、

「あ、そうだ」

リュウセイはなにか思いついたようで、本気で嫌がっているゼロ
をテーブルに下ろした。

そして懐からなにかを取り出した。
それは極太の油性マジックだった。

「ひひひ、ここをこうしてつと……」
『んだよ、このオタク！』

キュッ、キュキュキュ。

鮮やかな手つきでリュウセイがゼロの頭頂部（？）になにか書い

ている。

毒舌吐くだけで特に暴れないゼロのそこには、大きな達筆で『肉』と書かれていた。

肉。

まっ白いキャンパスのようなゼロの額に書かれた、肉、の一字に。

「ぶっ！」

「だははははっ！」

「ふふふ、いやね、もう」

ヒカリ、ゴオ、ミラは嘖き出して、笑ってしまっていた。

ゼロは自身の身に降りかかった災厄を知ることなく『なんだよ！？』と激昂している。

太く表示された眉をひそめて、その間に「肉」の文字が見える。眉が動けば動くほど、肉の字が強調される。怒っているのになんたか滑稽だった。

なお、マイは笑って気管に水が入ったらしく、顔を紅潮させてむせ込んでいた。

幼いなあ、まったく。あとで飴玉をやるう、とヒカリが思っていると館内放送で大声が聞こえてきた。

『SRXチームのボケども、速やかに指令室まで来い！』

所長の葵 霧子の声だった。

『あとダンナーチームもだ！ 5分以内に来ないと根性焼きするからな、以上！』

それだけで放送は切れる。

ヒカリの脳裏には、霧子の愛煙しているメンソールが額に押し付けられる光景が映し出されていた。

そしてインド人のホクロのように残される火傷の痕……イヤ過ぎる。

マジックで書かれた肉の方がまだマシに思えた。

「い、急ぐっ！」

ヒカリたちは手早く下膳を済ませて、指令室に向かった。

ダンナーベース 指令室

ヒカリたちが急いで指令室に辿り着いたとき、中には見知らぬ顔と見知った顔が勢ぞろいしていた。

まず見知った顔は、葵 霧子、影丸、トウマとダンナーベースのトップたち。

見知らぬ顔は青い髪にサングラスをかけた女性と、金髪の青年と緑髪の女性であった。

食堂でのリュウセイの言葉から金髪の青年はライ、緑髪の女性はアヤだと思われる。

残る青い髪の女性はすらりと締まったモデルのような体型をしていて、なるほど、彼の言う通りクールビューティーといった第一印象

象を受ける。

彼女が隊長のヴィレッタなのだろうと、ヒカリは見た。

「お前たち、一体なにをしていたの？ 指令室に来るように言っていたでしょう」

「すいませんヴィレッタ隊長。意外に広くて迷っちゃって」

苦笑しながらリュウセイが答えていた。

説明する必要もないのでヒカリは黙っているが、彼の言葉はもちろん嘘である。

言い付けられたことを忘れて基地内を探索し、お腹が空いたので食堂に来た。

ヒカリたちと出会った真相は大方そんなところだろう。

リュウセイに助け舟を出すようにマイが声を上げていた。

「本当なんだ。迷っていたらこの人たちと会って、親切にもここに案内してくれたんだ」

身ぶり手ぶりを添えて説明しようとする姿はなんとも幼く、愛らしかった。

しかし口元にご飯粒が付いているので説得力は皆無……緑髪の女性、マイの姉と言うアヤは頬を見ながらため息をついていた。

「……頼っぺたにご飯、付いてるわよ」

「はう！」

「どうせなら、もっとマシな嘘をつくんだな」

金髪の青年、ライが仏頂面で言った。

「大体、お前たち2人には緊張感が欠け過ぎだ。俺たちの仕事は子

どもの遊びではないのだぞ。少しは、人類の存亡を賭けたプロジェクトの一端を担っているという責任感をだな……」

「あー、ゴホン！」

リュウセイとマイに向けられたライの説教を、霧子が咳払いで中断させる。

根性焼きに使用する道具 メンソールの煙草を盛大に吹かせながら、ヒカリを含めた全員を睨みつけていた。

「あーライデース君、話が進まんのな、そう言った話はまたの機会にしてくれないか？」

「はっ、申し訳ありません」

霧子の言葉に緊張感ある面持ちで敬礼するライ。

「よろしい」と満足気な笑みを浮かべているが、面の皮の下ではなにを考えているのか分からない霧子に、何故かマイは恐怖を覚えたらしくプルプルと震えていた。

ちなみにリュウセイは能天気な笑顔を浮かべていて……ライでなくとも説教の一つでもしたくなるというものだ、とヒカリは感じる。

「ダンナーチーム、お前たちに来てもらったのは他でもない」

霧子はダンナーチームを名指しし、吸い終わった1本目のメンソールを灰皿に押し付けながら続けた。

「今日付けで、テスラ・ライヒ研究所から異動になったメンバーを紹介しておこうと思ってな」

ゴオが答える。

「紹介？ でもそれなら、なんで俺たちだけ呼び出すんです？

技術交換で来たんだから、トウマ博士の時みたいに全体で紹介すれば済む話じゃ……」

「なーに、事のついでってだけの話さ。

今からお前たちとSRXチームでやって貰う事のね」

「それについては後で僕の方からお話します」

霧子に代わってトウマが喋り出した。

相も変わらず朗らかな笑みが顔に張り付いているが、彼の言葉になにやら嫌な予感しか感じないヒカリであった。

「何はともあれ、まずはSRXチームに自己紹介でもしてもらいましょうか」

「そうね」

さらり、とヴィレッタが答える。

それに呼応するようにSRXチームは整列し、端に並んだリュウセイから自己紹介し始める。

「リュウセイ・ダテ少尉だ！

コールサインはSRX1、好きなモノはロボットだぜ！ 改めて、よろしくな！」

続いて隣の高髪青年ライにバトンは渡る。

「ライディース・F・ブランシュタイン少尉です。

コールサインはSRX2、以後よろしくお願いします」

次に、やけに露出度の高い制服を着ている緑髪のアヤが自己紹介する。

「アヤ・コバヤシよ。」

階級は大尉で、一応SRXチームのリーダーをしているわ。コールサインはSRX3、よろしくね」

頭一つ身長の低いマイだが、こうやって並ぶとやはり幼さが際立つので、やはり後で飴玉をやるうと思うヒカリを余所にSRXチームの自己紹介は続く。

「マイ・コバヤシ伍長だ。」

えーと、コールサインは機体が出来上がってないのでまだない。が、頑張るのでよろしく頼む！」

頬を染めて自己紹介する様はなんとも愛らしい。

やはり飴玉ではなくアンドロメダ焼きを食べさせてやろうと思うヒカリだが、既にサングラスの似合うクールビューティーヴィレッタが最後に自己紹介を始めていた。

「ヴィレッタ・バデウム大尉よ。」

馬鹿な部下が迷惑をかけるかもしれないけど、よろしく頼むわ」

「そりゃーねーっすよ、隊長！」

自覚はあるのか異を唱えたりユウセイに、指令室内で小さな笑いが起こっていた。

この後、ダンナーチームの3人の自己紹介も続いて終わり、頼んでもいないのにゼロは勝手名乗り出て互いの紹介は終わる。

その額に書かれた「肉」の文字が、若干場の空気を柔らかくしてくれたような気がするの、ヒカリの勘違いかもしれない。

それにしても、SRXチーム。

一列に並ぶと分かるが、非常に個性豊かなメンツであった。

リュウセイは前頭部に目立つ、まるで付け毛のような茶髪以外に外見上の特徴はない。

しかし他の面々は非常に個性的だった。

ライデースこと愛称ライは、金髪のクールガイ的な外見をしており、アホなリュウセイと見比べれば正にボケと突っ込みの関係であったし。

アヤはこの10月末の寒空に真夏のような薄着をしており、化粧も薄くはない。暑がりなのか、それとも若く見せたいのか知らないが、とにかく薄着の目立つ女性だったし。

マイはマイでとにかく小さく、幼く、可愛らしいのでヒカリは後で秘蔵のカスタード餡入りアンドロメダ焼きをやるうと思えるほどに愛らしく。

お姉様！ そう呼びたくなる程に、ヴィレッタは凜とした美しさを持つ女性であった。

そんなヒカリの感想を余所に、トウマが本題を切り出してくる。

「それで、皆さんにやって貰いたいことなんですがね」

トウマの間延びした言葉にヒカリは喉を鳴らして、唾を飲んでいった。

彼の提案はろくなモノがない。

1回目は殺し合いになりかねない先輩たちとの模擬戦、2回目は自然災害の処理であった。

データ収集と称して命令されるバスターゼロの運用試験は、たった2回でヒカリの気力を削ぐには十分すぎた。

そんなトウマの口から、これまた信じられない文句がヒカリの耳に飛び込んでくる。

「鬼ごっこをやってもらいます」
「はあ？」

ヒカリの口からは自然に気の抜けた声が上がっていた。
誰もが知っているかは分らない。

だがヒカリは知っている、馬鹿と天才は紙一重だつてことを。
きつとトウマは馬鹿なんだな、そう確信するヒカリにトウマは言
つて来た。

「あれ？ 自信ないんですか？」
「はあ？」

「だから、バスターゼロを使ってSRXチームと鬼ごっこもできな
いのか、って訊いてるんですよ。

これは機動性のデーター収集のためのものです。
それともヒカリさんは、特機であるバスターゼロでPTを捕まえる
のは無理だと思いますか？」
パーソナルトルーパー

明らかなトウマの挑発にヒカリは怒りを覚えたが、それにむざむ
ざ乗るのは自分が駒扱いされているようでイヤだった。
だからヒカリは顔を背けて、口を利かない事にした。
しかしトウマはゼロに声をかけてくる。

「ゼロは自信がないのですか？」

ああー、トウマはなんて事をほざくのだろう。
それは返答なんて分かりきつての声かけであった。
額に「肉」の文字を書かれた白い球体ロボ
ゼロは当然の
ように叫んでいた。

『屁の突っ張りはいらんですよ!!』

「なんだか分からないが、とにかく凄い自信ですねー」

あつはっは、とトウマの笑い声が指令室に木霊した。
肉の文字を持つ馬鹿ロボットにヒカリは激昂する。

「このポンコツ、いい加減にしなさいよ!!」

『んだと、コラア!?!』

足元に転がって来たボールにするように、ヒカリはゼロを踏みつけた。

ゼロと出会ってからの数日、ヒカリはゼロに振り回されてばかりだった。

ゼロに蹴りを加えるヒカリの姿を指令室内の面々は微笑みながら眺めているのが、迷惑を被る側としては堪ったものではない。

ゼロの先走りによる被害を受けるのは、これで実に3回目になるのだから。

特機とPTで「鬼ごっこ」をする、というトンチキな提案をしたトウマは、

「いやあよかったよかった、これで良いデーターが取れそうですね」

彼にヴィレッタが答えるが、その返事はどこか投げやりだ。

「そうね。前代未聞でしょうし……やり方は任せるわ」

「お任せを」

「くう……!!」

トウマと居ると、いつもヒカリのペースは狂う。

彼はヒカリが大声で反論するよりも早く、「鬼ごっこ」をすることを決定事項にしてしまっていた。

鬼ごっこ……鬼を一人決め、他の面々は鬼に捕まらないように逃げ回る子どもの遊びである。

しかし、20m級と40m級のロボットとする遊びとは……言えないだろう。

データー収集なら、ゴードンナーの時と同じく模擬戦でもすればいいのだ。

そう、模擬戦でもシュミレーションでもいいじゃないか。何故に鬼ごっこ？

しかしゼロを踏みつけ、拳をぶるぶると振るわせるヒカリの思考を逆撫でする一言を、さらにトウマが口走る。

「あ、そうそう、SRXチームの方は機体の武装使っちゃって構いませんから。頑張つてバスターゼロから逃げてくださいね。ただし、バスターゼロの兵装使用は禁止です」

「ちょっと待つてよ!？」

もう辛抱堪らん、とヒカリは声を荒げた。

「なによそれ! 聞いてないんですけど!？」

「そりゃあ、言つてなかったですしねえ」

「鉄砲撃ちながら逃げる敵を捕まえるのに、こっちが武器使っちゃ駄目なんてどういうことよ!？」

「えー、ヒカリさん、イヤなんですか？」

「当たり前よ!」

ヒカリの目尻に涙が薄っすら浮かんでいたのは見間違いだろう。

もしかしてトウマは変態的なまでのDSで、ただ単にヒカリを虐めて愉しんでいるだけではあるまいか？

そうヒカリが思ってしまうほどに彼の発言は理不尽だった。

敵に銃を突き付けられて反撃なしって……暗に死ねってこと？

自分が嫌われているのか、それとも大事なデータバンクであるゼロを蹴っているため笑顔の下で実は激怒しているのか……考えの読めない笑顔を映したまま、トウマがヒカリに言った。

「しかし、特機の攻撃が直撃したらP.T.なんか撃破してしまいますよ？」

「う……まあ、それはそうだけど……」

「トライアングルバンカーなどが直撃した時には、それは目も当てられないでしょうねー」

リュウセイたちのP.T.がどれだけの耐久力を持つのかは不明である。

しかしバスターゼロの持つ巨大な杭打ち機は、堅牢なゴードンナの装甲を穿ませる程の威力を誇っていた。

それを自機の半分程の体格の機体に叩きこめばどうなるか？

機体の大きさと戦力が全て決定する訳ではないが、機体サイズの差による破壊力の較差は生じ、遺憾なく猛威を振るうだろう。

おそらく、風穴が開く。

乗っているのは知り合ったばかりと言え、顔見知りだ。

そんな光景はヒカリも見たくはなかった。

「わ、分かったわよ！ やればいいんでしょう、やれば！」

『屁のツツパリは』

「うっさいわね！」

足元で喚くゼロへの踏みつけ度合いを強化しながら、ヒカリは答えた。

「私がリュウセイたちの攻撃を掻い潜りながら、機体を捕まえられれば私の勝ち。逃げ切られたら私の負けってことね？」

「その通りです。」

機体の柔軟な動きと耐久性を測るためのテストですから、好きなだけ攻撃を喰らって、頑張って対象に追走してくださいね」

「……………鬼」

視線でトウマを非難するが、彼の厚い面の皮はその程度では傷一つ付かなかった。

コロコロと笑いながら、さらりと言う。

「大丈夫ですって。バスター合金の強度は異常ですから」

「……………そういう問題じゃないんだけどな……………」

『ヒカリ、いい加減足を退けやがれ！』

ため息がヒカリの口から漏れた。その様は、諦めることに慣れてしまった者のように見える。

トウマが変な事を言い始めるのは今に始まった事ではない。出会って1週間足らずでそれを理解できる程に、ヒカリは彼に振り回されていた。

ホント、ペース狂うなあ……………

トウマを川の流れに喩えてみよう。ヒカリは小魚だ。

小魚は時にはうねり、時には激流と化す流れにその度に立ち向かってしまう性を持っている。しかし、いつその事流れに身を任せてしまえば楽なのではないだろうか？

無論、何処に流れ着くかは想像し得ないのだが……………

「まあ、いいや……………」

とにかく今はトウマの指令に従う事にしよう。と、ヒカリは心に決めた。

ヒカリは人差し指を鬼ごっこのターゲット
リュウセイに突き付ける。

「勝負よ、リュウセイ！」

「望むところだぜ、ヒカリ！」

前代未聞。

こうして特機とPTによる、史上初の「鬼ごっこ」が開始されることが決定されたのだった。

第4話 SRXチーム（後書き）

その2につづく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1982n/>

スーパーロボット大戦TOP ? Side The Earth ?

2010年12月13日19時23分発行